14.5
171

始

ヱ-5K31

14.5
17

14.5-17 イ

南滿鐵調査資料 第四十七編

滿洲現代史

南滿洲鐵道株式會社
庶務部調査課

145-17/1

凡例

一、本稿は要するに日清戰役以後に於ける滿洲關係事件をまとめたものであるが、編修方針として始終滿洲現代の主人公を日、露、支三國と看做したものである。

一、地名は全部調査課編「最新滿蒙地圖」に載せてあるもののみである。

一、參考資料書目

張作霖、大日本現代史、滿洲發達史、日滿關係の過去現在及將來、支那と米國との關係、北滿洲の政治經濟的地位、その他調査課出版書類、雜誌「外交時報」「支那時事」、その他新聞類

一、本稿は課員太宰松三郎の編纂に係る。

大正十四年七月一日

庶務部調査課

大正 14.8.10 寄贈

内閣寄贈本

滿洲現代史

目次

緒言第一　處女地滿洲……一
緒言第二……五
一　漢人移民……五
二　鮮滿國境問題……七
三　開放されし滿洲……八
第一章　日清戰役及びその後の滿洲……一一
第一節　現代史に入る滿洲の一瞥……一一
第二節　日清の開戰と滿洲軍……一三
第三節　滿洲に於ける戰鬪の經過……一六

第四節　日清の媾和と滿洲の新紀元……二〇
第五節　韓國政治に於ける日露の交渉……二二
第二章　露國南下の鋭鋒……二六
第一節　遼東還附とカシニー條約の締結……二六
第二節　韓國に於ける露西亞……三二
第三節　露國の旅大租借と英露の交渉……三五
第四節　露國の滿洲奄有……三九
第五節　滿洲問題とその雰圍氣……四四
第三章　滿洲に於ける漢人の根據……五三
第一節　日露支三國の比較……五三
第二節　漢人移民の增加……五六
第四章　日露戰爭と滿洲……六二
第一節　滿洲に於ける露國の行動……六二

第二節　日露戰役、其ノ一……六九
第三節　同　其ノ二……七五
第四節　日露の媾和と滿洲……八〇
第五節　日清及清露協商と韓國統監府の出現……八五
第五章　戰後の滿洲……九〇
第一節　日本の諸施設……九〇
第二節　清末の滿洲……九五
第三節　間島問題と安奉線問題……一〇二
第四節　戰後の露國と滿洲……一〇七
第六章　支那の革命と滿洲の地位……一一三
第一節　滿洲に於ける革命運動……一一三
第二節　革命黨の活動……一一八
第三節　民國の成立と滿洲……一二三

第四節　滿洲の變革と關東州……一三一
第七章　國際場裡の滿洲……一三六
第一節　滿洲鐵道の中立提議とその雰圍氣……一三六
第二節　日本の滿蒙五鐵道敷設權獲得とその後の日滿關係……一四三
第三節　所謂日支交渉……一四七
第四節　滿洲に於ける日貨排斥……一五六
第八章　奉天第一主義の實現と日本……一六一
第一節　張作霖の擡頭……一六一
第二節　宗社黨の活躍と鄭家屯事件……一七〇
第三節　奉天派の內訌……一七七
第九章　東三省統一の前提……一八四
第一節　參戰問題と奉天省……一八四
第二節　馮德麟の沒落……一九一

第三節　黑龍江省と張作霖……一九五
第四節　吉林省の紛擾……一九九
第十章　石井ランシング協約による日本の滿洲に於ける地位……二〇六
第十一章　東三省の統一……二一六
第一節　張作霖と徐樹錚……二一六
第二節　東三省巡閱使出現……二二四
第三節　孟恩遠の沒落……二二九
第十二章　北滿と西比利亞……二三八
第一節　西比利亞の混亂と日本の出兵……二三八
第二節　反過激派の沒落と日本……二四五
第三節　過激派勢力の擴大……二五一
第四節　東支鐵道を中心とする紛擾……二五七

第五節　呼倫貝爾の自主取消……二六四
第六節　琿春事件……二六五
第十三章　ワシントン會議と滿洲問題……二七四
第一節　ワシントン會議に於ける滿洲と日本……二七四
第二節　旅大回收運動……二八六
第十四章　大滿蒙主義へ……三二二
第一節　安直戰と張作霖……三二二
第二節　察哈爾の占有と吉黑督軍の更迭……三二六
第三節　蒙疆經略使（熱河の獲得）……三三〇
第四節　大滿蒙主義の破綻（第一次奉直戰）……三三六
第十五章　日露交渉と露支交渉……三四二
第一節　大連會議……三四二
第二節　長春會議……三五〇

第三節　露支交渉と滿洲（一）……三六一
第四節　露支交渉と滿洲（二）……三六七
第五節　日露條約成立……三八五
第十六章　第二次奉直戰まで……三九二
第一節　東三省の變局（一）……三九二
第二節　東三省の變局（二）……四〇六
第三節　第二次奉直戰と日本の態度……四一二
第十七章　尾　言……四二〇

滿洲現代史

庶務部調査課

緒言第一

處女地滿洲

もとより滿洲は清朝の土地ではある。吉林奉天はその發祥地であるから、愛親覺羅の根據地として確實なる占據を行つたことは事實である。黑龍江方面も早く己に太祖の朝に於て兵を用ゐ、索倫部を服し、更に太宗の朝に於て鄂爾春部を平定して、黑龍江口左岸一帶をも清領とし、又索倫部を雅克薩に擊つて遂に之を降れ、順治の初年には呼爾喀部を擊つて(三性一帶)黑龍江全境をその藩屬とした。

然しながら、凡そ二十餘年間に亘る明清の爭鬪は滿洲の地をして自ら荒蕪に歸せしむるに効果があつた。しかも人種的爭覇戰なるが故に、遼東に殖民したる漢人が難民となつて支那本部に歸還したことが、應河流域の耕地さへも荒蕪に歸せしめた。東部の漢人は又多く朝鮮境内に逃げ込んでしまひ、土著人は八旗の兵丁として軍に從つたので、東間島及び西間島の如き自然の間曠地帶を見るに至つた。彼

の北部諸種族の平定の如きも、滿洲八旗の補充兵を徵發することがその主たる目的であつたと云はれてゐる。だから遼東と云はず間島と云はず黑龍江一帶の地方までが、明代よりもはるかに人口稀薄となり、明朝の遼東都司が開拓した遼河流域の三百萬餘畝の耕地もその十分の一すら保有するを得なかつた狀態となつた。況んや滿洲人が太宗の北京入りと共に續々として北支那に趣いたに於ておやだ。斯くの如くして滿洲は文明史的一の處女地となり終つたのである。

二

然るに清朝はその財政的悲境より來る勸農開墾の急務と、又祖宗發祥地の荒蕪になりゆくを顧念する所から順治十年頃遼陽府を中心としたる遼東招民開墾令を公布し、好條件を付して移民を奬勵した。爲めに遼東一帶には次第に漢人の移住者を見、遼東の墾地は再びその舊體を復したが、その結果漢人の流民が次第にその奧地にまで侵入し、滿洲天產の最大たる人參の盜掘を試み、又は砂金を採取するものを生じたる爲め、その滿洲人の經濟的打擊たると、又祖宗の地が純然たる殖民地となり、滿洲の民族精神にも影響する所少なからざるものがあつた爲め康熙帝は遂に封禁政策を遂行して、山海關に於て嚴重に之が取締を爲さんとした。この封禁政策は獨り漢人に對してのみならず、蒙古人の圍場侵入をも防壓し、尙ほ朝鮮人に對してもその竄入を許さないことにした。江都會盟と稱されるのがそれである。

此の封禁政策の範圍は、彼の有名なる柳條邊牆によつて劃され、要地には邊門を設けて越界者を嚴重に取締つたのであつた。故を以て一時その移民は減少を來したけれども、すでに豐壤なる南滿洲を知覺した漢人は、山東より海を渡つて常に渡來し、遼東半島より鴨綠江口にまで上陸するものが絕えなかつた。朝鮮人も亦常に鴨綠江を越えて來るものあり、所謂國境問題は常に兩國間に紛擾があつたのである。

三

斯の如くして現代史に入るべき滿洲は一の處女地より次第に漢人及鮮人の殖民地としての價値を現はし來つた。その中鮮人のそれは國境一帶に限られ、しかも國力の微弱と人數の僅少なるとより、滿洲全部より之を見る時は、到底漢人のそれに及ばないものではあるが、漢人と雖も柳條邊牆以外には出なかつたのである。然しながら、之を他の滿洲原住民族に比較するときは、その數に於ては勿論、その文化的背景を持つ點に於てはるかに優つて居り、且つ一方は遊牧民族なるに他方は農耕者がその多數に居ることとて、文明史的價値に於て當代以後の滿洲を漢人の殖民地と看做し得るのである。只漢人は政治的に何等の權力もなく、又從つて兵力もなく奴隸的境遇の下に在つたが爲め、しばらく潛行の形を取りつゝあつたものである。彼の人爲的封禁政策が始んどその効を奏せず、やがて之が自然

消滅を見るに至つたのは、滿洲開拓の最大効勞者の漢人なりしが故に外ならぬ。清朝の漢人化が年の經過と共に實現すると同樣、滿人の滿洲に在る者も亦思想的に文化的に漢人化されて行つたから、表面的の主人公は滿人であつても、實際は漢人がその主たる地位に達せんとしつゝあつたのである。彼の滿鮮國境一帶の朝鮮人に對しても、その地理的不利なる條件の下に在りしに拘らず、清朝の勢威を背景としたる漢人が常に有利なる地位を確保し得たのであつた。

四

以上は主として南滿洲に於ける狀態であるが、玆に俄然として北滿洲の重要度が急激に增加し來つた。その增加の原因を提供するものは、謂ふまでもなく北强ロシヤの侵出である。

ロシヤが黑龍江岸に散在する清朝の朝貢民族を侵略し、やがて江岸の農業を經營せんとして永住的計劃を立てたのは順治初年の交であつて、清朝の北京入りと殆んど同時である。だから滿洲が人爲的處女地となるや、その强大なるロシヤ帝國の背景を以て、漢人と同時に滿洲に入つて來たもので、近代史に於ては、漢人及び鮮人に次ぐ滿洲開拓者であると云ふことが出來る。只前二者に比し數に於てはるかに僅少ではあつたが、背景が背景だけにネルチンスク條約締結前と雖も、その先驅として又は斥候として、重要視さるべきものである。

全く當時のロシヤが黑龍江に進出し來れるは、一の斥候に過ぎなかつた。清國との戰爭は順治九年より康熙二十五年に至る三十餘年間、呼瑪爾、雅克薩（アルバヂン）愛琿等の江岸に於て、多く清軍の勝利を結果しつゝ斷續したのであつたが、此の戰爭の結果、露清兩國は黑龍江地方の事情を詳悉し、清國は朝貢民族の自由に放任しつゝあつた邊牆以北に向つて先づその兵備を整ふる必要を感じ、露國は又極東進出に對する重要なる指南書を得たのであつた。即ち清國は、康熙帝親ら吉林以南の地を巡視し、從來吉林、寧古塔を以て北滿に對する政治軍事上の根據地としたのを、更に遙に北上して墨爾根をその根據地とし、齊々哈爾、黑龍江（愛琿）の二城を以て之が兩翼とし、更に水師を興して、黑龍、松花、嫩の諸江に游弋せしめ、遂河より伊通河を通じ北滿に至る交通路を開いて之が後援に容易ならしむる等、北滿の地は清國の範圍として必要なる諸施設が漸くにして備へらるゝに至り、やがてネルチンスク條約の締結ありて額爾古納河以東の地は完全に清領となつたのであつた。

緒言第二

一　漢人移民

「山海關を出ずるを虎の如く畏怖し」たる順治朝も過ぎて、北滿の境にはロシヤが刻一刻に進出し來り、清朝も爲めに劒を採つてその自衞を講ずるに至り、南滿洲より北滿洲の要鎭まで驛站の設立さ

れたる爲め、滿州の山河は新に漢人の耳目に豊かなる處女地として映するに至り、漢人東出の思念は自ら刺戟さるるに至つた。しかも愛琿、齊々哈爾、墨爾根の經營に多大の努力の拂はれたばかりでなく、呼倫貝爾地方にまで要鎭が設設せられ、更に長寧縣が伯都訥に置かれ、阿勒楚喀、呼蘭城、拉林、雙城堡等も次いで經營さるに及び、關内漢人の東出が實に大河の決する如く滔々として滿洲に入り、移住禁止令もその効なく、滿洲八旗の屯墾の如きは、反つて漢人誘入の素地を爲すに過ぎずして、山東より密航する流民の如きは遼河流域の監視を避け封禁以外の間曠地に向つてその移住地を求むるのであつた。

斯くの如にして道光朝を過ぎ嘉慶朝に至り移民特別許可令の發布を見るに至り、禁止令も事實上廢棄を告げ、漢人を小作人とし、その年貢米の增加を希望する滿洲旗人又は地方官の意志は遂に表面に現はるゝに至つた。東部内蒙古の王公の如き、自ら流民を招致して開墾せしむるに至り、今の洮昌道一帶より長春農安方面は非常なる速度を以て開拓され、乾隆年代に於てすでに長春堡を設置して漢人を管理する必要を生じ、間もなくそれを廳に改訂する如き狀態であつた。道光の初年には昌圖一帶の開墾が略々成功を遂げたと云はれてゐる。

滿洲開發に與りし者は此等農業移民と、それを助成したる商人を以て第一とすべきであるが、次いで擧ぐべきものは長白山の東西に據つて採金及人參私掘を爲しつゝありし挖金賊である。彼等は、清朝の封禁を犯しつゝ鴨綠江の水路を通路として長白山一帶に侵入し、やがて獨立の勢力を持して官憲の取締以外に立つものをも生じ光緒初年の交には三姓地方にまでその手を延ぶるに至つたのである。

斯くして滿洲の漢人化は着々として進行しつゝあつたが、然し彼等は何等政治上の權力を有するものではなかつた。依然として小作人として、又は商賈として以外の活動を許されなかつたが、清朝の威力の減少と反比例して裡面的に實勢力が培はれ、遂には地方徵稅の請負をも爲すに至り、財政的方面より次第に滿人及蒙古人の勢力を侵害しつゝあつたのである。武力以外何等の據るべきものを持たぬ滿蒙人は遂に彼等の平和的侵略の前に、殆んどその手足を搏さるに至るべきは豫期さるべきである。

二　鮮滿國境問題

金匪の增加はやがて鴨綠江流域の農耕地にも漢人の居住を見るに至つた。元來此の流域は豆滿江のそれと共に、江都會盟の結果滿鮮國境の中間地帶として殘されたもので、道光の初年までは兎も角も實行され來つた者である。然し旺盛なる漢人の流民は此の地帶を見逃すことはなかつた。殊に所謂封禁地以外の地であり、朝鮮勢力の微弱なるに乘ずるを得る好地位なると、鴨綠江の舟運を利するの便ありし爲め次第に侵入し、彼の中江貿易の如き次第に活潑に趨き、中江後市、柵門後市、閭練使後市の如き、一種の密貿易が盛になり、上流に於ては、材木業を爲すもの多數を生じ、同治六年には清朝

も遂に口實を設けて空間地帶を一般漢人に解放してしまつた。韓國の抗議の如き最早や如何ともすることが出來ず、光緒初年安東、寬甸、通化、懷仁等の行政廳は設けられるに至つた。

之に次いで清朝は豆滿西北の荒地を開墾せんと企てたが、意外にも此處には無數の韓人部落を發見したのである。依て清朝は之を越境者と認め、中國の政敎に從ふべしと主張し（光緒八年）韓國政府は之を認め越境者を悉く刷還すべきを申出たのであつたが、在間島の住民は此の土地を韓領なりと主張し、茲に兩國の紛爭を釀したが、韓國の主張は次第に微弱となり、日清戰爭前には單なる豆滿江源の堪定といふことに問題が縮少され、廣い意味に於ける間島問題は已に放棄されてしまつたのであつた。斯くして鴨綠江右岸の地は漢人の自發的進出によつて清領となり、間島は又鮮人の多數なるにも拘らず清朝の威力により清領に編入さるゝこととなり、人參私堀、採金及び材木農業を爲す漢人が國境の河谷に次第にその多數を算するに至つたのである。

三　開放されし滿洲

漢人の東出は衰褪に向ふ清朝の封禁を殆んと空文に終らしめたばかりでなく、遂に嘉慶帝に至りその一部を放棄するの止むを得ざる至り、流罪者の贖罪も旗人の生活が困難を加ひ來りし爲、金錢の支出によつて私に行はれ、滿人の特權たる一種の治外法權も撤回さるることとなり、咸豐年間に至つては黑龍江將軍特普欽の呼蘭平野開墾に次いで吉林省なる双城堡や拉林の荒地及び舒蘭河流域と吉林の西部とが公然開放され、更に同治の初年には伊兒們河の全流域より金匪の巢窟なりし樺皮甸子が認墾せられ、やがて滿洲禁地中の禁地といはれつゝあつた圍場を開放するの建議が容易に採用さるゝに至つたのであつた。

斯かる間に支那本部の內亂は益々發展し、亞片戰後、アロー號事件の外患よりも、長髮賊、捻匪等の大賊より、有名無名の小賊が各地に橫行するに至り、特に直隸山東の野は捻匪の猛烈なる流寇に惱まされて避難民は潮の如く滿洲に東出し來つた。かくて咸豐年中に發布せられた旗民交產章程は遂に漢人の土地所有權まで許容することとなり、漢人招墾の爲の墾務局の設立も要するに漢人の勢力に押された結果に外ならぬ。

北の方ロシヤに至つては、ネルチンスク條約締結以來正に二世紀の雌伏を經て咸豐年間に至れば怪傑ムラヴエフの東部シベリヤ總督に任せらるゝあり、爾來コサックの馬蹄は遠く韃靼海峽にまで至り、ペトロパウロスク、ニコラエフスク等建設せられ、黑龍江沿岸の經營は日に月に進涉し、清國が黑龍江以南の地を墨守しつゝある間に、勢力の分野は自ら愛琿條約の締結を容易ならしめたのであつた。當時は英佛聯合軍の北京進入あり遂に天津條約の成るあつて、ロシヤにとつては正に乘ずべきの好期ではあつたのだが、背後の實勢力なくしては不可能である。見よ、その後ロシヤは大波濤の勢を以て

東部西部利亞及び滿洲に押し寄せて來たではないか。兎も角も愛琿條約は清朝の勢が加速度を以て底下しつゝありし爲め屈恥的大割據が行はれ、黑龍江及烏蘇里江を境界とする現在國境を劃定するに至つたのである。

第一章　日清戰役及びその後の滿洲

第一節　現代史に入る滿洲の一瞥

韓國は殆んど問題にならぬ。鴨綠江の中間地帶は漢人の自由進入により完全に清朝の土地となつた。豆滿江畔の如き手を空ふして清領となるを認めてしまつた。漢人の勢は清朝のそれと反比例して波濤の如く、ヒタ押した滿洲の野に寄せ來つた。北の方黑龍江岸にまで先住の弱小民族を壓して一歩は一歩とその確實なる地位を占めて行つた。外患と內亂とにすべての積極的自信を失つた清朝が、不幸にして黑龍江左岸の地と、ウスリ河以東とを强敵ロシヤに與へたことは、滿漢の二元に附いて煩悶しつゝあつた當時の漢人にとつて誠に止むを得ざることではあつたであらう。然し、ロシヤは强敵である。朝鮮如きとはもとより比較にならぬ。颯々乎として流れ行く漢人移民の、逆境に處してたゆまざる努力は、國境の確定如きを不問に對して清領と謂はず露領と謂はず或は江東に或は尼港に浦鹽に空拳を以て生存の安易さを求めて止まない。之に對するロシヤは、揚々たるその國勢と威大なる陸軍とである。浮塵子の如き漢人とロシヤ帝國の國威とが黑龍江岸に次第にその戰線の接近が行はれて來つゝあつた。しかもロシヤの鋭鋒は獨り黑龍江岸に止まらず、ウスリ河源より韓國の國境へとその手を延ばし、問題の間島は清露韓三國の巴戰となり、韓國は清露兩勢力に挾まれて彼等が利用の的となりつゝ

あつたのである。

云ふまでもなく間島は清朝發祥の地、體面にかけても之が保有は必要事であるのみならず實に滿韓の中心である。清朝は長白山の根據地より先づ朝鮮を脚下に屈伏し得た。山嶺を傳ふて雪崩れ落つる勢には明の大軍も支ふるに術なかつた。更に之等地方に據る匪賊の一味は、宛然なる獨立國の形式を採り得る程の要害ではある。

若し東部西比利亞より滿洲朝鮮一帶を一の半島と看做し得るならば、長白山は正しくその中心地でなければならぬ。ロシヤがウスリ以東を範圍とするに及び、朝鮮の北部及び間島に着眼すべきは實に然かあるべきである。しかも間島は當時一の紛爭地帶である。韓國にして猛然どその主張を固持するならば、清國も一擊にして之を退くるの理由は持たぬ。茲に於てロシヤは朝鮮を利用することにより て漢人を追ひその後繼者たり得る可能性がある。露韓陸路通商條約がその草案に於て、豆滿江岸より百韓里の地に露人の自由進入を許可すること、及び富寧を貿易場として開くこと等が要求されたのは疑しむに足らぬ。もとよりそれは慶興府の開市に止まつたが、露國南下の情勢は之れによつて止むべきではない。しかも清朝にとつての朝鮮問題は半島の問題には非ずして東三省の問題である。東三省の問題は直ちに肘腋の問題でなけらばならぬ。その朝鮮に又一個の勢力が加はり來つた。云ふまでもなくそれは日本勢力の西漸であつたのである。

由來朝鮮の歴史は日本史と常に密接なる關係を有してゐる。日本國内の充實は常に朝鮮半島に向つてその餘剰を吐き出す。神宮皇后又は豐臣秀吉の朝鮮征伐は實に日本國力の旺盛を物語るものでなければならぬ。維新の大業を未曾有の大奮力を以て從事したりし興國日本が、明治の初年に於てすでに征韓論の喧轟を見しは正に然かあるべき所である。而かも太宗以來常に韓國の宗主權を把握したりし清國が、西力の東漸に戰々兢々として、その責任と煩累とを避けんとして愚かにも江華灣事件、シャーマン號虐殺事件等に於てその宗主權を放棄し、外交の干與せざるべきを宣言したるに於て、日本はイチ早くも日韓修好條約を締結し大陸への第一歩を踏みしめたのであつた。これより日清の勢力は、朝鮮半島に於て次第に接近し、事ある毎にその利害の衝突を見るに至り、清朝は或は米國を誘ひ、或は保守黨を後援して日本勢力の驅逐を策する等、百般その宗主權の回復を計るところがあつたが常に成功を見ず、日本も亦進歩黨を後援して之に對抗し遂に日清兩兵の小衝突を惹起するに至り、天津條約によつてその表面的解決を見たるが如かりしも實は然らず、朝鮮といふ間涉勢力を度外視したる兩國の直接交涉が現實したのであつた。

第二節　日清の開戰と滿洲軍

自分は滿洲現代史の開幕を日清戰役によるものと爲すの理由を持つ。實に日清戰役こそは世界史に

於ける日本と支那が舊來の地位を顚覆するものなると同時に、結果に於て東洋に於ける現代文明に對する代表的保守と進歩との爭覇である重大要素を有するものである。その爭覇の大舞臺こそは實に我が滿洲でなければならぬ。兩力士の活躍により、舞臺も亦現代に適應すべく余儀なくさるべきはもとより然る所、漢人及び露人の侵入によりて太古の眠りより醒め出した滿洲は玆に一躍して東亞の花形役者を迎ふることゝなつたのである。

朝鮮に於ける日清兩國の利害は最早や圓滿解決を告げる能はざるに至りしは前節に述べた。舊體を維持せんとする清國と、自己勢力の增加により新なる分野を要求する日本とは、共にその眞勢力を認め得ずして、しかも利害の相結んで解けざるものがある。かくては最早劍を採つて相戰ふより外に道はない。直接行動である。日清兩國は今は只導火線たるべきものの發生を待つのみであつた明治二十七年(光緒二十年)五月、全羅道地方に東學黨匪の亂が起つたのである。當時の韓廷はすでに日清兩國によつて度外視されたる如き微力なるものである。如何でか匪亂の鎭定が出來やうぞ。韓廷は遂に清國に援兵を請ふに至り、清國も亦之を奇貨として屬邦保護の名の下に續々出兵して、一部はすでに牙山に至つた。日本も亦居留民保護の名の下に混成旅團を發遣し、清國の增兵を疏止せん爲め韓國政治の共同改革等を提議したが、清國は之に耳をも藉さず、大兵を北部朝鮮に集中し、遂に牙山、成歡の開戰となり、海軍も亦豐島近海にて清國軍艦の發砲により海戰を開き、八月一日遂に宣戰布告となつたのである。

當時の清軍にて出征部隊は東三省の諸隊及び直隸提督所管の軍にして、之に北洋水師及び南洋出師を加へたものあつたが、山東に於ても亦巡撫福潤に命じて威海衛及び芝罘の防營を爲さしめた。その中出征陸軍部隊は次の如き數種である。

一、盛字軍(總兵、衛汝貴)――步隊十三營、馬隊二哨、砲隊二哨
二、盛字飛騎馬隊――五營二哨
三、通永練軍――步隊二營、馬隊一營
四、義勝營――步隊一營
五、仁字營――步隊二營
六、正定練軍――步隊四營、馬隊一營、砲隊二哨、水雷營二營
七、慶字軍及び毅字軍――步隊十四營、馬隊三哨、水雷營二營、(在旅順)
八、銘字軍――步隊九營、馬隊一營三哨、砲隊一營、水雷營一營(在金州附近)

以上は北洋大臣李鴻章所管の軍にして、直隸提督葉志超を總指揮官とし總兵聶士成を指揮官と爲すものである。

九、奉軍――步隊十一營、馬隊五營(當時の奉軍は大部分奉天府に在りしも、その一部は各地に分散

し又東邊道臺(鳳凰城)の指揮下に在りし靖邊軍五營を奉軍に合し聶桂林をその分統に任じ九連城に派遣を命じた)

十、盛字練軍、步隊八營、馬隊二營(奉天)

十一、吉字練軍——步隊九營、馬隊七營、砲隊一營(吉林府に在るものにして、主として琿春、豆滿江等の露清國境の警備に任じ又、琿春砲臺を改造じ、豆滿江岸に一營を增加した。)

十二、齊字練軍——步隊八營、馬隊四營(黑龍江齊々哈爾附近)

九以下は滿州の兵力にして合計五十五營であるが、その中奉軍は盛京將軍裕祿に、その他は直接に東三省練兵事宜大臣定安の指揮に屬せしめてあつた。

第三節　滿洲に於ける戰鬪の經過

豐島の海戰、牙山成歡の陸戰は、一の前哨戰に過ぎなかつたが、今や戰局は一轉して本局面を展開し、清軍は義州を根據とし、日本軍は京城に據つて之に相對し、元山方面にも支隊を出して三道より進軍し、平壤の決戰に於て清軍の敗退となるや、第一軍は山縣有明指揮の下に國境にまで進擊し、折柄黃海の大海戰に於てその制海權が日本によりて確保さるゝに至るや、日本は全軍を擧げて滿洲より國都北京を襲かんとし、第一軍は野津道貫、桂太郎の率ゐる二個師團と、大島(義昌)立見、大迫、大島(久直)の四混成旅團を以て先づ鴨綠江を渡りて九連城を拔き、立見旅團は西して軍を鳳凰城方面に進めて之を略取し、大迫旅團は南して敵を大東溝方面に追擊し、鴨綠江外の疆域は早くも日本の有となり、安東縣には小村壽太郎の民政長官に任命されて、民政廳の開設を見たのであつた。既にして第三師團は安東縣よりして更に西向し、大迫旅團は又攻めて大東溝を拔き進んで大孤山を占領し、更に一支隊を合して岫巖城に迫つて之を拔き、續いて師團の兵を合して析木城を攻擊した。清兵は此處にも居たまらず、遂に軍を擧げて海城に遁れ入つた。時に日本軍は野津道貫山縣有朋に代つて第一軍司令官となり、奧保鞏第五師團長として二路より海城に向つて進擊し、立見混成旅團は早くも十二月中旬に於て鳳凰城より北進し一鼓して直ちに之を陷れてしまつた。然し海城は交通の要衝にして、半島の中央に位するものなるを以て清軍は嚴多を物ともせず、懸軍の日本軍を逆襲して之をなやますこと しば〳〵なりしが日本軍も亦之を死守して退かず、切に第二軍の北行を待ちつゝあつたのである。

第二軍司令官大山巖が、聯合艦隊の援護の下に金州廳下なる花園江口に上陸したるは十月下旬であつた。麾下の第一師團(長山地元治)は長谷川混成旅團と共にすでに上陸を終り直ちに金州城に向つて進軍し、第一旅團長乃木希典を前衛として鵜子窩を發し、各道より金州に迫つた。清兵も之に對し防戰よく努めしも遂に及ばず、大連灣防備の諸隊と共に奔竄して旅順に集り一部は復州に遁れた。かくて大連灣一帶は金州の攻衛戰のみを以て悉く日本軍の占領に任じたのであつた。既にして十一月下

旬第二軍上陸部隊は、第一師團を右翼とし、先づ旅順の背面に迫りて椅子山砲臺を陷れ、更に長谷川旅團と相策應して二龍山及び松樹山の砲臺に向つて一勢の攻擊を設みて之を占領し、更に一隊は直走して旅順の市街に突入し、進んで黃金山砲臺に擊じて清兵を追ひ、次いで長谷川旅團も老鴉嘴砲臺を占領したるを以て、その他の砲臺も亦皆守りを棄て潰走してしまつた。此の旅順の戰には海軍援護射擊のあづかつて効ありしはもとよりである。

然るに清將宋慶は日本軍の旅順に集中したる虛に乘じ大兵を率ゐに復州、甕子窩の二道より來りて金州城を襲ひたりしも成らず、日本軍も亦旅順口の陷落により、此處に若干の守備兵を置きて北上し、金州に於て冬營の準備を爲し、第一旅團長乃木希典金州守備隊司令官となり、復州城をも手に入れて此に駐屯したのであつた。時に牛莊、蓋平の間には清將宋慶が蔣希夷、馬瑞慶、利周等の諸統領を率ゐて二萬余の大軍を擁し、常に海城回復の鋒を休めず。大いに日本軍を苦しめ居たりしを以て日本第二軍は二十八年二月金州の各營を撤して北上し、第一師團はすでに前月に於て蓋平を占領して第一、第二兩軍の連絡を通じ、第一軍も之に力を得て、黑龍江將軍依克唐阿、吉林將軍長順の率ゐる約二萬の兵を打ち退け、更に徐邦道の率ゐる二萬余の清兵も亦逆襲して成らず、しかも清軍は毫も之に屈せず依然として海城の近傍に駐屯して、三度び又四度び海城に逆襲し、その間常に小戰鬪の絕えず間なく日本軍の苦戰も大なるものありしが、間もなく日本軍は第一、第二の兩軍の聯合成り、第二軍第一師團長（山地元治）は太平山の敵に向ひ、二日間の激戰の後遂に之を營口及び西方海岸に走らし又鳳凰城より賽馬集近傍の清軍と戰ひ、更に崔家房、樊家臺に戰ひたる第一軍第五師團長（奧保鞏）は岫巖より進みて沙河沿近傍の敵を擊退し海城の東北に進んで鞍山店の天險を略したのであつた。

遼東半島と共に渤海を抱くものに山東半島がある。往昔舟航の便多からざる時に於ては兎も角、近代に入りては北京天津の國都を防止する爲めには、渤海の口を扼する旅順と威海衛とにいさゝかの甲乙もない筈。清國が滿洲の防備と共に、北洋陸軍の一部を以て山東半島の守備に任じ、日本も亦、第二軍司令官大山巖が、旅順攻略の後直ちにその麾下の一部たる第二師團長（作久間左馬太）と第六師團長（黑木爲楨）の一部とを以て榮城縣を占領し、海軍と共に威海衛の攻擊に移つたのは正に然かあるべき所である。提督丁汝昌勇敢に防戰すれども遂に勝たず、二月中旬遂に之が開城を余儀なくされ、鎭遠以下の諸艦も悉く日本の沒收する所となつてしまつた。かくて第二軍は、威海衛に守備兵を散きて悉く金州半島に凱旋し茲に第一、第二兩軍の大擧して遼西に進攻せんとした。先づ第一軍の第五師團及び第三師團は牛莊城を攻めて之を落し、前衛は更に營口を占領し第一第三第五の三軍を以て田庄臺の主力を攻擊し、清將宋慶も防戰大いに努めたれども勝たず、遂に田莊臺は日本軍の占領するところとなり、附近村落は日本軍の爲めに燒燬せられ旁近一帶爲めに蕩然として空し。

第四節　日清の媾和と滿洲の新紀元

威海衛は既に陥りて北洋水師は降伏し、營口、田莊臺亦陷りて渤海は日本制海の權内に在る。山海關太沽の砲臺も今や日本艦隊の進擊に一任してゐる。かくて日本軍は小松宮彰仁親王の征討大總督に任せられて旅順に出陣するあり、爲めに清廷大いに窮し北洋大臣直隸總督李鴻章を起して全權大臣とし、李經芳、馬建忠、張蔭桓、伍廷芳等と共に、下關に於て伊藤博文、陸奥宗光等と會見し、三月三十日先づ休戰定約、更に會同すること數回、李鴻章は專ら日本の要求を輕減せしめんとしたるも、日本は僅少の讓歩も爲さず、遂に日本の全要求を納れ三月十七日兩全權の調印を了り、五月批准交換も畢つて五月十日之が發布を見たのであつた。その條約の中滿洲に關係ある部分を左に摘錄する。

第一條　清國は朝鮮國の完全無缺なる獨立自主の國なることを確認す。因つて右獨立自主を損害すべき朝鮮國よりの清國に對する貢獻典禮等は將來全く之を廢止すべし、

第二條　清國は左記の土地の主權並に該地方に在る城壘、兵器製造所及び官有物を永遠日本國に割與す。

一、左の經界内に在る奉天省南部の地

鴨綠江口より該江を溯り平安河口に至り、該河口より鳳凰城、海城、營口に亘り、遼河口に至る折線以南の地、併せて前記の各城市を包含す。而て遼河を以て界とする所は該河の中央を以て經界とすること、知るべし。

遼東灣東岸及び黄海北岸に在つて奉天省に屬する諸島嶼（以下略）

日清戰役の最大根幹は云ふまでもなく朝鮮の獨立である。媾和條約第一條に於て明確に之が規定を見たるはもとより然るところ、而て安東の北五里の地より營口に引ける一線を界とせる遼東半島の割讓は、一に朝鮮獨立の保證の爲めに日本の要求したものに外ならぬ。而て結果に於てはいさかも清國をして朝鮮に干渉せしめず、反對に朝鮮國はその重要交通路を悉く日本の主權を以て被ふことゝなり、從つて朝鮮の獨立は日本によりて保證されたとは謂ひ、むしろ往時の清國が朝鮮に有する地位を自らにして日本が獲得したことになる。清國と共同して朝鮮政治の改革を爲すなどゝいふ事は、かくて最早や問題にはならなくなつたのである。朝鮮よりすれば、その獨立が日本に保たれたいふ弱味ばかりでなく、對清國關係も亦日本によりて地理上隔絶された爲め、以夷制夷の政策も採れず、只僅かに北部に於てロシヤの牽制を待つのみとなつた。即ち日本の勢力範圍は、朝鮮を通じて遼東半島一圓にまで擴大されたものと見ることが出來、從つて滿洲も從來の漢人とロシヤ人との爭霸に加ふるに突如として日本國が、しかもその重要部分に占據することゝなり、北方に於けるロシヤよりもはるかに有利なる條件を具備して、滿洲に於て漢人と相並ぶべきは實に日本及び日本人となつたわけである。加之、日本の勝利は東洋に於ける進歩派のそれである。進歩派なるものは要するに、白人の近代文明を採用しつゝあるものゝ事である。從つて日本の勝利はその一面に於て白人文明の勝利を物語るものである。戰後の清國が歐洲列强より宛然アフリカと同視せられたる傾向があつたのは、一に此の爲めに外ならぬ。滿洲も亦從つて此の傾向から逃れることが出來なかつたのだつた。たとひ强露が黑龍江

以北を占領しやうとも、滿洲は依然として清國の完全なる主權の下に漢人の獨舞臺として存在してゐたものが、日清戰後は、一擧にして之を日露支三國の競爭場として提供するの止むを得ざるに至らしめた。自分が、滿洲現代史の發端を日清戰役となす所以は實に此處にあるのである。見よ以後の滿洲には此の事實を證明すべき事實が續々として紛起するのであつた。

第五節　韓國政治に於ける日露の交渉

露國から見た韓國は、要するに滿洲の一部である。浦鹽を獲得したる露國が、更に日本海方面にその勢力を張らんとすれば、それはもとより朝鮮が問題にはなる。それよりも、黑龍江を迂廻して沿海洲に達することの不便さはより多く痛感さるべきだ。吉林省西部の防備も、浦鹽の安全の爲めには必要である。滿洲としても（獨立したる場合）朝鮮をその同一勢力圈內に置くと置かぬとでは、滿洲の主體に動搖を感ずる。即ち朝鮮は、人文地理的に之を滿洲の一部とも云ふことが出來る。而も日本の勢力は朝鮮に於ける清國のそれを一掃して之に代つた。自分が韓國に於ける日露の交渉を綴るのは實に此の故に外ならぬ。日露支三國の巴戰は先づ此處から發するのである。

日本は日清戰役中、韓國問題の重要なるに鑑み有力なる功臣を選んで之を京城に派遣せんとし、二十七年十月井上馨を以て駐韓全權公使に任じた。馨は即ち施政綱領二十條を定めて先づ韓廷の改革を

斷行し、漸を以て地方に及ぼさんとの計劃を立て着々として之が改革に缺掌し、すべて日本式を强制したのであつたが、その余りに急激に失したる爲め、裏面に於て閔氏を中心とせる排日派は露國公使ウエバアと通じ、翌年井上馨の京城を去るや、閔氏一派は果然として韓皇を擁して朴泳孝の親日內閣を更迭して之を遂ひ、冠するに反逆名を以てするに至つた。依て井上馨は急ぎ韓國に歸任し再び日本黨內閣を組織せしめたが、閔氏等は尙ほ陰謀を絕たず、三浦梧樓の井上に代つて駐韓公使となるや、再び事を起さんとして未然に發見され、反つて日本黨の爲めに王宮を砲擊され、王妃は日本黨の爲めに殺さるゝ如き始末となつた。かくて日本黨は再びその威望を加へたのであつたが、以來韓皇は深く日本に嘲む所あり、環視の列國も亦日本の處置を非難するに至り、徒に露國をして乘せしむるの好辭柄を得せしめたのであつた。而て當時の露國たるや、三國干涉に於てその志を得（次節參照）殆んど極東の司命者たるの感ありし露國である。敢焉として指を韓國の內政に染めんとする勢あるはもとより期待すべきである。曩きに獨力を以て韓國の獨立を扶植せんとしたる日本も、王妃殺害事件の爲め著しく韓國に於ける勢力を失墜したる爲め、遂に露國と協調して一に之れと衝突することを避けんとし、明治二十九年五月露國皇帝ニコラス二世戴冠式に際し、山縣有明を特派大使に任じて日露の協商を爲さしめんとしたのであつた。是に於てか日露協商は京城と莫斯科の兩地に於て開始せられ、駐韓公使小村壽太郎は京城に於てウエバア公使と、有朋はローバノッフ外務大臣と各々交涉を重ね、二種の同

趣旨の議定書が締結され之れによりて日本の獨占的優勢は失はれ、天津條約當時の清國の地位を、露國が代つて獲得することゝなつたのである。以下兩議定書の全文を掲げやう。

第一、小村ウエバア議定書

一、朝鮮國王陛下の王宮へ還御の事は、陛下御一己の裁斷に一任すべきも、露國の代表者は陛下の王宮へ還御あらせられるもその安全に就き疑惧を抱くに及ばざる時に至らば還御あらんことを忠告すべし、又日本代表者は日本壯士の取締に就きて嚴密なる措置を執るべき保證を與ふ。

二、現在内閣大臣は陛下の御一存を以て任命せられたるものにて、多くは過ぐる二ヶ年間國務大臣若くは其他の顯職に在りて寛大温和主義を以て知られたる人々なり、日露兩國代表者は寛大以てその臣民に對せられんことを陛下に忠告するを以て常に目的となすべし。

三、露國代表者は左の點々に就きて全く日本代表者と意見を同じふす。即ち朝鮮國の現況にては釜山京城間の日本電線保護の爲め或る場所に日本國の衛兵を置くの必要あること、及ひ現に三中隊の兵丁を以て組織する所の護衛兵は可成速に撤兵して之に代ふるに憲兵を以てし左の如く之を配置すること。即ち大邱に五十人、可興に五十人釜山京城間にある十ヶ所に各五十人、とす尤も右配置は變更するを得べきも、憲兵隊の總數は決して二百人を超過すべからず。而て此等憲兵は將來朝鮮に於て安寧秩序を恢復せる各地より漸次に撤回すること。

四、朝鮮人より滿一撃撃せらるる場合に對して、京城及び各開港場に在る日本在留地を保護する爲め京城に二中隊、元山に一中隊の日本兵を置くことを得、但し一中隊の人員は二百名を超過すべからず。護兵は各居留地最寄りに屯營すべし。而て前記撃撃の虞なきに至りて次第に之を撤回すべし。又露國公使館及び領事館を保護する爲め、露國政府も亦各地に於て日本兵に超過せざる人數の衛兵を置くことを得。而て右衛兵は内地全く平穏に歸し次第之を撤回すべし。

第二、山縣ローバノッフ議定書、

第一條　日露兩國政府は朝鮮國の財政困難を救濟するの目的を以て朝鮮國政府に向ひ、一切の冗費を省きて且つ其歳出入の平衡を保つことを勤告すべし。若し萬止むを得ざるものと認めたる改革の結果として外債を仰ぐことも必要なるに到れば兩國政府はその合意を以て朝鮮國に對し其救濟法を與ふべし。

第二條　日露兩國政府は朝鮮國財政上及び經濟上の狀況の許す限りは、外援に藉らずして内國の秩序を保つに足るべき内國人を以て組織せる軍隊及び警察を創立し、且つ之を維持することを朝鮮國に一任すべし。

第三條　朝鮮國との通信を容易ならしむる爲め、日本國政府はその既に有する所の電線を引續き管理すべし。露國は京城より其國境に至る電線を架設するの權利を保留す。

右諸電線は朝鮮國に於て之を買收すべき手段付き次第之を買收することを得るものとす。

第四條　前記の原則にして一層精確且つ詳細の定款を要するか、又は後日に到り商議を要すべき他の事項を生じたる時は兩國政府の代表者は友誼的に之を妥協するを委任せらるべし。

此の協商により露國は電線架設權を得、又日本と同數の軍隊を京城及び各開港場に駐屯せしむるの權利を得た。且つ韓國の財政に就いても日露兩國の協力して之か助力を爲すことを約した。是れ日本が露國の要求を待たずして、自らその既得權の一半を割譲したるものに外ならない。當時の露國が如何に旺盛なる勢力を持してゐたかが察しられる。而かも露國は、日本との協商に從ひし間に更に韓國と密約を結びてその羽翼を作し、露國の權威を韓國の上に立つること、是れより愈々大なるを致したのであつた。

第二章　露國南下の鋭鋒

第一節　遼東還附とカシニー條約の締結

露國の南下は、滿洲を主とし朝鮮を從とすべきは、もとより言を待たない。朝鮮に日本勢力の增加するを座視し得なかつた露國が、何條、日本の遼東半島所有を默視し待やう。何故ならばそれは、太平洋方面の進路に意外の障礙を覺ゐしめ、輓近巨億の資金を投じ、國力を傾注して經營したる西比利亞鐵道の目的も爲めにその大半を喪ふに至るべきが故である。露國よりして之を見れば二百年來孜々として遂行に懈らざらし東方經營の國是に對する一の大打擊たるや、固より疑ひがない。故を以て露國は清國全權委員李鴻章の了解の下に直ちに東洋の平和を辭柄とし、佛獨二國と結んで、日清講和條約の批准交換が未だ行はれざるに先ち、日本に向つて遼東半島の返還を迫つたのであつた。戰後疲弊の日本は之に抗するの力なく、遂に明治二十九年五月五日、露佛獨三國に向つて日本帝國政府は露獨佛三國の友誼上の忠告に基き遼東半島を永久に占領することを拋棄するを約すとの覺書を呈出するの止むなきに至り、八月駐清公使林董に之に關する談判の全權を附與し、李鴻章と會商して十一月に至りて六ヶ條の條約を締結し、日本は遼東半島を還附する報酬として清國より庫平銀三千萬兩を受領することを約したのであつた。

斯くて露國は、私恩を清國に售り、更に大なる報酬を獲んとして幹旋頗る努め、日本に支拂ふべき償金二億三千萬兩に對する公債の募集に對して保證の勞を採るなどあり、日清戰爭の責任者たる李鴻章は全く露國の捕虜となりしが如く、遂にカシニー條約に調印することゝなつたのであつた。時に明治二十九年五月、露帝の戴冠式に際し、駐清公使カシニー伯は、最も意を露國に傾けし李鴻章をして清國の特派大使たらしめんが爲め百方清廷に幹旋し、豫め露清條約の草案を具して密かに李鴻章と傾意の交渉を行ひ、李鴻章も亦戰敗の責任者としてしばらくにても國内非難の聲より逃れんとして、遂に募斯科に趣き彼一個の意見に於て該條約に調印を了したのであつた。故を以て該條約がカシニー伯の手を經て清國政府に提出せらるゝや、清廷の重臣は始めて事の意外に出で清國の主權を害すること頗る多きに驚き、孰れも該條約を不當として之が批准を阻止せんと試みたのであつたが、内に確たる自信なき清廷は、カシニー伯の懐柔威嚇に九月下旬に至り之が批准を爲すに至つたのであつた。議定書の本文に曰く、

清國皇帝陛下は日清戰爭の終局に方り、露國皇帝陛下の斡旋により、數多の恩惠を享受したるにより、兩國の邊境に於ける交通及び貿易を處辦し、相互の利益を擧げんと欲し、兩國の親誼を益々鞏固にせん爲めに或る事宜を妥協せんことを命ぜり。之により清國皇帝陛下は特に軍機處大臣に全權を賦與し、清國の朝廷に派遣せられる露國皇帝陛下の全權カシニー伯爵と會同し、兩國間貿易の運輸を圓滿にし、併せて邊境及び海岸の防備を堅實ならしむるの目的を以て東三省の鐵道を西比利亞鐵道と聯絡するに關するの事宜を協約せしめ、就ねて日本なして遼東及びその附近の島嶼を還附せしめたる露國側の援助報酬として、或特權を該國に讓與

カシニー密約に就て

所謂カシニー密約なるものは存在せず、一八九六年五月の露清同盟密約及一八九六年九月八日東清鐵道會社設立に關する條約が之に代るべきものなりとの議論近來有力となりつゝあり。本書に於ては從來一般に信ぜられたる如く、同密約の存在するものとして叙述せるが、此の點に關して特に研究せられんとする者は「マクマレー支那關係條約集」第一卷七九、八一、八二頁、矢野仁一氏の「日清戰爭後の露佛獨三國干渉所謂カシニー密約……」（外交時報大正十年三月十五日號掲載）等を參照せられたし。

せしむることを得せしむ。

第一條　露國の西比利亞鐵道は將に竣工せんとするを以て、清國はその鐵道を清國の境界内に延長することを露國に許可することに同意す。

甲、露領烏港より清領吉林省琿春府に至るまで、而て同府より西北吉林省の首都に至るまでとす。

乙、西比利亞に於ける或る首部の鐵道停車場より、清領黑龍江省愛琿府に至るまで、同府より四兩齊々哈爾に至るまで、同府より吉林省伯都納府に至るまで、同府より東南吉林省首都に至るまでとす。

第二條　露國によりて清領黑龍江及び吉林省に至るまで築造せらるる鐵道は悉く露國の單獨なる出資によりて敷設せらるべし。而其築造及び規則は全く露國の方式に準據すべし。清國は毫も之に干涉せず。而て全體の監理は三十年間一に露國の掌中に在るべし。其期間滿了せば清國は必要なる資金を準備し、該鐵道の適當なる評價に從ひ鐵道及び之に附屬する運轉車輛機械房屋建物等を買收することを得べし。但し清國が其時如何なる方法を以て買收すべきかは將來更に商議すべし。

第三條　清國は山海關より盛京省の首都奉天に延長する鐵道を有す、爾後清國にして自ら此鐵道を築造するを不便なりとせば清國は露國をして資金を調達し清國の爲めに其鐵道を敷設せむることを許す。而て清國は十年後に至りて此鐵道を買收する事を得べし。此鐵道の經過する線路に關しては露國は清國が吉林より奉天牛莊に至る鐵道に就いて既に踏査したる測量に從ふべし。

第四條　清國が山海關より牛莊、營平、金州、旅順口及び大連灣に敷設せんとする鐵道及びその附屬物は兩帝國通商の便宜を計らんため露國の鐵道規則に準據すべし。

第五條　露國により清國領土内に於て築造せらるる鐵道に關して其經過するの線路は常の如く清國地方文武官によりて保護せらるべし。且つ彼等は諸處の停車場に於て露國の文武官及び工事に從事するすべての技師職工等に、百般の便宜と援助とを與ふべし。然れども該鐵道は其大部分が確實にして人口稠密なる地方を經過するを以て清國官吏は常に必要なる援助を與ふること困難なり。故に露國は其鐵道財産を益々よく保護する爲め、諸處の必要なる停車場に於て騎兵の特別大隊を駐屯せしむるを許可せらるべし。

第六條　該鐵道により兩國より輸出し及び兩國へ輸入する貨物に對して徵收する關稅に關しては同治帝治世の第一年二月四日に批准せられたる兩國陸上運輸に關する露清通商條約によりて制定せられたる章程に準據せらるべし。

第七條　從來黑龍江及び吉林二省及び長白山に於て礦物採取を禁ずる規則あり。然れども條約批准後は露國人民及び清國人民共に前顯例れの礦物をも採掘を許可せらるべし。然れども採掘前先づ清國地方官に請願すべし。而て該官は清國本部に實施する鑛業條例により必要なる護照を與ふべし。

第八條　東三省に於ては、泰西の方式によりて訓練せられたる大隊ありと雖も、尙ほ地方軍隊の大半は清國の舊制によりて辦理せられたるものなるを以て清國が將來泰西の方式に從つて該省全體の軍隊を改革せんと欲せば露國より適當なる軍事士官を傭聘すべし。而て此條約の標識とすべき規則は兩江省に於て現に傭聘せる駐遼士官に關する章程に準據すべし

第九條　露國は亞細亞に於て未だ結氷せずして周年開放したる港灣を有せず。故に此の大陸に於て俄に軍事起ることあらは露國の東洋及び大平洋艦隊は自由任意に活動すること自ら困難となるべし。清國は之を熟知するを以て一時山東省膠州灣を露國に貸與せんと欲す。而てその貸與の期間は十五年か以て期限とす。此期限滿了後清國は露國が該灣占有中築造したる軍營倉庫、機房室船渠等を購買すべし。然ども軍事の恐れなきときは露國は列國の嫉妬猜忌を惹起すべき機會を忘却せんか爲め直ちに該灣を占有し、而て該灣を支配する諸要點を把握することなかるべし。貸貸金額及び之を支拂ふ方法に關しては將來議定書を以て更に妥協すべし。

第十條　旅順口及び大連は、及びその附近地方は軍事の要害あるを以て露國は將來の危險を慮り極めて速に適當なる防備を施し之が堡塞を修築せざるべからず。而て露國は此の二港灣を保護する爲めすべての援助を與ふべし。且又何れの列國と雖も侵擊することを緩過せざるべし。然ども將來事情切迫して露國が速に從事するに至らば清國は露國をして一層容易に敵を攻擊し、併せて自己の位置を防禦する爲め、一時該港灣内に陸海兵を集中することを許可するに同意す。

第十一條　然ども露國の關係する軍の虞れなきときは、清國は旅順口及び大連灣の管理に於て全支配權を有すべし。而て露國は如何なる方法を以てしても干涉すべからず。但し東三省の鐵道築造及びその礦物開坑採掘に關しては露國は此條約締結の後直ちに又その

人民の任意に從事することを得べし。而て前顯の地方を旅行する露國の文武官及び商人等は何處に前往するも清國地方官の權内に在るすべての保護の特權及び便宜を享受すべし。之等の官吏等はその途上に障碍を爲し、前顯露國官吏及び商人の旅行を遲延ぜしむべからず。

第十二條　此條約が清國及び露國兩皇帝陛下の記名調印を得たるの後は之に包含したる各條項は直ちに有効となるべし。而旅順口、大連灣及び遼州灣に關する條項を除きその他の條項は兩帝國の諸地方官へ通知せらるべし。又批准交換の場所は將來更に議定せらるべし但し交換は六ヶ月以内に起るものとす。

此の條約によりて滿洲は、その宗主權こそ清國の保有する所なるも、事實上露清の共同所有地となれるの觀がある。旅順大連の自由使用權と謂ひ主要幹線鐵道の敷設と謂ひ、鑛山の採掘權と謂ひ、露兵の駐屯と謂ひ、むしろ名義上の宗主權は清國に在るも、その實質に至つては、露國の領土にも異ならざる如き狀態となつた。たとひ同等なる權利を有すると雖も、強大なる露國に向つて、敗殘の北京廷は、之と對立して滿洲にその國權の運用を期することは出來ない。しかも此の間、第三國は毫末も加入するものなきに於ておやだ。今や露國は、滿洲にその自由手腕を振ふべき土臺を築き上げた。見よ此の年十一月露國は此の條約に基いて、東清鐵道會社を設立し、露清協同の外觀を裝ひて、前清國駐露公使許景澄を擧げ、之をして社長の名を稱せしめ、其實は露國鐵道界の老功者たるケルベッを副社長に充て、之をして一切の社務を總攬せしめ資本總額五百萬兩は露清銀行に於て悉く之を支給せんとしたので東清鐵道一たび設計せられて、滿洲は將來に於て實に露國極東の新帝國を經營すべき第一基礎が打建せられたのである。

然らば何が故に、斯の如き獨り露國にとりてのみ有利なる條約が締結せられたか。それは勿論露國そのもの優勢と、彼が外交の卓絶せるによる。然し、一方清國の弱點の多大なるものありしを忘れることが出來ない。卽ち、日清戰役の結果、清國は眠れる獅子より肥えたる豚に急轉直下したる現實暴露の悲哀がある。遼東半島の割讓は國都を不安ならむるものがある。それよりも清廷威信の失墜は之によりて加速度を加へて來た。當の責任者李鴻章も紛々たる國内の非難には清廷と同樣の窮狀に陷つた。遼東半島の返還が、極度に自信を失ふた之等清國の當局者に如何の感を懷かせしかは想像するに難くない。請ふ、李鴻章に語れるウイッテ伯の言なりと云ふ次の數項を讀め、カシニー條約締結の雰圍氣は眼前に彷彿たるものがあるであらう。

露國の極東政策は支那の保全を基礎とす。露國は既に過去に於ても然りし如く將來に於ても各機會を捉へて支那との友情を鞏固にするを利益とすべし。露國の此の如き態度に出ずるは、勿論己れの利益の爲めに相違なきも支那に對する同情の念より發するもの少なからざるなり。何となれば露清兩國は根底に於て利害を同じうするものなればなり。之に反し日本の政策は全然自己の利害のみを基礎とし清國の保全を破らんとするものなり。日本の求むる所は清國の領土と露國の領海なり。彼は平和の敵なり。若し露清兩國にして提携して彼に當るに非れば彼の野心を制する能はず。然れば

今日本にして急に清國を襲ふ如きことあらば露國は清國を助くべし。而て斯の如きは何時發生するやも保すべからざるなり。露國は有力なる軍隊と精巧なる重砲とを有す。而も一朝事あるに當り如何にして之を日清の戰場に送るべきか、交通機關は海陸に絶無たるなり。故に兩國にして提携事に當らんとせば先づ露兵の速に支那軍に連合するの途を開かざるべからず。これ即ち鐵道の敷設を要する所以なり。鐵道なくんば同盟なし。吾人の結論は此の二字に在り。

第二節　韓國に於ける露西亞

日本はすでに滿洲より驅逐された。國運を賭して爭ふた朝鮮さへも、日露協商のすでに成立して韓國は日露兩國の共同保護を受くべき地位に立つてしまつた。されど此協商たるやむしろ露國をして我が鼎の輕重を量らしめ、更に韓國をして我を輕侮せしむるの端を啓き開かしめた。露國に傾心せる事大の一派は爲めに勢を韓廷に得たのであつた。是に於てか露國は先づ日本に代りて軍隊教練の事に當らんと試み韓廷に迫りて日本士官を解雇せしめ、すでに明治二十九年(光緒二十二年、一八九六)五月には日本士官の手に成りし軍制をも廢止せしめ、新に露國式を採用せしめ、露國士官若干を陸軍教官として招聘せしめたのであつた。戰後の日本は、露國の威勢に恐れて敢て抗議する所なかりし爲め翌年に至り、露國は更に自國の士官二十八名下士卒九十五名其他三十五名合計百六十名の傭聘を韓廷に提議して已まず、事大を主とせる韓廷すらも日本を憚りて疑惧し直ちに之を諾することが出來なかつた。しかるに露國公使は態度を一變して韓廷の大臣を脅迫し、必ず其提議を容れしめずんば止まざらんとしたので、日本も始めてその日露協商に違へる所以を抗議したが、事未だ決せざるに露國士官若干名は韓廷の傭聘に應せんが爲め、既に京城に入り來つた。幾ばくもなく露國公使ウエバアは轉任を命ぜられスペーアは直ちに之に代りて依然韓廷に要求する所あり、遂には今回に限りて雇聘を增すとの約を結びて、爾來親衛兵五大隊は全く露國式の訓練を受くるに至つた。日本も亦東京駐紮露國公使ローゼンと議して之を是認したので、恰かも韓國保護の全權を擧げて之を露國に委任したるものゝ如くなり、日露協商は爲めに一片の空文と化し畢つたのである。斯して露國は更に進んで韓國財政の實權を收めんとし明治三十年(光緒二十三年)十日公使スペーアは、書を韓國政府に贈りて露國財政顧問官の雇聘を提供して曰く「朝鮮一切の租稅及び關稅を監檢し、且つ之を指揮せん爲めにアレキセーフを度支廳間に聘せられんことを希望す」と。然るに當時は英人ブラウンが財政の最高顧問であつた。露國の要求する所はブラウンを解雇して、アレキセーフをして之に代へんとするに在つたか故に、韓國の度支衙門は斷乎として之に應ずる能はざる旨を答へざるを得ない。然るにスペーアは外部大臣に迫りて之を强請し、韓廷も亦その言を怖れて、遂にブラウンを解雇せんとし、之を京城駐在英國領事ジョルダンに通告した。仍つてジョルダンは抗議最も力め日本の使臣も亦異議を唱ひ出したので、韓

國政府は踏躇逡巡して而かも露國公使の要請を斥くることが出來ず、却つて要請の爾來益々急なるに逢ふて、之を奈何ともするに由なく、爲に韓帝をしてブラウン解雇の詔勅を公布せしむるに至つたのであつた。是に於てか露國は直ちに、露清銀行を京城に創立して、韓國の財政經濟を左右すべき好個の機關を擁し、之に依りて韓國の實權を一握せんと圖つた。

斯の如き露國の傍若無人なる行動に對して猛然と立つたのは實に英國であつた。明治三十年十二月、英國東洋艦隊に屬せる七隻の巨艦は、忽然として仁川の埠頭に現はれ、ジョルダンは若干の兵を率ゐて京城に入城したのであつた。韓帝報を得て恐怖爲すところを知らず、特にジョルダンに贈るた正二品金寶冠を以てし、再び度支衙門最高顧問の職に從はしめ、アレキセーフは之に隷屬するの止むなきに至つた。是れより露國は、却つて韓廷の忌憚する所となり、併せて列國の同情をも失ひ反對に非露國黨が勢を回復し、米國派と稱する一派及び韓國協會の一團等亦起つて露國の專横を痛論するに至つた。時に偶々絶影島事件の起るあり、反露國派は爲めに益々聲焔を加へて來た。そも〳〵絶影島なるものは夙に日本の貯炭所に充てられし所であつたが、露國も亦東洋艦隊の爲めに貯炭所を此處に設けんとして新に之を韓國に要求し、露國黨なる外部大臣閔種默は獨斷を以て之に應じた爲めに、露國の專横を非議するの聲は囂然として國内に反響し、閔氏は遂にその職を免せらるゝに至つたのである。是に於てかスベーアは形勢の日に非なるを看取し、寧ろ從來の干涉策を拋つに如かざるを悟り、明治三十一年三月（光緒二十三年）財政顧問より傭兵に至るまですべて之を韓國より撤退し、己れも亦韓國を去りマチューニンが之に代るに至つた。斯くて露國の勢力も忽ちにして跡を韓國の半島に歛めたのであつたが、固より是れ半島を斷念したのではない、むしろ其鋒鋩を一轉して滿洲の局面に飛躍すべき時期がすでに到來したからであつた。之と同時に第二の日露協商は、日本外務大臣西德次郎と東京駐紮露國公使ローゼンとの間に、山縣ロバノッフ議定書第四條に準據して左の如き條款を協定し、韓國に於ける日本商工業の發達並びに韓國居留日本人の多數なることを承認したのであつた。

第三　日露議定書

第一條　日露兩國政府は、韓國の主權及び完全なる獨立を確認し且つ互に國内の内政上には總て直接の干涉を爲さざる事を約定す。

第二條　將來に於て誤解を來すの虞を避けんが爲め、日露兩帝國政府は韓國か日本若しくは露國に對して勸告及助力を求むる時は練兵教官若くは財務顧問官等の任命に付きて先づ互に其協商を遂けたるにあらざれば何等の處置をも爲さゞることを約定す。

第三條　露西亞帝國政府は韓國に於ける日本の商業及び工業に關する企業の大いに發達せること及び韓國居留日本國臣民の多數なることを認むるを以て日韓兩國間に於ける商業上及び工業上の關係の發達を妨碍せざるべし。

第三節　露國の旅大租借と英露の交涉

遼東還附の報償として締結せられし露清條約は、列國をして競ふて勢力範圍を清國に劃定せしむるの動機となり、先づ獨逸は、一宣教師の殺害を口實として直ちに軍艦を進めて膠州灣を占領し、明治

三十一年（一八九八）之が租借の條約を强制し、山東省をば公然擧げてその勢力範圍としたのであつた。是に於てか露國は蜘蛛する所なく直ちに軍艦を派して旅順口を占領せしめ獨逸に許與せしと同一の條件を以て旅順口及び大連灣の租借を清國に要求した。然るに旅順口及び大連灣は、もとより遼東半島の要衝に當るが故に、露國にして一度び之を占領せんか滿洲全部を露國に提供するの結果となる恐れがある。その利害の關する所最も多きは日英の兩國である。されば英國は先づ之に對し清國に抗議し、東洋艦隊をして進んで勃海灣に游戈せしめ、更に駐露英國公使をして直接に露國政府と折衝するところあらしめた爲め、露國政府は乃ち英國に約するに旅順口及大連灣をば、他の清國の諸港灣と等しく自由港と爲して之を列國に開放すべき旨を以てした。而も露國は此の間を以て旅大租借の交渉を北京に開始し、駐清露國代理公使パウロフは遂に明治三十一年三月を以て次の如き租借條約を締結したのであつた。

パウロフ條約大要

一、露國は二十五ヶ年の期限を以て旅順口及び大連灣を租借す。借地區域は遼東岬角より北へ清里百五十里、東西約八十里とす。

二、大連灣は貿易港たるべきも、旅順口は露清兩國の船舶に限り出入を許すべきこと。

三、伯都納より奉天府を經て旅順に至る鐵道を露國式によりて敷設すること、

四、露國は新に得たる土地區域より遼東の西方海岸に鐵道支線を敷設し得べき權利を有すること、而て此支線竣工の後その終點たる海岸は旅順口大連灣と共に露國に貸與せらるべきこと、

此間日本政府は退嬰畏縮をこれ事として毫も正當の抗議を試むるの勇なく、袖手して徒に英露折衝の成敗を傍觀してゐたのであつた。而かも露國は更に此の年の五月、また清國政府に說きて之と一種特別の協約を結び左の條項を約せしめたのである。

一、清國は露國の承諾を得ずして旅順大連以北の地方を他の諸國に割壤せざること

二、他の諸國の通商の爲めに此地方の西部海岸の諸港を開かざること、

三、露國の承諾を得ずして此地方に於て鐵道敷設及び鑛山採掘の權利を他國に讓與せざること

此の特別協約の如きはもとより、英國をその敵手として約定したるもの、獨逸の膠州灣占領も露國の奸策に出でたりとさへ云はるゝ如く、清國領土内に於ける英露の利害は次第に相反し、露國が遼東半島を租借するや、英國も亦威海衛を租借し、更に英國の香港上海銀行が清國の關外鐵道を新民廳まで延長し、又營口に達する支線を敷設する爲め、該鐵道全部の所有權及び沿道の石炭及び鐵鑛採掘權を抵當として清國政府に一千六百萬兩の資金を貸する當り、(一)以後清國の河川は英國船舶の航通の爲め開放せらるべきこと(二)楊子江沿岸を他國に讓與若しは租借せしめざる事、等を約せるに對し、露國も亦更に白耳義シンジゲートの名を藉りて蘆漢鐵道の敷設權をも獲得し、南下して將に楊子江流域

に出でんとする態度を示し、一方露國公使バウロフは、英國の山海關牛莊鐵道のカシニー條約に違背するものなることを清國に抗議し、之れが爲め英露兩國間に確執を生じて事體頗る重大なる結果を生せんとしたのであつたが、十月香上銀行はその契約を改めて北京天津山海關の既成線を担保とするに至りて解決し、清國は改めて英國に對し關外鐵道を決して外國に讓與せざるべきことを誓約したのであつた。斯くて英露兩國は、各自の勢力範圍を劃定して互に相侵害することなからむるの此際有利なるを覺り明治三十二年（光緒二十四年、一八九九）四月大要次の如き協商を締結したのであつた。

英國は自國の爲めにも、若しくは英國臣民の爲めにも、若くは他の者の爲めにも、支那の長城以北に於て鐵道敷設の許可を要求せず。且つ此地方に於て露國政府の支持する鐵道敷設の許可に對する要求を直接若しくは間接に妨害せざることを約す。

露國も亦之と同樣の事を揚子江流域に於てせざることを約し、玆に明白にその勢力範圍を確定したのである。かくて露國の滿蒙奄有は、世界的にその公認を得たやうなものである。何故ならば獨佛は三國干涉以來露國の行動を是認しつゝあたからである。唯獨り米國のみが門戸開放、機會均等を主張したのであつたが、既得權を尊重するものなりしが故に、滿洲に於ては單に大連港の開放を見たのみであつた。

第四節　露國の滿洲奄有

露國の滿洲に於ける根據はすでに定つた。そが奄有の野心は、只時機を待つて發するのみであつた時、偶々清國の排外運動は漸次其聲燄を添へ、變法自疆の失敗は固窮なる扶清滅洋となり、遂に明治三十三年（光緒二十四年、一八九九）山東省の各地に蜂起したる義和團匪は一氣に北上して北京を占領し、清廷の後援を得て攘夷を決行せんとしたのであつた。依りて列國は共同して北京在留民の救援の爲め聯合軍を組織し、日本兵を主力として太沽より進んで北京に入らんとしたのであつたが、是の時に當り露國は、黑龍江南岸の清國人が義和團に應じて攘夷の事を實行せんとするを聞きて大いに驚き、ブラゴヴエチエンスク知事チチエゴフは市內在留の清國人に命ずるに直ちに河を渡りて南岸に退去すべきを以てした。清國人は此の命令に服從したのであつたが、船舶不足せる爲め一時に多數の渡河は不可能にして、與へられたる二十四時間の猶豫期間を經過するも尙ほ市中に留まるものが多かつた。之を見たるチチエゴフはコサック兵に命じ武力によつて清國人を河に遂はしめ、その渡ること能はずして號泣するや、劒を執りて之を虐殺せしめた。その虐殺は實に二日間に亘り溺死せるもの五千人、伏屍累々として河畔に橫はるの慘狀を呈したのであつた。而も此慘劇は深く滿洲の人心を激昂せしめ、所在の馬賊一時に呼應して其暴戾を憤慨し、檄を飛ばして其讐を報せんと告げ、忽ちにして全

滿洲の動搖を來した。玆に於てか、露國は此の機會を逸せず、尙ほブラゴヴエチエンスク知事の要求に應じて援軍を送り、兵力足るに及びて北滿洲の匪亂を鎭定すとの名目を以て更に滿洲に兵を進め、先づ黑龍江對岸の愛琿を占領し、尋で琿春、哈爾賓、三姓を畧し、更に又南下して遂には南滿洲に出で、進んで海城、營口、金州を陷れ、數日を出ですして東三省一帶の地廣袤約十二萬方里をば擧げて露兵の奄有する所に一任せしめたのであつた。玆に於て露國は北清に於ける利害は列國と相違するに至り、動もすれば列國共同の羈束を脫し、單獨の行動を敢てして滿洲奄有の實を擧げんとする の情況を呈し、聯合軍が進んで北京を復し、旣に赴援の目的を達するや、露國は乃ち率先して直ちに撤兵の議を提出した。その理由とする所は實に「今後清國との平和回復せんには先づ主權者たる清國皇帝の還御を請はねばならぬ。若し列國の軍隊にして、此の如く北京に駐在せば皇帝回鑾の事は容易に望むことは出來ない」と云ふに在つた。これ實に列國撤兵の首唱者となりて先づ恩を清廷に售り、之をして露國の賴むべきを思はしめ、その報償として滿洲の利益を獲得せんとしたものと傳へられる。

當時日本政府は直ちに露國の提議を斥けて「列國若し同意せば日本亦撤兵を行ふも可なり、されど若し北京より一切の軍隊を撤退したるが爲め、却つて北京の平和を克復し難きことあらんには列國の派兵は殆んど之が効果の大半を失ふべし。是の故に清國の主權者をして再び彼が如き無謀の擧を演せざることを保證せしめ、且つ列國軍隊の一部を守備として北京に駐在せしむることを諾せば、日本は敢て撤兵を辭せず」と主張し、英國も亦清國と適當の條約を締結するに及ばざる間は斷じて撤兵の提議に同意することが出來ぬと唱ひ、佛國を除く外は列國擧つて露國の提議に同意するものがなかつた。

露國は是に於てか、自ら先づ公使以下の外交官及び軍隊の大半を天津方面に撤退せしめて、列國協同の班列を脫すべき第一歩に出たのであつたが、その滿洲に於けるや自ら馬賊を激して禍端を挑發し、秩序の未だ回復せらるざるを名として兵を增し、要地を占領すること、更に一歩を進めたるの觀あり し爲め、列國は次第に露國の擧止に就いて疑ひの目を放ち始め、米國の如きは露國政府に向つて滿洲出兵の理由を質し、露國は之に對し若し鞏固なる秩序の滿洲に確定せられ、鐵道の保護に關して必要の手段を採るの要なきに至らば、他國の動作が障害を與へざる限り露國は直ちに清國の版圖內より軍隊を撤退するに躊躇しないであらう」と言明したのであつた。而て此の北清事變の善後處分に關しては、その第一條件たる元兇の處罰に就いて、露國は表面上米國とその軌を一にする宣言書を發し「露國出兵の目的は唯團匪を掃蕩して北京を援護する爲めであつた。此目的にして旣に達するを得ば速に西太后の一派をして舊政府を恢復せしめ、然る後善後の處置を講せねばならぬ」と謂ひ、獨逸に反對して暗に淸廷の現狀を維持せしめんとしたのであつた。かゝる時に、西安に蒙塵せる淸廷の兩官は先づ軍機處大臣慶親王を北京に還らしめ、李鴻章と相會して共に一切の事宜を處辦せしめたが、西安に於ける

兩宮の左右は依然として守舊一派に周匝せらしるが故に、尋いで列國が獨逸の提議を納れて、既に元兇の處罰を媾和の第一着手としたるに際してすら、其元兇と目せられし鎧郡王が改めて軍機處大臣の首班に補任せられたるの奇觀を呈したのであつた。是れ露國が暗に聲援を與へた爲めであつたといふ。それかあらぬか、列國の使臣が方さに清國と北清善後處分を會商してゐた時、露國は別に滿洲に關して清國と單獨の交渉を開始し、早くも滿洲獨占の歩武を進めんとしたのであつた。

斯く如き露國の單獨行動は、既に滿洲領有の鋒鋩を露はして亦掩ふべくもない。英米兩國は始めよりして之を怪ばなかつたが、獨逸の如きはむしろ之を承認せんとするの色があつた。故に明治三十三年十月に成れる英獨協約は明かに清國の門戸開放と領土の保全とを宣言したのであつたが、而かも獨逸は滿洲を以て該協約の範圍外に置くべきものなりと解釋した。而して當時の日本は之に對して何等の異議を挾むことなく徒に之を傍觀して毫も與り知らざるものゝ如く、唯在野の志士の相率ゐて益々露國の專横を憤ふるものがあつたのみであつた。

英獨協商の調印せられし翌十一月、露國は更に一歩を進め來り、旅順口駐在の關東總督海軍中將アレキセーフは奉天將軍增祺を要して所謂アレキセーフ密約なるものを旅順口に締結した。第一露清密約と稱するものが是れである。即ち

一、露國軍隊は鐵道を保護し地方を鎮撫する爲め、奉天及び其他の地域を占領したるにより、奉天將軍及地方官は露國人を優遇し、之に宿舍及び糧食を供給する事を幇助すべし

二、奉天省に於て清國軍隊暴動を起し鐵道を破壞したるに就き、奉天將軍は彼等の武裝を解きて解隊せしめ、且つ露軍が未だ占領せざる兵器製造所にある兵器彈藥を悉皆露軍に引渡すべし。

三、露國官吏立會の上露軍の未だ占領せざる各地の要塞は一切防禦工事を除去すべし。

四、現に露軍の占領せる營口及び其他の個所は露國政府の滿足すべき秩序回復を待ちて還附すべし。

五、奉天省其他の地方警察は奉天將軍の指揮を受け秩序の維持を努むべきも、全般の監督權を有する露國辨理官は奉天府に駐在し、重要なる事項は奉天將軍より、右辨理官に報告すべきものとす。又若し或事變に際し必要ある時、奉天將軍は直ちに在奉露國總領事に通知し露國をして增援隊を派遣せしむべし。

此の密約は蓋し他日の本條約を協定すべき一の基礎たるものに過ぎなかつたが、その牛莊を依然貿易港として存置するを必要とする英米の感情を害し、又政治上の理由より日本の敵意を烈しくし、之等三國は清國政府に向つて滿洲に關する特別の協約を露國と單獨に締結するの危險なるを警告し、清國も亦時方に媾和條件議定に屬すとの理由を以て直ちに之を拒絶した爲めに、該密約は無効となつたのであつた。然し英獨協商に對する獨逸の解釋が、頗る露國をして滿洲獨占の好辭柄を與へたことは事實

である。獨逸が暗に露國に聲援を與へたる跡の既に掩ふべからざるものあるは勿論、當時列國聯合軍の總指揮官なりし元帥ワルデルゼーの如きも亦頗る露國の行動を幇助したりとさへ傳へられた。是れよりして露國の體度は毫も列國に憚るところなく單獨の行動を以て頗りに清國に迫り來つたのである。

第五節　滿洲問題とその雰圍氣

第二露清密約は、明治三十四年二月（光緒二十七年、一九〇一年）露國外務大臣ラムスドルフと駐露清國公使楊儒との間に露都に於て交渉が開かれた。それは、勿論列國の現線を避けて陰密の間に事を成さんとしたものである。然るに幾くもなくして飛說は早くも該特別條約の調印せられんとするを傳へ、露國政府は頻りに之を否認して、增祺アレキセーフ密約の再議に過ぎない、と稱したのであつたが、はからずもロンドンタイムス北京通信員モリソンが、該特別條約の草案なるものを探知して之を英京に報道するや、露都に於ける交渉の眞相も忽ちにして明白となり、爲めに一時は頗る宇內の耳目を聳動したのであつた。此の密約の要目と稱せられたのは實に次の十二項に渡つてゐた。

一、露國は滿洲を清國に還附し清國の吏治一切を舊に復するものとす。

二、露國はその兵を駐めて鐵道を保護す。但し地方の秩序回復し、且本條約最後の四ヶ條が履行せらるゝを待つて撤兵すべし。

三、事變あるときは右駐屯兵は全力を以て清國を助け鎭撫に從事すべし。

四、清國は鐵道の開通せざる間は兵を滿洲に置くべからず、後之を置くときはその數を露國と協定すべし。

但し兵器を滿洲に入るゝことを禁ず。

五、地方の將軍大臣の處置宜しきを得ざる時は露國の需に應じて之を革職すべし。滿洲の警察兵は露國と協議の上その數を定め決して外國人を用ゆべからず。

六、滿洲蒙古の陸海軍は外國人をして之を訓練せしむべからず。

七、清國は滿洲の自主權を放棄するものとす。

八、滿洲蒙古、新疆伊犂の鑛山及其他の利益は露國の承諾なくして之を外國人に與へ又は清國自らこれを爲すことを得ず、牛莊の外何れの地と雖も之を外國人に租借せしむるを許さず。

九、滿洲の軍事費は清國之を賠償すべし。

一〇、東清鐵道會社の損害は清國之を會社と商議の上賠償すべし。

十一、現時の損害賠償は全部又は一部を他の利益を以て擔保となすべし。

十二、清國は滿洲鐵道の支線を北京に延長することを許認すべし。

是の時に當りて北京に於ける列國の使臣會議は尙ほ依然として進行の央ばに在りし爲め、獨り露國

をして特別の要求を爲さしむる譯には行かなかつた。よつて日英米三國は先づ抗議を清國に提出して其不可なるを切言し、伊墺獨も亦同じく警告を與へたが、當時の清廷は動もすれば露國に聽かんとするの色ありしが故に、日本は更に一歩を進め直接露國政府とも併せて談判する所あらんとし、三月十日彼得堡の朝廷に向つて抗議を提出し、英國も亦有力なる援助を與へた。然るに露國は之を辨疏して單に滿洲の撤兵に關する一時の協定に過ぎすと爲し、今や反つて頻りに清廷を脅威し、四月一日を期して之か決答を迫り事體愈々急を告げ來つた。是に於て日本は元帥會議を開き外務大臣加藤高明も之に列して說明するところあり、陸軍省も亦戰鬪準備の調査を始めたと傳へられたので露國は忽ちその態度を一變し、四月五日の日附を以て猝かに露清條約の撤回を宣言した。而かも露國は爾來毫も滿洲領有の素志を抛つことなく、新市街は滿洲の各所に建設せられ、兵舍營は諸要地に築造せられ、既に撤回せられたる要求の各條件は事實着々として却つて實行の歩武を進め來つたのであつた。

かくて北清動亂の善後處分も既に終りをつげて、露國の單獨行爲も列國より抗議せらるゝ理由も消失したるを以て、露國は乃ち再び露清密約案を提げて清國全權に臨み、滿洲の撤兵に限りて特別の條件を附するの要ありと爲し直ちに交渉を開始した。之を第三露清密約といふ。その要領に曰く、

一、露國は牛莊山海關鐵道と共に滿洲を清國に還附すべし。但し該鐵道の保護に付いては一切他の外國人に委託せざること、

二、露國の軍隊は本年（明治三十四年、光緒二十七年、一九〇一年）內に盛京省を撤退し次の二ヶ年內を以て漸次に吉林省及黑龍江省を撤退す。

三、滿洲の清國軍隊は露國の士官によりて訓練せらるべきこと、

四、牛莊鐵道は清國に還附すと雖も英國又は日本軍隊の輸送を許さゝること、

蓋し曩日の提案に比すれば頗る寬大温和の外觀を裝へるものであつて、當時直隸總督李鴻章が露兵を撤退せしめて滿洲を清國に回收せんことを期し、清廷と駐清公使レッサアとの間に立ちて鋭意斡旋したるが爲めに外ならない。然し撤兵期と露國士官の傭聘とを約するは、固より他の列國に對して利益均霑の口實を與ふるの虞あるを以て、清廷は歳の十月遂に斷手として露國の提案を拒絶し、李鴻章も翌十一月病沒して、露清の交渉も爲めに一頓挫を來したのであつた。然しなら露國は此時すでに露領關東省を旅順大連の一帶に置きて駐兵を滿洲の各地に配置し、日夜工事を督勵して東清鐵道の竣成を急ぎ、李鴻章の病沒と月を同じふして、早くもその全線を敷設し畢つた。後貝加爾線と烏蘇里線とを接續せる北部線の延長一千四百六露里、哈爾賓より大連旅順に至る南部線の延長八百八十二露里を算するものが即ち是れである。是に於てか東清鐵道の全線は殆んど完成を告げ、旅順大連の築港建市築城船渠棧橋等も亦工事の大半を畢つた。故を以て第三露清密約の提案たるや、實は露國が之によりて第

三者たる列國に對すべき好保障を得んとするに過ぎない。隨つて之が極東の經營は此等密約の成否と事實何等の相關する所もなかつたのである。常に露國に類つて日本をのみ敵視したる清廷及び李鴻章も、着々として足下に迫り來る露國の鋭鋒には今更ながら驚かざるを得ぬのだ。李鴻章の如き、遂にその責任感より煩悶の餘り吐血して死んだと傳へられる。清廷のみではない。極東の利害を俱にして從來概ねその歩調を一にしたりし日英兩國も、露國南下の鋭鋒を防がんとして同盟を締結し、清帝國と韓帝國の獨立と領土保全を維持すること、及び二國に於ける各國の商工業をして均等の機會を得せしむること等を約せざるを得なかつたのである。而も露國は日英同盟如き毫も意に介せざるものゝ如く、明治三十五年（光緒二十八年）三月露佛同盟宣言書を發し、日英同盟は極東に於ける露佛兩國が特別利益の保障なりと皮肉り、第三國も清國自身も露佛兩國の利益を害するものある時は立つて之を保護せざるを得ずと謂ひ、爾來滿洲問題は列國利害の焦點たる形となり、禍機の啓端も亦將に朝夕を計られざる有樣となりたのであつた。

斯かる間に、露國が曩きに宣明したる滿洲の撤兵時期が迫り、今は日英同盟の之を監視するありしを爲め、露國も亦止むなく改めて清國と滿洲の還附條約を結び、進んで清國の爲めに大いに讓歩し、三十五年四月該條約の調印を終つた。その梗概は次の如くである。

第一條　露國は占領以前に於ける狀態の如くにして滿洲の主權を還附す。

第二條　清國政府は滿洲に於ける露國人民及事業を保護するの責に任ず。是を以て露國は十八ヶ月間にその軍隊をば全く滿洲より撤退す。其期限は三期に分ち六ヶ月以内には盛京省より、次の六ヶ月以内には吉林省より、最後の六ヶ月以内には黑龍江省より撤退べし。

第三條　露國の軍隊が撤退せざる間は清國軍隊を配置する地點及その兵數を露清兩國の將軍に於て協定し、露國軍隊の悉く撤退を終りたる後は、清國軍隊の駐屯及その兵數は清國政府の自由撰定に任ず。但しその兵數は露國に通告すべし。

第四條　山海關、營口、及び新民廳の鐵道はその所有主に返還す。其鐵道線路を保護するは清國政府の責任に屬し、他國を誘引して之を保護せしめ或は其線路を管理せしむることを許さず。

又露國の還附せし土地を他國に占領せしむゝを許さず。此線路を露國が修理したる費用として清國は若干を露國に償還す。但その金額は百萬留以内とす。

此條約によれば露國は明治三十五年十月八日を期して奉天西南部及び遼河以西に先づ撤兵を決行せねばならぬ。而も、該地域の撤兵はもとより露國にとつては多く痛痒を感ぜざる所なるが爲め、期に先ちてその約を履み、兼ねて撤兵實行の信を示さんとしたが、その實は單に駐兵の移動を行ひしに過ぎずして、之等の兵員は却つて盛京省の東部一帶の地に配置せられ、更に進んで韓國の疆上に出で恰かも鴨綠江一帶の地を占領せんとするものゝ如く、諸要地を卜して盛んに兵營類似の建築物を新設せられたのであつた。

既にして年は改まり三十六年の四月に至れば、第二の撤兵時期となる。然し露國は期に及んでも毫もその撤兵を實行せず、或はその一部を移動せるものがあつたが、是れも亦移されて悉く韓國疆上の

守備に充てられ、加之通化懐仁を根據とせる馬賊が、一たび露國陸軍大佐マドリトフの爲めに懐柔せられてから、鳳凰城安東縣の諸要地も亦擧つて露兵の駐屯地となつてしまつた。清國の東邊道臺は風を望んで恐怖之に抗するの力なく、露國は今や南滿洲を席卷して更らに重壓を韓境に加へんとするが如くであつた。斯の如く露國は一時滿洲駐兵の移動を行ひて幾かに撤兵條約の履行を裝ひ得たが事實はしかも掩ふことが出來ず、鋒鋩は頗る露はれ、かくて列國の抗議は益々紛起し來つた。依つて露國は最早や速かに事を定むるに如かずと爲し、陰密なりし從來の態度を一轉して直ちに清國に肉薄し來り、第二撤兵期の後幾くもなくして駐清代理公使ブランソンをして撤兵の附帶條件七箇條を清國に提出せしめた。その條件に曰く、

一、清國は東三省の地を他國に讓與し又は租貸せざるべきこと、

二、清國は營口より北京に至るの清國電線に沿ひ、露國の別線を架設することを露國に許す。

三、何等の名義を以てするも清國は北京に於て外國人を傭聘せざること、

四、營口に於ける海關稅は之を取扱ひ、右稅關長は必ず露國人なることを要し、且つ該稅關をして檢疫事務をも管理せしむること、

五、東三省に於て營口以外の地を外國貿易の爲めに開放せざること、

六、蒙古に於ける行政組織は舊に仍つて變更せざること、

七、北清事變以前に露國の取得したる權利はすべて何等影響を蒙らざること、

是れ直ちに全滿洲を擧げて露國の保護下に置き、その地域を閉鎖して之が利益を獨占せんとするのに外ならない。是に於て米國は率先して抗議を露國政府に提出し、之が眞意を詰問して直ちに決答せんことを促がし、之と同時に、日英米の三國は齊しく清廷に警告するところがあつた。露國外務大臣ラムスドルフは直ちに米國に覆牒して「露國政府は外國人民が現に滿洲に享有する一切の權利を奪ふて、露國自ら特別の權利を得んとするの意志を有せず、又何等の方法に於ても滿洲開放を阻害せざるべく、却つて露國は米國の通商と資本とを誘引せんことを布望する」との證言を與へ、又新要求の事實無根なることを宣明したが、事實は之と相背馳し、極東の駐在官は益々清廷に迫りつゝあつた。清廷は又日英米三國の警告に顧みて、遂に露國の提案を斥くる旨の公文を代理公使に交附したので、露國公使レッサアは急ぎ北京に歸任し再び清國と正式の談判を開き、六月慶親王と第一回の會見を遂げたのであつたが、爾來慶親王は病と稱して日英兩使節との面會を謝絶してしまつたのであつた。當時露國陸軍大臣クロパトキンが方さに日本に在りて頻りに款待を受けたとの報あり、爲めに清廷は、日本が兢々として露國を怡るゝものであると解し、益々日本を輕視して自ら露國に傾心するの色あり、北京に於ける巷說も亦紛々として眞を辨ずるを得ず、或は露清密約の將に成立せんとさへ傳へられた。是に於て日本は先づ清廷に對して峻烈なる警告を與へ、之が決答を待つて然る後露國と折衝を開始せ

んとしたのであつたが、間もなく露國側はクロパトキンの旅順に歸るや、極東の文武官を召集して所謂旅順會議を開き、公使レツサアも亦之に列して何事か協議するところあり、一方露國の軍隊は、俄然として盛んに示威運動を滿洲の各地に行ひ、吉林奉天の駐兵は悉く南下して遼陽、海城附近に集中し、旅順口の防備は益々嚴にせられ、砲臺は盛んに增築せられ、又新に東亞大守府を旅順に設置し、關東總督アレキセーフは海軍大將に昇進して東亞の大守に任せられた。更らに韓疆上にもその重壓は加はり、森林伐採を名として、鴨綠江上には盛んに哨舍が築造され、進んでは江を渡つて道路を韓國の內地に開き、電線を敷き、哨舍を築いて、既に龍岩浦一帶の地を占領したのであつた。當時淸廷は殊に露國の行動を知らんか爲め恰かも旅順會議の時に際して內官李蓮英を派したが、蓮英は先づ露國軍隊の頻りに動くを見て驚き歸つて之を朝廷に報じたので、風聲鶴淚に驚く淸廷は之を聞いて忽ち色を失ひ慶親王、王文韶、李經芳、增祺等は相率ゐて公使レツサアの前に跪かんとし、七月中旬にはすでに露淸密約の成立せる旨が傳へられた。時に日英米三國は依然として頗りに警告を淸廷に提出し、殊に日米兩國は、更に通商條約の改訂に依りて、奉天、大東溝及び安東の開放を要求して止まなかつた。

第三章　滿洲に於ける漢人の根據

第一節　日露支三國の比較

露國の滿洲に於ける行動は、自然に起る民族的膨脹の結果であるとは謂ふことが出來ない。むしろ露西亞本國が歐州に於ける政治的欠陷を滿さんとして、意識的に、東洋進出を企てたものと見られる。その行動の急速にして、一意海岸と露西亞本國とを連結せんとし、あまりに四圍の事情に注意を拂はなかつたのは、その證差たり得るものであらう。だから露國の滿洲奄有にも多くの無理が含まれてゐたばかりでなく、滿洲は全く歐露に對する一犧牲として取扱つた傾向がある。少くとも滿洲本位ではなかつた。或は彼に借すに多少の時日を以てしたならば、勢ひ滿洲本位の政策を一部なりとも實行したであらうが、然し結局に於ては彼れに滿洲の爲めの政策を期待することは出來ない。然るに日本はやや彼れとその趣を異にする。日本の對滿洲政策は、當時は要するに韓國の保護にあつた。韓國さへ安全なる地位に在り、日本の大陸に對する城壁となつて居れば、日本は必ずしも滿洲に於て自己の利益を强硬に主張する必要はない。只その地理的約束から朝鮮の安全は一に滿洲によつて保障される形勢の下に在るので、强大なる勢力の滿洲に占據することは、取りもなほさず朝鮮の不安となり朝鮮の不安は即ち日本國防の欠陷となる。日露戰爭の結果遼東半島の領有を主張したのも、當時は此の理由に外

ならぬ。しかも露國は日本より遼東半島を返還せしめた張本人である。その露國が滿洲を奄有し來る。日本の不安は玆に二重とならざるを得ぬ。故に滿洲に對する當時の日露兩國の利害は、一は積極的にして一は消極的なりと見られ、換言すれば一は攻擊的で、一は防禦的であつた。その何れも滿洲本位でなかつたことだけは同樣である。

之に反し清國は、當時二種に分ち得る利害を滿洲に於て有してゐたものと自分は見る。その一は清國朝廷の有するそれであり、他は漢人移民のそれである。

清廷より見たる滿洲はすでに前述せる如く漢人に對する一根據地であるべきだが、乾隆帝以後の清朝はすでに滿洲の朝廷ではあり得ない。やはり漢人とその利害を一にすべき地位となつてゐる。かゝる時代の滿洲は、事實上內蒙古の特別區域と同一視せらるべき位置に立つ。要するに北支那の守りである。然るに時は經過して同治光緒の時代となれば清廷と漢人との利害は再び玆に隔離し始めた。隔離し始むるも彼はすでに滿洲の朝廷でもあり得なくなつてゐる。只その歷史的因緣から滿洲をその根據地なるが如く思はしむるに過ぎない。だからと云ふて、今更滿洲を棄てれば、支那本部にその皇帝としての權威を失ひつゝある清廷だ、その據つて立つ根據がなくなる。禹域の統治者としての存在理由が稀薄になる。漢人に對して、統治者としての偉大なる權威であるべき、滿洲蒙古の完全なる統治が露國及び日本によりて破壞されたからといふて、之を放棄してはやがてそれが、統治者としての地位を投げ出すことになるではないか。日清戰爭によつて問はれたる鼎の輕重を、露國によつて回復せんとしたのは、情として許し得べきものがある。或は露國を背景として再び漢人に對し、一の偶像ではありながらも昔日の權威を表面上回復し得る可能性がないでもない。のみならず、封禁地と誇る滿洲が次第に漢人文明の色彩に塗られつゝある折柄、滿洲將軍の權威の爲めに、東支鐵道會社社長を支那人から出す約束を爲すことは、全然必要でないとは謂ひない。卽ち泰西文明を借りて漢人文明に對抗する意味である。而してその半面に於ては、滿洲さへも完全に保持するを得ないではないかといふ致命的惡批評が益々漢人勢力の增大となる憂もある。しかも清廷自身には、滿洲八旗の微力となれる今日、獨自の力を持つものではない。事實上はすべて漢人の勢を背景として事を爲すより外はないのである。だから後の結果から見れば、清廷は漢人の代辨者として中華民國の爲めに滿洲を保有すべく適當にして、しかも有利なる地位に在つたものと云ふことが出來る。

然らば漢人移民にとつては如何であらうか。彼等には、日本又は露國の如く國家的背景かない。清廷の從來滿洲に於て有したる地位が唯一の脊景であるべきだが、必ずしも漢人と滿洲に於ける利害を一にするものではない。而かも清廷が滿洲を保全する爲めには、今や漢人の力による外はない。滿洲が清廷の發祥地であるといふ事は、强力なる軍隊を以て壓し來る露國に對しては愚痴と一般である。やはり事實滿洲の土に喰ひついて浸々として之を開拓しつゝある漢人の上にこそ始めてその主權の行

使が主張さるべきである。然るにも拘らず清廷は清廷一個の有する權威が漢人の爲めに滿洲を保全するに有巧であることが必要なのである。單なる漢人の代辯者であることは、益々漢人に對するその權威を失ふ。玆に清廷の煩悶があり、又漢人の煩悶もある。只漢人にとつて大なる弱點たるべきは、兵力を有せぬことである。兵の指揮權を有つてゐないことである。漢人が漢人として一の統一體を組成してゐないとも謂へる。是れ清廷に賴るより外に術のない所以である、事實滿洲の主要人口でありながら默々として他人の跳梁を坐視せねばならぬ所以である。而も彼等は、默々として尙ほも滿洲移住を止めはしない。底行である。蟻穴にも浸入し來る水の如く、而てそれかやがて提防の運命を決する重大の力となるものの如くに、露國の勢力下に在りても依然たる移住を續け來つた。露國の如く一氣呵成に非ずともその實勢力は着々として地上を這ひ來たのである。これこそ眞に滿洲本位である。

第二節　漢人移民の增加

北清事變の際に極東露領に在りし漢人移民は殆んど露國官憲によりて驅逐され、黑龍江以南に退散するの止むなきに至つたのであつたが、之に代るべき露國民の移住運動は極めて遲々たるもので、到底支那人に代つて地方の開發に當ることが出來ず、道路は云ふも更なり、兵營、官衙、公所の建設は悉く勞力不足の爲めに停滯する狀態で、官吏が僕婢を必要としても、それ等をすら求むることが出來ない始末であつた。依つて兵卒をして之等の事に當らしむることにしたのだが、それは延いて彼等を軍役から遠ざける結果となるので、愈々苦力を支那に求むることに一決する始末であつた。露領に於てさへも然りである。滿洲に於ては、到底支那人なしには露國の如何なる計畫も遂行し得なかつたのである。而て支那人を使用することによりて極東に於ける露國の急速なる施設は驚嘆すべき成績を擧げ得たのである。浦鹽斯德の要塞港灣の建設、烏蘇里鐵道布設工事が如何に多くの支那人勞働者を使用したかは想像に餘りある。少數なる奴僕にさへも不足したる露國人である。之等工事を完成したる勞働者は悉くそれ支那人なりと斷じて差しつかへないであらう。しかも更に驚くべきことは東西約九百五十五哩、南北約六百二十哩の東清鐵道及びその南部線が、一八九七年に起工して、一九〇二年にその全部の完成を告げ、翌年から直ちに營業開始といふ段取りになつたことである。尤も彼等は敷設材料をば歐州より運搬し得たであらう。清國官憲を奴僕の如く使用し得たであらう。金錢も亦惜しげもなく散らしたには違ひない。然し鐵道敷設は材料の供給や官憲の使役のみで成立さるゝものではない。最後の問題は勞力、ことに下級勞力の豐富なる供給に俟つことである。吾人はこゝに於てか露人の幸運なりし(?)を認めざるを得ない。かの滿洲の野に散在する所の支那苦力は蟻の甘きに就くが如く線路の上に吸集されしのみか、勞力の供給地たる山東は靡然發動して無數の苦力を滿洲に送り出したのであつた。然らば則ち一千五百餘哩の東清鐵道は支那人によりて完成したと云ふても過言ではない。

東清鐵道の經營及びその完成の影響の東亞の大局に如何なるものありしにせよ、滿洲そのものは露人の計畫と支那人の活動とにより、斯くして空前の發達を示し來つたのであつた。クロパトキン將軍は實に此の間の消息をその著滿蒙處分論中に道破して次の如く云ふてゐる。

露西亞が北滿洲を切斷して建設したる一千三百露里の鐵道は勿論、極東に於ける露西亞の大要素ではあるけれども、その功果は期待せしよりも甚だ僅少である。當時東清鐵道沿線より五露里の地帶を買收せんとする問題も起つた。乃ち此の地帶を如何に利用すべきかに就いては深甚なる注意を要する。若し北滿洲と露西亞と連絡を絶つことある場合には此地帶内に住する露國農民は危險なる狀態に陷るだらう。だから此の地帶に住民あるは露西亞の利益とならずして、却つて彼等保護の爲めに軍隊を區分派遣して已れの無力を更に殺ぐことゝなるであらう。哈爾賓は北滿洲に於ける露國商工業の中心である。然しながら未だ全く露人掌握の地域であるとは謂ふことが出來ない。露國が最近十六年間、北滿洲に投じたる費額數億圓なりと謂ふに於て滿洲に於けるすべての建設はまた結果の希望に副はざるもの多きことを容易に了解し得る。實に露西亞は莫大の資金を投じて、しかも露人は之によつて利せず、却つて支那人をして利せしめたるものである。例へば東清鐵道は一大貨物輸送の功を見んと思はれたるに反し、その實貨物の運搬はその目的に副はず、全く地方的のものとなつたと謂ふに止り、畢竟する所北方支那住民の活動を容易にし、露國人の懷中より金錢を出して之を彼等に與へたるに過ぎない。或る統計によれば露國の金三億留は北滿洲支那人の手中に落ち、彼等は之れが爲めに永久此の地方に土着し得るに至つたと謂ふことである。東清鐵道が支那人の滿洲移住を助けたのは實に疑を容る餘地なき事實である。

實に彼れの言の如く、支那人は續々として滿洲に入り込んだ。僅かに軍隊輸送の爲めに驛站の置かれたことが急激に支那人の滿洲移住に役立つた程であるから、東清鐵道の完成は如何に多くの支那人を滿洲に移動せしめたか察するに餘りある。而も鐵道の完成に要する勞働力も僅小でないのみならず完成後に於て露國の大企模なる商工施設が各地に行はれ、地方の開發も亦從つて行はるるに至つては、元來が豐饒なる土地であるから、開拓の程度と支那移民の增加數とは互に因果關係を爲して行はれて行つた。黑龍江に於ける砂金業なども、北滿洲に支那移住民を誘引した重大原因を爲すものである。

斯の如く、東清鐵道の敷設は、その利益がむしろ支那人により多く均點せられし狀態であつたので、露國はウイッテ氏の發案により六十萬人の露國人をば滿洲に侈住せしむる計畫を進むることゝなつた。而もそれによつて驚きの聲を擧げたのは滿洲在住漢人ならで實に北京政府であつた。露人誘入の先達たる李鴻章の如きも、露人が滿洲に於て文明の設備をするといふことは、畢竟支那勞働者の利益となるのみである、西比利亞の如きもやがては支那勞働者の手に落つるであらうと樂觀してゐたらしいが、ウキッテ氏の計劃は實に、此の最大唯一の長處を奪はんとするのであるから驚くのも無理では

ない。斯くて北京政府は急速に漢人を北滿に移住せしむる計劃を立てざるを得なくなつた。光緒二十七年(一九〇一、明治三十四年)の終り頃、將軍薩保はハルビン、齊々哈爾間の鐵道沿線一帶に於ける植民の急務を建白し、翌年には北滿に近接せる蒙地十三萬五千淸方里を殖民地として開放せしむるの輸文が發せられたのであつた。

此れと同時に朝鮮人の滿洲移住も亦支那人と同樣な理由の下に增加したるべきは察しられる。その間島地方の如きは、露國人が支那と朝鮮との利害の中間に立つて、人口數に於てははるかに支那人に優る朝鮮人の爲に幾分の應援をしたことゝ察られる。間島を始め鴨綠江沿岸の處々にはすでに露國軍隊の駐紮するものがあつた程である。次に露國側の調査による統計を揭げる。これはポセット地方から興凱湖、烏蘇里河一帶に移住せる朝鮮人のそれであるが、之れによつてもその一般が察し得るだらうと思ふ。

一八八二年(明治十五年、光緒八年)	總人口	九二、七〇八人
	露人	八、三八五人
	朝鮮人	一〇、一三七人
一八九二年(明治二十五年、光緒十八年)	總人口	一四七、五一七人
	露人	五七、〇〇〇人
	朝鮮人(露國々籍)	一二、九四〇人
	朝鮮人	三、六二四人
一九〇二年(明治三十五年、光緒二十八年)	總人口	三一二、五四一人
	露人	六六、三二〇人
	朝鮮人(露國々籍)	一六、一四〇人
	朝鮮人	一六、二七〇人

第四章　日露戰爭と滿洲

第一節　滿洲に於ける露國の行動

東亞大守府の旅順に設置せられてアレキセーフの之が太守に任ぜられしは明治三十六年（光緒二十九年、一九〇三年）であつた。アレキセーフは乃ち九月を以て東亞大守府の職制編纂規定を發布し、關東副總督陸軍中將ウヲルコフを軍務委員長に、陸軍中將ナダロフを行政委員長に任命し、黑龍江總督、後黑龍江守備隊司令官をも東亞太守の隷下に屬せしめ、露國極東の全權は擧げてアレキセーフの掌中に委ねられた。更に日韓清三國駐在の公使館附武官に對しても今後報告書を總べて太守に提出することゝし、その文武兩委員會の第一回會議には駐日公使ローゼンも亦參加する始末であつた。而も露都には皇帝直轄の極東委員會あり、侍從ベゾブラゾフその實權を握りアレキセーフの巨大なる權威と中外相呼應して極東の樞機を專斷したのであつた。

當時清國に在つては、慶親王等のしきりに撤兵を露國公使レッサアに哀求したるあり、米國も亦露國が既に滿洲の開放に異議なき旨を通牒したるを楯として頻りに奉天及大東溝の開放を清廷に迫つて止まなかつた。然るに露國は、すでに年の七月下旬以來哈爾賓、吉林、遼陽等の駐屯兵を移動して之を南下せしめ、東清鐵道を擧げて兵員、馬匹、軍器、糧秣及彈藥等の輸送に供し、先づ支那人の乘車

を謝絶して、遂には各停車場附近に居住せる內外の商人に對しても十二時間以內に退去すべき旨を命じ、更に韓國に在りても亦鴨綠江軍の總指揮官たりし陸軍大佐マドリートフの代理者等が、頻りに韓國の森林監理趙性協を要して八月遂に龍巖浦租借契約を結ばしめ、既に舊森林契約に於ける約款以外の地をも併せて之を獨占せんとしたのであつた。同時に東清鐵道會社は、黑龍江、吉林兩省の炭鑛開掘に關して約款十二個條を結び、鐵道線路の兩側三十露里以內の炭鑛開掘及該地域外の炭鑛に關する會社の優先權を確定したるあり、暫らく靜止持重したりし駐清露國公使レッサアも亦起つて、新たに清廷に向つて撤兵延期並に之が附帶條件八個條の要求を提出した。駐清日本公使內田康哉は直ちに清廷に警告して頻りに之を斥くべき旨を力說し、米國公使コンガーも亦慶親王に向つて露國提案の不可なる所以を說き、清廷の反省を促したので、遲疑して未だ決せざりし清廷は遂に斷乎として、露國の提案を拒絶するに一決し「露國が滿洲還附條約を履行したる後に非れば撤兵善後の件に關して何等の協議を開くを得ず」との決答を公使レッサアに致し、更に十月、露國第三撤兵期に當り、必ず期日に及んで撤兵すべきことを督促したるに、露國公使は「清廷にして若し露國要求の附帶條件を容るゝことなくんば未だ猝かに撤兵するを得ず」と回答し、その撤兵期に至るも一部駐兵の移動をも行はざるのみか、營口の駐兵も之が民政廳も、尙は依然として舊の如く、加之當時遼陽に集中せる新遣の軍隊を南下せしめて、今や更に威容を張らんとするあり、東清鐵道の重要車站には鐵道守備隊の外別に所在の

駐兵を增置したるあり、今や鳳凰城には步騎砲工を合せて六百許りの兵を留め、貝加爾旅團チチンスキー第一聯隊長以下二三將校の此處に屯して大砲四門を備へ、諸將校の旣にその妻女を遼陽に送りたるものがあり、龍巖浦に在ても亦旣に砲臺の築造に着手し、更に安東縣にも之が建造に着手せんとし益々日本を威壓せんとする形勢を示し來つた。

かゝる間に日露の商議は、外務大臣小村壽太郎と公使ローゼンとの間に東京に於て開かれ、又北京に在つては、米清通商條約の改訂せられて、奉天、安東縣の開放を約するに至りしあり、日清通商條約も亦改訂せられて、奉天、大東溝の開放が議定せられ、旣に清國の許容する所となるあり、遠からずして將に列國の領事館が設置せらるゝことゝなつた。玆に於て露國は之に先つて必ず相當の特殊條件を得んとする殊に切なるものあり、偶々東邊道尹袁大化の參謀王潛が事を以て馬賊の一頭目を斬殺したる事件があり、その馬賊たるや嘗つて露軍に懷服したるものであつたから、露國は乃ち奇貨惜くべしと爲し、直ちに清國に迫るに、五日間を期して王潛を處罰し且つ袁大化に革職を命ずべきを以てし、清廷にして若し之を聽かずんば、任意に奉天の府城を占領せんことを聲明したのであつた。然し王潛の罪たるや、固より處刑に當るものではなく、袁大化も亦之を革職せしむるの理由はない。清國當局は止むを得ずして王潛のみは新疆に貶謫し、半は露國の要請を容れて、半ばは之が要求を斥けたのであつた。是に於てか十月下旬(光緒二十九年、明治三十六年)露國の步騎兵約一千名は突如として奉天の省城に闖入し、金鑾殿を奪ふて將軍衙門を占領し、清國戍衛の將卒を馳りて悉く之を城門の外に逐はんとした。將軍增祺は深くその亡狀を憤り極力之と抗爭したのであつたが、亦奈何ともするなく、將に藥を仰ぎて自盡せんとしたるに人の止むる所となつて果さず、竟に露兵の監禁する所となつてしまつた。是れより城門の守りは悉く露兵の管轄下に歸し、露國の國旗は翩々として城樓上に揭られた。郵電の公署も全く露兵の占領に歸して、苟しくも露國文武官の動靜に關するものは一切電報の受理を拒まれ、東清鐵道も今や純乎たる露國軍用の機關に供せられて、沿道の警備はその嚴を極はめ秋毫も犯すことが出來なかつた。越えて明治三十七年(光緒三十年)一月、露國が汽船イカテリノスラフをしてオデッサより旅順口に輸送せしめたる陸兵二千人は、偶々旅順大連の間、每夜馬賊の出沒して地方の良民を害すとの流言ありしを機とし、乃ち言を之が討伐に託して陸續兵を遼西の地に侵入せしめたのであつた。滿洲一帶の地は此の如くにして全く露國の版籍に歸したるの實があり、清廷も報を得て大いに愕き、擧朝その橫暴を憤慨して、露國問罪の議は今や朝野の人心を鼓盪したのであつたが、而かも露國は毫も清廷の憤激と否とに關することなく、滿洲領有の步武を寸時も休止することなく、東亞太守は頻りに旅順の防備を促し、要塞司令官陸軍中將ステッセルも亦少將コンドラチンコ、スミルノフ等と共に日夜工事を督勵して築城の完成を期しつゝあつたのである。

第二節　日露國交の斷絶

露國が清國と密約を結ばんとしたるもの前後四回。皆列國の抗議に遇ふて阻止せられたが、公使レツサアは更に第五回の密約を結びて撤兵の附帶條件を得ずんば止まざらんとし、清廷と交渉を累ぬること益々頻繁であつた。此の時クロパトキンの旅順會議を開けるあり、東亞太守府の設置せらるゝあり、清廷は之を觀て露國の決意の遂に動かし能はざるものありと爲し、將に滿洲を擧げて露國の領有に委ねんず形勢であつた。是に於て日本は直ちに露國政府と交渉を開始するの止むなきに至り、次の如き協約案をば作成したのであつた。

第一條　清韓兩國の獨立及領土保全を尊重すること、並に該兩國に於ける各國の商工業の爲め機會均等の主義を保持すること を相互に約すること。

第二條　露國は韓國に於ける日本の優越なる利益を承認し、日本は滿洲に於ける鐵道經營に就き、露國の特殊なる利益を承認し、併せて本協約第一條規定の下に劃定せられたる兩國各自の利益を保護する爲め必要なる措置を、日本は韓國に於て、露國は滿洲に於てこれを執るの權利を相互に承認すること。

第三條　日露兩國は本協約第一條の條項と背馳せざる限り、韓國に於ける日本及び滿州に於ける露國の商業的及工業的活動の發達を阻礙せざるべきことを相互に約すること、又今後韓國鐵道を滿洲南部に延長し、以て東清鐵道及山海關牛莊線に接續せしむることあるも之を阻礙せざるべきことを露國に於て約すること。

第四條　本協約第二條に掲げたる利益を保護するの目的、又は國際紛爭を起すべき騷亂、若しくは騷擾を鎮定するの目的を以て、日本より韓國に、或は露國より滿洲に軍隊派遣の必要が見るに於ては、其派遣の軍隊は如何なる場合に於ても、實際必要なる員數を超ゆべからざること、且つ右軍隊は其任務を果し次第、直ちに召還すべきことを相互に約すること。

第五條　韓國に於ける改革及善政の爲め助言及援助（但し必要なる軍事上の援助を包含すること）を與ふるは日本の專權に屬することを露國に於て承認すること。

第六條　本協約は從前韓國に關して日露兩國間に結ばれたる總ての協定に替るべきこと。

時は明治三十六年八月の交であつたが、露國の之れが對案は、東亞太守と駐日公使ローゼンとの會商によりて作成せられ、十月初旬始めて日本外務大臣に手交された。その第一條より第四條までは表面上韓國に對する日本の要求を納れたが、滿洲に關しては、一言も日本をして關與せしめざる口吻にて而もその第五條以下には實に次の如き規定があつたのである。

第五條　韓國領土の一部たりとも軍事上の目的に使用せざること、及朝鮮海峽の自由航行を迫害し得べき兵要工事を韓國沿岸に設けざること。

第六條　韓國領土にして、北緯三十九度以北に在る部分をば中立地帶と見做し、兩締約國軍隊を引き入れざるべきことを相互に約すること。

第七條　滿洲及其沿岸は全然日本の利益範圍以外なることを日本に於て承認すること。

清韓兩國の獨立保全に就いては一言も之れに及ぶものなく、反對に北緯三十九度以北に中立地帶を劃せんと云ふのである。北緯三十九度以北とは、實に平壤より元山に向つて引ける一線にして、平壤、元山はもとよりその中に在り、日本の提案とは根本の主義より全く相容るゝものではない。斯くて日露

の兩國は、東京に於て、幾度か會商したるも議はまとまらず、此間に露國は着々として滿洲の戰備を固め、馬賊の襲來を口實として滿韓の疆上にも增兵し、龍巖浦の韓國船を使用して糧秣彈薬等諸般の軍需品を旅順口より輸送し、龍巖浦租借の約未だ成らざるに乘じて益々之が經營を急ぎ、著々土工を起して姑ばらくも休止することをしない。義州を開放せしめんとする列國の意圖も露國の彈壓によりて韓廷の肯ずる所とならず、反對に多數の日本居留民ある平壤を閉鎖せんとする如き有樣であつた。

日露會商は尙ほも依然として轉換せず、回を重ぬること實に十二、日本は專ら退讓の意に基きて、露國の對案を酌量して遂に最後の確定修正案を作成し「朝鮮海峽の自由航行を迫害し得べき兵要工事を韓國沿岸に設けざること」を認め「韓國鐵道も鴨綠江まで延長し滿洲に入ることを止め、韓國が露國の特種利益の範圍外なるを認むるならば、日本も亦滿洲が日本の特種利益の範圍外なることを承認すべし」と謂ひ、更に中立地帶に關しては滿韓國境に於て、その兩側各五十キロメートルを設定せんとしたのであつた。

然るに露國は此提案ありしより四十幾日かを經過したる十二月初旬始めて之が覆答を爲し、しかも依然として滿洲に關する日本側の條項を削除し、兩國の協商を單に韓國に關するものに限り、韓國領土を軍略上の目的に使用せざることや、北緯三十九度以北の中立地帶も亦舊主張を固執してあつた。日本は更らに之が修正案を作つて露國と交渉を重ねたが、露國は頑として原案を支持して下らず、かくて年は改まりて明治三十七年（光緒三十年）となり、外務大臣小村壽太郎は、ローゼン公使と第十五回の會見、第十三回會商を累ね、今や毫も讓步の余地なきを以て日本の修正を固執する旨を告げたのであつたが、露國政府は徒らに回答を遷延し、その間露國は回答を督促せらるゝこと前後四回に及ぶも而も其期日をすら明言しなかつた。是に於て二月五日再考通牒を發してより二十一日目、遂に外交斷絕の通牒を駐露公使栗野慎一郎に傳へたのであつた。

第二節　日露戰役　其一

日露國交の斷絕は直ちに戰鬪の狀態に入つた。その戰鬪區域は、もとより、露國の所謂、北緯三十九度以北より滿洲の全部に渡る露國の防備によつて殆んど戰前に略定されてゐる。而てその戰鬪區域こそ、實に兩國爭覇の目的物であつたのである。而て又此の區域は、露國よりすれば陸續ぎてあるのみならず、すでに幾多の防備が整ひられてゐるが、日本は海洋によつて之と斷絕してゐる。それに對馬海峽を越えて北部朝鮮に至るべき京釜鐵道は未だ完成して居なかつたから、勢ひ東支那海が、滿洲と日本との間に橫つてゐると同樣の狀態であつた。この故に日本軍の活動は先づ海によりて始められた。日本にとつては極東の制海權を挽するにあらざる限り、滿洲の戰局を展開せしむることは出來得ないのであつた。之れに對する露國側は、その主力を旅順口に集中し、浦鹽斯德の根據地に在る艦隊

は、日本海一帶を負擔區域としてゐたのである。

兩國の海戰は先づ仁川に於て開かれた。そは陸兵の上陸地が仁川を適當とするばかりでなく先づ京城を重壓して韓國政府の體度を決せしむる必要があつたからである。その結果は、日本軍たる第四戰隊(海軍少將瓜生外吉)の全勝となり、歩兵第十二旅團(少將木越安綱)は先登部隊として仁川に上陸し京城府に入城した。之れに次いでは當然旅順口の攻擊である。第四戰隊を除く全艦隊は、海軍中將東鄕平八郎指揮の下に第一戰隊(少將梨羽時起)第三戰隊(中將出羽重遠)より成る第一艦隊(東鄕平八郎)と第二戰隊(少將三須宗太郎)第四艦隊とより第二艦隊(中將上村彥之丞)とは一路旅順口に向ひ、露艦と口外に戰つて之を擊破し、次いで驅逐隊(司令中佐長井群吉)の第二次夜襲あり、爲めに露艦は多大の損傷を蒙りて港內に逃入した。依つて日本艦隊はその港口を閉塞して、露艦を港內に封鎖せんとし決死の閉塞隊が編制せられ中佐有馬良橘を總指揮官として第一次の閉塞が實行せられ、爾後旅順口の攻擊を行ふこと、前後實に八回、閉塞の決行は三回にも及び、露艦は殆んど全滅に歸し、唯僅かに戰鬪艦一隻、巡洋艦四隻、驅逐艦十五隻を存するのみとなり、提督マカロフは戰死するの狀態であつた。爲めに極東總督アレキセーフは海軍提督を暇攝するの已むを得ざるに至り、次いで黑海艦隊司令長官中將スクイドルフが新に太平洋艦隊司令長官に補せられ、殘艦を督して再び立たんとしたるも、而かも敗餘の勢亦之を奈何ともするを得ず、この間にも日本軍は海洋島を占領して黃海樞要の位地を得、又大連灣を攻擊して三山島の砲壘を破壞し、かくて東支那海の制海權は、日本軍の得る所となつたのであつた。

諸れを陸戰の方面に顧れば、海州に上陸したる先發部隊は新院、戴寧、鳳山、中和を經て平壤を占領し、進んで安州を略し、定州に於て始めて戰鬪を開き、之を遂ふて遂に義州に入り、鴨綠江を隔てゝ相對峙するに至つた。時に明治三十七年四月(光緒三十年)、近衛師團(中將長谷川好道)第二師團(中將西寬二郎)第十二師團(中將井上光)は第一軍司令官黑木爲楨指揮の下に、先づ江中の九連島、黔定島を占領し、第三艦隊(少將細谷資)之を水上より援護して上流水口鎭方面より先づ江を渡り、少將ツルメフの率ゐる東部西比利亞狙擊歩兵を九連城に遂ひ、第十二師團所屬砲兵の一部隊は遠く靉河の上流に溯り、九連城の包圍攻擊を爲して遂に之を陷れ、又之れを蛤蟆塘に遂擊して破り、露軍は師團長サシタリンスキー以下の死者を殘して悉く鳳凰城に遁入した。

始め露軍は九連城を以て第一陣地となし、鳳凰城を第二陣地とし、遼陽を以て第三陣地としてゐた。日本軍は、既に九連城を占領し、騎兵隊は北ぐるを追ふて湯山城に向ひ、歩兵隊は進んで鳳凰城を占領した。沿路の家屋は概ね露軍の爲に燒棄せられ、敗殘の露兵にして森林、村落等より出でて投降するもの多く、此時日本軍の一技隊は進んで寬甸縣を占領したのであつた。

旅順口第三次閉塞の後、黃海の制海權は全く日本軍の有する所となつたので、陸軍はその第二軍を

鞏子窩附近なる鹽大澳に上陸せしめ、先づ一隊を進めて普蘭店を占領し、鐵道を破壞して以て南北の連絡を絶ち、更に一隊は鞏子窩を攻撃して、茲に第二軍司令部は大將奥保鞏指揮の下に第四師團（中將小川又次）を右翼とし、第一師團（中將伏見宮貞愛親王）を中堅とし第三師團（中將大島義昌）を左翼として前進を開始した。時に五月中旬、目的地たる金州城及び南山の砲撃は五月下旬を以て開始された。然し金州城は一撃の夜襲にて陷れたが、南山の險は、露軍の頑強なる抵抗に遇ふて激戰實に十六時間、砲兵旅團（少將内山小二郎）は海軍の四砲艦を力を合して、諸砲臺と猛烈なる砲戰を行ひ午後七時に至り、右翼たる第四師團の登攻により露軍壞滅し、翌日直ちに歩兵第二旅團長中村覺は、總預備隊を率ゐて進んで露軍の敗走を追撃し、南關嶺、柳樹屯を占領して大連灣一帶を日本の手に收めたのであつた。然るに露軍はその一部隊を南下せしめて、旅順進撃の勢を牽制せんとしたので、日本軍はその一部騎兵隊をして北進せしめ、田家屯、張家屯に進出して小部隊の露軍を得利寺方面に追ふたが、幾くもなく露軍南下の勢復た新たに加はりしを以て第二軍は乃ち新來の第三軍に關東半島の進戰を讓り、茲に全軍を旋回する事となつた。第三軍とは陸軍大將乃木希典の率ゐる第十一師（中將上屋光春）第九師（中將大島久直）及び第一師（後に伏見宮は中將松本務に代る）にして、六月下旬劒山、歪頭山及び小平島を占領して大連灣の掩護を確實にしたので、第二軍は乃ち普蘭店、大沙河の線を發し、主力を分ちて中央及び左右の兩縱隊とし、左縱隊は大沙河に沿ひ中央隊は鐵道に沿ひ、右縱隊は復州街道に向ひ、別に騎兵隊をして、鞏子窩より熊岳城に向はしめ行く行く露軍の小部隊を驅つて王家屯一帶の地を略し、得利寺の露兵と苦戰し、復州より來れる一隊と合して遂に之を拔き、更に進んで熊岳城を略し、海軍の第六戰隊も亦蓋平附近の露軍に威嚇砲撃を行ふて遂に之を折木城に走らしめた。

一方第一軍は既に蛤蟆塘の大勝を得、爾來鳳凰城を中心として戰線を四方に開展せんとし、先づ右翼縱隊の一部は寬甸縣の東北にて露騎を撃退し西北して靉陽邊門を占領し、更に小部隊は賽馬集の露軍を撃破し、寬甸よりは東北渾江の上流に前進し、露兵の小部隊と馬賊の一隊とを追ふて懷仁（桓仁）を占領した。此時遼陽街道の本隊はすでに通遠堡に迫り、更に一部隊は大孤山上陸軍（中將川村景明の率ゐる第十師團）と戮力して露軍を追ひつゝ共に進んで岫巖を占領した。第十師團は是れよりして第一、第二兩軍の鎖鑰となり、今や遼陽進撃の歩武は各方面に進められたのであつた。

岫巖、懷仁を占領したる第一軍は左翼、中央、右翼の三隊並列して北進し、露軍をして本溪湖西道より橋頭に追ひ、その前衛隊は連山關に進んで摩天嶺を畧した。露軍乃ち之の天險を回復せんとして新任軍團長ケルレルは約二個師團の兵を率ゐて猛烈なる逆襲を爲し、陸軍少將岡崎生三は數倍の露軍と激戰して遂に之を甜水站方面に逐ひ、騎兵隊はその退くを追ふて撃ち、一隊は更に城厥を占領し、本隊と共にケルレル軍團を左右より攻撃し激戰實に二日間、漸くにして太子河の右岸に撃退した。時に七月中旬。

是の時に當り第二軍は七月初旬既に露軍を蓋平の傍近に擊破してその地を略し、更に連綿せる防禦區域に內迫して之を拔き、露軍を海城方面に走らして、大石橋、營口を占領した。此の戰鬪に於ける露軍の負傷者中には參謀總長中將サハロフ少將コンドラウイツチ等があつた。既にして第四軍は、(大孤山上陸軍)司令官野津道貫の新たに到るや、乃ち第二軍の一部隊と合して中央軍をなり、七月下旬岫巖を發して王家堡子に進み、行々露軍を擊つて遂に拆木城を拔き、第一軍も亦、是れと時を同じふして樣子嶺を占領し、露軍は軍團長ケルレル戰死して、安平及び湯河沿の方向に退き、第二軍は更に海城、牛莊を占領して露軍を鞍山站の方向に卻け、かくて各軍路を分ちて齊しく遼陽を指した。

之れに對し露軍は防禦陣地を鞍山站、安平、太子河、湯河の左岸に布きて、兩々相對峙すること三週間、日本軍は、滿洲軍總司令官大山巖が總參謀長大將兒玉源太郎、次長中將福島安正以下の幕僚を率ゐて自ら各軍を統率し、秋風既に動く八月下旬全軍は攻擊の形を採つて進み、會戰の第一戰は先づ右縱隊よりして開かれた。時に八月二十六日、二十七日には露軍が湯河の軍橋を破壞して左岸の第二防禦線に據るあり、日本右翼軍は湯河右岸を占領して更に攻擊を續行し、各軍連繫をとりつゝ太子河を徒涉し、梅澤支隊も亦本溪湖を占領し、かくて九月一日より激戰四日の後、露軍主力の占領せる煙臺停車場より、煙臺炭坑に亘る鐵道支線南方の陣地に接近し、スタッケルベルグ軍團を瞰射した。此の時遼陽の露軍は既に中央及び左翼兩軍の爲めに擊破せられ敗兵は路を爭ふて奉天に走つた。

茲に於てか露軍總司令官クロパトキンは全軍を鼓勵して戰備を修め、先づ太子河左岸より橋頭に向つて前進し橋頭、本溪湖間を遮斷して日本右翼軍(第一軍)の後路を搗せんとし、戰は本溪湖、火連寨間に行はれ、露軍の逆襲は成らざりしも抵抗甚だ强烈にして、日本軍も一歩も進むを得ず、かゝる間に中央軍(第四軍)及び左翼軍(第二軍)は次第に露軍の强襲を追ふて沙河の線に達し、共力して優勢なる露軍と大會戰を爲し、遂に之れを奉天に追ふこのであつた。此の後、日露の兩軍は渾河を隔てゝ相對峙し、著しき戰鬪もなくして三十七年を終り、三十八年(光緒三十一年)一月中旬に至り、露將ミスチエンコの率ゐる騎兵旅團は牛莊を襲ふて日本守備隊を追ひ之を占領したが、日本軍一枝隊の進擊に遇ふて潰亂し牛莊老堡を經て東北方に去り、露將グリッペンベルグも亦渾河の左岸に來つて一大襲擊を試み日本軍を追ふて黑溝臺を占領したので、黑溝臺攻擊軍司令官中將立見尙文は紛々たる飛雪を冒して肉迫したが日本軍の死傷頗る多くして勝敗決せず、激戰實に四日間、殆んど全滅を期して攻擊前進を行ふこと前後數回に及び漸くにして之を略取し更に進んで長灘附近をも略し茲に渾河の左岸を完全に領有することが出來たのであつた。

第三節　日露戰役　其二

かゝる間に旅順攻圍軍は大將乃木希典指揮の下に、七月の下旬より進擊を開始し、營城子、土城子

より大孤山に亘る一線を占領して露軍を旅順要塞の中に押し込め、八月より攻圍の作業に着し、海軍も亦旅順の殘艦と黄海に戰つて大勝を得、かくて海陸力を合せて旅順口の總攻擊が開始されたのである。乃ち松村師團は右翼隊となり、中央隊は大島師團、土屋師團は左翼隊となり、先づ盤龍山砲臺を占領し爾來總攻擊を行ふこと三回、多大の死傷をも顧みず、彼我互に激烈なる戰鬪を行ひ、遂に決死隊の奮戰によつて十一月下旬漸くにして二百三高地を占領し、續いて東鷄冠山、二龍、松樹二山の砲臺を占領して旅順の堅壘は悉く壞たれ、守將ステッセルも遂に力竭きて三十八年一月一日開城するの止むを得ざるに至つた。茲に於て日本軍は旅順に鎮守府を置き海軍中將柴山矢八を司令長官とし、第三軍は直ちに軍を北上せしめて奉天の大會戰に參加することゝなつたのであつた。

一方奉天に於ては日露兩國の大軍八十五萬沙河を隔て相對峙すること百二十有餘日、露軍はすでに牢永久の堡壘線を設けて日本軍に對し、第一軍指揮官大將レネウキチを左翼とし第二軍指揮官大將カウリバールスを右翼とし第三軍指揮官大將ビリデルリングを中堅とし、クロパトキンは別に主力を率ゐて自ら全線の指揮を爲し、先づその兵を撫順方面に增加しつゝあつた。是に於て日本軍は、先づ右翼軍たる第一軍に前進を命じ、最右翼兵團たる司令官大將川村景明の鴨綠江軍は先づ既に寒馬集の方向より進み城廠北方の露兵を馳逐して草子峪、高力營の線を略し、更に進みて清河城附近の露兵を攻めて攻擊二日間にして清河城を略取し、再び追擊して馬群丹に之れを窘迫せしめ竟に之れを攻略した。

沙河方面に於ても第一軍及び第四軍の中央兵團は共に鐵路以東を北進し、第二軍の左翼兵團、第三軍の最左翼兵團は共に鐵路の以西を北進し、三月一日右翼隊は姚千戶屯を占領して、露軍の大逆襲を擊退し、最左翼軍は早くも渾河を渡り、迂回して奉天の西北方に馳行し、無人の境を長驅して大民屯新民廳を略取し、前後四回の逆襲を擊退して次第に露軍を東北方に壓迫した。而かも更に露軍の强抗を排して北進し北陵を經て堅壘の露軍と相對し、一部は更に奉天以北の鐵道を破壞して露軍の走路斷つた。而して中央兵團及び右翼團は、一歩は一歩より着實なる地歩を占領しつゝ奉天に迫り、すでに蔡家屯に至りて露軍を奉天に壓迫し、三月初旬、總攻擊を開始して、最右翼兵團は遂に撫順を占領して露軍左翼の根據地を奪ひ、右翼兵團も之を援助して追擊し、中央隊も亦渾河を渡つて奉天城に肉迫し、最左翼兵團も亦露軍の背面を攻擊し、三月十日全く奉天城を占領し終つた。而かも日本軍は、そのまゝ猛烈なる追擊を開始して、露軍を二重に包圍して少將ナヒモフ以下四萬の捕虜を得、最右翼軍も亦營盤の露軍を驅逐して、更に興京を略し、將に吉林の境に迫らんとし、追擊兵團の一部隊も露軍を遂ふて鐵嶺を略取した。露軍總指揮官クロパトキンはその總司令官の職を第一軍司令官リネウキチに讓るの止むを得ざるに至つたのであつた。

爾來日本軍は益々露兵を追擊して前進し、三月中旬法庫門を略して遼河の水路を拋し、更らに開原を占領して東淸鐵道の沿線を壓し、昌圖府をも陷れ、一軍は別に英額城を擊ひ、他の一軍は又通化を

も占領して、茲に日本軍は追擊前進より一轉して直ちに追躡前進に移り、(一)開原吉林街道並びに(二)昌圖、長春街道(三)法庫門、長春街道よりして進むものゝ外、更に(四)撫順、海龍城街道、並に奉京通化街道より北進するものとの四道駢進の狀態となり、四月より五月に亘りて、各道に間斷なく來襲する露軍を擊退しつゝ北進を續けたのであつた。露軍新司令官リネウヰチは、之に對し頻りに長春吉林間を往來して全軍指揮し、銳意日本軍の前進を防止せんとして、日々に逆襲を行ひ、殊に五月下旬以降に至つては本街道に沿ふて威力偵察を試むること最も頻繁であつたが、六月中旬日本の左翼兵團が遼陽寫棚にミシチエンコの率ゐる主力部隊を擊破してよりは、四道全線の駢進は全く成り、廣く戰線を、吉林、蒙古及び圖們江の疆上に擴大して一齊に北進すべく將にその時機を待ちつゝあつたのである。然らば圖們江方面の情況は如何。露軍が日本軍を牽制せんとして頻りに北韓の疆上に兵を出したるは、日本軍の將さに韓疆を踰えて滿洲に入らんとするの時であつた。四月初旬露騎若干名は先づ圖們江を渡り咸境北道に入つて鏡城に現はれ、歩兵亦踵いで入り、騎兵は更に進んで吉州に迫り、浦鹽の露國艦隊も亦日本第二艦隊の緯隊を窺ひ南下し來つて突如として元山に來襲し、日本汽船を擊沈し、更らに敵狀偵察の任務を帶びて利源に向ひる金州丸を捕獲して歸航したるあり、爾來露騎の北韓疆上に出沒するもの益々多きを加へ、進んで城津を襲ひ、更に南下すること七十哩にして、北青にまで出て來たのであつた。爾來浦鹽艦隊は、日本海に跳梁しつゝあつたが、蔚山沖の海戰に敗れて浦鹽に歸り、日本北遣艦隊は又司令長官片岡七郎指揮の下に、樺太上陸軍の輸送に任じ、樺太軍司令官原口兼濟は先づコルサコフを占領して北進し、更にアレキサンドルフをも占領し七月下旬露軍の降伏を納れて全島を占領した。而て北韓軍は六月下旬鏡城を略取して北韓最北の要地を占め、更に前進して輸城を占領して獐項(章興)に進み、露軍を慶興、鏡城の兩道に退却せしめ、第二艦隊は雄基灣及び羅津浦を砲擊して露軍を走らし、かくて北韓軍は海岸山地の兩道を駢進して富寧、富居洞附近の露軍を擊退し茂山嶺一帶の高地を占領して、茲に暫らく露領進擊の戰備を修め將に一擧して豆滿江の渡河戰に着手せんとしたのであつた。

斯くの如くして陸戰に於ては未だ決定的勝敗はなくとも、常に日本軍の勝利に歸し、趨勢を挽回せんとして、遠くバルチック海より來りし露艦も日本海に全滅したので、講和熱は日露兩國に起り、恰も米國大統領ルーズベルトの仲介するあつて、九月一日、先づ次の如き休戰條約を協定し、日露の大戰も茲に終結を告ぐることとなつたのであつた。休戰條約に曰く。

第一條　滿洲並びに豆滿江方面に於ける兩國軍隊の間に一定の距離區劃地域を定むべし。

第二條　兩交戰國一方の海軍は他の一方の領土若く占領地を砲擊するを得ず。

第三條　海上の捕獲は休戰の爲め停止せらるゝことなし。

第四條　休戰期間中增援兵を戰地に派遣するを得ず、その派遣の途に在るものは日本國に在りては之を來天以北に、露國に在りては之を哈爾賓以南に送ることを得ず。

第五條　兩國陸海軍司令官は前數條の規定に從ひ、雙方合意の上休戰の條件を決定すべし。

第四節　日露の媾和と滿洲

日露の戰に際し清國は局外中立を宣言したのであつたが、北清事變の終熄以來は、滿洲に於ては清國政府の政令は殆んど行はれず、匪賊は四方に勃起して跳梁拔扈を極め、露國は又之等匪賊を利用して早くも清國軍たる中路各營を襲ふて間島一帯を占有し、韓國の間島監理李範允も亦之に參加し、更に吉林なる韓家を强迫して、夾皮溝に協同經營の鑛山事務所を設け、露將マドリドフ大佐は間島馬賊の頭目劉單子や李翰臣を手足として花膀子隊と名付くる馬賊軍を編制し、更に遼西方面に於ては、鄭家屯に根據を置く金壽山等を買收して更に多數馬賊の招降に着手せしめ、排露派馬賊の頭目なる俠豪馮德麟を捕へて之を樺太島に配謫する如き狀態であつた。故に當時の滿洲はその住民は支那人であつたといふに過ぎなく、政府は全く有名無實なる一清國政府の代辨者たるに過ぎなかつた。日露戰爭の展開中の如きは、全くその用を爲さないと云ふとも過言ではない。日本軍も戰鬪中は馬賊を操縱して之を使用したことは勿論である。

此の爲めに、清國中立地帶の侵反を以て露國は列國に通告し、且つ「清國自ら進んで戰鬪に關與せんとし、今や頻りに戰備を修めて排外の念の日に熾なるものがあるから、一般歐洲人も爲めに排斥を免かれぬであらう」との旨を訴へたのであつたが、島の雌雄はもとより分明すべくもなく、問題とは成り得なかつた。只當時は清國政府も日本に對する輕侮心より一意露國に賴りしことを後悔し、次第に親日の空氣が濃厚となり、直隸省北部の防備の爲めには清國軍に日本將校の教官として附屬してゐるものがあつたと風評された程である。事實直隸省北境に於て嚴正なる中立を守ることは、日本軍の策戰上甚だ重要な事には相違なかつた。又滿洲馬賊の中にも次第に排露派が多數を占め、韓家の頭目韓登擧はもとより、遼西では馮德麟、洪福臣、陳蔭棠より杜立山、金壽山などまでが日本軍の爲めに義軍(中佐橋口勇馬)の招募に應じたのであつた。時に新民府の營長であつた張作霖などは、首鼠兩端を持して動かなかつたものである。

斯の如き狀態の下に日露兩國は遂に休戰を約することゝなり、次いで兩國の使節は將さに會商をポーツマスに開始せんとするや、清國政府は突如として代表者を之に參加せしめんことを提議し露國も亦その請を納れんとするの色があつた。然し日本政府は清國の力を藉らずして日本自ら滿洲を還附するの權能を有するものであると唱へ、直ちに清國の要求を峻拒したのであつたが、然るに清國の官吏にして「滿洲は未だ曾つて外國に讓られしことはないが故に敢て日本の還附を受くるの理なく、清國領有の地域は清國自ら之が處分をなすであらう」と唱ふるものがあり、清國政府も亦此の主張を採用して遂に日露の兩國に通告するに「滿洲に關する日露兩國の商議と決議とは清國政府に於て之を認諾

することが出來ない」との旨を以てし、又之を各國政府に聲明したのであつた。尋いで又翰林院編修五名は更に連署上疏して、

一、東三省を一の藩となし親王中の穎才を擇びて之に封じ特種の權力を附與すべし。

二、旅順、大連は露國が曾つて清國より租借したるものにして固より清國の領土たるが故に、日本にして之を露國より獲たりとするも清國に還附すと稱するを得ず、清國も亦兩港の還附をば日本よりして之を受くるの理なし。清國は宜しく平和克復の後兩港を公開して貿易港と爲すべし。

三、滿洲に屯田の法を設くべし。

四、安東縣、營口の兩地に港務局及稅務局を設置すべし。

五、各國軍隊の山海關に在る者を移し大連旅順に駐屯せしむべし。

六、新に貨幣を鑄造し日本の制に則り、日本貨幣と同一ならしむべし。

との意見を開陳したのであつたが、當時清國の提議は新任駐清露國公使ボコチロフが暗に清廷の一派を煽動してかゝる行動に出でしめたものであると傳へられ、列國も之を對手にする道理はなく、幾ばくもなくして清國も亦其要求を遂げ得ざるを思ひ。軍機大臣を更迭して纔かにその失計を免かれ得たのであつた。

かゝる間に日露兩國の全權委員小村壽太郎及びウキッテは媾和條約の協定を終り九月五日を以て記名調印を終り、十月十四日に至り漸く兩國君主の批准を經て之が公布を見るに至つた。次にその滿洲に關係する條項を提ぐるであらう。

日露媾和條約及追加約款要項

第二條　露國は日本國が韓國に於て必要と認むる政事上、軍事上及び經濟上の卓絶なる利益を有することを承認し日本國が韓國に於て必要と認むる指導、保護及監理の措置を執るに方り之を阻礙し又之に干渉せざることを約す。

韓國に於ける露國人は最惠國人民と同一の地位に置かるべし。

兩國は一切誤解の原因を避けんが爲め露韓兩國間の國境に於て、露國又は韓國領土の安全を侵害することあるべき何等の軍事上措置を執らざることに同意す。

第三條　日本國及び露國は互に左の事を約す。

一、本條約に附屬する追加約款第一の規定に從ひ遼東半島租借權が其効力を及ぼす地域外の滿洲より全然且つ同時に撤兵すること。

二、前記地域を除く外現に日本又は露國軍隊に於て占領し、又はその監理の下に在る滿洲全部を擧げて全然清國專屬の行政に還附すること。

露國は清國の主權を侵害し又は機會均等主義と相容れざる何等領土上の利益又は優先的若しは專屬的讓與を滿洲に於て有せざることを聲明す。

第四條　日本及露國は、清國が滿洲の商工業を發達せしむる爲めに、列國に共通する一般の措置を執るに方り之を阻礙せざることを互に約す。

第五條　露國は清國政府の承諾を以て旅順口、大連灣並にその附近の領土及領水の租借權及び該租借權に關聯し、又はその一部を組成する一切の權利、特權及び讓與を日本政府に移轉讓渡す。露國は又前記租借權が其効力を及ぼす地域に於ける一切の公共遺贈物

及財產を日本政府に移轉讓渡す。

兩締約國は前記規定に係る清國政府の承諾を得べきことを互に約す。

日本政府は前記地域に於ける露國臣民の財產權が完全に尊重せらるべきことを約す。

第六條　露國は長春(寬城子)旅順口の鐵道及其一切の支線、並に同地方に於て之に附屬するの權利、特權及財產及び同地方に於て該鐵道に屬し、又はその利益の爲めに經營せらるゝ一切の炭坑を補償を受くることなく、且清國政府の承諾を以て日本政府に移轉讓渡べきことをを約す。

第七條　日及露國は滿洲に於ける各自の鐵道を全く商工業目的に限り經營し決して軍事の目的を以て之を經營せざることを約す。

該制限は遼東半島租借權が其効力を及ぼす地域に於ける鐵道に適用せざるものなり。

第九條　露國はサガレン島南部及其附近に於ける一切の島嶼並に該地方に於ける一切公共營營物及財產を完全なる主權と共に永遠日本に讓與す、該讓與地域の北方境界は北緯五十度と定む。日本及露國はサガレン島又は其附近に於ける各自の領地內に堡壘其他之れに關する軍事上工作物を築造せざることに互に同意す、又兩國は宗谷海峽及韃靼海峽の自由航海を妨碍することあるべき何等軍事上措置を執らざることを約す。

追加約款第一、第三條に付

日本及露國は同時に且講和條約の實施後直ちに滿洲の地域より各其軍隊の撤退を開始すべきことを互に約す。而して講和條約實施の日より十八個月の期間內に兩國の軍隊は遼東半島租借地以外の滿洲より全然撤退すべし。

前面陣地を占領する兩國軍隊は最先に撤退すべし。

兩締約國は滿洲に於ける各自の鐵道線路を保護せんが爲め守備兵を置くの權利を保留す。該守備兵の數は一キロメートル毎に十五名を超加することを得。而して日本及露國軍司令官は、前記最大數以內に於て實際の必要に顧み之に使用せらるべき守備兵の數を雙方の合意を以て成るべく小數に限定すべし。

滿洲に於ける日本及露國軍司令官は前記の原則に從ひ、撤兵の細目を協定し成るべく速かに且如何なる場合に於ても十八個月を超えざる期限內に撤兵を實行せんが爲め雙方の合意を以て必要なる措置を執るべし。

第五節　日清及清露協商と韓國統監府の出現

日露戰爭その者が滿洲を最後の目的としたるが如く、その媾和條約も亦事多く清國の領土たる滿洲に干繫し、條約の實行上、清國政府の同意を得べきものが多い。是に於て日本政府は更に清國政府と會商して新たに協約する所あらんとし、外務大臣小村壽太郎は乃ち遣清大使に任命せられて辨理公使佐藤愛麿、政務局長山座圓次郎、陸軍少將福島安正等は之か隨員となり十一月初旬北京に至り、駐清公使內田康哉も亦全權委員となつた。因つて清國政府は軍機大臣慶親王、直隸總督袁世凱、外務部尙書瞿鴻禨を擧げて議約大臣に任命し、十一月中旬先づ第一回の會商を遂げ、爾來會商を累ぬること前後二十回、十二月中旬に至つて全く會商を終結し、明治三十九年(光緒三十二年)一月日清新協約は公布されたのであつた。

滿洲に關する日清條約幷に附屬條約

第一條　清國政府は露國が日露講和條約第五條及び第六條により日本國に對して爲したる一切の讓渡を承諾す。

第二條　日本政府は清露兩國間に締結せられたる租借地幷びに鐵道敷設に關する原條約に照し努めて進行すべきこと承諾す。將來何等案件の生じたる場合に付隨時清國と協議の上之を定むべし。

日清兩國政府は滿洲に於て雙方共に關係を有する他の事項を決定し以て遵守に便ならしむる爲め左の條項を協定せり。

第一條　清國政府日本軍隊撤退の後、成るべく速やに外國人の居住及貿易の爲め自ら進みて滿洲に於ける左の都市を開くべきことを約す。

「盛東省」鳳凰城、遼陽、新民屯、營口、鐵嶺、通江子、法庫門

「吉林省」長春（寬城子）吉林、哈爾賓、寧古塔、琿春、三姓

「黑龍江省」齊々哈爾、海拉爾、愛琿、滿洲里

第二條　清國政府は滿洲に於ける日露兩國軍隊並に鐵道守備兵の成るべく速やに撤退せられんことを切望する旨を明言したるに鑑り、日本國政府は、清國政府の希望に應ぜんことを欲し、若し露國に於て其鐵道守備兵の撤退を承諾するか或は清露兩國間に別に適當なる方法を協定したる時は日本政府も同樣に照辦すべきことを承諾す。若し滿洲地方平靖に歸し、外國人の生命財産を清國自ら完全に保護し得るに至つた時は日本國も亦露國と同時に鐵道守備兵を撤退すべし。

第三條　日本政府は滿洲に於て撤兵を了したる地方は直ちに之を清國政府に通知すべく、清國政府は日露媾和條約追加約款に規定せる撤兵期間内と雖も、既に上記の如く撤兵完了の通知を得たる各地方には自らその安寧秩序を維持するが爲め、必要の軍を派遣することを得るものとす。日本軍隊の未だ撤退せざる地方に於ては、若し土匪の村落を擾害することある時は、清國地方官も亦相當の兵隊を派遣し之が勦捕することを得。但し日本軍隊駐屯地界より二十清里以内に進入することを得ざるものとす。

第四條　日本政府は軍事上の必要により滿洲に於て占領又は收用せる清國公私財産は撤兵の際速やに清國官吏に還附し又不用に歸するものは撤兵前と雖も之を還附することを承諾す。

第五條　清國政府は滿洲に於ける日本軍戰死者の墳墓及忠魂碑所在地を完全に保護する爲め總べて必要の處置を執るべきことを約す。

第六條　清國政府は安東縣奉天間に敷設せる軍用鐵道を日本政府に於て各國商工業の貨物運搬用に改め、引續き經營することを承諾す。該鐵道は改良工事完成の日より起算し（但し軍隊送還の爲め遲延すべき期間十二箇月を除き、二箇年を以て改良工事完成の期限とす）十五箇年を以て期限と爲し、即ち光緒四十九年に至りて止む。右期限に至らば、雙方に於て他國の評價人一名を選び、該鐵道の各物件を評價せしめて清國に賣渡すべし。其賣渡前に在りて清國政府の軍隊並兵器糧食を輸送する場合には、東清鐵道條約に準據して取扱ふべく、又該鐵道改良の方法に至つては、日本國の經營擔當者に於て清國より特派する委員と切實に商議すべきものとす。該鐵道に關する事務は東清鐵道條約に準じ、清國政府より委員を派して實際經理せしむべく、又該鐵道により清國公私貨物を運搬する運賃に關しては別に詳細なる規定を設くべきものとす。

第七條　日清兩國政府は交通及運輸を增進し、且之を便易ならしむるの目的を以て南滿洲鐵道と清國各鐵道との接續業務を規定せんが爲め、成るべく速に別約を締結すべし。

第八條　清國政府は南滿洲鐵道に要する諸般の材料に對し各種の稅金及關金を免すべきことを承諾す。

第九條　盛京省内に於て通商場を開設したる營口及通商場となすべき約定あるも未だ開かれざる安東縣、並奉天府各地方に於て日本居留地を劃定する方法は日清兩國官吏に於て別に協議決定すべし。

第十條　清國政府は日清合同材木會社を設立し、鴨綠江右岸に於て森木採材に從事すること、其地區の廣狹、年限の長短及會社設立の方法並に合同經營に關する一切の章程は別に詳細なる約束を取極むべき事を承諾す。日清兩國株主の利權は均等分配を期すべし。

第十一條　滿韓國境の貿易に關しては相互に最惠國の待遇を與ふべきものとす。

第十二條　日清兩國政府は本日調印したる條約及附屬協約各條の記載せる一切の事項に關し、相互に最優の待遇を與ふることを承諾す。

日清新協約の締結を終るや、清國政府は十二月下旬更らに露清會商を開始して滿洲問題を解決せんことを駐清露國公使ボコチロフに求めたのであつたが、ボコチロフは未だ本國政府よりの訓令に接せざるの故を以て之に應じなかつた。爾來清國政府は屢々協商の開始を露國政府に促がし、且つ之をボ

コチロフに迫つたので露國も亦終に清國の請求を容れ、ポコチロフをして新に協商を開かしむるに至つた。光緒三十二年(明治三十九年)一月下旬清國政府は乃ち先づ外務部侍郎唐紹儀を露國公使館に遣はして豫じめ談判の準備を爲さしめ、且つ清國の要求を提出せしめた。是れ露清會商の第一回會商である。然るに露國公使は之に對して別に何等の回答をも與へなかつたので、清國政府は改めて外務部尚書瞿鴻禨、外務部侍郎唐紹儀に命じ該會商の衝に當らしめ、尋つで二月初旬露國公使ポコチロフは清國の提議に答ふる所あり、且其反對提議を清國委員に通牒した。爾來露國公使館に在つて第二及第三回の會商を行ふたが、露國委員は會議進行の秘密を求めて、事毎に清國の提議を斥け、或は條件を附して承諾の意を表し、或は過大の要求を提出して清國の提議を沮んだのであつた。之が爲め一も協商を進行せしむるに至らずして荏苒時日を經過し、加ふるに當時露國電報局員の同盟罷業が尚ほ歇まなかつたので清露間の音信は爲めに屢々杜絶せられ、會商の進行を妨じることも亦頗る多かつた。

既にして二月中旬に至り唐紹儀とポコチロフは露國公使館に在つて第四回の協商を行ひ、三月上旬更に第五回の會見を遂げたのであつたが、偶々奉天將軍趙爾巽は、露國が曾つて營口の占領に際し、關稅百六十五萬兩、釐金稅二十萬兩を徵收した事實があると報じて來たので、清國全權は改ゆて此事實を提げ露國に對して之れが拂戻しを要求し、且つ露國が久しく要求したりし呼蘭廳より齊々哈爾、愛琿に至るの鐵道敷設をば遂に黑龍江將軍に命じたのであつた。此れ即ち清國が露國の要求を峻拒すべき決心を示したものに外ならない。且くの如くにして露清協約は第五回の會見ありし以後全くその進行を止めて何等の決定をも見ることなく空しく案を懸けて會商は中絶の姿となつたのであつた。

以上を以て滿洲に於ける日露支三國の勢力圈の確定を見たのであるが、日本の滿洲に對する勢は、もう一つ特說せねばならぬ者がある。それは云ふまでもなく韓國が日本の保護國となつた事でなければならぬ。露國の敗退によりて韓國が日本の勢力圈內に入るべきは自明の事實であるが、日本は更に進んで明治三十八年十一月日韓の新協約を締び、樞密院議長伊藤博文が統監となり、鶴原定吉が總務長官として之に臨むことゝなつては、韓國は最早や決定的に日本の勢力圈內に入り、第三國の干涉を容れざることゝなる譯である。從つてその滿洲に對する日本の勢力も鴨綠江及圖們江を隔てゝ直接に影響せざるを得ない。滿洲を得んが爲めには、露國も、滿洲を防備せん爲めには清國も、共に必要にして、しかも之れによつて戰を厭はざりしその朝鮮が、今や完全に日本の勢力下に置かるゝとすれば、滿洲に對する日本の利害は、最早や消極的なるものではあり得ない。かくて滿洲は完全なる三國鼎立となる譯である。

第五章　戰後の滿洲

第一節　日本の諸施設

日露講和條約によつて讓渡さるべき東清鐵道南部線の授受は、明治三十九年（光緒三十二年）四月に於ける前後三回の會商を以て結了し、中村愛三、堀三之助、ドエッヲ、イリコフ等の委員は相會して八月全線の受領を終り、只寬城子停車場に關しては、改めて外交上の交渉を開き、日本は露國より金七十萬圓を受けて寬城子停車場を露國に讓り、かくの如くして日本總理大臣西園寺公望の親しく滿洲を視察して歸るや、南滿洲鐵道株式會社は陸軍大臣寺內正毅を委員長として創立せられ、二億圓の資本を以て半官半民の組織となし、大連に本社を置き後藤新平、中村是公、之が正副總裁として營業の開始を見たのであつた。

之れより先き日露戰爭に際し日本軍は滿洲の各占領地に於て軍政を布いて所在の住民を統治し、遼東半島に於ける金州、大連、旅順の軍政署はもとよりのこと、鐵道線以東に在つては安東縣、岫巖、鳳凰城、大孤山、鐵道以西に在つては法庫門、新民府、鐵道沿線では遼陽、瓦房店、復州、蓋平、海城、營口、奉天、鐵嶺、開原、昌圖等に中佐又は少佐を軍政官とする軍政署の設置を見、遼陽には明治三十八年九月に至り關東總督府が設置され大島（義昌）大將を總督として之を統べてゐたのであつたが、金州、大連、旅順の三軍政署は三十八年六月關東州民政署の編成と共に撤廢せられ、住民統治の事務は民政署に引繼がれ、更に三十九年五月關東總督府の旅順に移され關東都督府と改稱さるゝや、各軍署も前後して閉鎖され、所管事務は悉く清國地方官に返還されたのであつた。而て關東都督の權限たるや、單に關東州の管轄のみに止らずして、南滿洲鐵道の線路保護及之が取締をも掌り、各所管事項に從ひ、外務大臣陸軍大臣及參謀總長の指揮を受くることゝなつてゐた。その組織は又之を民政部及陸軍部の二部となして各所管事務を司らしめ、先づ管內の地方行政に關して之が基礎となるべき各事項の調査に着手し、又滿洲利源調査委員の設けらるゝありて、民政長官之が委員長となり、幾多の專門家實業家を選拔して調査事項を囑託し、農商工、林業、釀造、水產、鑛業の六班に分れて深く滿洲に入り各方面の利源調査に從事せしめたのであつた。

而て軍政方面に於ては、都督府參謀長をして陸軍部の事務を主管せしめ、三十八年十二月には關東憲兵隊が旅順に創設せられ、旅順、大連、安東、遼陽、奉天、鐵嶺、公主嶺に各分隊の設置せらるゝあり、更に遼陽には一個師團を駐劄せしめ、師團司令部を此處に置き、柳樹屯及旅順に旅團司令部を、四個步兵聯隊を柳樹屯、旅順、遼陽、鐵嶺の四個所に配置し、騎兵聯隊を公主嶺に、野砲兵聯隊を海城に、工兵大隊を遼陽に置き、遼陽駐屯步兵聯隊の內一個大隊を奉天に分駐せしめたる外、越えて明治四十二年四月（宣統元年）鐵道沿線守備の爲め獨立守備隊が設置され、司令部を公主嶺に置き、守

備兵は豫後備中より召募して之を次の如く分駐せしめた。

第一大隊、公主嶺

第一中隊、范家屯、第二中隊、公主嶺、第三中隊、郭家店、第四中隊、長春、

第二大隊、開原

第一中隊、開原、第二中隊、昌圖、第三中隊、四平街、第四中隊、開原。

第三大隊、奉天

第一中隊、千金寨、第二中隊、奉天、第三中隊、煙台、第四中隊、虎石台、

第四大隊、鳳凰城

第一中隊、本溪湖、第二中隊、草河口、第三中隊、鳳凰城、第四中隊、安東縣、

第五大隊、大石橋

第一中隊、大石橋、第二中隊、鞍山站、第三中隊、海城、第四中隊、大石橋、

第六大隊、瓦房店

第一中隊、瓦房店、第二中隊、得利寺、第三中隊、熊岳城、第四中隊、瓦房店、

此の外旅順には要塞司令部あり、司令官は關東都督に屬し、又衛戍司令官として旅順に駐屯せる軍隊（重砲兵大隊、歩兵聯隊）を統率し、旅順鎮守府も亦依然旅順に置かるゝことになつた。

又營口の還附に關しては、明治三十九年十二月、中佐興倉喜平、公使館書記官阿部守太郎、領事瀬川淺之進等が清國委員奉錦、山海關兵備道梁如浩との間に條約を締結し、日本は直ちに營口の軍政を撤して、從來軍政官衙に於て公共の爲め經營せる衛生、警察、教育、土木其他人民に許したる公益に關する建設事業は清國地方官に於て繼續執行する旨を告示したのであつた。

然しながら當時滿洲の實狀たるや、單に關東都督と總領事並びに南滿鐵道の當事者とが權限の疑義を生じて互に杆格を生じたるのみならず、奉天將軍趙爾巽と日本側との間にも爭議抗言の連續して往返せらるゝあり、新奉鐵道の還附の如きは全くこの日本側の內狀の暴露せられたものであると稱せられたものであつた。新奉鐵道とは、奉天新民府間の鐵道のことであつて、日露戰爭に際し、日本が軍事上の必要から敷設せられたもので、將來敷設せらるべき長春吉林線と共に、南滿洲鐵道と最も重要の關係を有するものであつたが、北京に於ける協定に於ては、奉天新民屯間の鐵道をば、日本貨百六十六萬圓を以て清國に讓渡すことゝし、之が改造費の中、遼河以東に要すべき資金の半額をば、南滿洲鐵道會社より借入るべきことを約し、その返濟期限は八箇年とし、借款期限中には日本人を技師長として用ゐることを規定した。此の協約はもと日清協約の會商に際して兩國全權の共に一致したる所を基礎としてものではあるが、而かも亦新たに讓歩をなしたる形跡が多い。その清國が自己の資金を以て他に鐵道を敷設する場合には、南滿洲鐵道會社と關係する所なしと規定した如きは、その最も

大なるものである。この新奉鐵道の完全なる讓渡しによつて南滿洲鐵道中奉天營口間の貨物は大減少を來すが如き始末で、當時の日本には一定せる滿蒙策なきことを暴露し、清國は日本を輕侮し更にその排日熱の旺盛なるを助長し、法庫門、齊々哈爾鐵道が英獨兩國の資本によつて清國の新經營の下に將に着手せられんとするが如く、極東に在住する一般歐洲人も亦日本の行動を蔑視して排日を煽動する形跡ありしが如き狀態であつた。カイゼルの黃禍論も此の時代の產物に外ならなかつた。斯の如きを以て滿洲に於ける日清兩國の懸案にして解決を告げたるは關東州漁業問題と吉長鐵道に關する日清協同の約款とを僅指し得たに過ぎずして、餘は依然として兩國の外交問題として殘され、間島の如きは永遠に亘れる一の懸案として一時商議を中止したものの如く、鴨綠江の森林問題も亦年を逐ゆること兩回、明治四十一年(光緒三十四年)にして漸く日清協同の下に、材木公司章程の妥協を告げ得たに過ぎなかつた。而かも明治四十年春には、關東州漁業組合員が遠洋漁業團を組織して汽船二隻を艤し熊岳城近海に於ける支那漁船の保護に任せしめたのに對し、奉天將軍趙爾巽は遠洋漁業團が保護料として支那漁船一隻に就き十五圓乃至三十圓を徵收せるを不當とし、奉天領事萩原守一に對し、右漁業團を解散せんことを要求して來た。之に對し日本側は保護料の徵收は禁止すべきも漁業團の解散に同意し難き旨を主張し、清國側も飽くまで當初の要求を枉げず、交涉數次に亘るも容易に決せず、遂に兩者間に熊岳城漁業問題なる懸案を構成するに至つた。然るにその後幾何もなく蓋平漁業局總辦黃家傑は關東州在住の漁民高景賢が日本に加擔するの故を以て之を蓋平に誘致して殺害し、又日本人一名を拘禁した、これより問題は更に枝葉を生じ、明治四十一年四月(宣統元年)に至り、奉天總領事加藤元四郎と奉天交涉使陶某との交涉により兎も角解決し、漁船の保護は清國當然の任務として之を行ふことになり、日本人の出漁は一時的解決を見たるに過ぎなかつた。

尙ほ大連稅關の設置問題に關しても、日本が時期尙早を唱ひて輕しく之に應じなかつた爲め、日本が滿洲の開放を實行したるにも拘ず、支那側の疑惑のみならず列國も亦大いに日本の政策を蔑視の狀を以て迎ふる如き始末であつた。戰勝の日本はかく滿洲の進出によつて多大の負擔を負はねばならなくなつたのである。

第二節　清末の滿洲

日露兩國が約に從ひ期を定めて滿洲より各撤兵を實行することゝなつたので、北京朝廷は滿洲一歲に亘れる戰禍の善後策を講ずる爲めに、特に張錫鑾を奉天巡防營務處總辦に任じ、軍備整理の重任を負托し、將軍趙爾巽と共に戰後の經營に當ることゝなつた。時に光緒三十二年である。張錫鑾は浙江省錢塘の人、光緒元年馬賊剿討の爲め奉天に派遣せられ以來、通化、錦州、鳳凰廳等の各縣に地方長官として歷任し令名あり、日清戰役にも參加して寬甸縣方面にして勇戰せる武將である。

彼が來任した當時東三省に於ける清國陸軍は不統一無秩序を極めてゐたことはもとより、地方の自衛兵も北清事變後漸次解散されて空しく、殊に日露の戰禍に遇ひ、地方治安は只團練と稱する土民兵に依つて僅かに維持さるゝ如き狀態であつた。舊式軍隊の如きは全く有名無實で、加ふるに奉天省財政の窮乏は此の無秩序と相待つて宛然無政府を出現せん勢を呈してゐたのである。

茲に於て張錫鑾は奉天を中心に前後左右五路巡防營を創設するの計劃を立て、先づ新民府駐防の張作霖を巡防五營の統帶官に任じ、之を鄭家屯に移駐せしめ、やがて五路の巡防營は宣統元年次の如く任命されたのである。

前路巡防隊統領　張作霖
中路巡防隊　同　張作霖（兼）
後路巡防隊　同　吳俊陞
左路巡防隊　同　馮德麟
右路巡防隊　同　馬龍潭

而して張作霖は洮南駐防となり、當時洮南に在つた孫烈臣の部隊をも彼の節制下に歸したのである。斯かる間に清朝の老臣として畏敬された盛京將軍趙爾巽は、戰後日本との懸案も略々一段落を告ぐる頃光緒三十三年（明治四十一年）春湖廣總督に榮轉するや、清朝は、東三省の年と共に發達し、且つ日本及露國との關係が次第に切實を加へ且つ國際的に重大なる要素を加へ來りしに鑑み、之を統一して、此の二國に對する清國としての勢力を固めんとして、遂に廷議を決して奉天將軍、吉林將軍及び黑龍江將軍を廢して新たに東三省總督を置き、三省の將軍事務を兼攝し、尙ほ奉天、吉林、黑龍江の三巡撫をも統轄して三省の行政事務を掌理することゝなつたのである。尋いて徐世昌をば東三省の總督任じ、唐紹儀を奉天巡撫に、朱奎寶をば吉林巡撫代理に、段芝貴を黑龍江巡撫代理に何れも任命した。當時は北京政府に在つて外務部尙書袁世凱が、慶親王等と結んで大なる勢力を有してゐた時であつたので、之等の變改は、袁世凱の劃策に基くものであると稱せられ、事實徐世昌は清朝の長老ではあるが、袁世凱には、兄弟も只ならぬ厚情を有してゐる人で、唐紹儀の如き袁世凱の朝鮮以來復心の徒黨なのである。老將趙爾巽が廣湖總督となつたのも、榮轉とは云ふ得なかつたといふ事である。

兎もあれ新總督徐世昌は巡撫唐紹儀と共に光緒三十三年春五月任に赴んだ。爾來清國の滿洲に對する各施設は漸く一種の生氣を帶び來り、盛んに新政は創始せられて、最早や滿洲は、外族に對する中立地帶若しくは漢人の植民地たる域より完全に脫却し、支那本部と同樣視せらるゝことを如實にし始めた。新總督の最先に着手したのは實に邊防の計劃であつた。これは日清兩國の繫爭問題たる間島の現狀に鑑みて先づ此計劃を立つるに至つたのである。これによれば露清の國境より滿鮮の國境に亘れる廣大なるものであつたが、實際案としては日本のみをその敵手とするの感があり、先づ之が經營の

第一着手としては吉林より間島及琿春に至るの軍用道路を作らんが爲め、先づ該工事に從ふべき工兵三百名を募集し、更に奉天より興京及通化を經て輯兒山に至るの大道路を作らんが爲め別に工兵七百名を募集するの案を立てたのであつた。且つ東間島には延吉廳を置き西間島には長白府、を置いて、之が經營の爲めには電信を架設して移民開墾を奬勵し、更に軍事教育警察に關する設備を全ふするが爲めに北京政府より國庫補助を受くるに至つた。

尋いで日清協約に基ける吉林長春間の鐵道敷設に着手するの準備を開始し、別に新民屯より法庫門に出で北方遠く齊々哈爾に至りて露國の東清鐵道と接續せしむる新線路の計劃を立てたのであつた。清國が日本の同意なくして、南滿洲鐵道の併行線若しくは利益競爭線を敷設するは、北京協約附屬の覺書に背くものなるが故に、之の線路の計劃の暴露するや、直ちに日本よりの抗議に遇ふたのであつたが、清國郵電部は之に答へて、歐洲に於ける先例によれば、一鐵道を隔つる三十哩以内に在つては之が駢行線を設けしめざるを原則としてゐるが、清國今回の計劃たる新民屯法庫門線は、南滿洲鐵道を距つること最近距離に於ても三十五哩を有するものであると主張したものであつた。これ實に極東在住の英國民が、日本の滿洲經營を快しとせず、且つの彼等の放資に係る京奉線を延長して滿洲の利益を切牢せんとし、往々にして清國當局者に對して相當の刺激を與へ、此の如き口實を假るに至らしめたものであるといふ。但し該計劃は、明治四十年（光緒三十三年）十二月より日本との交渉に入り、四十一年に至つて尙ほ未だ解決せざる中に自ら清國の中止する所となつてしまつた。

然しながら清國の日本に對する爭心は毫も衰へず日本も亦戰後多端を加へし國情の整頓の爲め、且つは列國の嫉視に遇ふて、外交上の懸案も常に讓歩を余儀なくせられ、清國は事毎に日本に向つて硬外交振りを示し、彼の安東、大連の稅關に關しても嚴重なる交渉を試むる如き有樣であつた。而て露國に對しては、國境に於ける稅關問題に關しても未協定のまゝに一任して問はず、滿洲里、綏芬河兩所の稅關は之を設けたけれども、又何等の取締を實にすることなく、露清の境上千里に垂んとして、しかも十清里の間を無稅地帶となし、露國若しくは露領よりの商品が事實無稅なるを常としたるの實狀を呈したのであつた。只對蒙政策の一として光緒三十四年、東三省蒙務局を設定し朱啓鈐をして之が董督たらしめたものあるのみであつた。蒙務とは東蒙古の土地行政を專任籌畫することであつて、當時東三省總督が北京政府に提出したる意見書には「露人は、日本の爲め滿洲に失ひる所を必ずや蒙古に得んとするであらう、而てその衝に當つてゐる地點は東蒙古のそれであらねばならぬ。東蒙古は當然愚昧なる游牧民に一任すべからざるものである」といふ意味があつて、蒙務局は此の意味に於て設立されたものではあるが、翻つて思ふに、廣大にしてしかも肥沃なる東部內蒙古を完全に東三省總督の管轄に歸する爲め、その蒙古王公元有の勢力を薄弱ならしめ來つた漢人を、更に移住せしめんとしたものであつたと察しられる。而て蒙古王公の勢力を弱めることは、換言すれば、此處に漢人の多數移

住者を見るに至らば、據て以て露國の南下をも防止するに便あるべきである。何故ならば蒙古人は多く漢人の壓迫（多く借金）に苦しめられ、末期の清朝は又只漢人の歡心を得んことのみ努むる如き狀態だつたので、勢ひ露西亞に賴らざるを得なかつたからである。彼の烏泰王（科爾沁右翼前旗）のひそかに露人より借款して、漢人に對抗する爲め場合によつてはその全財產を提供せんとした所謂烏泰事件などは、その最も著しき例であらねばならぬ。

以上の如く東三省新總督徐世昌は、滿洲の新場面に臨んで、東蒙古までも東三省の管下とし、巡撫唐紹儀の辛辣なる手腕と相まつて盛んに新改を創始し、奉天省城の改築や總督衙門、公園等外形も亦之に劣らず修築し、或は文明の外形を模倣して無用の制度、又は官制を定めたとの不評判あつたのに加へて情實を以て人を用ゐる形跡かあり、爲めに冗員濫史も亦少なからず、政費を濫費せる結果は、蒞位一年にして財政の困難を來したのであつた。趙爾巽が奉天離任の際、度支司（財政廳）に蓄へゐたる七十萬兩の剩餘金はもとより、却つて此の外にも數十萬兩の欠陷を生ずるに至つたのであつた。而かも奉天官場は廣東派と浙江派とが隱然相對峙して朋黨相排擠するの結果を生じ、爲めに巡撫唐紹儀の如きも、終には浙江派に牽制せられて自由手腕を振ふを得ざるに至れるのみか、左參贊錢能訓、東三省蒙務局督辦朱啓鈐、督練公所參議傅良佐等を筆頭とし、其他秘書官に至るまで徐世昌系を以て充滿し、爲めに唐紹儀は懊惱不平の極、東三省外資輸入問題の打ち合せに藉口して北京に去り、復た歸任を肯じなかつた。かくて財政は次第に窮乏を告げ、諸官吏の俸給すら支振ふを得ずして常に數箇月の延滯を來すの慘狀を呈し、加ふるに北京に在つては戴振貝子の御史に彈劾せられたるあり、黑龍江巡撫の段芝貴も亦彈劾せられて、その連累の徐世昌に及ばんとしたる事あり、徐氏の北京召還說は當時尤も盛なるものがあつた。その裏面には雲貴總督岑春煊の未だその任に赴かずして滯京し頻りに清廷諸臣の私事を暴いた結果であるといふ。兎も角徐世昌は、一たびは北京に赴きたるも、その連累は遂に免かれたのであつたが、光緒三十四年（明治四十一年）に至り西太后、光緒帝の相繼いで崩御せるあり、その政局の變動は遂に袁世凱の失脚となり、徐世昌も亦郵電部尙書に轉任を命ぜられて、在位二箇年にして北京に去つたのであつた。

徐世昌の後任として東三省總督に新任されたのは雲貴總督の錫良であつた。錫良は蒙古旗人にして武人の出、深く邊境の旅務に通じ、攝政王の親任を得ること多かつた。然し一時は錫良も東三省に於ける人材の欠云と財政の紊亂とに躊躇したが、遂に前黑龍江巡撫程德全を奉天巡撫に任じて共に着任したのであつた。着任以來彼れは徐世昌失政の後を承けて鋭意改革に努め、先づ財政整理に着手して政費の節減を以て當面の急務とした。依つて膨脹せる諸機關に緊縮の鐵槌を下すと共に、空文に等しき諸制度を削除し以て缺員を淘汰し濫費を防止したのであつた。自らも亦勤儉を以て範を示し、强壓手段を用ゐて奉天官場に緊縮の空氣を漲らした。然しながら清朝もすでに宣統の頃となつては、大厦も

支ふるに由なく、革命黨は各處に蜂起して北京政界は別個の變調を帶び來り、錫良も亦充分の活動を爲す餘地を與へられず、奉天省内の革命派と暗鬪を續けつゝ在職二年、宣統三年四月(明治四十四年)北京に歸つたのである。これよりも先きに巡撫程德全は宣統二年四月江蘇巡撫に轉任して行つた。

第三節　間島問題と安奉線問題

間島に於ける清韓兩國の國境線は、由來劃然たる決定を見ず、韓國は間島在留人の六割に餘る朝鮮人を保護する爲めに官吏を派遣しつゝあつたが、日露戰爭に際して悉く同地を撤退したる爲め在住韓人は爾來全くその保護を受くる所なく、馬賊その他無賴の漢人等の公然横行して掠奪を縱まゝにするに任せらるゝ狀態であつた。その後日露の媾和既に成立して、韓國の施政も亦漸次その其緒に就きたる爲め、明治三十九年十一月(光緒三十二年)を以て韓國統監府は先づ應急の處置として韓廷の請ふがまゝに若干の吏員を同地に派遣して韓民保護の任に當らしむることに一決し、陸軍大佐齋藤季治郎以下の吏員の一團は明治四十年(光緒三十三年)八月間島に進往して派出事務所を六道溝に開設し、これと同時にこの旨を清國に通知し、地方官憲をして誤解なからしめんが爲め必要の手段を採るべきことを請求したのであつた。清國の該通告に接するや、直ちに抗議を日本政府に提出し、且つ清國政府よりも同じく自國民の保護及境界測量の名義を以て吏員を增派し、尋いで十二月下旬には東三省總督の所轄兵員を派遣するに至つた。然るに日本は間島の開拓者は韓人にして、漢人は之れに次いで來り、從つて人口もはるかに少なきの理由を以て間島を韓國の領有とすべきであると主張し、清國は又頑として日本の要求に應せず、爾來年を踰ゆるも遂に解決を見ることが出來ずして、只相互に駐在官を派遣して各自にその領民を保護することゝなつた。その後も日本關東都督大島義昌と間島邊務大臣陳昭常との間に幾多の交渉が重ねられたが、依然として交渉は進渉せず、其間往々にして一二列國が、該問題を仲裁に付すべしとの旨を、清國外交部に慫慂したものがあると傳へられたに過ぎなかつた。其後日本は明治四十一年(光緒三十四年)四月を以て更に間島派出所を置き、以前の事務所を襲用し、所長等も亦概ね前日と同樣であつた。派出所の所在地は六道溝の龍井村に在り、清國の延吉廳は局子街に在つて、兩々相對峙の狀態となつたのであつたが、日本は又清津會寧間に不完全ながらも輕便鐵道を敷設して韓國の中央部との聯絡に便じ、更に會寧、六道溝間にも亦輕便鐵道を敷設せんとの議があつた。

茲に於てか東三省總督徐世昌は强硬なる抗議を日本政府に提出し、且つ頻りに兵を發して間島の地に入らしめ、天寶山に於ける日本人の金鑛採掘を中止せしめて、當業者に多大の損害を與へたので、屢々日支間の物議を釀したものである。

又安奉線問題に關して、その北京協約に定むる所に從へば光緒三十四年冬にその改良工事が竣工す

る筈であつたが、日本は更に之を廣軌に改めんとして、光緒三十四年冬に至り再び清國と交渉を開いたが、當時は西太后、光緒帝相繼いで崩卿し、北京政界が安定しなかつたので、日本政府は更に宣統元年正月(明治四十二年)再び交渉を開き、委員を派遣して安奉鐵道の新線路を踏査せんことを要求した。依つて清國は郵便部より吏を派して日本鐵道委員と共に線路の踏査に從事せしめ、三月中旬には陳相屯より奉天に至る二十哩を除く全線の踏査を終つた。もとより日本側豫定の線路を檢閲したに止まる。かくて日本よりは線路敷地の買收を督促して止まなかつで、外交部は責任脱れの爲め東三省總督錫良をその當事者に委任し、日本總領事と交渉せしめ、錫良は北京政府の内意を體して極力廣軌線に改築を爲さしめざらんとして反對し、且つ該鐵道の日本守備兵を撤退せんことを要求した。日本も、もとより之を以て滿足するものではなく、總督錫良の提議を以て條約を無視するものなりとし、その後も再三再四日本領事より交渉する所があつたが、錫良は前言を繰返すのみにして他を云はず、遂には回答さへも與へざること月餘に及んだ。茲に於て日本政府は六月中旬北京外交部に最後の通牒を發し「かくては、日本も止むを得ず、北京政府の協力を待たずして、條約上の權利に基き自由行動を採るべき」旨を通じ、同時に南滿洲鐵道會社に命じて起工せしめ、斷然たる態度に出でたので、清國政府も遂に日本の一切の要求を承認し、總督錫良、巡撫程德全に命じ、日本總領事小池張造と會して次の數項を協定した。

一、安奉鐵道の軌道は京奉線と同樣ならしむること、

二、兩國政府は大體に於て曩日委員の踏査せる線路を承認し、陳相屯より奉天に至るの線路は、改めて協議決定すべし、

三、此條約調印の當日より即時敷地の購入その他一切の細目を協議す。

四、條約調印の翌日より工事を始む、

五、沿道の清國地方官は工事の施行に對して諸般の便宜を與ふること、

而て日本は、その最後通牒中に滿洲に於けるその他の懸案も、同時に妥協の精神を以て解決せんことを希望したるにより、清國も亦之に應じ七月下旬外務部會辦梁敦彦と日本駐支公使伊集院彦吉との間に、滿洲に關するものと、間島に關するものとの二種の協約を成立せしめたのであつた。

滿洲に關する協約

日本政府及清國政府は、滿洲に於て雙方共に關係を有する事項を明確に議定し、將來の誤解を防ぎ兩國善隣の關係を益々鞏固にせんことを希望し茲に條款を訂立す。

第一條　清國政府は新民屯、法庫門鐵道を敷設せんとする場合には豫め日本政府と商議することに同意す。

第二條　清國政府は大石橋、營口支線を南滿洲鐵道支線と承認し、南滿洲鐵道期限滿了の際一律清國に交還すること、並に該支線の末端を營口に延長することに同意す。

第三條　日清兩國政府は撫順及煙台兩處に關し和平商定すること左の如し。

甲、清國政府は日本政府が上記兩炭礦採礦權を有することを承認す。

乙、日本政府は清國の一切の主權を尊重し、並に上記兩炭鑛の採炭に對し清國政府に納稅することを承認す。右の稅率は清國他處の石炭に對する最高の稅率を標準とし、別に協定すべし。

丙、清國政府は上記兩炭鑛の採炭に對し、他處の石炭に對する最高の輸出稅率を適用することを承諾す。

丁、炭鑛の區域竝に一切の細則は別に委員を派遣して協定すべし。

第四條　安奉鐵道營業及び南滿洲鐵道幹線沿線の鑛務は、撫順及び煙台を除き明治四十年即ち光緒三十三年、東三省總督及巡撫が日本總領事と議定せる大綱に按照し、日清兩國人の合辦と爲すべく、その細則は追つて東三省總督及巡撫と日本總領事との間に商定すべし。

第五條　京奉鐵道を奉天城根に延長することを日本政府に於て異議なきことを聲明す。その實行の辦法は地方に於ける兩國官憲竝に專門技師をして妥當商定せしむべし。

間島に關する協約

第一條　日清兩國政府は圖們江を清韓兩國の國境とし、江源地方に於ては定界碑點を基點とし石乙水を以て兩國の境界となすことを聲明す。

第二條　清國政府は本協約調印後、成るべく速に左記の各地を外國人の居住及貿易の爲めに開放すべく、日本政府は此等の地に領事館若くは領事館分館を配置すべし。開放の時期は別に之を定む。

龍井村、局子街、頭道溝、百草溝、

第三條　清國政府は從來の通り圖們江北の墾地に於て韓民の居住を承准す。其地域の境界は別圖を以て之を示す。

第四條　圖們江北地方雜居區域內墾地居住の韓民は清國の法權に服從し、清國地方官の管轄裁判に屬す。清國官憲は右韓民を清國民と同樣に待遇すべく、納稅その他行政上の處分も清國民と同樣たるべし。

右韓民に對する民事刑事一切の訴訟事件は、清國官憲に於て清國の法律を按照し公平に裁判すべく、日本領事館又はその委任を受けたる官吏は、自由に法廷に立會ふことを得、但し人命に關する重案に就いては須らく先づ日本領事館に於て若し法律を按照せずして判斷せる廉あることを認めたる時は、公正の裁判を期せんが爲め別に官吏を派して覆審すべきことを清國に請求することを得。

第五條　圖們江北雜居區域內に於ける韓民所有の土地家屋は、清國政府は清國人民の財產同樣に完全に保護すべし。又該江沿岸には場所を選び渡船を設け雙方人民の往來は自由たるべし。

但し兵器を携帶するものは公文又は護照なくして境を越ゆるを得ず。雜居區域內產出の米穀は韓民の搬出を許可す。尤も凶年に際しては禁止することを得べし、柴草は舊に依り賣買すべし。

第六條　清國政府は將來吉長鐵道を延吉南境に延長し、韓國會寧に於て韓國鐵道と連結すべく其一切の辦法は吉長鐵道と一律たるべし。開鑛の時期は清國政府に於て情形を酌量し日本政府と商議の上之を定む。

第七條　本條約は調印後直ちに效力を生ずべく、統監府派出所竝に文武の人員は成るべく速に撤退を開始し二箇月を以て完了すべし。日本國政府は二箇月以內に第二條所定の通商地に領事館を開設すべし。

此の外鹽業問題に在つても清國の官鹽局をして總べて關東州の製鹽を買上げしむることゝし、清國の官鹽を侵害するの故障を避けたるあり、殊に久しく專任の民政長官を見ざりし關東都督府も白仁武の任命を見、南滿洲鐵道會社總裁後藤新平の露都訪問などもあつて、日本の滿洲に於ける立場はその大局の形貌を改め得たるの觀があつた。

第四節　戰後の露國と滿洲

露國は日露戰爭の當時より國內各地の擾亂常に絕ゆることなく、媾和成立の後に至つても尙ほ依然

として繼續し、勢焔は終に極東にまでも波及し、明治四十年（光緒三十三年、一九〇七年）十月には浦鹽警備の水兵にして忽ち叛亂を企てたるものがあり、爲めに戒嚴令を布くの止むなきに至る狀態であつた。而も極東に於ける在留露國民も日露戰爭以後著しく減少し、西比利亞移民にして失望して本國に歸還するものその八分の一に及び、產業發達せずして極東に於て最も有望なる浦鹽港の如きすら商工業は殆んど皆獨逸人の手によつて經營せらるゝ如き始末であつた。

是に於て露國は、清國よりの戰後經營の交涉を回避して、先づ國內の紛爭にも拘らず、西比利亞鐵道の改造及び黑龍江鐵道の新計劃を企圖し、二億萬留の鉅額なる經費に對しても議會は事もなく協贊を與へて大いに世人を驚かした。素と日露開戰當時に於ける西比利亞鐵道の運輸力は、一日僅かに七列車を運轉し得るに過ぎなかつたが、遞信大臣ヒツツコフの鋭意して待避線を增加したると、其他諸般の改善を急施したるとの爲め戰役の後期に於ては既に二十列車を運轉し得るに至つたものである。而かも露國は是を以て尙ほ足れりとせず、更に該鐵道の復線工事を遂行すると共に、別に他國の領土を通過せざる露國の專有線を得るの必要より、黑龍江に沿ふて新たに一線を敷設し、露都と浦鹽港との聯絡を完全ならしめんとするものが、即ち當時の新計劃であつたのである。之が完成の時には、一日にして步兵四個聯隊、騎兵四個聯隊、砲兵二個旅團及び二萬五千の補充兵を極東に發送せしむることが出來るといふ事であつた。その經濟的價値の如きは、鐵道の延長とその經費とに比して甚だ少なるものであらうといふ定評であつた。同鐵道は黑龍鐵道と稱し、ネルチンスクよりハバロフスクに至る約二千露里にして一九一六年（民國五年、大正五年）完成の豫定であつたが、その外にも一九一三年（民國二年、大正二年）よりは烏蘇鐵道の改築工事に着手することゝし、西比利亞鐵道の複線工事、オビ、エニセイ、レナ、黑龍江の四大河連絡、及び黑龍江沿岸、沿海州南部の道路大修築等續々として計劃せられ、哈爾賓及び齊々哈爾の支線を布設して、黑龍、東淸兩鐵道を連接する計劃も亦企圖された。

之等の計劃は多く軍事上の必要より爲されたと見るべき節が多いが、戰後の露國が如何に所謂黃禍に對して恐怖を抱いたかに就いて請ふ、クロポトキン將軍の言に聞け、曰く、

露國の最も恐るべきは蒙古北境への支那の移民である。此の地方は果して多數住民の土着生活に適するや否や、又た我が西比利亞國境線と界を連ぬる此の地方の移民數が、支那政府の制限の下に行はるゝものなりや否や、吾人はその何れに係るを問はず深く考究するの必要がある。想ふに平和にして稀薄なる遊牧人民の去つて、露國に反感を抱く多數の支那人の代つて此地に侵來するに至らば、これ露國にとつては危險の到來にして吾人の大いに考慮を要するものであるであらう。

今や支那人は二三百露里の邊境附近の地帶に多數農作者を置くべき好適地を求めて人民を移住せしめ、以て蒙古人を南方へ放逐しつゝある。而て興安嶺山脈よりイルチシに至る地方は數百萬の住民を收容するに足る。若し今に及びて我が露國が適當なる手段を取るに非らずんば、國境移住の黃色、

帶は西比利亞に侵入し來り、露人の事業を奪ひ、我が勞動者をして殆んど賃銀を取るに由なからしむるに至るであらう。今後支那が北京、庫倫、烏里雅蘇臺、科布多を通過する鐵道を敷設し、既定の計畫により、蒙古北境へ六師團の步兵を配備し之を前衛とせば、五倍の支那人は再び一七二五年に行ひし如くトボリスク地方までの還附を申込むに至るであらう。此の如く支那民族の蒙古移住が我にとつて軍略上恐るべきのみならず、我が露國の經濟關係に及ぼす威嚇も亦大なるものがある。

これ尤も吾人の考慮を要するものである。

斯の如き理由により露國政府は、その西比利亞移民に對しても大いに考慮を費すところあり、先づ移民の資格等に制限を加ふると共に一方にはその生活を安固ならしむるに力を用ゐ、殊に一九一一年ゴンダッチ待從の黑龍江總督に任せられてより、專ら力を經濟的方面の振興に注き、極東政策に一變色を混せしむるに至つた。

かゝる間にも直接その利害を相接する北滿洲に於て清國と種々なる交涉案件の生じて來たことは止むを得ぬ。その第一は、哈爾賓に於ける露國の行政權行使に對する清國の抗議である。日露戰爭後に於ける新なる露清關係は露國の回避により未だ決定せざる狀態であつたから、そこに勢ひ問題の紛起は免かれぬ。その導火線を爲すものは、實に米國が國務卿ルートとワシントン駐劄露國公使ローゼンとの商議に成れる、米露の條約を固守すべきことをいひ、且つ米國が進んで滿洲の開放を主張し、之が實施を促がすと共に、獨り露國の特權のみを茲に認識することが出來ないと宣明したことである。

爾來滿洲に於ける露國の行政權問題に關しては米國政府と駐米露國大使との間に交涉を重ねたること幾回、露國大使は哈爾賓及海拉爾に於ける露國居留地の市行政權組織に關しては、全く清國主權の及ばない所であつて、一八九六年（光緒三十二年、明治二十九年）の租借條約により絕對に清國より許與せられたるものであると主張した、蓋し此の如き疑義は、素と米國當初の主義たる門戶開放と機會均等との原則をば甚だしく變形するものであつて、全く露國が清國より許容せられし特別行政權の爲めに除外例の場合が頗る多いことから起つたことではあるが、當時は、滿洲駐在の米國領事が居住同胞の不便不利多きを訴へて已まざるに動かされ、米國政府に向つて何等かの訓令を仰いだ事から起つたものだと評されたものである。果せるかな、尋いで米國は滿洲の行政權問題に關して、露國は只滿洲の主權を侵害せず、只その警察權のみを維持することを宣明したことに滿足して何等の行動を執らざることゝなりた。事實當時は浦鹽を始めとし哈爾賓にも海拉爾にも、居留外人の主要なるものといへば、即ち獨米の商人を以て最も多しとなしたりしが故に、この問題の一たび起るや、露國に於ては之を以て獨逸が米國を煽動して、かゝる言動に出でしめたものであると論じられた。

然るに、その翌年（光緒二十四年）東淸鐵道總辦兼哈爾賓總領事ホルワットは東淸鐵道市制を哈爾賓に布き、市制四十條を規定し、哈爾賓居住の人民はその何國人たるを問はず、悉く商工業稅、家屋稅

借地税、主税等を課せられることになつた。これに對し清國商人は忽ち反抗の聲を擧げ、清國外務部は又東三省總督徐世昌に命じて哈爾賓に自治會を設けて之に對抗せしめた。かくて兩國の交渉は次第に急を告げ來つたが、宣統元年ホルワットが親ら北京に至り外務部と直接談判を開くに至り、三月下旬外務部尙書梁敦彥との間に、鐵道附屬地内に自治會を設くることの協約が締結されたのであつた。

第一條　露國は鐵道附屬地に於ける清國の主權を承認し、之を侵害せず。

第二條　清國は鐵道附屬地内に於て、主權に關する一切の措置を執ることを得、東清鐵道會社又は自治團體は東清鐵道會社に關する諸條約に違反せざる限り清國主權發動を妨ぐるを得ず。

第三條　東清鐵道會社に關する現行諸條約は引繼き有効なるものとす。

第四條　清國がその主權に關する法律命令及その他の規則は自ら之を告示す、

第六條　鐵道附屬地に在る重要なる都市に自治會を設く

該都市の居住者に地方の程度と人口の多少に從ひ選擧により議員を任命し、該議員をして更に執行機關を設けしめ、又は居住者自ら自治團體の事務に從事し一名の代表者を選出し、該代表者に於て總會の決議事項を執行せしむることを得、

第七條　鐵道附屬地内に於ける清國人並に外國人は、同一の權利義務を有す、

第十一條　議員中より行政擔任の委員を選擧(三名以下)し、これに交渉局總辨及鐵道長官の任命する二名の委員を加へて行政委員會を組織す。

第十三條　交渉局總辨及鐵道長官は行政委員會を監督し、必要ある時は自ら檢査を爲すの權限を有す、

第十五條　鐵道附屬地内の都市に於ける重要問題は鐵道督辨(清國)並に東支鐵道本社にて共同審議すべし。

此の外松花江の航行權問題、及び税關問題に關しても皆相當の紛議を重ねたが、清國は松花江の各國自由航行を認めて落着し、戰後に於ける三國の關係は、大體の結着を見たのであつた。

第六章　支那の革命と滿洲の地位

第一節　滿洲に於ける革命運動

滿洲の天地は日清、日露の兩戰役に洗禮を受けて、異常なる發達と變化とを示した。而かも日露の兩國が此處に確實なる地歩を占めて、着々として侵入の實を擧げつゝある。それは實に北京政府腋肘の問題でなければならぬ。しかも之等に對抗する爲めには、一漢人の力に待つより外はなかつたのが當時の北京政府である。その漢人は、白人の必ずしも恐るに足らざることを日露戰爭によつて如實に見せられた。それよりも露國をして滿洲に於ける傍若無人の行動を爲さしめたのは、白人强きか故に非ずして北京政府の弱きか故である、と漢人は思ひ出した。或は進んで爲すなきの北京政府に對し、漢人の運命を托すべくあまりに不安なる弱勢と而て無誠意なる清朝の利己主義を發見したものもある。露國の滿洲侵入、引いては日本の滿洲に於ける地位は、實に滿洲朝廷存在上の必要より漢人が甘んじて受けたる犧牲であるとさへ思はざるを得なかつた。只漢人は之を打して一丸となすべき力の欠亡の故を以て一時清朝の爲すところに從ふのみであつた。而かも清朝はこの風潮を察しながらも滿洲戰後の整理經營の爲めに、大いに漢人の新智識を拔擢して滿洲官界に特派するより外に、日本及び露國に對抗する道を見出し得なかつた。當時の新人とは、日本又は歐米に留學したる所謂新智識の所有

者にしてその大部分は漢人である。この新人こそ實に東三省に革命思想を流入せしめたる元兇でなければならぬ、何故なれば當時特に日本に在つては、孫文一派の革命黨全盛にして、日本留學生の何人もがこの空氣の中に育てられて來たものだからである。只彼等は學窓を出でゝ日尚ほ淺き一介の書生なると、政府の壓迫が激しき爲め、表面的運動を爲すの勇氣がなかつたに過ぎなかつた。だからその反面には又同志の結合が漸次堅固の度を加へ來り、時間の經過は、彼等の勇氣の缺亡にも拘らず遂には奉天官場に牢固たる潛勢力を扶植するに至つた。而かも北京政府に在つては西太后光緒帝相繼いで崩じて、清朝がその中心勢力を缺くや、以來支那本部に於ける革命黨の活動は愈々具體化し、滅滿興漢の氣勢は遂に全支那に漲り出し、清朝が、之等人民の歡心を得んとして止むなつて設置した諮議局は益々革命思想を濃厚にし、東三省に於ても亦その影響を蒙り、奉天諮議局を中心として革新の氣運が熟し來つたのである。

かゝる時に當つて宣統三年五月東三省總督錫良の職を辭するあり、北京政府が之が後任として前盛京將軍たりし趙爾巽を再び起して東三省總督兼管三省將軍事務の重任を托し、以て東三省内に潛在する革命黨一派の彈壓根絶と、三省の治安維持に任せしめたのであつた。趙その人はもとより漢人にして錫良の滿洲人たることも改めて說くまでゝもなからう。

新總督趙爾巽は就任以來銳意してその職に當り、又由來清國地方大官が尊大自ら持し、督撫衙門に蟄居し、部下を頤使するを能とし、親ら遠く出で、民情を視察するものなきを概し、親らレコードを破つて北滿巡視に赴いた。革命の烽火が武昌に擧がり、響の聲に應ずる如く南支一帶に動亂の擴大したのは實に此の秋であつたのだ。

茲に至つて東三省各地に潛伏して機會の到來を窺つてゐた革命黨も亦動き出した。奉天に於ける革命黨の首領張榕、張根仁等は南方諸省に倣つて獨立の旗を擧げんと圖り、諮議局議長吳景濂も亦陰に之を助け、先づ省城を革命の渦中に卷き込まんとして活躍を開始せんとした。急報に接したる趙爾巽は急遽北滿の旅より奉天に歸來した。これ實に軍隊が革命黨に聯絡して叛亂に加擔することを恐れたが爲めに外ならなかつた。故を以て彼は歸來直ちに次の如き訓辭を發表して人心の鎭撫に努めたのであつた。

湖北革命黨の宣言には滿洲政府を顚覆することを目的とするとあるも、支那の歷史を見れば明國と雖も元國を倒して起つたものである。現支那の現狀は區々たる漢滿の爭鬪を許さない。同族力を合はせて世界列强に當らねばならぬ。吾等は時代の進歩せる今日、昔より繰返したる同族の爭をなすべきではない。余は漢人八族の出ではあるが、滿洲政府と云ふが如き偏狹なる見を捨て、危急存亡の支那の爲めに盡さうと思意する。云云

趙爾巽は斯くて革命黨の彈壓を試みんとしたが、支那本部に於ける革命の動亂は愈々擴大し、清朝

の勢威日に失墜するを見ては流石がに自己の安全をさへも不安とならざるを得ぬ。前提の訓辭の如きすでに漢人と妥協の意志を歴々看取し得る狀態であつたから、騷擾を厭ふ諮議局議員及び其他紳民の請ふがまゝに、平和手段によつて獨立の實を擧げ革命黨の機先を制して暴動の餘地なからしめ樣といふ見地から、北京政府とは充分の諒解を得たる上、九月下旬奉天國民保安會なるものを組織し、獨立の形式を採つて奉天省の行政權を收むること、及び會長に趙爾巽、副會長に吳景濂及伍祥禎を推す事等を決議した。趙爾巽は國民の二字を不隱當として會長就任を肯じなかつたが、該保安會準備會には第三十九協統領伍祥禎を始め、民政使、道尹等も列席してゐる始末なので遂に承諾した。依つて翌日奉天諮議局に於て改めて保安會發會式を擧行し、大綱十二條を決議し、會長、副會長の外、外交、行政以下七部を設け各地方に支部を置き、總べて從前の官憲をして其事務を掌らしむることゝ定めた。趙爾巽も、自分は漢人である、國民の公擧を受けて會長と爲る上は、一身を賭して生命財產の保護と安寧秩序の維持に當るであらうとの聲明を行つた。保安會の役員は次の如くである。

保安會　長	東三省總督	趙爾巽
同　副會長	陸軍第二十鎭第三十九協統領	伍祥禎
同　外交部長	奉天交涉使	許鼎霖
同　內政部長	奉天民政使	張元奇
同　軍政部長	陸軍第二混成協統領	聶汝清
同　財政部長	奉天度支使	朱鑑琦
同　交通部長	奉天旗務處總辦	金梁
同　教育部長	奉天法政學堂監督	紹昭
同　執法部長	奉天審判廳丞	許世英

右の如く保安會は成立したけれども、要するに騷擾豫防の爲め耳目を塗飾するに過ぎないので、事實に於ては奉天は依然として清朝官僚の天下であつた。即ち革命黨の望む獨立とは甚大の距離があるものであつた。故に保安會の內部にも穩和急進二派の暗流あるに加へて、亦軍人派、文治派の之に相錯錚するあり、奉天諮議局議長吳景濂、同副議長袁金凱及張榕等の急進派は、不平に勝えずして、別に聯合急進會といふものを組織して獨立を圖る機關とし、張榕を會長とし、吳景濂を關東代表として上海に送り、又人を省內各地方に派して其宗旨を宣傳せしめた。

總督張爾巽が、此の危局に際し、最も痛切に感ぜざるを得なかつたのは、自己の足下たる省城の兵備が頗る薄弱な事であつた。しかも張榕等の活動は到底默過するを許さない。許せば自己の覆滅である。この爲めに彼れは地方治安維持として奉天省の各道に配備してある巡防隊の一部を省城に移駐せしめ以て萬一の警備に任せしむる方針を取つた。そして新たに省城移駐の命令は、年來洮南府に駐防

してゐた巡防隊統領張作霖に下つたのである。時に宣統三年秋十一月、張作霖は是に於て巡防隊の精銳三千五百名を引率して省城に移駐し、且つ奉天中路及び前路巡防隊統領として保安會軍政副部長を兼ねることになつたのであつた。

第二節　革命黨の活動

革命の大潮は澎湃として滿洲にも押し寄せ來つた。國民保安會如きもとより革命黨の滿足も買ふべくもない。しかも多數の兵隊は趙爾巽の命により奉天に集中するに及んで、茲に官革兩者の對抗を現實し、革命黨は遂に奉天を去つて、その彈壓の激しからざる地方に於て革命の烽を擧ぐるに至つたのである。

その第一聲を叫んで立つたものは、遼東半島の一角、復州に居住する豪族顧人宜であつた。彼はその弟顧人邦・顧人敏等と共に、宣統三年十一月下旬、莊河廳及び復州の二個所に同志を糾合して擧兵し、遙に南方支那の革命黨と相呼應し、一時はその勢も頗る猖獗を極め、顧人宜の如きは武昌の中華民國軍總司令官黎元洪より滿洲第一路司令官任命の辭令を受け、革命の宣言書を發表し、蓋平、鳳凰城、安東、海城、熊岳城、營口その他各地に駐屯せる軍隊に對し協力事を擧げんとの勸告狀を發したりした。然しながら莊河の一軍は、更に近防の匪賊と聯合して一時は同地の巡防隊を襲擊して之を破つたが、巡防隊には更に應援軍の來り加はるあり、爲めに敗れて終に四散するの止むなきに至つた。

莊河方面の革命軍の敗報を聞ける遼陽附近の革命黨員一千餘名は、退いて劉二堡附近を根據地として地方の莊丁を募集し、遼陽巡警學堂の教習生三十二名も亦革命黨に投ずる目的を以て各自左腕に白布を纏ひ武器携帶のまゝ遼中縣に逃亡し、共に相合して一擧遼陽を占領して奉天に迫らんと計劃しつゝあつたが、遇々遼陽に殘留せる同志八十餘名が、討代隊として遼陽に向ひる、黃業福の率ゐる步兵第三標の兵約五百の爲めに、不意を襲はれて白兵戰を交へたるも遂に敵せず、革軍の裨將尹德山は、同志五十餘名と隙に乘じて遁竄したが、三十餘名は或は死し或は斬に處せられたので、劉二堡の革軍は遂に引還し、一部は遼中縣に向ひ、他は劉二堡に留つて機會を待つことゝなつた。時に十一月下旬である。

之より先き奉天第二協統領を辭して上海に走れる藍天蔚は顧人宜等の黑幕となつて、彼等をして復州莊河間に活躍せしめ機を見て滿洲に侵入せんとしたが、滿洲革命軍の氣勢所在に擧らざるを見るや、民國元年一月下旬自ら北討軍を組織し鞏子窩地方に上陸し、官軍と戰を交へて之を敗つたが、銃器彈藥の缺亡は、單に復州に莊河に小衝突を惹起して人心を動搖せしむるに過ぎなかつた。

そも〳〵藍天蔚は日本陸軍士官學校出身の新人であつて、第二十鎭統制張紹曾、第三鎭統制盧永祥等と連署して彼の有名なる十二ヶ條の改革意見を清廷に上奏した關係で、爾來趙爾巽よりは危險人物視

せられ、遂に南方の情勢視察といふ名義で第二混成協統領の職を部下の第三標統聶汝清に讓るべく餘義なくされものであつた。爾來彼自らは上海なる革命黨に馳せ參じ、奉天に於ては急進派の張榕一派と策動し、猛烈なる運動を開始し、憲政急進會なるものを組織し「飽くまでも平和的手段によつて東三省の政治的革命を行ふのであつて、湖北革命黨は滅滿興漢を趣旨とするも、吾等は人道を重んじ滿漢の別なく共和政體を施すを趣意とし、清國皇帝には混位を求むるも財産を與へて貴族とする」ことを主張し、機の熟するや、第二混成協の將校等と共に總督趙爾巽に向つて奉天省の獨立宣言を强迫せんとする形勢となつた。遂には趙爾巽に向つて「願くば大勢の趨く所に從ひ共和政治の輿論を容れ、皇帝は讓位して熱河に蒙塵せんことを上奏ありたし」と陳情し、この間に顧人宜一派の直接行動を助け、又一方舊部下の兵の一部をして張榕一派と策應せしめ奉天獨立を決行せんと劃策したのであつた。流言蜚語は飛び、省城の人心は爲めに騷然たるの狀態であつた。かゝる時總督趙爾巽の命を受けて省城内外の警戒と藍派の監視に任じたのが、實に張作霖その人であつた。張作霖の革命黨一派に對する態度は實に峻嚴を極めた。藍天蔚の雞子窩上陸と同時に彼は先づ急進黨の領袖として最も活躍したる張榕をその第一の犧牲者として斃してしまつた。同夜(一月二十三日)張榕は袁金鎧、葆崐等と奉天大西關の某酒樓に小宴を張り、夜半單身歸途に就いたのを大西關の一角に邀して殺害せしめたのである。この外憲政急進會副會長柵大年、國民報主筆田亞賓、その他黨員の有力者を逮捕監禁し、或は殺戮し或はその財産をも横奪して革命黨をして活動の余地を與へなかつた。故を以て急進派及び藍天蔚一味の深怨を買ひ、當時は常に刺客の爲めに身邊を附け狙はれてゐたそうである。

文治派の急進黨を葬つた張作霖は、更に軍人派のそれをも驅逐せんとした。その軍人派は一方張作霖自身の利害からも邪魔者であつたのだ。實に當時の奉天省内の陸軍は、第二十鎭統制潘矩縻、第二混成協統領聶汝清、先鋒隊統領吳慶桐、第二十鎭第三十九協統領伍祥禎、巡防隊統領張作霖、馮德麟馬龍潭、吳俊陞等であつたが、省城に於て張作霖と相對するものは、藍天蔚及びその舊部下以外にはなかつたのだ。かくて藍の舊部下等は、彼等に對する彈壓の次第に加はるや、遂にその營所北大營より出で、夜半省城の各關に於て大掠奪を決行し、大北關外より大西關外に亘る地域は兵火にかゝる始末となつた。この時張作霖の部隊は盤く省城を守つて城門以内には亂兵を入れしめず、完全に城内の治安を維持し、掠奪の主槐をそのまゝ逃走して、省城の騷擾は一夜にして平定されてしまつた。これと共に省城に於ける兵權の大半が張作霖に歸したことももとよりである。

然しなから革命黨の活躍は之を以て終熄した譯ではない。民國元年二月中旬に於ては鐵嶺に於ける革命軍が突如として事を擧げ、その敗るゝや、再擧火を放つて鐵嶺城を燒き拂はんとした。之を聞ける商務會、農務會、自治會等は大いに驚き、縣知事高士英、巡警局長趙聯邦に對して降伏を懇願し、革命軍との間に調停を爲し官軍をして次の如き條件の下に投降せしめた。

一、銃彈その他の兵器は一時商務分會に預り置き、革命軍の入城と同時に商務會は革軍に合體し武器は革軍に之を引渡すこと。

二、官府の事務はその司法行政權と共に革軍に引渡すこと。

三、革軍の入城に際し市民は爆竹を以て歡迎の意を表することを、及び衙門には革命旗を掲げること。

しかも知縣等は約に違ひて卽夜巡警總員を率ゐて逃亡し、同時に革命軍指揮官孫縱橫以下百餘名は鐵嶺に入城し民國新政廳を樹立した。奉天より到着せる討伐隊百餘騎も亦直ちに革軍に降伏を申出で更に匪賊の頭目戴秀山その他の應援隊も亦來り加はり、革軍は一朝にて五百餘の兵力となり、勢大いに張つたのであつたが、元來迂合の衆なると、無賴の徒なるとにより城內各界の動搖を甚だしくし、且つ革命の爲め身命を投じて張作霖の討伐隊と決戰する勇もなく、遂に鐵嶺城頭革命旗を翻すこと僅かに三日にして何處に向つてか退散してまつたのであつた。

鐵嶺占領に加つた革命黨幹部の一人宋少俠は、由來開原に在つて滿洲討伐隊北部先頭本部なるものを設けてあつたが、鐵嶺退散と同時に、再び開原攻擊軍を組織した。偶々四平街の革黨領袖段右軍なるものが開原城內の保安會長張占元を强迫して革黨に加擔すべきことを勸告するに遇ひ、共に城內に入りて巡防隊八十名と猛烈なる市街戰を演じた。この革軍は大部分吉林省より來れる巡防隊だつたので遂に開原城を占領し、直ちに獄を開いて囚人を解放した。この時鐵嶺を退散せる匪賊戴秀山は三百の部下と共に開原に來つたが、すでに鐵嶺縣知事と密約を結んだ戴秀山は、敢て革軍に同せず、遂に兩軍は銃火を交ふるに至り、革軍は戴軍を敗つて士氣大いに揚つた。是を以て奉天總督は混成第二協第三標第二營、前路步隊第二營等を派し鄭及春を討伐司令官として之に向はしめた。戴秀山の一隊も亦之に加はり、小戰鬪の後、革軍は、二十數萬圓を徵發し官軍と妥協して、開原占領後四日にして解散してしまふしたのである。

その後本溪湖、鞍山站等に於ても官革軍の小衝突を見たが、何れも物にならなかつた。

第三節　民國の成立と滿洲

滿洲に於ける革命黨の活動は官軍の强烈なる彈壓に遇ふて、もろくも崩れ、只その無力無能を暴露したに過ぎない。官軍の勢は、趙爾巽、張作霖を中心として奉天省內に今や確固たるものとなつてしまつた。

然るに之に反して支那本部に於ては、四百餘州の山河殆んど革命の旗風に靡かざるはなく、萬策盡きたる淸廷は、遽きに官界より退けたる袁世凱を再び起用して、革命軍討伐の大命を下すの止むを得ざるに至つた。袁世凱は則ち河南の草廬よりおもむろに起つて淸廷の死活の責任を一身に負ふて北京

に來任した。茲を以て滿洲の軍人等は多大の望を袁世凱に囑し、彼れを目して清朝の爲めに第二の曾國藩たるべきを期待した。多年清廷の眷顧を受くること大なりし趙爾巽は直ちに張作霖、馮德麟、聶汝清、馬龍潭、吳俊陞、劉恩鴻、耿玉田等三十三名の武將と共に連署して勤王の決議を爲して袁世凱に電申した。曰く、

革命軍は民亂を醸成し、君主を無視して私利、私憤を敢てす、其行爲は殆んど賊徒と異るところなし。朝廷唯だ大局の和平に汲々として講和の議あるも、原より斯かる誠意なき平和は講ずるの要なく、吾が採るべき道は武斷あるのみ。東三省は內地各省と異り軍隊の分置既に成り、且つ勤王の心厚し。勁旅數萬一旦命あらば道を山東に取りて南下し誓つて革命軍を剿滅し以て徽忠を朝廷に盡すべし、云云。

斯の如く盛んなる勤王論を高唱し、强硬なる意見を表示して民主共和に反對し君主立憲の政體を主張し、且つ趙爾巽は北京政府の嚴命を奉じて奉天五路の巡防隊より半數を選拔し之を山海關以南に駐屯せしむる意があつた。張作霖は又自ら進んで滿洲軍の總司令となり、南征せんことを欲し趙總督に向つてしば〳〵要請したが、張作霖の離奉は三省匪賊の操縱上甚だ不利となるので、遂に「卿は軍界に重きを爲し威望殊に厚し、一旦奉天を去らば人心爲めに動搖の虞あれば南征は中止されたし」と懇諭し、出動の命令は馮德麟に下つたのであつた。

然るに袁世凱の廟堂に上り全權を把握するや、清朝と革命黨との間に立ち、巧に兩者を操縱し、南方革命黨と和を講ずると一方、清廷に對しては大勢不可抗を說き皇帝の退位を慫慂した。是に於て趙總督一派は大いに憤怒し、依然共和政治の出現を承認せず、或は正に清朝の正朔を奉じて袁世凱を討伐せん勢さへも示した。而かも袁世凱より張作霖宛の密書到着し共和政治の出現の遂に止むを得ざる所以と、共和政府成立後は、卿を東三省防務督辦に任命すべき旨とが傳へられるや、張作霖は直ちに袁世凱の提議に同意を表し、馮德麟、聶汝清等を說服して、總督趙爾巽に對しても亦反對に壓迫の態度を執り、遂に趙爾巽をして袁世凱に對し「東省の事憂ふるに足らず」との電報を送らしめた。

斯くて宣統四年（民國元年）二月中旬、宣統幼帝の悲愴なる退位上諭は下り、袁世凱は、清廷の政權を繼承して革命軍と和を講じ、臨時大總統に就任して、唐紹儀を首相とする南北の聯立內閣を組織し、中華民國の創建を中外に宣言したのであつた。もとより此の期に際しても東三省には勤王の義兵も擧らず、傍觀默殺の態度であつたのである。間もなく前山東巡撫段芝貴は袁世凱の命を銜みて奉天に至りて宣統帝退位の旨を宣布し、趙、張等は共に袁世凱に向つて革命軍の勝利を祝賀し、且つ賣政院に電して「國體已に定まり臨時共和政府樹立さる。大總統はよろしく袁世凱を推選するを以て至當なりと思惟す」と陳情したのであつた。

斯の如くして世は兎も角も中華民國となつた。君主專制は民主共和と變り、從來の總督、巡撫は都督

民政長と改稱された。東三省總督の趙爾巽も改めて奉天都督に任せられ、吉林都督には吉林巡撫の陳昭常、黑龍江都督には黑龍江巡撫宋少濂が改任された。それに實質は別としても、表面は民主共和となつた喜悅に革命派は中央に地方に、朝に立つて建國の新制を施くの意氣を示した。黃龍旗の代りに、城頭高く飜る五色の民國旗に、新政を謳歌するの聲は全城に滿ち、民國氣分は此處滿洲にも橫溢し來つたのである。いつの間にか清朝時代の老官僚の代りに新進氣鋭の革命派青年が親しく省政の衝に當り出した。六月聶汝清麾下の第二混成協第三、四標の兵が北門外を掠奪し、九月吳慶桐所部の先鋒隊も亦叛亂し、共に張作霖の兵によつて鎭壓されてよりは、東三省陸軍の舊式軍隊も亦從來の巡防隊組織を廢し、範を日本陸軍の制度に則つて、師旅制を採用し、武官の稱呼も日本武官の制を模して全部改正された。張作霖の率ゐてゐた奉天前路及び中路の巡防隊は陸軍二十七師と改編され、馮德麟麾下の奉天左路巡防隊は陸軍第二十八師と改編され、共に陸軍中將に任せられた。第二十鎭も亦第二十師と改編されて潘矩樞は依然その師長となつた。時に民國元年九月、張作霖麾下の湯玉麟、張景惠、張作相も亦夫々任官して旅長、團長、營長の椅子を得、馮德麟の配下たる汲金純、張海鵬等も亦旅長に任命された。

斯の如き空氣中に奉天都督趙爾巽は齡已に古稀に近く、殊に民國となつて以來は辭意を抱くこと堅く、元年十一月大勢已に定まれるを見て遂に官を退いて靑島に隱栖するに至つた。その後任として直隸都督の張錫鑾が東三省西邊宣撫使なる名を以て來り奉天都督に就任した。その頃は、東三省に於ける革命黨の一派が又漸次に勢力を得て、次第にその羽翼を延ばしつゝあつたのだつたが、しかも民國二年三月となつて上海に於ける宋敎仁の暗殺を導火線として第二革命の勃發するや、北京政府の武斷政治は俄然として發動し、東三省に於ても革命黨の壓迫は再び猛烈となり、革命黨は又再び復州莊河廳の各地に據つて官軍に對せんとしたるも、軍資兵力共に足らずして、もとより問題にならず、二年十月袁世凱の大總統に當選して、國民黨に向つてクーデターを斷行するや、奉天に於ても亦都督張錫鑾は袁世凱の旨を受けて、張作霖、馮德麟等に命じ、武力を以て革命派に彈壓を加へ之を一掃して、これより奉天官場は武斷派の天下と化してしまつた。

民國三年六月には官制の再改正あり、各省都督は將軍と改まつたので、張錫鑾も亦奉天將軍督理奉天軍務に任じ、又奉省の民政は革命以來奉天都督の兼任であつたのを、軍民分治の目的より二年一月民政長の官を設け一時張錫鑾が兼任し、後許世英來つて就任せるも在任半歲にして去り、再び張錫鑾の兼任となり、三月五月巡按使と改稱されて、九月張元奇が專任巡按使として就任した。而て第二十師長潘矩樞は省城より新民屯に移住を命ぜられ、間もなく潘師長は綏遠都統署理として西に去り、時の陸軍總長段祺瑞の妹婿である吳光新が第二十師長となり、又先鋒隊統領の吳慶桐は河南省の南陽鎭守使に轉任し、伍祥楨は湖南の長岳鎭守使となつて共に兵を率ゐて南下し、聶汝淸、王汝賢等も亦前後して奉天省を去り、省城の兵權は一に張作霖の下に集り、三年夏には、右路巡防隊統領馬龍潭が東邊鎭

守使（鳳凰城）に後路巡防隊統領の吳俊陞が洮遼鎭守使（洮南）に共に任命されたのであつた。尙ほ奉天交涉使于沖漢は元年八月より三年七月まで在任した。

次に參考の爲め民國元年より三年に至るまでの東三省職官任免を掲ぐるであらう。

奉天省軍政長官

元年	都督	趙爾巽
	軍務司長	張錫鑾
二年	同	同
三年	將軍	鎭安上將軍督理奉天軍務 張錫鑾
	洮遼鎭守使	吳俊陞
	東邊鎭守使	馬龍潭

奉天省民政長官

元年	民政使	王永江
	提法使	彭穀孫
	興凰道	錫齡阿

吉林省軍民政長官

二年	內務司長	張錫鑾（兼）榮厚
	財政司長	趙臣翼
	教育司長	莫貴恒
	實業司長	馮紹唐
	國稅廳籌備處司長	惠風岡
	籌備處司法	王來
	巡按使	張錫鑾（兼）任毓麟
	中路觀察使	張翼廷
	同東路	朱淑蘋
	同西路	錢鏞
	同南路	王樹幹
	同北路	王秉鎭
三年	內務司長	張錫鑾（兼）張元奇（兼）史紀常
	財政廳長	張翼廷
	巡警道尹	榮厚
	東邊道尹	朱淑蘋
	洮昌道尹	王來
	同	伍元芝 張翼廷

吉林省軍民政長官

元年	都督	陳昭常
	護軍使	孟恩遠
	民政長	
二年	民政使	韓國鈞
	度支使	饒昌齡
	提學使	郭宗熙
	內務司長	徐鼎康
	財政司長	
	教育司長	
	實業司長	
	國稅廳籌備處	
	同司法	
	觀察使東南路	
	同西南路	
	同東北路	
	同西北路	

| 年 | | |

ふて差しつかひない。從つて奉天省の幹線を爲す南滿洲鐵道及びその沿線と、而て關東州とは、東三省の變革に對して相當の意義を有せねばならない。況んやそれ等は、全然他國の政治下に在るに於ておやだ。

先づ南滿洲鐵道であるが、それは實に奉天と吉林とを連絡する大導脈を爲す。以前遼河の水運に賴り、更に伊通州より陸路幾十日の行程を經て吉林に達する時とは異り、奉天の形勢は南滿洲鐵道により一路北上し得ることは、政治的に奉天、吉林二省を如何に密接ならしめ得たるかを察し得る。吉林省の巡防隊が開原占領の革命軍中に參加してゐるのは、之が顯證であらねばならぬ。只この巡防隊が吉林省に於て革命行動を爲さずして奉天省内のそれに參加したのは、奉天省さへも革命さるれば吉林は直ちに之に遂隨する形勢理に在つたことが一の理由となるであらう。それよりも支那官憲の彈壓以外に立つ鐵道の附屬地が、彼等が事を起す好個の策源地となつたものであることは否定されない。而かも南滿洲鐵道によりて直ちに日本の權力下なる關東州に非難し得る便宜もある。復州と謂へ、莊河廳と謂へ、悉く關東州と接攘の區域ではないか。その策源地は一に關東州内なる窶子窩であることは爭はれぬ事實である。藍天蔚の上陸地が窶子窩であつたといふだけではないである。

但し、當時の日本官憲は、官革兩軍に對して概して一視同仁の政策を採り、只關東州内及び鐵道附屬地の沿安維持を目的として居たので、兵力の寡少なる革命派にとつては利便が多かつたに違ひない。何故なれば、大連の如きは革命黨員の來りて身を潛むるものが多かつたが、州内に於て禍亂を引き起さない以上之を不問に付するだらうからである。官軍の密偵の如き、之等革命黨員を追跡し來つて、その動靜を窺ふものがあつても、直接行動には移ることが出來ず、時には暗殺團の出沒を傳ふることもあつたが、日本官憲の警戒が嚴重にして兇行を恣にすることが出來なかつたものである。清朝の沒落に當り、遺臣等の難を避けて大連に來り永住するに至つたものがあるが、これも一視同仁を裏書きする一例であるであらう。

然しながら遼東半島の南端に關東州なる他國主權の行使さるゝ區域の存在するといふことは、南滿洲の政治的地位に或種の變化を與ふるものであることは注意を要する。即ち關東州は、滿洲と山東省との海上交通の要衝に當つてゐる。從來の歷史より見るも支那本部より滿洲に進出するものは、山東省より海を渡つて、今の關東州に來るものが多かつたのである。だから關東州は南方支那より滿洲に來る第一歩を踏むべき地であつて、今次の革命の如きも、もし關東州なるものがなく、金縣なる區域であつたならば、金縣は正しく革命黨の根據地たり得る可能性がある。上海方面より山東省に上陸したる居正等の革命黨員が比較的成功し、關東州に上陸したる藍天蔚等の失敗したるは、一は外國主權の存在し、一は存在せざることにその幾分の理由は存するに違ひない。加之山東省との交通に當つては、關東州なるものは正しく一の中立地帶、若しくは間涉地帶を形成するものである。それもベルジウム

やスキスの如きものではなく、支那そのものよりも、もつと強大な勢力に依つて占據されてゐる中立地帶であるから、それは有形にも無形にも犯すべからざる地帶である。故に、支那本部の種々なる形勢は、この中間地帶の存在の爲めに、滿洲に波及することが少なからずさまたげられることは確だ。元來ならば山東省の變更か直ちに遼東半島に及ぶべきであるのに、そうは行かない。復州、莊河廳の擧兵の如きも、擧兵したる當人は所謂宇内の大勢に順應したつもりであらうが、滿洲には、關東州及び南滿洲鐵道といふ、强い勢力を以て維持してゐる大動脈の存在の故に、滿洲には未だ大勢を爲してゐない。だからそれは結局地方的の一局部の叛亂に止る。革命失敗の原因は此處にも見出される。斯の如きを以て、若し滿洲に於て革命を遂行せんとしたならば、先づ以て關東州及び南滿洲鐵道を維持する日本そのものをも革命の空氣の中に押し込まねばならない。革命に對する日本の好意と而て了解とを必要とする。彼の袁世凱の宣統帝追ひ出しの如き、日本の了解の故に、宗社黨色彩の濃厚なる奉天武人の一派も、一の勤王軍の出動をもなく共和贊成を爲したではないか。若し日本にして不贊成ならば、勤王軍として奉天の兵力を山東省に送ることも困難であるし、又三省の兵力を奉天に集中することも大なる困難あるべきはもとよりである。

もう一つ茲に安奉線なるものがある。その一般的價値は勿論、南滿洲鐵道本線と同一に論じらるべきであるが、只それは、支那側が東邊道一帶に通ずる交通路として重要なばかりでなく、日本と滿洲とを連絡するものとして、南滿洲鐵道に更に多くの日本的色彩を加ふる導體である。東邊道の如き、滿洲の支那側爲政者にとりて國防上さまで重要視さるべきものではない。只匪賊を取締り、叛亂の根據地としての東邊鎮守使が必要なばかりである。日本にとつても亦安奉線は實は搦手であつて、滿洲への その正門は實に關東州でなければならぬ。滿洲が獨立の一地域であるならば兎も角、中華民國の一部として始めてその存在の理由と而て可能とを見出す現在に於ては、之が山東省との聯絡地點に立ち、先づ以て渤海の灣口を握することを以て第一義とすべきである。日本の勢力下なる朝鮮と接續すると雖も、日本は朝鮮統治に勢力を傾集するも尙ほ足ざるの感ある場合、接壤地域より漸次滿洲に文化的影響を與ふることさへも不可能である。だからどうしても安奉線の價値は消極的で、日本に若し積極的政策ありとすれば、それは必ず大連を根據地とする南滿洲鐵道本線であらねばならぬ。

然り而て京奉線は、實に滿洲と支那本部とを連結する唯一の導線にして、これあるが故に奉天は吉林及び黑龍江を率ゐて立つものと解せられる。奉天の位置は實に鐵道線路がよく之を示す。若し吉會線も成り、朝鮮の咸境道線も竣工したならば、吉林の地位は、或る意味で奉天と對立し得るだらうと思ふ。

第七章　國際場裡の滿洲

第一節　滿洲鐵道中立の提議とその雰圍氣

日露戰爭後に於ける國際的雰圍氣は日本の擡頭によつて大なる變化を見ることになつた。元來歐洲諸國の對東洋政策は一に歐洲に於ける外交關係によつて支配せられ、その外交關係の緊切なるものあればある程、未だ利害關係の密接なるに至らざる東洋に向つては、銳意して且つは露骨に殖民地の獲得を爲すことゝなり來つたのであつた。その成功と不成功とによりて、歐洲外交界の覇者たり得るや否やが定まるのだ。外交に於て有利なる地位を保持し得れば、それはやがて國內の政治的優者を恃も得るのが歐洲の國情である。然るに歐洲諸國のこの對東洋政策は露國の猛烈なる突進によつて極東に國を立つる唯一なる日本の衝突を惹起した。當時はもとより日本の勝利を豫定したものはなかつたであらう。それだけ日本の勝利は露國の東洋政策に對しては勿論、その他の諸國に對しても多大の變化を引起さずしては止まない。殊に日本と同盟して露國に當つた英國にとつては、日本の勝利が支那に於ける英國勢力の安定を確保したことになる。支那に於ける英國の强敵は思はずも、日本によつて退けられてしまつたのである。かくて日英同盟の更新又更新となり、朝鮮に於ける日本の地位は保障され、而かも日露再び戰を開く場合には英國は共に劒を採つて立つことになつた爲め、先づ露國との同盟國

佛國は英獨兩國に挾擊さるゝ形象を呈し來つたのに鑑み、日本が歐洲に於て二千三百萬磅の公債を募集するを期とし、明治四十年（光緒三十三年）五月（一九〇七）佛國外相ピションは、極東の平和を維持する爲めに絕對平和主義を目的とする旨を公言し、六月遂に日佛協約の締結となり、同時に佛國と利害を同じふする露國も、日本と同樣の意味の日露協商に調印した。此の日露日佛兩協約はやがて英露協商の前提となり、ペルシヤ、アフガニスタン、西藏等に關する兩國の勢力圈も茲に劃定を見、かくて歐洲列强の東洋に於ける猛烈なる勢力擴張策は日本を中心として茲に安定し、亞細亞に於ける多年の紛爭を絕つに至つたのであつた。

然るに北米合衆國は米西戰爭以來東洋との關係が密接となり、マニラ及びグアム根據として大海軍を擁することゝなり、極東の問題に對しても實力を以て容喙し得る一國となつた。茲に於てか極東關係列國にしてその勢力圈の了解安定を見ざるは、獨逸と米國との二箇國となり、從つて清國政治家中には、今後日本及び露國の滿洲經營上尙ほ幾多の紛議の生すべきを慮り、米國及び獨逸に依賴して日本及び露國を抑制せんとの主義を採るものを生じ、奉天駐在米國總領事マルヴインの如きは北京政府の熱誠なる好意を以て迎ひられ、また清國よりは特派謝恩使の名を以て人を米國に派し、米國も亦之に實質上の便宜を與ふる所が多かつたのである。是に於て日本は駐米大使高平小五郎に訓令し、清國に關する日本の衷心を披瀝して米國の疑を解かしめ、對清外交の方針に於て日米の一致する所を一の公

文として交換せしめたのであつた。その內容は東洋の現狀維持と機會均等とに要約されるが、然しそれは直ちに他に誓約するものではなく、相並行して各々その決意を實行するまでの事である。

然るに一九一〇年(宣統二年、明治四十三年)一月、米國は豫じめ日露兩國に商ることなく、突如各國に向つて滿洲鐵道を中立とし、日露を加へたる六國の共同事業に移さんことを提議した。その內容は滿洲に於ける諸鐵道を各國共同投資の下に清國をして買收せしめ、同地方を中立地帶たらしめんとしたのであつたが、斯の如き計劃は、一國務卿ノックスの氣まぐれでは勿論なく、その據りて來る緣由は實に米國鐵道王ハリマンの巴里訪問に始まつてゐるのである。

ハリマンの巴里訪問は一九〇九年(明治四十二年、宣統元年)六月であつた。彼はノオツリオンと會して世界一週交通機關に關する所見を告げ、國際シンヂケートを設立して東清鐵道を該シンヂケートに買收すべき畫策を說き、ノオツリオンは直ちに之に贊成して急遽露都に赴き、ココフツォフ藏相と會見して八月巴里に歸着し、露國藏相が此の計劃に贊成を表せる旨を報告したのであつた。此れと同時に佛國の新聞は東清鐵道買却論を唱導し、又露國一部の人士中にも、何等相償はざる東清鐵道は宜しく之を米國又は日本に賣却するの得策なるを論ずるものを生じ來つた。是に於て露國政府は藏相を極東に派遣し、親しく東清鐵道の現狀を視察せしめ、同鐵道の運命は將にココツツォフの意見如何によつて決定せられんとするに至つた。此時日本も亦伊藤博文を滿洲に派遣し、哈爾賓に於てココフツォフと會見し相互の意見を開陳せんとしたのであつたが、不幸伊藤博文は該地に著するや否や、空しく兇漢の爲めに射擊せられて死し、その使命の那邊に在りしかすら遂に世に發表せらるゝに至らずして止み、其後久しからずしてハリマンも亦死去し、東清鐵道買收の計劃も水泡に歸し去つたのであつた。

然しながらココフツォフの實視の結果は東清線賣却を得策と認めたるや否や、又は果して世に噂せられし如く外務大臣イズヴオルスキーの反對によりて實現を見るに至らなかつたのであるかどうかは何れとも疑問であるが、兎に角ハリマンの此の計劃は一轉して米國國務卿ノックスの滿洲鐵道中立提議となつた事だけは確實である。而てノックスの提議ありし頃にはすでに計劃成功の望みがなかつた事も事實であつた。然らばノックス提議の眞相は何であつたらうか。請ふ、此の投石によつて生じたる波紋を見よ、國務卿ノックスは滿洲鐵道の中立を列國に提議する前に先づ彼れは英國に對して贊意を求めた。英國政府は之に對して、主義に於ては贊成なるも最も深き關係を有する日露兩國及び他の列國の意嚮を質すの要あることを回答したが、ノックスは之を以て該案に對する至大の援助を得たるものとして前途を樂觀し、英國政府に送致したると同一の公文を獨、佛、露及日本に發して同意を求め來つたのであつた。而てノックスは此の滿洲鐵道中立提議と共に錦愛線敷設の議を以てし、日露兩國にして若し中立の議を承諾せずんば、米國は新たに錦愛線を敷設し滿洲鐵道と競爭を開始すべき意嚮あるを示し、日露の承諾を强要するの策に出たのである。然るに此計劃は全然その性質を異にせる二種

の提案を同一の卓上に列べたる矛盾の行動なるを以て、流石に駐露米國公使ロックヒルも同時に之を提議するの不可なるを認め、本國政府の訓令を得るに先ち、自己の判斷により先づ滿洲鐵道中立の議のみを露國政府に提出した。然し日、獨、佛三國に於ては南案が同時に提出されてあつたので、露國は米國の眞意を疑ひ、米國の提議を以て結局露國に不利を與ふるものに外ならずと爲し、此の問題に就いては露國と同じく被告たる位置に在る日本も亦露國と共に反對の地位に立ち、親しく露國と協議したる上、殆んど同時に米國に向つて拒絶の回答を爲したのであつた。

日本の回答は一月下旬東京駐在米國大使オブライエンを通じて爲したもので、その要旨には「日本政府に於ては滿洲の門戸開放機會均等の主義を尊重せるのみならず、將來に於ても亦既往と同じく此主義を遂行するに努むることを約したが、而かも滿洲鐵道を擧げて列國の共同經營に委ねやうとするのは禍根を後來に貽すものであつて、却つて關係諸國に不利益を醸すの虞があると信ずるのみならず、殊に日本は既得權を奪はるゝ所以であるから遺憾ながら同意する能はず」といふてあつた。

是の如く、第三國の爲めに滿洲經營を阻害せられざる日露兩國の希望の一致と、全力を歐洲の問題に注かんとする露國の意志とは此處に融合して、年の七月遂に第二の日露協約の成立を見ることになつたのであつた。その內容は次の如くである。

一、兩締約國は滿洲に於ける各自鐵道の改善及び該鐵道の聯絡業務整備の爲めに、相互に友好的協力を與ふること、並に一切の競爭を爲さざること。

二、兩締約國は孰れも今日に至るまで、日本國と露國との間、又は兩國と清國との間に締結せられたる一切の條約又はその他の約定に基く滿洲の現狀を維持尊重すること。

三、前記現狀を侵迫する何等事件發生することあらば、兩締約國は該現狀を維持するに必要と認むる措置に付き協定せんが爲めに、相互隨時に商議を爲すこと。

然ながらこれのみを以てしては、米國の滿洲鐵道中立提議の眞相を理解するに充分でない。自分は是非とも最後に錦愛線及錦齊線問題の成り行きを、いさゝか重復の氣味はあるが、之を外交上の空氣より說述する必要を認める。それは實に日露兩國の接近を來した重大なる原因ともなるものだからである。

そも〳〵錦愛線とは、盛京省遼西なる錦州より黑龍省愛琿に達する鐵道であつて、南滿洲鐵道及び東淸鐵道に併行する一線路である。この鐵道は明治四十二年(宣統元年)十月初浣東三省總督錫良と英米シンヂケートとの間に締約せられ、翌年一月下浣淸國政府の准許を見たものであつたが、日露兩國の峻拒に會ふて、米國政府は獨力其敷設計劃に狂奔し、宣統三年(明治四十四年)四月遂に細目の取極めを完了するに至つたのであつた。露國は直ちに「該鐵道の敷設は東部西比利亞に於ける自國の領土及び滿洲蒙古に於ける同國の利權を不安ならしむる虞あり」となし、淸國政府に向つて抗議を提出し、日本は直接之に反對を唱へなかつたが、敷設の計劃には日本も亦參加すべきことを主張し、米國の獨立敷設

を牽制するの策に出でたのであつた。米國は是に於て英米シンヂケートの代表者ストレート（前奉天駐在米國領事）を露京に遣はし露國政府の同意を促したのであつたが、露國は依然として之に應せず、英國は又その成行きを傍觀して、直接米國の運動に援助を與へなかつた爲め、終に米國の計劃は立消えの已むなきに至つたのであつた。然し米國は、尙ほも錦齊鐵道の成立に奔走し、ストレートは頻りにその間に立つて運動に努めたのであつたが、日露兩國の握手成れる今日到底成功する見込みなく、反對聲裡に葬られる運命を見たのであつた。此の錦齊鐵道なるものも、要するに錦愛線と同一物にして、只齊々哈爾より愛琿までを放棄して露國の贊成を得、且つは英國の歡心を得る希望を以て計劃されたもので、他面清國が日本を牽制せん爲めの苦肉策の一現はれに過ぎなかつたのである。その英國の之に關係ありと云ふは、元來英國の工事請負會社と清國の間に契約せる新法鐵道（新民屯、法庫門間）の敷設にその端を發してゐるからである。當時新法鐵道に對しては日本の反對ありし爲め、日英同盟に反感を有せる一部人士は之に乘じて清國を慫慂し日英兩國の感情を離反せんめんと企てた形跡があり、爲めに爭議は一層の難澁を來した感があつたが、倫敦タイムス社のチロルは駐英公使加藤高明の勸誘に從ひ、東洋漫遊の途次北京通信員モリソンと共に日本に至り、滿洲の諸問題に關する日本政府の說明を聽取して滿洲の實狀を明かにし、日本が滿洲開放主義に忠實なる意嚮あるを了解し、從來の態度を改めて日本の立場を辯明し、且つ清國政府が日本との條約に背いて、英國の一工事會社に並行線敷設の請負を爲さしめたのは、之に依つて日英同盟を離間する苦肉策なることを報告したる爲め、新法鐵道は遂に沙汰止みとなり、是に於て清國は、更に英米シンヂケートに依つて錦州齊々哈爾間に三百哩に亘る並行線の敷設を計劃したものなのであつた。要するに滿洲鐵道中立の提議も錦愛線計劃も、又は錦齊線の劃策も前奉天駐在米國領事たりしストレートの方寸に出で、米國政府を動かしたるものと解するを得、而かも彼が滿洲に於ける日露の勢力を牽制せんと狂奔したる結果は、徒勞に終れるも、全世界の物議を起し、滿洲をして外交の檜舞臺に立たしむることに於て成功したりと謂ふべきである。

第二節　日本の滿蒙五鐵道敷設權獲得とその後の日滿關係

日本を中心とせる各種の條約が相繼いで締結せられ、支那領土保全の連鎖は一時なりともその鞏固なるを致し、列强の支那に對する覬覦も亦自然に牽制せられ、支那の排外熱の旺盛を加ふると正比例に列國管理の鐵道も次第に回收せられ來つた。然るに武漢の革命起り、清國の國土は將に內部より分裂を來さんとするの兆あるに及び、列國は互にその隙に乘じて所謂勢力範圍の擴張に努め中華民國の成立となるや、袁世凱の政府は、列國の承認を得んが爲めと、新たなる民國を維持せんが爲めに、債主の如何を問ふことなく、條件の如何にも關することなく借款を締結する傾向となり、五國財團も遂に經濟借款の除外を聲明してより、列强の鐵道敷設權を得るもの相繼ぎ、露佛は、白耳義シンヂケートの

名を藉りて蘭州、海門間、大同、成都間の二線を、獨逸は濟南順德間、高密韓莊間の二線を英國は廣東重慶間の一線を獲得した。五國財團の加盟者たる日本も亦、滿洲に於て四平街、洮南間（二百三十哩）長春、洮南間（百八十哩）洮南、熱河間（四百七十哩）海原、海龍間（百二十哩）海龍、吉林間（百十哩）の五線、其延長一千一百哩に亘る鐵道の敷設權を得たのであつた。

元來日本が南滿洲鐵道以外更に一線の敷設を計劃したのは、彼の錦愛鐵道問題が紛糾せる當時であつて、日本は此の鐵道の敷設を默過するの交換條件として、南滿鐵道の一驛より錦愛線と連絡すべき一線、即ち洮南線の敷設計劃を措き出したのであつた。

その後清國に革命亂起り、外には庫倫、西藏の獨立の變も之に相繼ぐや、日本も列强の利權爭奪の仲間に入り、民國元年（一九一二年）七月桂太郎の露都入りによりて、滿蒙に關する日露の密約が締結されたりと噂され、更に英國の後援による西藏獨立の機會を利用して、該密約は英國政府の承認する所となつたとさへ傳へられ、同時に日本に於ては支那の排日に憤慨する人士の支那分割論を唱ふるもの少なからずある狀態であつた。只犬養毅、山座圓治郎等の日支提携論が極力支那分割論を抑制したるあり、やがて桂太郎も死し、中華民國大總統袁世凱も亦日支親交の態度を表明するに至り、兩國の外交關係は茲に漸く圓活となつたのであつた。

民國二年の春に至り、袁世凱政府は所謂南方派を抑制する必要より頻きりに大借款の成立を渴待しつゝあつたので、日本公使伊集院彥吉は此の間に斡旋し、次いで五月、清國總稅務司との間に、滿鮮國境の關稅輕減條約を締結するに至つた。その條項は次の如くである。

一、滿洲より鐵道によつて新義州方面に輸出さるゝ貨物及び新義州方面より鐵道によつて滿洲に輸入さるゝ貨物は、民國海關稅率より三分の一を減じたる輸出入稅を課す。

二、新義州より鴨綠江の氷路によりて他處に輸送し、再び滿洲鐵道によつて輸出せんとする貨物、及び該氷路により新義州に至り、更に鐵道によつて滿洲に輸入さるゝ貨物は前項の減稅を行はず。

三、已に三分の一の減稅を行へる貨物にして滿洲に輸入さるゝ時は、海關稅率より三分の二を減じたる通過稅を課す。

四、已に三分の一の減稅を爲せる貨物にして、安東に輸入され更に安東より滿洲以外の各通商港或は支那本部の各省に輸出さるゝ者は、右既減額を納入するに非れば、普通の稅關取扱を受くることを得ず。

以上はすでに日露戰爭後の日清條約に於て「滿鮮交界の陸路通商は、最惠國の待遇を得べし」との一條を根據として、露國の東清鐵道に於けるそれと同一なる條件を要求したものに過ぎなかつたが、清國は、滿鮮の國境には鴨綠江ありて隔斷されてゐるから、陸路通商の條文は適用するを得ないと稱して、細目の協定を肯じなかつたものであつたが、宣統三年（明治四十四年）に至つて鴨綠江の鐵橋も竣工されたので、漸くにして細目協定が成立したものであつた。

然るに民國二年に至り所謂第二革命が勃發し、日本人にして南方軍に參加するものもあり、爲めに兗州、武昌等に於て日本人の拘禁せらるゝものを生じ、九月初旬には南京に於て、日本國旗を手にして領事館に排難せんとしつゝあつた日本人三名が張勳兵の爲めに殺された事件が生じた。是に於て日本政府は新任公使山座圓次郎をして民國政府に抗議を提出し、一方又居留民保護を名として南京に軍艦六艘を派遣して威を示した。依つて民國政府は直ちに日本の條件を容れたのだつたが、張勳は南京克復の功に誇つて、日本政府の再三の督促あるも肯て犯人の處罰を爲さなかつたので、日本政府は之を機會に遂に滿蒙五鐵道の敷設權を要求したのであつた。その裏面に於ては、恰も民國は正式大總統の選擧に當り、袁世凱は各國の承認を求むることに窮々としてゐた時であつたので、日本は、中華民國とその大總統袁世凱とを承認する交換條件たらしめんとしたものであつたといふ。兎も角斯の如くにして滿蒙五鐵道は、民國二年十月初浣を以て兩國の調印を見たのであつた。但し五線の中洮南熱河間は、將來支那に於て之を敷設する場合には、先づ日本資本家と協商すべしとの極めて權利の薄弱なる條件を存し、他の四線は津浦鐵道借款條件に遵ひ、日本は鐵道收入を擔保とし、日本技師を選任するの權利のみを收め、敷設資金を民國に貸付けて、民國政府は自ら之を敷設し且つ管理し得るものであつて、民國にとつては有利なる條件に相違なかつた。日本としても亦、第三國の滿洲侵入を防ぐことを以て第一義としたるべきは、日露戰後の困難を加へし國家財政に徴して明かである。

第三節　所謂日支交渉

第二革命に當り、日本人の革命軍を援助するものゝあつた事は痛く袁世凱一派の感情を害し、常に排日主義を採りて日本を敬遠して特に英、米、獨等に親しむの傾向があつた。かゝる間に歐洲の風雲は險惡となり、一九一四年(民國三年)夏に至り有史以來の大戰亂が勃發し、日本は日英同盟の締約よりして、三國協商側に加擔し、獨逸の勢力を東亞より驅逐せんとして、遂に彼れが根據地なる青島を攻擊するに至つた。此の際に當り民國政府は事毎に日本に抗議して暗々裡に獨逸の利便を計るところあり、青島陷落の後も、膠州灣押收問題、青島稅關吏任用問題、山東撤兵問題等を提出して、或は抗議し或は交渉し來ること一切にして止まらなかつた。かくて日支の國交漸く多端ならんとする際、日支兩國は日本政府の提出に係る新要求に就いて交渉を開始するに至つた。時に一九一五年即ち民國四年一月であつた。一月十八日日本公使日置益は親しく袁總統に謁し外交次長曹汝霖同席の面前にて日本政府の要求條項を列記したる文書を呈したのであつた。その文書は五項に分れ第一項は山東省に關する四箇條で、その中滿洲に直接關係ありと思はれるのは(一)山東省内若しはその沿岸島嶼を他國に讓與又は貸與せざること、(二)芝罘又は龍口と膠濟鐵道とを聯絡すべき鐵道敷設を日本に許可すること、の二つであるが、第二項は南滿洲及び東部内蒙古に關する七箇條であるから、次にその全部を掲げる。

一、旅順、大連租借期限並に南滿洲及び安奉兩鐵道に關する各期限を更に九十九個年延長すること

二、南滿洲及東部內蒙古に於て日本人に對し各種商工業上の建物の建設又は耕作の爲め必要なる土地の賃借權又は所有權を許與すること。

南滿洲及び東部內蒙古に於ては

三、日本人が居住往來並に各種商工業及其他の業務に從事すること許可すること。

四、南滿洲及び東部內蒙古に於て、日本人に對し特に指定せる鑛山採掘權を許與すること。

五、南滿洲及び東部內蒙古に於て他國人に鐵道敷設權を與へ、又は鐵道敷設の爲め他國より資本の供給を仰ぐ時、並に諸稅を擔保として借款を起す時は豫じめ日本政府の同意を經べきこと。

六、南滿洲及び東部內蒙古に於て、政治財政軍事に關する顧問教官を要する場合には、日本政府に協議すべきこと。

七、吉長鐵道の管理經營を九十九個年間日本に委任すること。

次に第三項は漢治萍公司に關する二箇條で、第四項は支那領土保全の目的に關する一箇條であつた。而て彼の第五項なるものは、所謂希望條件であつて、民國政府の日本人顧問傭聘、支那に於ける日本の土地所有權、支那警察機關の革新、日本より支那への兵器供給、南支那に於ける日本の鐵道敷設權、福建省に於ける鐵道、鑛山、港灣の設備に關して日本の資本を借ること、及び支那に於ける日本人の布教權などの七箇條を含んでゐたのであつた。而て外務大臣加藤高明の日置公使に與へたる訓令には第二項に關し次の如く云ふてあつた。

大體南滿洲及東部內蒙古地方に於ける我が地位を明確ならしむるの趣旨に有之、畢竟南滿洲及び東部內蒙古に關して、帝國の地位明確ならざる點鬱からざる爲め、從來日支兩國の間に諸種の問題を生じ、延いて帝國の國民的感情にも好ましからぬ影響を及ぼしたること一再ならざる次第なるに付き、兩國政府に於ては此際同地方に於ける帝國の當然有せざる可らざる地位を、支那政府をして確認せしめんとするものに有之候、云云

然るに民國政府に於ては、袁總統より直接日置公使に向つて後日外交部より應答するであらうとの覆答があり、且つ日置公使が、外交部に總長孫寶琦、次長曹汝霖を訪ねて覆答を促したること兩度に及びしも、民國政府は日本の要求を頗る重視して俄かに回答する樣子も見えなかつた。此の時に當り孫外交總長は病軀任に堪えざるの理由にてその職を辭し、陸徵祥がその後任として總長の倚子に着いたのであつたが、日本政府の要求に對しては旬日を經過するも何等の回答をも爲さず、二月に至り日置公使は迎賓館に陸總長、曹次長を訪ねて頗る强硬なる態度を以てその回答を督促したが、逐條討議すべきことを主張して讓らず、遂に日支の意見一致を見るに至らなかつた。

然しながら日本の此の要求は、兩國共その內容に就いて秘密を守り、發表せられてはゐなかつたの

で、支那の言論界は種々の臆說を逞ふし、或は二十一箇條なりとし或は二十四箇條なりとして何れも日本の要求の不當を叫ばざるはなかつた。民國政府も亦、日本の要求を敢然拒絕するの勇なく反對に之を內政に利用して、反對黨(主として革命黨)を根絕せんとし暗に國論を鼎沸せしめて、名を輿論の反對に籍り交涉を拒絕せんとの策略なるが如く、或は各省に通電して交涉の經過を報じ其意見を徵したりとさへ謂はれ、それかあらぬか、各省よりは之れこそ亡國滅種の大禍なりと騷ぎ出し、極力排日の氣勢を擧げ來り、馮國璋、段芝貴等の軍人連は連署國難に殉すべきことを袁總統に上書し、袁總統も之に對し協力を要求し、或は無責任にも日本の要求までも漏したと見えて、當時の新聞は日本要求の大部分を公然と之を世上に發表する如き始末であつた。

同交涉と最も密接の關係ある奉天省は中外の視聽を集中した。然し將軍張錫欒は、滿洲に於ける日本の立場及び東三省爲政者の立場を充分に諒解してゐたので敢て過激な反對論を表示することもなく反つて無謀なる排日論を制仰するの態度に出で、圓滿なる解決を希望してゐたのであつた。然るに北京政府より、同交涉に對する奉天省としての意見を徵詢して來たので、張錫欒は奉天省軍官の重要人物を省城に召集し、二月末日より約二十日間に亘り、連日軍事會議を開き政府の諮詢に就いて協議を進め、遂に日支兩國の關係及び、日支間に在りてはその第一線に立たねばならぬ自己の立場等を參酌し、圓滿解決を希望する穩健論者が多數を占め、此旨復答することを議決したのであつた。唯獨り二十七師長張作霖のみは衆論を排し、强硬なる意見を表示し、軍官會議の決議にも亦加盟することを避け、反對に排日主戰論を固執し、暗に省城官民を煽動し、頻りに反對の氣勢を擧げ、大總統袁世凱に宛て、「日支交涉は毫も讓步すべからず、交涉若し破裂せば願くば全師を率ゐて決戰し日本兵を驅逐せん、然らずんば一死以て國に殉せん」と電申した位であつた。

斯の如く、日本の要求に對する民國の輿論は大いに沸騰して日本の要求を苛酷なりとし、斯く如きは、多年日本が抱懷して居つた支那領土侵略の宿志を實現したもので、歐洲戰の未だ結了せざるを好機として、山東撤兵問題に藉口し支那領土分割の端を開かふとするのであるから、厭くまで之を拒絕せねばならぬと叫び、歐洲方面に於ても亦、日本の行動を火事盜にはあらずやと猜疑するものを生じ反感が激發される始末だつたので、民國政府も亦主權を侵害する如き要求は斷じて拒絕せねばならぬといふ方針を定めたのであつた。斯の如きが故に日支交涉は會議を重ぬること前後實に二十有五回時日を費すこと三ヶ月餘に亙るも依然として進涉せず、在支外字新聞までも排日的記事を提げ、或は日本は表面强硬を裝ふも內實は、單に要求の一半を貫徹したのみでも多大の成功であると輕蔑し、政府は又、南滿洲に關する重要問題たる居住及び土地に關する條項に付き種々なる制限を加へんとし、東部內蒙古問題に關しては斷乎として之を却くる如き始末であつたので、日本も亦靑島守備軍增加派遣の命令を發したり、日本海軍が或る特別の任務を帶びて某方面に出動したりして示威を行つたが、そ

れは一層支那の人心を刺撃して排日の傾向に油をさしたと同様の結果となり、遂に「東部内蒙古問題に就いては差しあたり絶對必要なる事項に止め」る等の修正案を提出するに至つた。然るに民國政府は日本の修正案に對し再修正案を提出し之を以て最後の決定案であると聲明した。此の民國政府の修正案中南滿洲に關するものに就いては、日本人の未開放地に於ける居住營業及び土地賃借權を認めたけれども永租權を許與することを拒み、且つ民國の警察法規に服從し、民國人と同樣に各種課稅を納め、土地に關する爭議に就いては、日支人間は勿論、日本人相互間の訴訟と雖も總べて民國官吏の審判に歸すべしとの條件を要求し、東部内蒙古に就いては同地方の範圍を限局し、日本要求の眼目たる日支合辦の農業及び附帶工業の經營を承認することを拒絶してあつた。依つて日本政府は愈々最後の手段に訴へても初志を貫徹するに決し、只第五項のみは本交渉と引き離し他日の協商に留保し、他の修正案全部に亙つて四十八時間を期限とする最後通牒を發し、同時に此の交渉の顚末を發表したのであつた。然かも尙ほ支那に於ては少莊軍人等の多數が飽くまでも日本の要求を峻拒すべしと叫んだが、日本では廣島、高田、久留米の三個師團及び岡山砲兵隊を始めとし第一、第二の兩艦隊が出動準備を開始したので、民國政府も遂に應諾の旨を回答し、五月二十五日を以て條約の調印を見るに至つたのであつた。即ち次の如くである。

南滿洲及東部内蒙古に關する條約

兩國主權者は南滿洲及東部内蒙古に於ける兩國間の經濟關係を發展せしめんことを欲し、右の目的を以て條約を締結することを決し各全權委員を任命し、全權委員は左の條項を商議決せり。

第一條　兩締約國は旅順大連の租借期限並に南滿洲鐵道及安奉鐵道に關する期限を何れも九十九箇年に延長すべきことを約す。

第二條　日本國臣民は南滿洲に於て各種商業上の建物を建設する爲め、又は農業を經營する爲め必要なる土地を商租することを得。

第三條　日本國臣民は南滿洲に於て自由に居住往來し、各種の商工業其他の業務に從事することを得。

第四條　日本國臣民が東部内蒙古に於て民國人民と合辦により農業及び附隨工業の經營を爲さんとする時は民國政府之を承認すべし。

第五條　前三條の場合に於て日本國臣民は例規により下附せられたる旅券を地方官に提出し登錄を受け又民國警察法令及課稅に服すべし。

民刑訴訟は日本國臣民被告たる場合には日本領事館に於て、又民國人民被告たる場合には民國官吏に於て之を審判し、互に員を派し臨席傍聽せしむることを得、但し土地に關する日本臣民及民國人民の民事訴訟は民國の法律及地方習慣により兩國より員を派し共同審判すべし。

將來司法制度完全に改良せらるゝ時は日本臣民に關する一切の民刑訴訟を完全に民國法律の審判に歸すべし。

第六條　民國政府は成るべく速に外國人の居住貿易の爲め、自ら選んで東部内蒙古に於ける適當なる諸都市を開放すべき事を約す。

第七條　民國政府は從來民國人民を各外國資本家との間に締結したる鐵道借款契約規定事項を標準と爲し、速に吉長鐵道に關する諸協約並に契約の根本的改訂を行ふべきことを約す。

將來民國政府に於て鐵道借款事項に關し、外國資本家に對し現在の各鐵道借款に比し有利なる條件を附與したる時は、日本の希望により更に前記吉長鐵道借款契約の改訂を行ふべし。

第八條　滿洲に關する日支現行各條約は本條約に別に規定するものを除く外一切從前通り實行すべし。

第九條　本條約は調印の日より効力を生ず。

條約締結の日を以て、民國外交總長と日本公使との間に交換したる公文書の内容は次の如くである

一、旅順、大連租借期限の件

南滿洲及東部内蒙古に關する條約第一條に規定する、旅順大連租借期限の延長は民國八十六年即ち西暦千九百九十七年に至り滿期となり、南滿洲鐵道還附は民國九十年即ち西暦二千二年に至り滿期となるべく、其原條約第十二條に記載せる運輸開始の日より三十六年の後民國政府に於て買戻し得るの一節は之を無効とすべく、又安奉線鐵道の期限は民國九十六年即ち二千七年に至り滿期となるべし。

二、東部内蒙古開市の件

南滿洲及東部内蒙古に關する條約第六條に規定せる開放すべき諸都市及商埠章程は、民國政府自ら之を選定し豫め日本國公使に協議の上決定すべし。

三、南滿洲鑛山採掘の件

日本國臣民に於て南滿洲に於ける左記各鑛山(既に試掘又は採掘せられたる鑛山を除く)を速に調査の上選定したる節は、民國政府は其試掘又は採掘を允許すべし。但し鑛業條例確定に至るまでは現行辦法に準據すべきものとす。

イ、奉天省

牛心臺(本溪縣)石炭、田什付溝(本溪縣)石炭、杉松崗(海龍縣)石炭、鐵廠(通化縣)石炭、暖池塘(錦縣)石炭、鞍山站一帶(遼陽縣より本溪湖縣に亘る)鐵

ロ、吉林省南部

杉松崗(海龍縣)石炭鐵　紅窰(吉林縣)石炭、夾皮溝(樺甸縣)金

四、南滿東蒙鐵道借款の件

民國政府は將來南滿洲及び東部内蒙古に於て鐵道を敷設する場合には自國の資金を以てすべし。若し外資を要する時は先づ日本國資本家に借款を商議すべし。又民國政府は前記地方の各種稅課(但し既に民國中央政府借款の擔保となれる鹽稅、關稅等の類を除く)を擔保として外國より借款を起さんとする時は先づ日本資本家に商議すべし。

五、南滿洲顧問教官傭聘の件

民國政府は將來南滿洲に於て政治、財政、軍事、警察等に關する外國顧問、教官を傭聘せんとする時は眞先きに日本人を傭聘すべし。

六、商租に關する件

南滿洲及東部内蒙古に關する條約第二條に記載せる商租の文字は三十個年までの長き期限附にし

て且無條件にて更新し得べき租借を含むものとす。

七、警察法令及課稅の件

南滿洲及東部內蒙古に關する條約第五條の規定により日本國臣民の服從すべき警察法令及課稅は豫め民國官憲に於て日本領事館と協議の上施行すべし。

八、南滿洲及東部內蒙古條約施行期限の件

南滿洲及東部內蒙古に關する條約第二條、第三條、第四條及第五條は民國政府に於て諸般の準備を整ふる必要上、同條約調印後三箇月間其實施を延期す。

第四節　滿洲に於ける日貨排斥

民國四年四月日支の交渉は愈々行惱みの狀態に陷り、五月上旬滿洲奥地在留日本人は引揚げの內命を受けて續々南部滿洲に引上げ、日支間の商取引は一時將に杜絕せんとする狀態となつた。幸にして五月九日民國は日本政府要求の全部を承認する旨回答したる爲め、引上げたる日本人は再び歸來したのであつたが、此の四箇月半に亘る外交的艱難に會ふて支那國民は異常の興奮狀態となり、上海に於ける國民對日同志會の成立より、留日學生の歸還となり、二月下旬には早くも上海に於て日貨排行の運動が始まり、此の運動は忽ちにして南支一帶に及び、廣東に於ては猛烈なるボイコットあり、漢口に於ては日本人商店の破壞さるゝものがあり、輿論沸騰、新條約締結前後に及んで其の極點に達したのであつた。次いで五月中旬に至ては北京に救國儲金の議起り、國產奬勵の名の下に復讐的日貨排斥は遂に北進して滿洲にまで及び、煽動者は先づ營口に來り、更に奉天に移り、進んで長春哈爾賓にまで及んで頻りに檄を飛ばして公然日貨排斥を絕叫し、日貨を使用するものは國賊なりと稱して、遂に日本製帽子を被るものを擁して之を迫害し、日本煙草を喫するものを捕へて之を威嚇する等、百方其運動に力を致したので、日本雜貨は到る處の顧客を失ふの狀態となつた。是に於て所在の日本領事は民國官憲に對して其防遏を迫り、駐支公使も亦北京政府に向つて一般的に嚴重なる交渉を試みた。よつて民國政府は地方官憲に訓電して形式的論告を發せしめ排貨の禁斷に力を致すが如く裝ふたのであつたが、由來官憲の敎唆が基因を爲せる排貨運動は、日本勢力の伸張を喜ばざる獨逸及び在支英國人等の煽動後援によりて容易に終熄すべくもなく、全支六十餘の救國儲金團と相俟つて統一的に全支那に浸潤し、滿洲に於ても亦外國商人の比較的强くして且つ政治の中心たる奉天、營口、哈賓爾等は相當に激烈さを見せ、遼陽、鐵嶺、開原、四平街等は排貨少なく長春、安東縣等がその中間に在つたものゝ如くであつた。

大連市の如きに至つては、支那人部落たる西崗子方面に於て多少排貨の形跡があつたけれども、日本の眞勢力圏內に在ることとて、潛入せる運動者も、到底奉天、營口の如き排貨事實を擧ぐことが出來

す、只山東方面に對する仲繼貿易の關係上、排貨熱の熾んなる芝罘との取引が殆んど杜絶し、綿糸布商の如き大なる打擊を蒙つた。又營口に於ける排貨の趨向は五月中旬に於て既に顯著となり、一時は官憲の注意によつて大いに緩和せられた如くであつたが、一旦沈靜せし暗流は奥地の餘波を受けて再燃し來り、六月中旬には支那商人は一般に日本品の取扱を躊躇し、日本商品の取引を爲す商店には、續々として脅迫狀が投せられ、商務總會は救國儲金演說會を開いて表面は單に國民の愛國心に訴へ儲金の必要を勸說したるに過ぎなかつたが、裏面の暗流は漸次排貨の潮勢を振盪し、滿洲奥地及び山東より來れる流言蜚語に刺激されて、商取引も需用も共に益々減退し、之が爲め四五の問屋は破產に瀕するの窮狀に陷つたものがあつた。而かも排貨の高調に達せる銀爐團の壓迫と、兇暴を極むる無賴漢の迫害を怖れて、排貨の形勢を打破せんとするものなく、牛莊道尹は七月初旬、日貨排斥禁止の告示を發して形式的に抑制を試みたが、もとより何等の反響をも見ず、前年六月に於て七千三十三梱の輸入ありし綿布の如きは此の年の六月に於て僅に百二十梱の輸入を見たのみであつた。以てその打擊の大なりしを知るに足るであらう。而て又奉天に於ては五月下旬南方より入込める煽動者によつて戶每に數枚の檄文が配布せられ、若し支那商人にして日本品の取引を爲すものあれば、忽ちにして脅迫狀が舞込み、或は電話を以て脅迫し來る等、運動方法も頗る組織的となり、日本商人は六月上旬より排貨の打擊を受くるに至つた。六月中旬の一夜、奉天法政學堂の學生三名は遂に城內なる一日本藥種店に

爆烈彈を投じて日本警察官の捕縛する所となり、排貨は遂に排日と變じて、日本人の生命財產さへも頗る危殆となつた。依つて在留日本人は直ちに居留民會を開いて(一)日貨排斥を嚴禁せしむべし、(二)民國警察制度を改善せしむべし、(三)將來治安の維持を無條件にて保證せしむべし、(四)被害者に對し損害賠償及責任者の處罰並に當局者に謝罪を行はしむ等の決議を爲し、之を日本の各要路に電請し同時に奉天駐在總領事落合謙太郎に對して嚴重なる交涉を希望し、實行委員十五名を擧げて對抗運動を開始した。是に於て民國官憲側も七月初旬日貨排斥鎭壓演說會を開き、巡按使張元奇自ら出席して熱心に訓示演說を爲し、商務總會長、敎育會長、工務、農務の兩會長等も相繼いで演壇に立つたのであつたが、もとより聽衆の心を動かすに足らず、城內在住の日本商店は休業の止むなきに至り、日本兒童の通學者を道に擁して迫害を加ふるものさへも生ずる狀態であつた。故を以て奉天在留日本人有志が主唱者となり七月下旬滿洲居留民聯合大會を奉天に開き、現在及將來の排日排貨根絶法として日本政府は他の支那各地と事情を異にせる滿洲に對し特種の政策を確立せられたきこと、排日、排貨の取締は誠意なき民國官憲に信賴せず、日本政府に於て適當たる自衞策を執り以て居留民の保護に任せられたき事、滿洲各地に續出せる日本人被害事件に對し、日本政府は速に救濟法を講ぜられたきこと、聯合會本部を奉天に設置し各地排日排貨の情況を調査すること、決議の實行を期する爲め委員を上京せしむる事等を決議し直ちに實行に着手たのであつた。

然しながら多年日本物貨を取引せる滿洲の支那商人は自營上全然日本貨物を排斥することが出來ず一方には又日貨排斥に苦痛を感せる需用者も多かつた爲め、倉庫内にて日本貨物の包裝を更へ、或は仕入徑路を變更して排貨運動者の目を避けんことを計り、奉天の商人は撫順又は新民屯に於て密かに日本貨物を仕入れ、馬車を以て搬入し來るが如き策に出で、各地も亦概ね之に等しく、綿糸綿布の如き必要品は到底長く排斥し去ることが出來ず、かくて七八月以降漸次排貨の形勢は緩和され來り、一時救國儲金、國貨奬勵に傾注せられし耳目は、更に新なる國體變更問題に向つて、その方向を轉じ去つたのであつた。

第八章　奉天第一主義の實現と日本

第一節　張作霖の擡頭

民國四年の初頭に於ける奉天官界は、老將軍張錫鑾の下に第二十七師長たる張作霖あり、この外に馮德麟、吳俊陞、馬龍潭の三中將が遼西、遼北、東邊の三方に分駐して全省の治安を分擔維持してゐた。之が即ち當時奉省の四大重鎭である。その中馮德麟は第二十八師長として張作霖と互角の勢力を擁し、北鎭縣(廣寧)に駐屯して遼西鎭撫の任に當り、吳俊陞は洮遼鎭守使として後路巡防隊統領を兼ね洮南に在つて東蒙古の探題役を司り、馬龍潭は又東邊鎭守使兼右路巡防隊統領として鳳凰城に駐防し東邊の重鎭であつた。唯獨り張作霖のみは省城に駐屯して省城治安の維持に任じてゐたのであつたが、その駐紮の場所が政治の中心地であるだけに、他の三者よりも自然その名を顯はすこと多く、殊に精鋭なる第二十七師を率ゐて、手足の如く之を使用し得る力量を有してゐることとて、彼が省城に於ける潛勢力は、實際に於て將軍たる張錫鑾さへも凌駕する勢であつたのである。張錫鑾は又奉天將軍の名義はあるも有力なる武力の後援を有せざる結果之を制馭する事も出來ず、反て張作霖の壓迫と掣肘に只その傀儡たる如き奇觀をさへ呈するに至つたのであつた。

是に於て比較的權勢に恬淡なる張錫鑾は引退の時期すでに至れるを察し、齡もすでに古稀を越ゆも

の數年なりしを以て、遂に辭職の腑を堅め「奉省の政務多事にして老病重任に勝えず」と稱し北京政府に對し一再ならず辭表を提出するに至つたのであつたが、北京政府は「東省の事唯卿に倚る」と慰諭して容易に辭職聽許の模樣もなく、これよりして將軍更迭問題は奉天官場の懸案となり、張錫鑾の職辭は單に時日の問題にして早晩實現すべき形勢となつた。この間に在つて張作霖は奉天將軍たらんとの野心を藏し、前後二回事に托して北京に赴き政府筋の有力者に向つて穩密の中に將軍繼任の運動を試みる處があつたが、然し當時は袁世凱が帝制復活を企畫し、自已の腹心なる參政院參政楊度、孫毓筠、嚴復等に命じて帝政復活の前提たる籌安會を組織せしめ、着々としてその準備を進めつゝあつた時だつたので、優厚なる兵力と、すばらしい潜勢力とを奉天政界に有する張作霖に、北京の搦手たる東三省の實權を與ふることは、之を牽制する他の有力者の存在せざるだけ、且つは又地理的に之を屈服せしむるに困難なる場所であるだけ、いささか危險視せざるを得なかつた。南面して帝王を稱せんとする袁世凱である。是非とも此處には自已の腹心を置いて字義通りの後顧の憂を斷つ必要がある。まして況んや東三省は清朝發祥の故地である關係上、宗社黨の策源地と目され宣統帝の復活ならば兎も角、清朝から見れば一の簒奪者である袁世凱自らが帝位を踐むことに對しては、贊成するか否かさへも大なる疑問である上に、如何に機會主義者であるとは謂へ、張作霖は由來宗社黨的色彩の濃厚なる人物と見られてゐたに於ておやだ。だから張作霖を此際奉天將軍の重職に据ゆる事はやがて自已政策の破綻となる憂がないでもない。若し宗社黨熱にして勃發せんか、彼は革命黨と宗社黨の挾擊を受くる事となり、簒奪者の汚名は何等の辨解をも許さない。故を以て袁世凱は東三省に於ける反對派の鎭壓と帝制贊成を促進せしめんが爲め、此の張錫鑾の辭職を機會に無二の腹心たる段芝貴を任命し、一方又勢威隆々たる張作霖の勢力を牽制せしめんとしたのであつた。而て張作霖に對しては、他日機會ある秋に拔擢するの意なることを仄かし、極力その不平を慰諭し、かくて民國四年八月下旬、久しい間懸案として未解決のまゝであつた奉天將軍の更迭は愈々大總統袁世凱の豫定通り次の如く發表された。

任鎭安上將軍　督理奉天軍務兼吉林黑龍江軍務　彰武上將軍　督理湖北軍務　段芝貴

任彰武上將軍　督理湖北軍務　鎭安上將軍　督理奉天軍務　張錫鑾

右の如く張錫鑾と段芝貴とが奉天、湖北と相互に更任したのであつたが、然し新將軍段芝貴の實權は張錫鑾のそれに越え、往年の東三省總督と同樣のものであつた。云ふまでもなく段芝貴は趙秉鈞、段祺瑞、王士珍と共に袁門四天王の一人であつて段祺瑞とは同鄕の安徽合肥の產、往年袁世凱が外部尙書時代、袁の命によりて天津の妓女楊翠喜を、前淸宗室の筆頭として袁世凱の相棒であつた權勢家慶親王の長子載振貝子に獻じ、黑龍江巡撫の榮職を贈ち得たが、事新聞紙上に暴露され、御史の彈劾

に會ひ官紀肅振に問はれて赴任することなく免職された事があり、袁世凱とは密接なる關係を有つてゐた。兎も角重大の新使命を帶びたる新將軍段芝貴は手兵六百の衛隊を率ゐて意氣揚々と奉天省城に入り、張錫鑾と會見して奉天將軍の印綬を授受し、次いで奉天巡按使となした約一年間在任した張元奇も亦內務總長朱啓鈞の下に次長として北京に去り、段芝貴は巡按使をも兼攝して東三省の實權を握ることゝなつたのであつた。かくて、袁世凱の密旨を銜み東三省探題として來任したる段芝貴は背後に勢威嚇々たる袁世凱の威光を負ひつゝ、直ちに帝制復活の運動に着手し、一方に於ては盛んに國體變更問題を論議せしむると共に、他方張作霖、馮德麟、吳俊陞、馬龍潭等の奉省武將連を籠絡懷柔して以て帝制復活の具に利用せんと努力した。その結果は遂に東三省に於ける重なる文武官をして連署せしめ、參政院に對して長文の國體變更請願書を提出するに至り、次いで奉省軍界は第二十八師長馮德麟を代表に選任して上京せしめ、袁世凱に對して皇帝即位の勸進書を捧呈した。是れ實に帝制復活の第一聲であつたのである。此の際にも張作霖の態度は最も注目されたのだが、彼は世人の豫想を裏切つて、奉天武官の帝制勸進運動には率先して加盟すると共に、一方電報を袁世凱に送り其意に迎合する事をさへ努めたのである。その電文に曰く、

立國の途は長治久安に在り、此の際國體決定の必要を認む。然も宣統帝の復辟說を唱ふるが如きは人心を弱くする所以にして予は之に與せず。我が大總統は人望に從ひ、一身天を負ふに非らずんば危亡を救ふこと能はず。若し東三省內に異議を唱ふるものある時は、死を以て之に當たらん、云云。

斯の如く彼は袁世凱に向つて皇帝たらんことを要請するを其に一方將軍段芝貴を輔佐して民論を壓迫し、實に段芝貴に優るとも劣らぬ忠義振りを發揮したのである。殊に「萬一奉天省より反對者を出すことあれば恐懼に堪えず」と謂ふて部下の探偵を八方に密派し、嚴重に反對派の行動を檢査せしめ「帝制成らずんば死すとも再生を欲せず」などゝ極言し一死以て袁世凱に殉ずるを否まざるの態度を示したりした。

然しながら北京政府に於て、すでに革命派と宗社黨との奮起を恐れたといふことが、帝制問題に付いて確たる自信を有するものに非ることを示す如く、帝制運動の進行とは反比例して袁世凱の勢力は次第に下落し來つた。換言すれば、第二革命に於て革命派を一掃し得たことは、その大なる理由は、袁世凱勢力の强大よりも、むしろ革命派の孤立がその大なるものであつたが故に、革命派の閉息は必ずしも袁世凱をして天を背ふて立たしむる可能性を示したことゝはならない。その革命派なるものは、實に從來の反袁派一部極左黨に過ぎなかつたからである。かの帝制運動が形勢の惡化に從つて益々盲進突進を始めたことは、最早や帝制運動者に、少しの餘猶もなかつたことを示すものに外ならない。見よ帝制運動者は次第に無理に無理を重ね來つた。國體變更と皇帝產出を爲す爲めに、國民代表大會の組織を公布し、全く自家の製造を以て、破擔の時期の速からん事を恐るゝものゝ如く急速に國民代

表を選擧し、十二月十一日該代表大會に於て、滿場一致、君主立憲と袁世凱の皇帝推戴とを決議せしめた。而て翌十二日早くも帝制の復活を中外に聲明し、袁世凱の洪憲皇帝は直ちに出現したのであつた。正しく之れ憤火口上の舞躍である。次いで帝制成就の論功行賞が同じく二十三日に發表されたに至つては沙汰の限りである。奉天省の大官連も、もとより選に漏れやう筈がない。即ち

一等公爵　奉天將軍　段芝貴
一等子爵　第二十七師長　張作霖
二等男爵　第二十八師長　馮德麟
二等男爵　洮遼鎭守使　吳俊陞
三等男爵　東邊鎭守使　馬龍潭

然しながら大河の決する勢は止むべくもない。東三省に於てこそ中央の形勢に從つて動くのだから、此處から大勢が發動するといふ事はないが、支那本部に於ける反袁の氣勢は劃一劃濃厚の度を加へ來つた。それに加へて支那の大勢に大なる力を持つ列國、就中日本及び英國が、愈々帝制反對の氣色を鮮明にし、袁世凱に勸告書を發するに至つたので、鬱積したる勢は遂に遠く雲南の一角より崩れ始め、唐繼堯、蔡鍔、李烈鈞等は堂々袁世凱の退位、帝制取消及び元兇段芝貴以外十二名の處罰を要求するに至つた。此に至つて西南諸省は續々として之に應じ、帝制取消の飛電は日夜北京に來つて、形勢は劃々に推移し、洪憲皇帝は在位僅かに三ヶ月にして帝制取消を宣布するの止むなきに至つたのであつた。

支那本部の形勢に遂隨する奉天官場にも此の形勢は波及せずには居らない。その最も窮境に陷つたのは云ふまでもなく一等公爵段芝貴である。張作霖の帝制勸告の如きもとより御都合主義より結果したるもので、而かも彼に據つて立つ勢力の根據は奉天省内に限られたもので、而かも袁世凱によつて與へられたものではなく實力によつて獲たものであるから、洪憲皇帝の退位とは殆んど關係を有しない。然るに段芝貴は全然袁皇帝の背景によつてのみ奉天將軍たり得たものである。その奉天に蒞位するや、もとより奉天の地方的勢力を壓伏するに在つただけ、それだけ此の際に在つては段芝貴に對する張作霖の態度こそ最も注目さるべきであり、又事實そうであつた。俄然として背景を失ふた段芝貴が頗る苦境に立つに至つたことは云ふまでもないのである。

然しながら奉天派武人の帝制勸告と雖も、それは段芝貴に壓伏されたる結果では勿論ない。只袁世凱の威勢に對して敬意を表したものと見られる。故を以て段芝貴は奉天派の代表的勢力たる張作霖をばその到底駕御し難きを感じ、從來幾度か北京政府に向つて張作霖の轉任を要請した。果ては張作霖の晉京と同時に熱河都統、或は綏道都統に榮轉すべしとの說を專ら省城内に流布せしめ、その地盤に動搖を與へんと試みたりしたが、多年奉天省城に扶植したる勢力は一朝一夕にして覆滅する樣なもの

ではなく、段芝貴の劃策は單に徒勞に終つたのみならず、反對に、自己の勢力失墜と同時に或は張作霖が南方革命黨と相呼應し奉天省獨立の行動に出でではしないかとの疑惧さへも生ずるに至つた。而かも張作霖は、過ぐる日、鎭安上將軍代理として、奉天交涉員馬廷亮、農商部次長金邦平、吉林鎭安左將軍參謀長張恕等と共に、朝鮮總督寺內正毅の招待に應じ京城に至り（朝鮮併合五週年紀念物產共進會參觀）寺內總督と肝膽相照して、大なる滿足を以て歸奉した事などは此際段芝貴の猜疑を深からしむるものであつた。何とならば、袁世凱は常に排日を以て、英、米の信賴と國內の同情をかち得て來たものであつたのだが、洪憲皇帝たると共に、袁世凱自らが全國に彌蔓せしめた排日の空氣は日支交涉の結末頃に至つては却つて外交失敗を自證する結果に終り、第二革命以來隱忍時を待つてゐた一部反袁派をして峨起の機會を捉ふるを得せしめたからである。而て第三革命の勃發に對しては、日本代理公使小幡酉吉が、日、英、佛、露の共同警告の形式に於て發したる質問が、その唯一の端緒を與へたとは云ひ能はざるにせよ、少くとも之によつて著しく氣勢を揚げ得たものであるからである。見よ、帝制復活の空氣が濃厚となると共に引退した陸軍總長段祺瑞は、これよりして親日の巨頭と目さるゝに至つたではないか。

兎も角も排張運動によりて、到底張作霖を度外視しては、奉天省に於て何事をも出來ないことを覺つた段芝貴は、帝制取消後、張作霖に對する態度を變し、奉省の事は大小となく張作霖に謀つて決する等、極力彼の歡心を買ふに努め、主客全く顚倒するの奇觀を示すに至つた。茲に於て張作霖の勢力は段芝貴の失政に反比例して益々擴大し、段芝貴は賴み難き張作霖を賴んで僅かにその地位を擁するの外なき窮境に陷つたので、斯くて張作霖は段芝貴放逐の策を定め、馮德麟、吳俊陞、馬龍潭の三中將を說破し加盟せしめて壓迫を加へ始め、段芝貴も亦之を察して警戒を嚴にし、陰に密偵を派して張作霖一味の擧動を監視せしむるに至り、省城の空氣は何となく、不穩の情を呈したのであつた。而かも北京政府は今や無力にして袖手傍觀するの外なく、六百の手兵を以てしては段芝貴も到底奉天省四武將の連衡に敵すべくなく、民國五年四月下旬遂に逃ぐるが如く離奉上京するに至つた。その後任は次の如く發表されたのは蓋し必然であらねばならぬ。

任奉天盛武將軍督理奉天軍務兼奉天巡按使　陸軍第二十七師長　張　作　霖

任帮辦奉天軍務　陸軍第二十八師長　馮　德　麟

越えて七月初浣袁の死と共に段祺瑞國務總理となり、地方官制の改正ありて張作霖は奉天督軍兼省長に改任された。斯くの如くにして奉天省は純然たる奉天省の利害の上に立つ人々によつて代表さるゝに至り、從つて北京政府との關係は、從來の如く殖民地として、全然北京政府に隸屬する關係より脫し、民國の一重要なる組成分子として獨自の人格を有することになつたのである。

第二節　宗社黨の活躍と鄭家屯事件

第一革命の後、肅親王及恭親王は密かに大連に勤王の士を糾合し、再擧を企てつゝあつたが、次いで第二革命起り民黨の失敗して又多く大連に逃匿するあり、その何れも失意の人々たるより宗社黨と民黨とは次第に混合せられ共に破壞黨を以て政府の監視する所となりつゝあつた。然るに袁世凱の勢力が次第に沒落し、反袁の氣勢が隨所に起るに至るや、遺臣鐵良及升允等は南北を往來して殘黨を糾集し、その勢力を扶植せんことを企圖したのであつた。殊に升允は屢々上海に宗社黨を會合し、莊丁を募りて之を滿洲に派遣し、或は張勳と密會せりとも傳へられた。而て張勳は徐州會議に前清皇室を優待するの一條を提出して世人の嫌疑を蒙り、之に對し張勳は一個の辯明書を發表したものだが、彼の宗社黨との關係は免も角、升允等は早くより東三省の馬賊及蒙匪を煽動し、清朝の遺德を稱へ、その復興に盡力すべきを說き來つたのであつた。

時は來つた。それは反袁の氣勢の隨所に盛なる民國五年五月であつた。彼等は先づ討袁興清の旗を翻す以前に、奉天の中心勢力にして、御都合主義なる張作霖を暗殺し、その騷亂に乘じて吉林將軍孟恩遠を獨立せしめ、一擧にして奉天の牙城を屠り、滿洲を宗社黨の天下とするの計畫であつた。宗社黨と孟恩遠との聯絡も當時は完全に成立してゐたといふことである。

五月下旬、張作霖は旅順より來奉したる關東都督中村雄次郎を奉天驛に迎ひ、會談の後、警備も嚴かに歸城の途、宗社黨の一味は之を小西門に邀して爆彈を投じたのである。幸にしてそれは第二十七師第五十三旅長湯玉麟の馬車にして、湯玉麟も微傷を負ふたのみであつた。張作霖は直ちに馬を駈つて大西門より將軍行署に向ふたのであつたが、又奉天交涉署横の圖書館三階より、更に第二の爆彈が飛び來つた。然し此處でも張作霖は身に微傷だも負はずして無事に歸還し、而て犯人は二人共爆彈を踏んで倒れたので極力嚴探したが、遂に事件の正態は判明せずにしまつた。

張作霖の暗殺は失敗に終つたが、海拉爾の山中に兵を練り來つた蒙匪巴布扎布は、升允等の請により、三千の部下に更に二千を招募し、七月始め海拉爾附近より漸次南下し、洮南府を以てその策源地と爲さんとし、その先鋒は光づ突泉縣を襲ふた。洮遼鎭守使吳俊陞は之を追擊し、七月下旬突泉に大激戰を演じ、負傷して洮南に退却した。茲に於て奉天軍は耿玉田を總司令とし、洮南の兵を突泉に、鄭家屯の軍隊を洮南に、第二十八師第五十五旅の兵を鄭家屯に各移駐せしめ、以て蒙匪の南下を防ぐことゝなつた。然し宗社黨は、この巴布扎布軍のみならず、到る處胡匪馬賊を使嗾し、就中兎子閻王、黃四懶王、燕子包老等は遼陽附近に出沒し、鷄子廳、天下好、飛天夜叉、無翅虎等は法庫門附近を往來し、吉林匪首王林刀等も亦綏芬一帶に集散し出した。然し此等は互に統一せる行動を執るものではなく、徒に地方を掠奪騷擾するに過ぎず、その海城、大石橋、八面城等に於ける擧兵の計畫は、日本官憲の

警戒の爲めに悉く失敗に歸し、長春に於ても同樣の理由にて實行を果たすには至らなかつた。殊に八月上旬夜、長春發南行滿鐵客車内に於て、宗社黨の一領袖劭榮勳は張作霖の密偵の爲めに暗殺せられて大なる打擊を蒙つたのであつた。

然るに一方突泉に勝つたる巴布扎布軍は、一擧して鄭家屯に殺到する形勢を示しながら、途を東南に轉じ、突如として長春南方の南滿鐵道沿線なる郭家店に出で來り、長駈して奉天城を衝かんとするの勢を示した。洮南の守備をそのまゝ吳俊陞に一杯喰はせて南滿線を目指して進出したのであつた。

張作霖は此の急報に接し驚駭措かず、所部軍隊を急派し、吉林軍と聯絡して蒙古軍の南下抑制と、その擊滅とを嚴命した。蒙古軍と奉天軍とは鐵道線路を挾んで郭家店郊外に對陣し、雙方睨合ひの委となつた。鐵道地帶に侵入し、又は線路を越えて接戰することは日本側の同意を經ざれば不可能で、此の際日本の氣嫌を損ずることは、どちらにとつても不利益極まるものであつた。勝負は要するに日本の後援を有すると有せざるとによつて決せられるとも謂はれる。而も日本は内政干渉の批難を避くる爲めに鐵道地帶の中立を嚴守し、兩軍交戰の結果、日本附屬地に流彈の落下し危險の虞ある爲めに、日本は兩軍に抗議して停戰を要求したのであつた。これ一氣に奉天城を擊たんとする蒙古軍にとつては不利益だつた事は云ふまでもない。此の休戰期間中張作霖は、充分日本側と諒解を得たらしく、奉天省軍事顧問步兵中佐菊地武夫を郭家店に出張せしめ、鐵道警備の爲め出動監視してゐる日本軍と打ち合はせの上、蒙古軍に對し極力蒙古に引揚げんことを懇諭させた。時に蒙古軍は懸軍方里、彈藥糧食は缺乏し、兵疾れ、馬斃れ、暑氣の爲めに傷病者も亦多く、加ふるに後續部隊もなくして孤主無援の狀態に在り、日本の好意も亦期待し難きを知り、首將巴布扎布も遂に大勢の不可なるを觀じ、再擧を圖る爲めに歸蒙の事と決し、菊地中佐の調停に對しては、蒙古軍退却の際奉天軍の追擊せざる事を條件に遂に蒙古引揚げを諾したのであつた。

斯くて巴布扎布は八月下旬、軍を率ゐて郭家店を撤退し、蒙古に向つて去り、越えて數月、林西に於て官兵の爲めに狙擊されて死し、部下は悉く離散してしまつた。

然るに巴布扎布軍の退却と殆んど時を同じうして、八月中旬、東蒙古の咽喉にあたる鄭家屯に於て突如日本兵と奉天軍との衝突事件が勃發した。事の起りは在留一日本商人が、蒙匪討伐のために駐防してゐた第二十八師騎兵第二十八團長楊德生部下の兵と衝突し、口論の結果多數の爲めに毆打せられ日本領事館分館に告訴したるによる。據つて同館詰日本巡査が交渉の爲め第二十八師第五十五旅（張海鵬）の兵營に赴いたが、營兵は銃を擬して威嚇し交渉に應じなかつたので、已むを得ず應援を日本守備隊に請ふた。中隊長井上大尉は松尾中尉に命じ兵士二十名を率ゐて同巡査を護送した。然るに兵營に至つて毆打せる支那兵に會せんことを要求せしに、營兵は之を納れず急に同巡査を射擊したのである。茲に於て日本兵も亦之に應戰したが、衆寡敵せず日本兵は下士卒十名の戰死者を出し松尾中尉

以下五名の負傷を見て退却したるに、支那兵は更に大擧して鄭家屯日本守備隊を包圍し激戰四時間に亘つたのであつた。急を聞いて知縣、商務會長等は、自ら守備隊に至り戰鬪の中止を請願したが、支那兵は依然射擊を止めざるを以て之に應戰し、翌朝に至つて愈〻退散した。

守備隊包圍の報至るや、日本軍は、八面城より一個大隊を鄭家屯に、四平街より一個中隊を八面城に各急派せる外獨立守備隊司令官藤井少將は、公主嶺駐屯の騎兵第三十一聯隊二個中隊（松村中佐引率）及び鐵嶺駐屯の獨立守備歩兵一個大隊（第四十一聯隊第三大隊內藤少佐引率）機關銃一個小隊の鄭家屯出動を命じた。然し當時は四鄭鐵道未開通以前の事として行軍頗る困難を極め、一時は鄭家屯の守備隊は僅かに一個中隊なりしに奉天軍は一個旅團の兵數を有するので、居留民全部鏖殺さるべしと憂慮されたが、日本軍の進出によつて、支那軍は全部鄭家屯以外に退去して事なきを得たのであつた。

一方又張作霖は此の事件を聞いて大いに驚愕した。彼が奉天督軍としての地位か未だ強固でないのに、宗社黨の活動や蒙匪の襲來があり內外多事の時、日本の好意的援護の下に地位を保持してゐた際とて日本を對手とする事件の勃發を聞いては驚かざるを得ぬ。その對手が彼の競爭者なる馮德麟麾下の第二十八師であつたことは、幸であつたが、日本が若し之を機會に宗社黨に好意を寄せる樣なことにつたなら彼の地位は怪しくなる。何とならば宗社黨にも蒙匪の中にも日本人の參加者が少なくなかつたからである。而かも彼れは、此の事件によつて益々馮德麟の日本よりの信用を失はしめ、反對に彼の信用を增加するのを得る機會を作り得る。故を以て彼は直ちに交涉使馬廷亮を奉天總領事館に派して善後策を講ぜしめ、一方鄭家屯に在る第五十五旅長張海鵬に對し日本軍と衝突せる官長及兵卒の人員調査を電命すると共に、軍事顧問中佐菊地武夫を公主嶺の獨立守備司令部に派遣し藤井少將の了解を得るを努めた。尙ほ二十八師に對しては鄭家屯の西三十里なる庫平地方に退去せしめ、第二十七師の兵をば二十里外の地に各移駐せしめたのであつた。

抑々此事件たる支那側は、該日本商人を以て蒙匪に對する軍需品密賣者となし、日本兵の來營を以て蒙匪の襲來と誤解せる結果であると稱するも、その守備隊を包圍せるは故意に出ずること明かなるを以て、支那側は之を奉天に於て處理せんことを欲したるも、日本は之を北京に移さんとし北京駐在公使林權助に交涉開始を命じたのであつた。尙ほ實地調査は、日本外務省より酒匂鐵嶺領事出張し、北京外交部より派遣されたる王鴻年に、奉天側なる交涉署の丁鑑修及び奉天顧問少佐町野武馬を加へて行はれた。

然るに同問題が北京に於て日支交涉事件となるや、彼我の交涉約半歲に亘り、會見十數次に及ぶも猶解決を見るに至らず、遂に民國六年一月に至り、林公使は北京政府に對し、速に責任者を懲罰し、被害日本人に對し賠償すべきことを要求し、且つ民國士官學校の教習及び滿洲蒙古駐紮の各部隊の顧問として日本將校の聘用、南滿洲東部內蒙に對し日本警察官派駐の三希望條件を提出したのであつた。

是に於て北京政府は三度國務會議を開きて答覆方針を決定し、一月中旬外交總長伍廷芳は林公使と會見して、第一の希望に對しては軍官學校は本國人より教授し、外國人を教習とするの意なく、第二に對しては既に奉天督軍公署に軍事顧問を聘用して居り、第三に對しては、民國領土内に外國警察官を駐在せしむるは、民國主權の精神及形式上に障害ありとて否認し、只將來奉天省長衙門に日本人の警察顧問を增聘するの意あることを聲明した。日本政府は該件の久懸決せざるは善隣に利ならざるを察し、遂に希望條件を放棄し、滿蒙の秩序維持に關しては兩國政府に於て互に適宜の處置を執り、民國政府は南滿の官民に對し、事件の發生なきを訓諭し將來を戒飭するの命を出すに止め一月下旬次の如く商定したのであつた。

一、第二十八師長を申飭す。

二、責任ある民國軍官は法律を按照し酌量處罰す、嚴重にすべきものは當然嚴重に處罰すること。

三、日本人雜居區域内に於ける日本軍民は相當禮遇すべき旨一般軍民に出示告諭すること。

四、奉天督軍は相當の方法を以て陳謝の意を表示すること、但し關東都督及奉天領事の同じく旅順に在るの時之を行ひ、其方法は該督軍より任意辦理すべし。

五、日本商人吉本に慰藉金五百元を給與すること。

以上全部實行後四平街より鄭家屯に至る駐屯の日本軍隊は全部撤退すべし。

之に關し北京政府に特に宣言書を以て該商定の經過を說明し、國會に對しては參事伍朝樞をして其の顚末を報告せしめた。

第三節　奉天派の內訌

奉天省城に於ける張作霖の地位は次第に鞏固の度を加へ來つた。督軍、省長、師長の三大權を獨占して奉天に於ける軍務、政務、その他萬般のことは悉く張作霖の方寸に出ずるに至つた。民國五年十月一日より、奉天省議會も三年振りに復活したが、張作霖は巧に之を操縱して反對派議員の擡頭を許さなかつた。奉天軍務帮辦馮德麟の如きは全く虛位を擁するに過ぎなくなつたのである。斯くては平素張作霖を若輩扱ひをしてゐた馮德麟だけに、內心大いに憤滿に堪えない。將來の大飛躍を顧念する張作霖にとつても馮の存在はいさかゝ邪魔物である。兩者の排濟が次第に猛烈を極め來つたことは怪しむに足らぬ。

只此處に注意を要することは、張作霖の地盤は、東方奉天であるだけ、日本をその大なる背景とするに對し、馮德麟は遼西（廣寧駐在）にその根據を置く爲めに、少くも張作霖に對する時には支那本部のみがその背景たり得るものである。若し從來の如く奉天省の周圍に何等勢力の盤據するものがなかつたならば、そして東三省が依然として單なる支那本部の殖民地的價値以外に何物でもなかつたな

らば、遼西に盤據することは、正してその咽喉を扼することになるから最も有利なる立場に在り得る。然し今は最早や奉天第一主義の實現が急速度を以て進行し來つた。たとひ支那本部との聯絡を絶たるゝも、少くも支那本部に對してだけは獨立を決行し得る地位が出來てゐる。奉天と廣專の地理的關係がそも〳〵張、馮兩者の勢力の程度を從來物語り來り、又將來をも語るものでなければならぬ。然しながら、勢は今や進行中でもある。それに勢の渦中に在つてはそれを意識しないのが普通だ。馮德麟なりすとも張作霖に對する反感から種々苦肉の計を爲すことは蓋し止むを得ぬ所であらう。しかも馮は、彼にとつては不利である所の鄭家屯事件に際して、張作霖排斥運動を爲したのである。

即ち馮德麟は、鄭家屯事件の責任者として（第二十八師長として）その善後處分に藉口し北京に赴き、張作霖の政敵である衆議院議長吳景濂（奉天興城縣出身）と結び、張作霖が省城に於て、公金消費者の私刑、公民大會壓迫等その他種々の違法事件を剔抉し、共に政府に向つて彈劾したのであつたが、當時の北京政府は親日に近い段祺瑞の國務總理時代であつたので、結局徒勞に終つてしまつた。然し兩者の暗鬪は、これを以て止むものではない。何等かの導火線が出來れば何時決裂するかも知れぬ狀態で相對してゐた。ところが端なくも省城に於ける文治派對武斷派の爭權が之に導火線を與ふることゝなつたのである。それは第二十七師第五十三旅長兼省城密偵隊司令湯玉麟と、全省警務處長兼省會警察廳長王永江との軍警爭權問題に對し、馮德麟は湯玉麟に加擔し張作霖は王永江を庇護し遂に奉省官界未曾有の政變を惹起することになつたことは是れである。

抑々本事件の張本人たる湯玉麟は元と綠林の一頭目で、張作霖とは二十年來の友好關係があり、張作霖の麾下に奉天前路巡防隊管帶（騎隊長）となつたのを官界に入る始めとして、民國元年には騎兵上校として第二十七師騎兵第二十七團長となり、次いで第五十三旅長依榮廷の死亡によりその後任となつた者である。彼は蠻將軍の異名ある程短氣一徹の蠻勇漢で、密偵隊司令として傍若無人の振舞多く軍權を以て警察權を壓迫し第五十四旅長孫烈臣さへも度外視する如き態度であつた。

然るに張作霖は省城に於ける警察行政の改革を意圖する所あり、自己と姻戚關係ある全省警務所長宋文郡が無能凡庸の質にして、且つ官金濫用の嫌疑ありしを以て、斷然として之を安東稅捐局長に左遷し、遼陽警察署長王永江を任用して省城警察の任を托したのであつた。これ民國五年十一月の末である。而て王永江は、省城警察界に於ける湯玉麟一派の威力を見、その就任條件として（一）警察行政は一切自由手腕に任すこと、（二）軍界の警察行政に干涉することを嚴禁することの二個條を提出し、張作霖の承諾を得て、新たに警務處長になつたのであるから、就任と同時に先づ軍權と警察權の權限を明確にする必要を認め、敢然として所信を斷行するの決心を示し、早々改革の手は湯玉麟の部下宋某の頭上に下つたのであつた。此の宋某なるものは多年城内に賭博局を開設して不正の利を貪つてゐたが、王永江は疾風迅雷的に宋某を逮捕投獄して賭傳局に閉鎖を嚴命した。これ湯玉麟を恐れて歷代

警務處長の爲し得なかつたものである。是に於て湯玉麟は大いに憤怒し、直ちに張作霖に抗議して宋某の釋放を迫つた。然かも反對に張作霖の拒絶に遭つて湯玉麟の憤怒は極度に達した。彼は部下の軍隊を使嗾して盛んに警察官を壓迫せしむると共に、他方張作霖に對して再三要求を爲したが、明答なき爲めに、屈强の部下十餘名を從へ、張作霖を襲ひ、之を射殺せんとまで威迫した。而かも之を以て軍權の侵害であると稱し王永江排斥の示威運動を開始し、第二十七、八兩師の各旅長及び高級軍官を說き廻つて之に加勝せしめた。然るに張作霖が、その萬一を慮つて調停した條件が王永江に有利であつた爲め、湯玉麟の反感は更に高まり、王永江對湯玉麟の爭執は一變して張作霖對湯玉麟のそれとなつた。湯玉麟に絶大の聲援を與へたものは、もとより馮德麟である。斯くて彼等は、遂には張作霖に對し、宋某の釋放と王永江の免職を强要し、聽かれずんば自由行動を採るべしとの威嚇的氣勢を示し、爲めに張作霖も一時頻る苦境に陷り、軍人連の强要に屈從するより外はあるまいと信ぜられ、問題の中心人物たる王永江も、湯玉麟一派の危害の身に及ばんことを恐れ、老母病氣の看護を名として鄉里金州に難を避けた。

是に於てか馮德麟は公然と張作霖に反抗の態度を採つて曰く「余自身を奉天省長に、湯玉麟を第二十七師長に任命せよ、然らずんば吾等は自由行動を採り賊の本性に復歸すべし」と。同時に彼は北京方面にも運動して吳景濂一派の國民黨系を後援に北京政府に對しても張作霖排斥運動を試みた。吳俊陞、馬龍潭等が兩者の間に調停に努めたけれども、放たれた刀はそのまゝで引く譯にはゆかず、形勢は次第に惡化して人心の動搖をはげしくした。然し張作霖は國務總理段祺瑞とは意志の相通ずるものがあり、段祺瑞も亦親日派なりしが故に馮德麟とは利害を同じふしてゐない。從つて政府は張作霖を擁護する方針を採り、馮德麟に對しては之を慰諭する爲に再三その上京を電命した。而て馮の上京を回避するや、大總統黎元洪と段祺瑞とは特使を馮德麟の許に派し「張作霖は日本との關係融洽し、又馮國璋副總統、張勳巡閱使等の同情あり、此際張作霖を動かすことは大局に不利である」とて更迭不可能の理由を說き又「政府は深く馮將軍の大材に倚重し居るも今その要求には應じ難し、適當の時期に拔擢すべき」ことを懇諭せしめ、前東三省總督趙爾巽も亦政府の旨を含み來つて兩者の融和を謀るところがあつた。形勢が斯の如きものなるに加へて、先きに湯玉麟一派に加入した第二十七師の軍官等は文治派對武人派の爭權と信じてゐたので、眞に張作霖に反抗する爲ではなかつたのに、今にして馮德麟一派の眞意を知つて、その利用せられつゝあるを知るや、遂に加盟を脫して張作霖の下に復歸してしまつた。流石に馮德麟も周圍の形勢が自己に不利なるを察せざるを得ない。幸ひ政府の調停があつたので、此れを好機として一と先づ廣軍に退去し、上京を誓つて恭順の意を表したのである。

湯玉麟は唯一の後搖とした馮德麟が最初の意氣は何處へやら悄然廣軍に歸任したので、全然孤立の狀態に陷つたが、さればと云ふに今更屈服も出來ない。此の形勢を見て張作霖は直ちに湯玉麟に第五

十三旅司令部を新民屯に移す樣に命令を下した。立場に窮した際とて湯玉麟も之を好機として倉皇部下を率ゐて新民屯に移り、奉天を距る此處に於て、廣事なる馮德麟と聯絡し最後の反抗を續けんとしたのである。斯くて湯玉麟は五十三旅の一部を中心に遼西の馬賊を糾合し、總計一千餘人を以て盛んに反抗の氣勢を張り、遙かに奉天を威嚇するの態度を取つた。新民屯よりの警報の頻々として湯玉麟不穩の情況を傳ふるを聞き、張作霖は遂に民國六年三月十九日湯玉麟の第五十三旅長を免じ第百六團長鄒芬を旅長代理に任命すると一方、第五十四旅長孫烈臣を湯玉麟討伐軍の總司令に任じ、張作相の騎兵第二十七團を中堅にして湯玉麟及び馮德麟に對せしめた。然るに第五十三旅の一團は未だ職はざるに湯玉麟に叛旗を翻し、孫烈臣が愈々討伐軍を引率して新民屯に向け進擊を開始すると共に第二十八師も亦湯玉麟を應援することを中止し形勢觀望の態度を採るに至つた。依つて湯玉麟も、馮德麟の命を含みて情況偵察の爲めに新民屯に來れる第二十八師第五十五旅長張海鵬と共に、手兵を纒めて新立屯に赴き、武器を返還してしまつた。何れにも撤底しなかつた馮德麟も、是に於て奉天軍務帮辦の職は取り上げられ、省城に在りし二十八師辦公處も撤廢して、省城に於ける勢力は全く根絶されてしまつたのである。

かくて張作霖の地位は愈々强固を加へ、王永江は警務處長に就任し、同年九月には王樹翰の辭職により奉天財政廳長に榮轉し、警務處長としては營口警察廳長王家勳が任せられた。

而て吳俊陞は東蒙古に於て達爾罕親王と姻戚關係でもありて大なる勢力あるに、奉天省今次の政變に際しては表面中立を標榜しながらも張作霖の後援となつて種々斡旋奔走したる爲め、張作霖は大いに之を德とし、之に酬ゆると共に自已の勢力を擴大する目的の下に二十九師改編問題を計畫し、民國六年五月遂に北京政府の許可を得て吳俊陞を師長とする陸軍第二十九師は編成され、吳の部下なる騎兵第二旅第四團長石得山を第五十八旅長に、後路巡防隊帮統耿玉田を第五十七旅長に各々任命した。

第九章　東三省統一の前提

第一節　參戰問題と奉天省

奉天省に於ける張作霖の地位は、馮德麟の廣寧退去によつて確認された。謂はゞ此際滿洲に於て日本勢力を背ふて立つ者は確實に張作霖一人となつたのである。日本勢力の及ぶ範圍は謂ふまでもなく南滿洲鐵道本線と安奉線とが確實に之を代表する。此の範圍内に於ては最早や張作霖以外他勢力の存在が皆無となつた。況んや、日本勢力進展のコースに當る東部内蒙古即ち洮昌道が吳俊陞によつて安全に保持さるゝに至つて、東三省に於ける張作霖と日本の利害關係が對内的に一致した事になる。只一つ奉天省としては遼西のみが馮德麟の根據地として殘されてあるが、それは日本勢力以外の地にして或る意味から奉天省に於ける北京政府の勢力を代表するものであり、露國以外の各國が日本と奉天省に於て、競爭するに際し、從來もその根據地とされ來つた所である。然し東三省が最早や支那本部の純然たる殖民地でなくなつた以上、その獨自の利害がある。そしてそれは遼東一帶でなければならぬ。何となれば、日本及びロシヤの滿洲に於ける勢は純然たる國家的背景のみ以て成立してゐるに反し、漢人のそれは、實に北京政府の勢力を背ふて始めて可能なものではなく、全く漢民族としての堪ゆまざる苦鬪によつて一歩は一歩と築き上げられたものだからである。過去に於ても遼西一帶は支那によつて開墾殖民されて來たが、支那本部を切り離した場合の奉天省に於ける遼西の地域は邊境にも等しき一局部である。到底それが奉天省の利害を代表し得るものではない。滿洲の發達なるものは、鐵道を中心とする日露兩國の文明的施設と而して漢民族の莫大なる移入に待つ。北京政府の移民計畫の如きはもとより問題にならい。奉天省に於て南滿洲鐵道をその交通幹線とする部分が奉天省の利害を代表し得る所以はこれだ。而して之れが又奉天省をして北京政府の殖民地的地位より向上せしめた緣由だ。奉天省がすでに獨自の利害の上に立つて中華民國の一組成分子となつた時、遼西は只兩地域の通路たるに過ぎぬ。奉天省がその全權を委任したる代表者として張作霖をば中央政界に乘出さしむるに際し、それが中華民國をどうしやうといふ積極的立場でない限り、遼西を度外するも奉天省獨自の利害に缺陷を來さない。見よ、民國六年の初頭、參戰問題の紛糾に際し、張作霖は奉天が此の獨自の利害を完全に代表して中央政局に有力なる地位を保つことゝはなつたのである。

民國六年二月初旬、米國は、獨逸の狂暴なる潛水艇政策に對し遂に米獨國交の斷絶を宣言した。民國も亦米國勸誘に從ひ對獨斷交を爲さんとして、日本の了解を得て、先づ獨逸公使ヒンツエに抗議書を送つたのである。元來此の參戰問題は民國四年（一九一五年）すでに大總統袁世凱によつて計畫されたものであつたが、當時日本は袁が之を以て帝制計畫の道具に使用する爲めであると見、日本は、民國を戰爭に參加させようといふ英、佛、露三國から來た提議を支持するを拒んだものである。然るに

今回は、民國の參戰提議を支持することに同意したのみならず、進んで協商國側加入をも勸誘した。時の日本の內閣は寺內正毅の組織するもので、民國の內閣は段祺瑞を總理とするものであることは云ふまでもない。

然るに段祺瑞が對獨斷交に就いて大總統黎元洪に同意を乞ふたところ、黎氏は先づ國會の贊否を質す必要があるといふて之に反對した。依つて段祺瑞は、國務總理を辭して天津に下つたが、副總統馮國璋の仲裁によつて復職することゝなり、結局對獨斷行を實施する事となつた。然し之に就いては日本の寺內內閣がその決行を段祺瑞に勸め、段祺瑞も亦日本を信賴してその決心を定めたのだといふ說が行はれた。兎も角段祺瑞と寺內內閣との提携といふ事は、此の問題に伴つて民國政客の注目を惹く程になつたのである。

斷交は一步を進めて宣戰となつて來た。宣戰は約法の規定に從つて國會の同意を經なければならぬ。然るに國會の國民黨議員は、段祺瑞が內閣を組織してゐる限りは參戰決議を通過せしむる事を拒んだ。北方督軍團は之に對し段氏の後援となり民黨一派とは全然反對の態度を執り、吉林督軍孟恩遠を筆頭に二十二名の連署を以て憲法の改正と國會の解散とを要求した。張作霖も、その督軍團の一人であつた。

然るに大總統黎元洪は此の要求を拒絕したばかりでなく、五月下旬、突如として段祺瑞の國務總理を免じ、外交總長伍廷芳を國務總理代理に任命した。是に於て段祺瑞は卽夜徐樹錚、傅良佐を從へて天津に下り、督軍團も亦徐州に集つて、大總統黎元洪及び國會に向つて反抗の氣勢を示した。張作霖も亦曹錕、孟恩遠等と共に段派督軍の錚々たるものであつた。張作霖の代表は、參戰問題以來入京してゐる參謀長楊宇霆にして、張作霖は彼をして督軍團と同一行動を探らしむると共に大總統に對して長文の激電を發し、國會を解散し、且つ段祺瑞を復任せんことを迫つたのである。續いて彼は第二電を發して劈頭國會及び總統府の失態を痛擊し、且つ「若し中央政府にして能く國會を解散し民意眞確の議員を改選し、暴民專制の憲法を制定し、一面には黨見を屏除し良好なる內閣を組織して以て大局を維き人心を安くせば中國の前途は尙ほ振興の一日あらんも、若し然らずして猶ほ疵謗の意を存じ別に野心を蓄へば、作霖は當に遼東の子弟を率ゐて直ちに京師を衝き彼等奸邪を懲らして我が社稷を衛らん云云」と謂ふ最後通牒を發し、次いで安徽省長倪嗣沖が張勳の指金にて獨立を宣言するや、張作霖も亦直ちに奉天省の獨立を宣言し、遂に中央政府との關係を離脫した。之に續いて河南、陝西、直隸、福建、山東等の各省督軍も獨立し、共に聯合して天津なる段氏の下に臨時政府を設けやうとする程の意氣込みを示したのである。代理總理伍廷芳が、張作霖に電を寄せて段祺瑞免職問題に就いて辯解し來れるも、素とより顧みる所とはならなかつた。

此の混亂の最中へ意味あり氣に立ち現はれたは長江巡閱使安徽督軍張勳である。彼は有力なる軍隊

を率ゐてその駐在地徐州から北上して先づ天津に着し、時局調停に名を藉りて、北方督軍團の代表たる權威を以て七ヶ條の要求條件を大總統に提出し、且つ日を限つて國會を解散せんことを迫つたのである。曩に獨立した督軍連も張勳の希望に從つて獨立を取消した。黎元洪も亦壓迫に堪えずして遂に國會を解散した。時に六月の中旬である。

然るに七月一日張勳は突如として前清宣統帝の復辟を斷行した。康有爲の起草に係る復辟の上諭は發せられ議政大臣張勳以下の任命が電光的に發表されたのである。此の張勳の行動に對して最もその向背を注目されたのは張作霖であつた。大體が復辟派と見られてゐたものであるから、張勳の今次の行動には相當の聯絡と諒解があるものと信ぜられた。然るに事實に全く然らず、張作霖は六月二十日張勳よりの獨立取消勸告に應じて奉天の獨立を取消しはしたが復辟運動の機密には全然參與する所がなかつた。張勳より特別の牒報にも接してゐなかつた。六月三十日夜始めて張勳よりの密電に接し復辟の斷行を知つたものらしい。張作霖としては張勳が自己を除外して復辟の議を進め實行の前日まで何等の通知もせずに突如斷行したについては不快の念を抱いたに違ひない。而かも清朝復辟の一事が既に時世に反し大勢に逆行するものなることを知つて深入りしなかつたとも謂へる。だから彼は只中立を標榜して大局の推移を觀望して動かなかつたのである。然し張勳としては張作霖の加盟を當然のものと信じてゐたらしく、張作霖が獨立的態度と採つて動く模樣もないのに非常に驚いて焦り出した。實を謂へば張作霖の贊否こそ張勳の死活を決する問題であるのだ。東三省は清朝の根據地でもあり今でも中央政界と斷絶し得る地位であるのに、張作霖は實にその力を有するからである。張作霖さへ動けば吉林の孟恩遠、遼西の馮德麟は、すでに張勳の同志であつたからである。斯く如きを以て張勳は、議政大臣の資格を以て張作霖に對し「執事を奉天省巡撫に任命せるを以て速かに賀表を朝廷に奉り且つ宣統の正朔を遵用せよ」と電命したが張作霖は少しも之に應ずる色を見せなかつた。清廷も亦特使を奉天に派し黃馬褂を贈つて速かに勤王の師を起さん事を懇囑し以て復辟贊成を勸說せるも張作霖は依然として動かず、清朝の再現を祝福して先づ第一贊成しそうに觀られた奉天城には、五色の民國旗飜り、黃龍旗の影すら見えなかつたのである。然し實を謂ふと張作霖も復辟の絕對反對者ではない。張勳一味の復辟運判狀に加盟した一人であるといふのも事實らしい。それが張勳の不評判の爲めに公然の贊成を見合はせて密かに各省の意嚮を探究してゐたものであつた。但し對內的にも張作霖の中立は證明される。何故なれば滿洲に於ける復辟贊成者は張作霖の外に孟恩遠、馮德麟等があり、而かも彼等は張作霖よりも熱心なる贊成者である。然るに此の二人は滿洲に於ける最大の競爭者であつて、漸く大ならんとする張作霖にとつては何れも邪魔物である。若し此の二人が積極的支持を中央政府より得れば張作霖の翼は延びんとしてのばす能はざるものがある。出來得べくんば張勳を失敗せしめて彼の二人の競爭者の鼻をあかすことが彼には此の際有利であつた。だから彼は復辟の贊成者が少な

いことを確むるや、これも亦復辟派と目せられてゐた山東督軍張懷芝と密電を交換して、張勳討伐軍の組織に就いても交渉を進める所があつたのである。然し彼の此の表面中立的態度は、東三省に於ける宗社黨が盛恩遠及び馮德麟に加擔して張作霖討伐を實行するを恐れたことに歸因する。七月十一日彼は天津國務院宛として段祺瑞に對し、張勳復辟に對する清室の立場に同情し、次の如き意味の電報を送つて清室優待の舊の如くならんことを求めたのであつた。

今次の復辟計畫は全然失敗に歸するは必然なるも、宗社黨は東三省及び各省に充滿しあり再度の機會を覘ふことは明瞭である。思ふに此の際清室に對しては不當の處置を採ることには贊成出來ない。且つ清室には天下を私するの態度なく這般の擧は全く張勳に脅迫せられたものに過ぎないものだから、優待條件は一切その舊によつて舊臣等の故主を依戀するの情を慰するを可とするであらう。云云。

然しながら中央に於ける張勳の行動は一勢に輿論の反對を受けた。段祺瑞の如きは、復辟宣言の翌日直に共和擁護、張勳討伐を宣言して馬廠に立つた。そして副總統馮國璋も亦段祺瑞と歩調を合せる事になつた。此の北方二巨頭の聯合は督軍團の執るべき態度に大なる影響を與へたことは事實で、何人も張勳の爲に表面に立つて努力しやうとするものがなくなつたのである。七月十二日段軍は遂に北京に入城し、張勳は逃亡を餘儀なくされ、段祺瑞は再び北京政界の主人公となつて對獨宣戰も八月中を以て布告されて問題は此處に始めて解決されたのであつた。

第二節　馮德麟沒落

第二十八師長馮德麟は前年張作霖との爭權に失敗して以來、廣寧の本據に起臥して復た出でず、不平を抱いて時期の再來を待つてゐた。北京政府は彼の不平を知り、他日拔擢云云の聲明に基き、且つは張作霖との均衡上、黑龍江軍界の動搖ありしを期とし之が鎭壓の爲めに馮德麟を黑龍江督軍に昇任させるに內定し、すでに張作霖の同意も得て任命の發表も近きに在りと報ぜられてゐたが、中央政局が紛糾混亂せる結果馮德麟の任命も一時中絕の姿となり有耶無耶の裡に立消えの狀態となつてゐた。然るに張勳の復辟に際し張作霖は段祺瑞と共に大總統黎元洪に反抗の氣勢を擧げたが、同じく復辟加盟者の一人である馮德麟は張作霖に對する反感から此れと同一行動を執つて段總理擁護を高唱するを欲しなかつた。人々は彼れの吳景濂一派の國民黨系の關係から黎總統擁護を聲明して張作霖と對戰する決心ではないかとさへ思つたものだつたが、馮德麟の態度は依然蓋へ切らず旗幟頗る鮮明を欠いだものである。然るに六月中旬に至り馮麟德は突如張勳よりの召電に接し、遽かに晉京を思ひ立ちたる如く自己の腹心なる第二十八師五十五旅長張海鵬をして兵三百を率ゐて先發隊として入京せしめた。續いて馮德麟自身も自ら手兵三十を從へて入京し直ちに張勳と會見した。而かも張勳より復辟運動加擔

を慫慂さるゝや、彼は不用意にも直ちに賛同してしまつた。事成就の曉には張作霖を蹴落して奉天督軍たるか、奉天督軍たらんまでも相當の地位を贏ち得る事が兩者の間の了解の裡に約定された事は想像され得る。斯の如くして彼は復辟宣言以來張勳の軍機に參畫し奔走領る努め、且つ麾下の第二十八師に至急入京する樣に電命し、或は宣統帝に謁見して盡忠を誓ひ、吉林督軍孟恩遠とも聲息相通ずるものがあつた。而て張勳の復辟軍が、もろくも北京城を開け渡さんとするや、馮德麟は却つて電を張作霖に飛ばして救助を哀願するの醜態を演出するに至つた。之に對し張作霖も年來の舊誼に顧み馮德麟を見殺すに忍びず「北京に永居するは甚だ危險なれば速かに陸路を取り長城に沿ふて單騎歸還せよ、適當の場所まで迎ひを出すべし、汽車にて歸還するは危險である」と好意ある注意を寄せて一刻も速に北京を脱出せん事を警告した。然るに馮德麟は左右の言に誤られ陸路歸還を避け大膽にも汽車にて歸還せんとし、張海鵬旅長以下幕僚と共に私服に變裝し、同じく私服に變裝した二百の兵を從ひ、七月十日北京より天津に着した所を曹錕部下の偵査隊に發見され、列車の最後に連結された馮德麟の客車は密かに鎖を切り離され、二百の私兵は發車と共に何事も知らずに東行し、馮德麟の一行は偵査隊の爲めに何なく取り押へられ天津國務院辦公處に拘禁さるゝことゝなつたのであつた。間もなく北京に護送された馮德麟は張鎮芳、雷震春等と共に大總統令を以て「共和に背き逆跡明瞭なるを以て官職及び勳位一切を褫奪し法定に交附し法に據りて嚴罰に處せしむ」ることゝなり、二十八師長の地位は勿論陸軍中將勳四位の官位を失ひ、あまつさへ囹圄の人となつてしまつた。

馮德麟就縛の報奉天に達するや張作霖は痛く馮德麟の重罪に處せられんことを憂慮し、多年の舊誼に顧み、總理段祺瑞に向つて寛大なる處置を求め、吳俊陞、馬龍潭の二鎮守使を始め第二十七、二十八、二十九、三師の各旅長、團長、營長及高級軍官等百餘名の連署を以て、政府に馮德麟の命乞ひを爲し、又馮德麟と關係深き遼西十六縣の有志等を說いて同樣連名請願せしめ、極力馮德麟の爲めに奔走したのであつた。審理百餘日の後政府も張作霖等の請を容れ、十月中旬「復辟加擔は證據不充分なるを以て阿片吸飲の罪を以て罰金八百元に處す」る旨の寛大なる判決を下され漸くにして釋放されたのであつた。然しながら馮德麟の失脚に伴ひ二十八師長の後任が問題になる。何故なれば二十八師なるものは馮德麟が綠林時代より統率して來た一隊、即ち奉天左路巡防隊を改編したものであつて、實に馮德麟個人の私兵にも等しいものであるからである。政府の二十八師ではなくして馮德麟の二十八師だからである。從つてその麾下に隷せる第五十五旅長張海鵬、第五十六旅長汲金純の二少將を始め、各軍官は悉く當年綠林の舊部下にして親分子分の密接なる間柄である。馮德麟失脚の後之等を統禦することの困難は想像に難くない。張作霖が、すでに滿身の創傷を蒙りて立つ能はざるに至つた馮德麟に對して、その釋放を運動したその一面には、此の二十八師諸軍官の信用を得るための手段でもあつたのだ。そして馮德麟の勢力をそのまゝに自己のものにしたかつた事は云ふまでもない。だから今後二十八師は馮德麟の勢

力下であつてはいけない。出來るなら二十七師五十四旅長孫烈臣を昇任せしむるのだが、兎もすると馮德麟の二十八師長再任の噂さへ立つ程だつたので、張作霖は、張海鵬、汲金純二旅長を奉天に召致して協議する所があつた。然し張、汲二旅長は二十八師を二個混成旅に改編して奉天督軍の直屬とすることを主張して止まなかつた。厭くまでも第二十八師を手に入れたい張作霖はこれにはかゝわず孫烈臣の師長任命を北京政府に電請してその許可を得、一方二十八師勸說使として督軍顧問馬瑞祿、于沖漢の兩人を廣寧及新立屯に派し、汲、張兩旅長を始め、二十八師軍官と極力慰諭せしめ、漸く孫烈臣の師長就任を承諾させたのであつた。然るに時あたかも遼西方面に匪賊蜂起して人心騷擾、二十八師の兵も亦動搖して不穩の形勢あり、汲、張二旅長の態度も急變して、斷じて孫烈臣の節制を受けずと公言するに至つたので、張作霖は孫烈臣の二十八師長就任を中止せしめ、二十八師長は張作霖自ら之を兼攝することゝなつたのである。かくて張海鵬、汲金純兩旅長も張作霖の節制を受くることを得たのを嬉び動搖は全く平穩に歸した。そして實際の軍務は五十六旅長汲金純をして師長代理として處理せしむることにした。これは將來の二十八師長として、馮德麟に心服して硬骨屈せない張海鵬を避け、張作霖と了解ありし汲金純を選んだものであつた。そして馮德麟の釋放と同時に再び二十八師長後任の噂があつたので、張作霖は機先を制して突如として汲金純を正式師長に任命し、百十團長郭瀛洲を五十六旅長に昇任せしめ、二十八師問題も茲に念々解決を告げたのであつた。時に民國六年十一月中旬である。而て馮德麟は總統府高等侍從武官なる閑職を得て依然北京に滯留することとなつたのであつた。

第三節　黑龍江省と張作霖

張作霖が單に奉天人の奉天を實現したのみならず、それを基礎としたる中華民國の重要分子たることを參戰問題に於て從分證明したことは前節の如くである。而て、すでに奉天省の價値ある獨自性が公認さるゝことゝなれば、吉林、黑龍江に對する奉天省の地位にも少なからざる變化を生ずる。何故ならば、吉林、黑龍江の二省は未だ北京政府に對する關係に於て、奉天省と同一の進展を示してはゐないからである。素より此の關係に就ては、北京政府に於ける奉天省の重要さが、民國內政に於ける日支關係の重要さと比例するものであることが多くの注意を爲さねばならぬことではある。それと同時に、又之れと或る種の因果關係を持つ、北方露國の對民國關係も同樣なる注意を要する。即ち日支關係の重要さが、露支關係のそれを浸飾して行く傾向を滿洲に於ては見得るからである。此の種の關係を拔きにしても奉天省の强大は、その地理的關係よりしても、自然に吉林及び黑龍江をも支配せんとする傾向あるは爭ふべからざる所である。何故なれば、先づ第一に北京政府は民國全圖を支配する威力を欠く。從つて北京政府に向つて有力なる發言權を有するものは、これと密接なる關係を有する地方を率ゐるに至るべきが故である。而て黑龍江省は未だ殖民地たる性質より脫せずに居る。政府に向

つて獨自の主張を爲し得るものではない。しかも隣國露西亞と、北滿洲に於ける利害は未だ一致するには至らない。從つて奉天の東三省に於ける勢力の多寡は、彼れの北京政府に對する發言權の多寡と同比例を以て進行すべきものなるが故に、張作霖の勢力は北に向つて進むべきは當然である。しかも黑龍江省は內部的に統一されたる勢力を爲してはゐないものであるのだ。

此の未だ統一されざる黑龍江に於て最も大なる軍權を有し、久しく之が主人公たらん欲望を有するものに黑龍江省陸軍第一師長許蘭州がある。彼れは光緒三十三年東三省總督徐世昌に從つて奉天に來り、次いで張勳に從ひ黑龍江省に赴き巡撫程德全の下に巡防第二統領となり、爾來黑龍江省に在ること前後二十年、黑省陸軍第一師長として軍務帮辦を兼ねることになつたものである。

然るに第一革命以來黑龍江省の主腦者は三度び變つた。初代の都督宋少濂が黑龍江巡撫より改任し二年八月事により露國官憲の反感を招き壓迫を受けて放逐され、次いで露國通の畢桂芳來任したが、三年六月中央に去り、護軍使朱慶瀾が昇任し鎭安右將軍督理黑龍江軍務となつた。然るに許蘭州は此の軍權を背景に、直接間接之が排斥策を講じ、遂に五年五月辭職せしめ、再び畢桂芳の來任を見ることになつたのであつた。

然し畢桂芳は元來が外交官出身として、只露國との關係の良好なるものあるを唯一の武器とする外、自ら號令して動かす所の一兵をも有しなかつた。蒙匪が大擧して、邊境に迫り形勢急を告ぐるものあ

りしも、彼は之が討伐の師を出さんとして、しかもその命に從ふものなく、事每に許蘭洲に掣肘せられて如何とする事が出來ない始末であつた。而かも許蘭洲の壓迫は常に絕えず、遂に畢桂芳も刦を盡やして任を捨てて北京に歸つてしまひ、中央政府又、直ちに督軍を任命をしなかつたので、黑龍江省は自然許蘭洲の獨天下となつたのである。然し彼は自ら黑龍江督軍兼省長を潛稱して橫暴の擧があつたので、北京政府は彼の正式任命を認めず、又張作霖と權衡上も面白くないので、彼の二十八師長馮德麟の黑龍江督軍任命などが問題になつたのである。

かゝる時、中央に於ては參戰問題の紛糾より引き續いて張勳の復辟運動があり、中央と遠ざかつてゐる許蘭洲は張勳より黑龍江巡撫に任命されて得々たるものがあつた。而て復辟の失敗となるや彼は、あわてゝ共和擁護を表明し、地位の擁護に腐心し出した。此の見苦しい權勢欲の發露に、先づその足下を見すかして許蘭洲反對の火の手を擧げたものは、黑龍江省騎兵第四旅長英順、同步兵第二旅長巴英額を始めとして許蘭洲の部下を除く全部の軍官にして、彼等は兵力を用ゐても之と相爭はん氣勢を示したのであつた。かゝる時に直接居中調停の任に當り得べきものは、張作霖以外にはない。彼れの命によつて黑龍江省に赴いたのは第二十七師第五十五旅長孫烈臣で、孫烈臣の黑龍江行きと時を同じふして、陸軍講武學堂長鮑貴卿は同鄕の緣故を辿つて再び奉天に來り張作霖の了解を得、國務總理段祺瑞も亦鮑貴卿とは親しき間柄とて、黑龍江督軍は鮑貴卿と決定し、民國六年八月鮑氏は赴任の爲め

奉天に來り張作霖と會見し、之れと充分なる了解を得、且つ之れを背景として下旬齊々哈爾に入城した。許蘭洲が之れに對して不平であるべきは勿論だが、然し鮑貴卿は朱慶瀾や畢桂芳の樣に背後に武力を有せない將軍等とは同一には出來ない。張作霖といふ東三省の大勢力がその背後に控へてゐる。うつかりと手は出せない。手は出せぬけれども、機會あらば黑龍江政界に波瀾を生すべき危險分子で彼はある。鮑貴卿も亦奉天の兵力を賴んで安居するを得ない。彼も亦手兵を有せぬから突發事件に對しては危險の度が少くないからである。依つて張作霖と北京政府に向つて數次の協商を爲し、許蘭洲及びその所部の騎兵五營、步兵三營を奉天に移駐し、張作霖の麾下に屬せしむることゝしたのであつた。許蘭洲も止むなく將軍府參軍なる名譽職を得て九月下旬部下の軍隊を率ゐて奉天に來り、張作霖の命のまゝに東路剿匪總司令として西豐縣に駐在したのである。然しながら許蘭洲なき後の黑龍江省には猶ほ英順、巴英額等を中心とせる一種の黑龍江閥があつた。鮑貴卿が自己直屬の親衛隊一旅を編制せんとし、張作霖と諮つて奉天より十營の兵を徵し、張明九を旅長に、李夢庚その他の軍官を招いで編制に着手せんとするや、英順、巴英額等は、直ちに奉天軍の入省に反對を表明し、鮑貴卿を威嚇して形勢は甚だ不穩となり、鮑貴卿の地位も少なからず動搖を來した。是に於て張作霖は、蒙匪剿滅を名とし、吳俊陞をして第二十九師の一部を率ゐて急遽北上せしめ、强硬なる武力調停を爲さしめ、之れに應せざるや十二月上旬英順に對しては陸軍少將の軍官及び旅長の軍職を褫奪し、巴英額を免職して之を放逐してしまつたのである。鮑貴卿を傀儡とする張作霖の勢力は間接に黑龍江省をその手に收め、かくて對露關係を主としたる黑龍江の政界は、奉天の利害に從隨することゝなつたのである。

第四節　吉林省の紛擾

吉林は、清朝の對滿洲政策の中心地であつただけに、自らその住民は鄉土的愛着心を持つ。之を奉天に比すれば、一方は北京政府よりの殖民地長官が駐在する所であり、他は滿洲を支那本部より切り離し、又對日露關係も想像に入れざる場合には滿洲の都と稱し得る差違がある。又黑龍江が露國より影響さるゝ處多く、奉天が、日本及び支那本部より影響さるゝこと多きに比し、滿洲としてはその何れよりも最も影響を蒙ること少なき地方である。從つて其處には地方的色彩の最も著しきを見る。これが吉林政界をして從來多く排外的ならしめた所以であつて、而てこれが、吉林政界に、東三省の他の二省といさゝかその趣を異にせしむる原因を爲すものであつた。彼の張作霖の北進經略も吉林省を後廻しとし、東部內蒙古を通過して直ちに先づ黑龍江省に至つたのも、此の故に外ならぬ。即ち奉天の色彩を以て抹し去るべく、其處にはあまりに鄉土的色彩の濃厚なものがあつたのである。

然しながら、すでに東部內蒙古を通じて黑龍江省にその勢力を張つた後に於ては、吉林省と雖も全然之れが圈外に立つことは出來ない。しかも吉林には之が後援たるべき背景としてはなく、只從來の歷

史的因緣及び、その地理的雰圍氣によつて然るのみで、それもたとひそれが督軍孟恩遠によつて殆んど統一されてゐたとは謂へ、他の二省に獨力對抗し得べきものでは勿論ない。この故を以て吉林省も亦滿洲に於ける大勢力の影響を次第に蒙らねばならなかつたのである。

そも〳〵孟恩遠は卒伍より身を起したるものであつて、光緒三十四年吉林巡防督辦に轉任以來、陸軍第三十三鎭統制官、第二十三師長等に歷任し、民國二年六月吉林護軍使に任じ、吉林軍隊全部を節制するに至り、民國三年六月鎭安左將軍署理吉林軍務の重職に昇任し、やがて吉林督軍となつたものなのである。

然るに張勳復辟運動に際し、偶々北京に帶在してゐた孟恩遠は、張勳の計畫に與し、その計畫に參與する所があり、清廷より吉林巡撫に任命されて、大いに氣を擧げ上書して恩を謝し、復辟の實行さるゝや、公報を吉林に打電し、黃龍旗の揭揚を命令した。そして更に副官長高連甲を吉林に急派し、吉林省長郭宗熙を威嚇し、强制的に民政の全權を督軍參謀長の高士賓に引繼がしめ、かくて吉林省城は悉く清朝の復辟を謳歌し、黃龍旗に風靡さるゝの觀を呈したのである。

然るに段祺瑞の討逆軍北京に迫り、張勳の復辟軍の甚だ振はざる見て大いに驚き、倉皇態度を豹變し、共和擁護と省長留任とを吉林に電告して運動せしめ、而して自已の罪責を免がれんが爲めに一切の責を副官長高連甲の過失とし表面を糊塗せんとした。彼自身も亦北京より天津に潛行し段祺瑞を討逆軍司令部に訪ひ陳辯せんとしたが面會を拒絕されたので周章狼狽、吉林督軍の地位を保持せんとして百方に運動し漸く七月中旬吉林に歸任することを得たのであつた。

然しながら爾來吉林に於ける威信は次第に地を掃ひ、勢ひ孟恩遠反對派の搔頭となり、又排斥運動となり、全省公民大多數の意見として北京政府に申達した激電は孟恩遠の罪狀を剔抉彈劾し、その更迭を强要してあつた程である。卽ち黑龍江省の場合と同じく此際に當つても、初めより共和擁護を叫んで段祺瑞派となつてゐた張作霖がその反對に光りを增して、云はず語らずの中に、吉林政界に張作霖の黑影が濃くなつて行つたことは爭はれぬ。少くも孟恩遠は張作霖の支持によるものでないといふ事だけでも、孟恩遠反對派には、或種の力を與ふるに違ひないからである。實に張作霖は第二十七師長孫烈臣を吉林督軍に就任せしめんとして、此の間に北京政府に對して運動する所があつたのである。のみならず北京政府としても復辟事件以來、孟恩遠革職の意があり、一般にも早晩その實現すべきことを必然として期待さるゝに至つた。

その期待は十月中旬遂に實現し、察哈爾都統の田中玉が之に代つて吉林督軍に任命された。これには又、光緒の末年朱家寶に代り吉林巡撫となつた陳昭常が盛んに排日論を提唱し、吉林の鄕土的色彩と相待つてこれを排日の根據の如きものとしたので、日本の後援を得てゐた段內閣は朝鮮方面との日支接觸の關係上、親日者をして之に代らしむる意嚮でもあつたのである。

然るに政府より高壓的に「督軍の職務を省長郭宗熙に引繼き速かに來京すべし」との電促を受けたる孟恩遠は、吉林に於て前後十二年間勢力の敷植を爲し來つたものである、到底一朝にして之を拔き去ることは難い。はたせる哉、孟恩遠が年來全省に亘つて分布せる子分等は、孟氏革職が同時に自家の地位に及ぼすべき影響を顧慮し、遂に一致して中央の命令に反抗の態度を示し來つたのである。之れが中心人物は多年吉林軍務の樞機に參與して未來の督軍を以て自任してゐた督軍參謀長高士賓と、吉長鎮守使の裴其勳とであつた。彼等は吉林軍官の連署を得て北京政府に打電し「何が故に督軍孟恩遠を免職せしや、若し正當の理由なきに於ては吉林省の獨立を宣言し中央との關係を離脱すべし」と詰問して、同時に兵を吉林、長春間の要衝に集中して防備を爲し十月下旬遂に吉林省の獨立を宣言するに至つたのであつた。

然しながら一方張作霖としては孟恩遠の放逐に就いては、もとより異論はないが、田中玉の任命に就いては多くの異論がある。甚だ面白くない。何故ならば、田中玉は段祺瑞派の驍將として錚々たるものであるから、北京政府に對する關係に於て張作霖よりか、はるかに良好であり、從つて東三省の事も張作霖よりもむしろ田中玉によつて代表さるる機會の多かるべきが故である。そして又、田中玉は往年長春駐在當時、日本人との關係が甚だ良好で、且つ政界にも多くの日本人知己を有してゐるので、對日本關係は張作霖の專賣持許でなくなるからである。だから田中玉の赴任は張作霖によつて、第一の孟恩遠を逐ふて更により大なる第二の孟恩遠を迎ふるに等しいのである。此の際はむしろ比較的好々爺の孟恩遠を留任せしめて徐ろに時期を待つに若かずと考へたのは疑しむに足らない。故を以て吉林省の獨立に對する張作霖の態度は和戰兩樣にして、先づ田中玉の來任を中止せしむる事を主眼とし、一方に又武力的高壓手段を採つて孟恩遠を驅逐し、その功を以て孫烈臣を吉林督軍に任命せんとするのであつた。それが不可能なれば孟恩遠を暫時留任せしむるのが得策である。こうなれば、何れにしても吉林問題解決の鍵を開くべき手段は張作霖の一擧一動によつて變化して行くのである。故を以て張作霖は一方孟恩遠に對しては恭順奉命を勸告すると同時に、北京政府に向つては吉林討伐を主張して武力調停の態度に出で、黑龍江督軍鮑貴卿と電商して吉林討伐軍の組織に着し、次の如き吉林討伐軍を組織したのであつた。

討伐軍總司令　第二十七師長　孫烈臣

第一旅(二十七師)司令　張作相　　第二旅(二十八師)司令　汲金純

第三旅(二十九師)司令　陳錫武　　第四旅(許蘭洲軍)司令　任國棟

之に對し一方吉林軍の主動者高士賓、裴其勳等は極力麾下の吉林軍を督勵して戰備怠らず猛烈なる示威運動を始めた。田中玉に對しては又「吉林治安の爲め暫く來任することを延期されたし」と打電して來任を拒絕すると同時に、吉林各界の反對派を壓迫し自派の御用人物等を糾合して孟恩遠の留任運

動を開始させた。各界の代表者等は、かくて陸續北京に赴き總統府國務院の間に狂奔したのである。

事情斯の如くなるを以て田中玉も段總理に向つて吉林赴任を婉曲に辭退するに至り、張作霖の態度がすでに田中玉赴任を嬉ばないので、北京政府も强ひて强硬策を採れば、東三省全部の破裂となり、對日本關係に於ても種々なる惡結果を來すべきを慮り、遂に田中玉の赴任を緩延させ前察哈爾都統何宗連、講武學堂長陳光遠の兩人を吉林宣撫使として吉林に派遣し、孟恩遠と善後協定を爲さしむることとなり、張作霖も亦此間に立つて斡旋する所あり、孟恩遠の留任を圖り、且つ高士儐裴其勳等の首謀者に對しても抗命の罪を問はない事と、その生命財產の安全とを希望した。その結果孟恩遠に對しては二ヶ月の督任延期となり、從つて吉林獨立も之を取消すことゝなつたのであつた。

かくして十一月に至れば段祺瑞內閣（武力政策）は對南方問題に就いて大總統馮國璋一派（主和政策）と衝突して辭職することゝなり、直隸派の長老王士珍出でゝ內閣を組織し、その結果孟恩遠と北京政府との關係も次第に良好となり來つた。而して十二月哈爾賓に於ける過激派が五ヶ條の宣言を發し、東淸鐵道の乘り取りを畫策し形勢惡化したる際、孟恩遠は北京政府の訓令を奉して兵を哈爾賓に送り、東支鐵道長官ホルワット一派の穩健派を援護し過激派の行動を壓迫掣肘し乘取策を畫餅に歸せしめた事があつたので、王士珍內閣は之れを以て復辟加擔の罪と相殺することに內定した。係つて孟恩遠は吉林省公民各團體に旨を衝めて正式留任命令の發表を請願させ、王士珍內閣ではいさゝか勝手の

違つた張作霖も亦「奮朕哈爾賓事件の鎭定は一に孟督軍の威望厚きに依る所なれば引續き孟督軍を留任せしめて、與に東省の大事を商量し以て大局の維持に資せん」と電請するに至り、孟恩遠の居據りは成功を見たのであつた。

第十章　石井ランシング協約による日本の滿洲に於ける地位

日本と米國との關係は滿洲問題を中心として日露戰爭以來屢々利害の衝突があり、滿洲鐵道中立提議や、錦愛鐵道線路の敷設の如きは、すでに第七章に述べたる如く、日露の共同抗議に遇ひて結局不成功に終つたが、米國民の滿洲に對する貿易發展が、意の如くならずして、滿洲に於ける各國の自由競爭が日本の差別待遇により阻止せられつゝあるとの見地より、米國の日本に對する不平は滿洲問題を中心として屢々繰返された。そして一九一一年(宣統二年、明治四十四年)には又もや、英、獨、佛三國と共に(四國財團)支那の幣政改革及東三省の實行振興を目的としたる所謂幣政借款一千萬磅を支那政府と契約し、東三省に於ける煙草稅及び燒酒稅年額一百萬兩、東三省生產稅年額七十萬兩、同じく消費稅年額八十萬兩を、その擔保として提供せしめ、且つ滿洲に於ける投資企業に關しては、四國財團が他國資本家に對し優先權を有することの特種條件を定め、又その用途としても、東三省幣政革費二百萬磅、同じく農業振興費百四十萬磅、黑龍江開墾費十四萬磅、東三省防疫費轉補三十萬磅、黑龍江省及び東部蒙古金鑛採掘費二十萬磅、東三省燒酒、砂糖、紙改良費十萬磅等を計上し、暗に日露の勢力範圍を覆さんとする形勢を示した。然しそれは日本及露國の强硬なる抗議と、革命亂の勃發とによりて

發行中止せられ、前渡金四十萬磅も、その後、善後借款收得金によりて完濟せられた。そして日露兩國も亦滿洲除外を條件として財團に加入し、反對に米國はウヰルソン大統領となるや財團より脫退し、日米の感情は對支問題に關して益々乖離し來つたのであつた。依つて日本は、米國が歐戰に參加して日本と同じく協商國側となり、獨逸の潛水艇政策に對して兩國の利害及感情の接近を示し來つたので、大正六年石井菊次郎を米國に派遣し、國務卿ランシングと協約せしめ、大正六年十一月七日次の如き公文を交換したのであつた。

近來往々流布せられたる有害なる風說を一掃せんが爲め、支那に關して兩政府の等しく懷抱する希望及意向に就き更に公然たる宣言を爲すを得策なりと思惟す。

日本國及合衆兩國政府は、領土相接近する國家の間には特種の關係を生ずることを承認す。從つて合衆國政府は、日本國が支那に於て特種の利益を有することを承認す、日本の所領に接續せる地方に於て殊に然りとす。尤も支那の領土主權は完全に存在するものにして、合衆國政府は日本國がその地理的位置の結果、右特殊の利益を有するも、他國の通商に不利なる偏頗の待遇を與へ、又は條約上支那の從來他國に許與せる商業上の權利を無視することを欲するに非る旨の日本國政府累次の保障に全然信賴す。

合衆國及日本國政府は毫も支那の獨立又は領土保全を侵害するの目的を有するものに非ることを聲

明す。且右兩國政府は常に支那に於て所謂門戸開放又は商工業に對する機會均等の主義を支持することを聲明す。

將又凡そ特種の權利又は特典にして支那の獨立又は全土保全を侵害し、若しくは列國臣民又は人民が商業上及び工業上に於ける均等の機會を完全に享有するを妨碍するものに付いては、兩國政府は何國政府たるを問はず之を獲得するに反對なることを互に聲明す。

之れに對し、日本側は多く滿蒙に於ける日本の特種なる利益を正式に承認せられたものと思維し、此の日米協定中最も重要にしてその骨子とも見るべきは、兩國政府が領土相接近せる國家の間には特殊の關係を生ずることを承認し、且つ日本所領に接壤せる地方に於て殊に然ることを承認したるの一事なりとした。實に南滿及び東部内蒙古に就ては日支交渉に於て民國が事實の上に於て之を承認し、滿洲に於ては不完全ながら日本の司法權をも之を認め居り、且つ日本官民の合同經營に成る南滿鐵道は滿洲を縱貫し、その沿線に於ては、日本軍隊が秩序維持の責にさへも任じてゐるのであるから、米國に於ても此の特殊關係を認めざるを得なかつたのだと論じた。

而米本國に於ては、大體に於て本協定を觀迎したが、只特殊利益の認識は日本が日本自身の安全を圖る爲めに必要なる一の政治的事實を認めたものに過ぎずして、何等日本が支那に對する侵略主義を助くるものではないと謂ひ、而てそれは協商末文に在る、支那の獨立又は領土保全及商業的機會均等に反することを爲さないといふ日本の證言により安心して可なりであらうと論じられたものだ。

只露國のみは、米國が日本の支那に於ける特殊利益を承認したことを重大問題なりとし、日本は朝鮮を有して支那と國境を接し、各種の事業を營むもの多く支那に特殊の利益を有してゐるが、露國も亦支那と一萬哩以上國境を接し、昔より歴史的關係が深い、もし日本に特殊の利益あれば露國も亦之を有すべきであると主張した。

然るに支那に在る外字新聞は、殆んど一せいに此の日米協定を無意味なりとし、或はその「特殊利益なるものは日本の占有する所に非ずして英米その他各列强の齊しく享有する所、而かも此の各種の利益は斷じて開放主義を侵犯せざる範圍に於て有せざるべからず」と謂ひ、或は又「米國は單に日本の支那に對する地理的關係に基く特殊の利益を承認せるに過ぎず、斯の如き利益は支那が隣邦たる日本に對し有する所のものに外ならず」と論じ、或る者は「第三國に於ける特殊利益の承認が、何等當該國の同意を俟たずして公然發表するが如きは獨立國に對する侮辱にして、而かも米國が日本の帝國主義に相應じて自ら進んで茲に出でたるは誠に驚愕に堪えざるものあり」と論述した。而て漢字新聞は又、協定文にある機會均等及び完全なる主權と特殊利益とは、全然相矛盾するものなることを指摘し、且つ商工業以外には日本の殊殊の利益があることを謂ふのであらうとて、支那に於ける日本の地位の高上するを恐れ、且つ「支那が夢醒めて强國なる政府を建設するの時に至るに非れば、日本をして此

の特殊利益のある地位より離れしむることは出來ない、他人の我を蔑にするを憤慨するのも無益無効である、我國人は激烈なる空言を以て隣邦の惡感を招ぐことを爲さず、唯自ら速やかに覺悟して强固の政府を建設せねばならぬ、眞正の日支親善は實に此の時に於て始めて擧がるであらう」と謂ふた。

而て北京政府に於ても亦、一獨立國に對し甲國が乙國の特別關係特殊利益あるものと爲せるは外交上の一新例にして、之をして承認せば支那は將來困難なる地位に陷るであらうとの說を爲すものがあり、十一月九日遂に此の際一種の宣言を發し國家の地位を留保しなければならぬといふので、次の如き宣言書を發表したのであつた。

最近日米兩國は誤傳を息止するの目的を以て、米京に於て中國に對する意見に關して照會を交換し、並に北京駐在日本公使より前項照會の原文を中國政府に通告せり。中國政府は誤解を除かんが爲めに自ら將に此機に際して聲明し、以て左の如く中國政府の意見を表示すべし。

中國政府は友邦に對して曩きに公平平等の主義を持す故に、各友邦の條約に基きて得る所の利益は一律に之を尊重せざるなし。即ち領土接壤によりて國家間に特殊關係發生すとも亦專ら中國條約の既に規定する所のものを以て限りとす。並に再び聲明す。今後中國政府は依然として從來の主義を保持し中國政府は他國の文書の互認によつて拘束せらるゝ所あらず。

然るに米國公使は之れに對し一種の辨明書を送つて曰く

遣米日本大使一行の米國に渡來せる爲め極東に於ける日本の利害に關して自由に討論するの機會を得たり。日本大使は日本の政策が侵略主義に非ること、日本の地理的關係により生ずる特別なる關係を商業上若しては間接の利益に利用するの意志なきを一般に宣言せり。斯の如くにして日本の代表者は在來獨逸人の流布せる謠言により疑惑を示せる諸點を外交上一掃したり。かくて日米兩國政府は門戸開放主義を維持すること、並に支那に於ける商工業上如何なる國の國民に對しても機會均等を十分に有せしむることを維持するを宣言せり。支那に於ける日本の商工業上の發展は日支兩國の地理的關係上、他國人民の同樣の事業に比較して便宜なるは明白なり。日米兩國政府は此好機會を以て支那に關する兩國の關係に就き意志の發表を爲し、之を交換したるものなり。要するに右は門戸開放主義を茲に再び明かにせるのみならず、永遠の國際間の平和を要素として支那に於ける主權及び領土の保全に關し何等干涉を爲さゞるの主義を包含せしめたるものなり。

然るに北京政府は、「合衆國政府は日本國が支那に於て特殊の利益を有するを承認す、又日本の所領に接壤せる地方に於て殊に然りとす」と宣言書中に記載しあると指摘し、斯の如きは日本が惡き新例を作れるものであつて、支那は日本の外に西藏に於て英國の所領と接壤し、雲南に於て佛國の所領と接し、又北部は露國の所領と接壤するものあるが故に、英、佛、露が今回の日本の例に倣つて各自國の領土に接壤せる地方に於ける特殊利益を主張し來るに於ては、支那の領土は遂に分裂の端を發するに

至るやも知れないとて危惧の念があつたので、此の一項に關し米國公使ラインシュは米國政府に照會したるに、米國政府は、特殊利益を以て日本國民が支那と地理的に接近せる關係より商業上工業上特別關係あるを指したるものであると回答し、在支英國人等は又前述の如く此特別利益の意味を成るべく輕く解釋せんと努め、協定の重要意氣はむしろ後段に在りと稱したものであつた。

事情斯の如くなるが故に日本の輿論にも日米協定の効果に就いて疑問を抱くもの少なからず、或る者は「要するに此公文は地理的位置の結果として支那特殊の利益を有する當然事を米國をして只一句承認せりと謂はしめたさの餘り、支那に對する米國の權威を保障し、併せて自己に一層の束縛を加ふることを承諾したるの愚劣事を示すに過ぎず。日支兩國は之によりて米國の監督の下に於て總てを爲さざるべからざる如き事となりたるものといふべく、從つて日本の支那に於ける對米屈從條約なりと解するの外なし。日本は米國の近接接壤の地方（メキシコ）に對して何等の發言權を求めず、獨り米國の對支發言權を保障せるに至りては吾輩呆然として言ふ所を知らず」と極言し、又或る者は（大坂朝日）支那の聲明の無意義なると日本外交の拙なるを攻擊して次の如く論じた。

日米協定成立の通告を受くるや、支那政府は一篇の聲明書を發表し、支那は何等此協定の拘束を受けず、領土接壤によりて特殊關係を生ずるも、唯條約に規定さるゝ所のもを以て限りとすと。若し日米協定が日本に有利なるものにして特殊利益の承認を主とするものとせば、此聲明は乃ち日本に對するものと謂ふべし。日本は日支親善を標榜し、殊に寺内内閣は其成功者を以て自ら任じ、國民の忍ぶ能はざるものをも忍び、只管此の形式親善を買ふに吸々たるもの。然るに支那が此の聲明を出すは對日親善に裏切るものにあらずや。單に是のみならず青島民政に關する抗議を提出し居れり。斯るは決して友邦たる我國に對する作法にあらず、畢竟は寺内閣の小細工の結果にして、失敗を意味するものと云ふべし。尙此聲明が支那自身の發意なるか、支那は對内策にすら窮し、何等對外行動を取る能はざる今日、一度ならず二度ならず、對日的には抗議を行ひ、又此聲明を爲すは何故なるか。是或は何者かの煽動者なきかとは一般に推想せらるゝ所なり。支那某當局は此聲明を以て單に對内政策なりとし、決して日本に對する惡感を表白するものに非ずと辯明するも、抑々斯る對内的手段を取らざるべからざるは何に由る。支那に一種の磅礴たる一種の氣勢あり、對内閣的に又對日本的に政府をして此の辯解を爲すの餘儀なきに至らしむ。其某當局者といふは或は段派の人ならざるなきか。段派以外の閣員中亦斯る聲明を必要とするの人なきか。何となれば支那の現政府は決して統一さるゝものに非ず、閣員以外馮總統と段總理とは必ずしも一致するものにあらざるを報じ來る。此の際支那が斯る抗議的か、將た辯明的かの聲明を爲さゝるべからざるは順調といふべからず。尙殊に注意すべきは、在支英米の態度なり某英人は「日米協定の前段は特殊利益を認むるも、後段の宣言により無意義となれり」と云ひ、又「最近日本の借款三千萬圓は皆南方討伐の爲流用さ

れ、其結果は日本と北京に據る一勢力との關係を密接ならしむるに止まり、支那の改善には用ゐられず」と評し居れり。是明かに日米協定の精神を否定し、又日本の對支政策を非認するものに非ずや。更に傳ふる所によれば、英公使は南北調停の任に當り、南方に有利の解決を試み、日本の對支政策を覆さんと企畫し居れりと。

是れ容易に信ずべからざるも、日本が餘りに北方に偏し、殊に北京に據れる一部勢力にのみ結託するを以て自然に此の反動を起すの嫌ひなきにあらず。又米國公使も何の爲にか屢次支那政府に迫る所あり、本國の協定と同公使の行動と一致せず、或は公使一個の行動なりと云ふも、米國の如き民主國にて在支米國人及び駐支公使の意向を無視して高壓的に對外策を決定する等の事あるべからず。米公使の意向を尊重するものとせば、日米協定は無意義のものとなり、又日米協定の特種利益を認むるものとせば、非民主的の專斷外交となるなり。尙日本が支那の參戰を慫慂せしとき、米公使は對獨問題よりも內政改革が急務なりと、根本的に反對の意向を示し居れり。而て英米の兩紙が日米協定に重きを措かざるも注目すべき事柄にて吾人は何の爲めの協定なるか疑はざるを得ず。日本の支那に於ける關係は普通接壤地が特殊關係を有する以上に重大なるものにて、一片の協定の有無に關せず、既定の事實たるものなり。此の事實は英米の反對あるも、支那の聲明あるも毫も動かさるゝものに非ず。國家及人類生存上の問題なり。故に日米協定が不備なるも、又は有害なるも國民は關する所に非ず、國家百年の大計上進むべき所に進まざるべからず。然るに我內閣は餘りに標的を謬り、支那の中心勢力にあらざる段氏一派に偏重し、且執る所の手段の公明ならず、次第に支那大部分の反感を買ひ、殊に段氏に反對するの故を以て、餘波を日本に及ぼすものあり。是非常の損害なるが、更に米國に對しては自らの地位を辯明せざるべからざるに至り、特に石井氏を派し、日本の特殊利益を認めしめんとして却つて門戶開放等に他意なきを誓ひ、英米人及支那人に之を評價せしむるの機會を與ふるに至る。畢竟は無用の協定の爲め平地に波瀾を起さしむるものなり。

第十一章　東三省の統一

第一節　張作霖と徐樹錚

大總統馮國璋を傀儡とする主和派は、江蘇督軍李純をその急先鋒として南京に時局解決會議を開き國民黨の要人等と結んで遂に主戰派たる段祺瑞内閣を倒した。然し彼等は要するに大局の安定を目標としての主戰主和ではなく、自己の地盤擁護を唯一最大の目的とするものなるが故に、殊に主和派なるものゝ主張は各勢力の提携をその條件となすべきものなるに、而かも自家の擁護その勢力の擴張を目的とするといふ相矛盾する内容を有するものなるが故に、段内閣の瓦解後に於ては直ちに南方派よりの恐威を感せざるを得ず、且つそれに對する直接の責任を負はねばならぬ。中間に立つて、兩方に自信のない弱點につけ込んで、その調停者たることが主和論の主體であるから、善後の責任を負ふ自信などは勿論ない。只主戰派の强大となるを防ぐのがその目的である。故を以て段内閣の瓦解は直ちに主和派政策の欠陷を暴露することになり、從つて主戰派の再擡頭をうながすことゝなる。見よ王士珍内閣出ずるや、北方主戰派の武將は猛然として蹶起した。十二月初浣安徽督軍倪嗣冲、山東督軍張懷芝を筆頭に直隸、奉天、黑龍江等の十省區長官及びその代表者等が天津に參集し、所謂第一次天津會議を開き、南方討伐と主和派督軍の彈劾を決議する始末である。而して段祺瑞は督辦參戰事宜に復活し、段派の驍將段芝貴が陸軍總長となり、七年一月初浣には再び天津會議が開かれ、李純に反感を抱く直隸督軍曹錕之か牛耳を取り、山東、奉天、吉林、黑龍江、山西、察哈爾、綏遠の各代表者之に參加し、舊國會復活の反對、討南軍の兩路南征の可否に就て討論し「時局は武力を以てする外斷じて解決の途なし、宜しく各省聯盟して南方討伐令の宣布を中央に請ひ、若し聽かざれば各省獨立して最後の對抗手段と爲すこと」等を決議するに至つた。

然しながら、此の天津會議發案の實際的謀士は實に段祺瑞の寵兒徐樹錚その人に外ならなかつた。而て之を握手して、該會議の中堅となりし者は奉天督軍張作霖である。由來張作霖と徐樹錚との關係は、彼の湯玉麟事件に始まる。湯玉麟の後援者たる馮德麟が、張作霖を推倒すべく種々劃策したる際徐樹錚は、大いに張作霖の肩を持つて段祺瑞を說き、馮德麟を制壓懷柔させた。張作霖は深く此の援護を感謝し、重金を贈つて其斡旋の勞に酬ひたのであつた。爾來兩者の間に信使の往來頻繁となり、張作霖は中央に於ける徐樹錚の勢望を認め、之と提携して東三省に於ける自己の政治的野心を滿たさんと欲し、茲に兩者の提携は と期し、徐樹錚は又張作霖の武力を利用し、自己の政治的野心を滿たさんと欲し、茲に兩者の提携は成立した。而て此の間に立ちて斡旋奔走最も努め握手せしめた者は、張作霖の代表として天津會議に參加したる奉天督軍署參謀長楊宇霆であつたのである。

かくして張作霖は天津會議以來主戰派の急先鋒となつた。彼は强硬なる討南意見を主張して、李純、

王占元、陳光遠等の新謂長江三督軍が臨時參議院の解散を以て南北和議の前提とすべく主張せるのも斷じて耳を傾けなかつた。而て湖南の形勢切迫して南軍の岳州に迫るや、民國七年一月中旬大總統に向つて「時局の紛糾極點に達せり、遠かに曹錕張懷芝の兩路司令に傳令して大軍を南下せしめ以て萬一に備ふべし。況んや南方すでに和議の誠意なし、政府は宜しく堂々たる討伐令を下すべし。云云」との意味を電請し政府當局に最後の決心を促した。

かゝる中に南軍の北進の勢が次第に猛烈を加へ、近く武昌を指すに至り、同時に主戰派督軍連の態度は益々强硬となり、爲めに主和派はその立場に窮して、馮國璋は遂に一月下旬湖南討伐令を發布するの余儀なきに至り、天津會議の主張はまたゝく間に成就してしまつた。徐樹錚陰謀の成功である。而て第二の秘策はすでて彼の腦裏に熟し來た。張作霖の武力を以て、秦皇島に陸揚げ中なる兵器を橫奪せんとすること是れである。

當時日本の泰平公司が對支軍器購入契約に基き、その一部を商船武德丸に積込んで秦皇島に陸揚して支那側に引渡してゐた。之に着目した徐樹錚は相棒の楊宇霆を說いて張作霖を動かした。そして徐樹錚と張作霖との間には暗々裡に楊宇霆を通じて一種の默契が成立し、徐樹錚の秘電の一度び奉天に飛ぶや、張作霖は電光石火の勢で、第二十七師五十四旅長張景惠に旨を含めて秦皇島に急派した。之れ二月の中旬である。卽ち張景惠を南征奉天軍司令に任命し、步兵二個大隊機關銃隊一個中隊を率ゐて南征奉軍先發隊の名を冠し堂々入關せしめたのである。而て張景惠急遽入關の重要使命は問ふまでなく、秦皇島の兵器橫奪に在つた。秦皇島に到着した張景惠の一隊は直ちに武力を用ゐて兵器保管の當事者を威嚇し、大砲小銃その他を合し約三萬餘挺の兵器を橫奪し、その大半を奉天に輸送し一部は之を天津に送つた。

勿論之れに對しては中央政府より抗議が發せられ、引渡を要求して來た。然し主戰派に制せられてゐる內閣では、その抗議も何等の効力もなく、張作霖は曾つて袁世凱の大總統時代に奉天省から中央に貸與した多數の兵器を今尙ほ返還されずにあるその代償としての保留であると云ふて更に返還する模樣もなかつた。依つて政府は此の兵器を一時奉天省に保管させるといふ名義にして漸く表面を糊塗する始末であつた。そして張景惠の軍はドン〳〵その步を進て天津に至り、張作霖は頻りに大兵增派の準備を行ひ、南方討伐を政府に强要せしむるの態度を採り來つたのである。

斯の如くして張作霖を背景とする徐樹錚一派の活躍は遂に二月下旬早くも王士珍內閣の瓦解を招來するに成功したので、徐樹錚は當初の目的通り再び段祺瑞內閣を復活せしめんと劃策し、先づ露國過激派の東漸に伴ひ邊境の物情騷然たるを以て北方露境の事情を視察するといふ名義で奉天に至り、張作霖と會見して南征問題、軍器處分問題に關し秘密に協議する所あり、尙ほ來るべき秋の正副總統改選に於て、大總統には段祺瑞を、張作霖をば副總統に選出して、支那を北洋派の手中に握る計劃を示し、

之れが前提として先づ段祺瑞內閣を復活せしめ、之をして新國會の總選擧を行はせ、自黨議員をして國會の絕對多數を占めしむる必要を說き、その爲めに張作霖の武力的援助を懇請したのであつた。

茲に於て張作霖は更に從前に倍する强硬なる主戰論を表明し出し、入關奉天軍司令張景惠に電命して奉天軍を廊坊より北京城外の疊臺に進め、更に陸續後續部隊を入關せしめつゝ三月中旬政府に向つて突如四ヶ條の要求條件を提出し、萬一政府が拒絕すれば武力に訴へても主張を貫徹し彖ねまじき見幕を示した。その四ヶ條とは(一)段祺瑞內閣の組織、(二)長江三督軍の罔責、(三)東三省巡閱使新設、(四)新師團の增設にて、これ主戰派督軍としての態度を鮮明にしたものであつた。續いて「段內閣成立せば十日以內に北京附近の兵を全部撤退して長沙、岳州方面の攻擊を援助のため南下せしむべし」との條件を提出し、三月中旬岳州が北軍の手に奪還されて和議の論が再び頭を擡げ出す傾向あるや、再び大總統に對して「南方は常に亂を構へて國政を紊すこと久し、然かも勝てば則ち進み、敗るれば則ち和を祈る、その誠意なきは萬人の認むる所なり、今幸に岳州を恢復したるを以て此の機に乘じ極力猛進せば妖氣を蕩平し座して西南を制すること敢て難事にあらず、聞く朝野今また和議を唱へて總統の聰明を掩はんするものありと、冀くば我が大總統邪說を採納して失岳の故轍を踏む勿れ」と皮肉りて主戰論を主張した。而て京奉線の軍糧城に南征奉天軍總司令部を新設し、張作霖自らその總司令に任じ、筋書通り徐樹錚をば副司令として南征奉天軍指揮の全權を委ね、之れが參謀長としては天津會議以來徐樹錚の相捧である楊宇霆が任命された。奉天軍械廠長の丁超も亦之に參與し、諸般の設備全く完備し、倪嗣冲と相呼應して盛んに南征の氣勢を張つて政府を威嚇し出した。

越えて數日北京の政局は張作霖の注文通りに展開し、段祺瑞內閣は出現して北方の政權は再び主戰派武人の手に落ちた。これ三月の下旬である。而て北京附近の奉天軍は漸次撤退して南征の途に就き、張景惠の先發隊を先登に第二十七、第二十八、第二十九の三師及び新編招募の各混成旅は漸次南下し三月末、第二十九師第五十七旅の第百十三團はすでに徐州に到着した。後續部隊も之に續いて南下し孫烈臣、汲金純、吳俊陞の三師長を始め、許淵洲、張作相、張景惠その他各混成旅長等は湖南、湖北福建、河南、陝西、直隸の各省に進駐しその數約五萬と稱せられた。

然るに征南軍の先鋒は湖南の戰に敗退し、第一路總司令曹錕は責を負ふて辭意を電請し來つた。依つて徐樹錚は之れに代り自ら總司令となつて奉天軍を第一線に立たせ決戰せんと策したのである。これこそ徐樹錚年來の宿望であつて、奉天軍の精銳を中堅に北洋軍の陣容を新にして南軍を蹴破して大功を立て、以て反對者を制壓せんとしたのである。是に於て奉天軍の南征に關する一切の指揮權を徐樹錚に委任した張作霖は遽かに狼狽し出した。元來奉天軍の南征は要する大奉天の實現をその目的としたものなのであつた。堂々たるその聲明も實は一種の自己宣傳に過ぎなかつたものである。具體的には南征軍の美名の下に中央より巨額の軍費と武器を得ることも、その目的の一つであつた。だから始

めから戰線に立つ意志はなかつたものと察せられる。決して徐樹錚に御奉公申しあぐるものでない。張作霖は、此の徐樹錚の計劃を聞いて是非共對策を運らす必要が生じて來る。加之孫烈臣、汲金純吳俊陞、張景惠、張作相等の各武將は夙に徐樹錚反對派であつて、彼の副司令任命當時から既に不快の念を萌し、徐樹錚の指揮に屬するを不平としてゐたものであつたが、張作霖が徐樹錚を絶對的に信任してゐるので、張作霖に對し進んで徐樹錚反對を表明することを憚り來つたものである。それが徐樹錚の獨斷專行甚だしく横暴日に昂ずるを見て憤激し、同じ主戰派の中にも徐樹錚反對が多數出來るといふ始末だつたので、之等奉天軍の武將も遂に張作霖に向つて「最後の獲物は奸譎狡猾な徐樹錚一人に奪はれ、結局奉天軍は國民の怨府となり、最も馬鹿を見るに至るべきこと」を說き、且つ「奉天軍は奉天省軍官を以て統率せしむべく、何ぞ外人を招くを要せん」とて張作霖の反省を促がす所があつた。それに又張作霖の懷力として奉天省文治派の大立物である秘書長の袁金鎧も、徐樹錚を攻擊し「公(張作霖)の力を藉りて以て其個人の權利の伸張と私を圖るに過ぎざるのみ」といふて徐樹錚を遠けんことを勸告したのである。

是に於て張作霖も漸く後悔し、急に南征方針を變更して、徐樹錚の横暴を牽制する爲め、孫烈臣等の勸告を容れて、奉軍三師長をして南征軍を分擔統轄せしめることにした。そして一方南軍と衝突を避くる爲めには奉天軍を戰線より撤退する必要があつた。然しそれは何等か相當の理由がなければ當初の聲明に顧みて張作霖の面目上不可能事であつた。依つて張作霖は奉軍引揚げの口實として露境邊防の急務を力說し勞農露國の東漸と、日支軍事協定の締結により北滿出兵の必要あり、奉省の兵を永く南方に遠征せしめ居るを得ざることを縷述し、之れと同時に六ヶ月分の軍費百五十萬圓の支給と武器の供給とを要求し、政府が之に應ずるを得ないのを見越して、それを口實として奉軍の撤退を斷行せんとするのであつた。

此の張作霖の意外に强硬なる態度に遇ふた徐樹錚は、遂に第二路總司令たらんとする欲望を棄てゝしまわねばならなかつたが、然して彼れはかゝる際にも何とか方策を考へる男であつた。それは彼自身の私兵を養ふことである。彼は張作霖の態度急變を見るや、急遽その招募に着手し、奉軍參謀長楊宇霆と奉天軍械廠長丁超とが共に日本士官學校出の同窓たるを奇貨として之を說服し、楊宇霆が管理してゐた奉天軍の軍費の一部を自己軍隊招募費に濫用し、且つ丁超をして保管してゐた武器を密かに徐樹錚の新軍に交附せしめた。而てこれが張作霖、徐樹錚の關係が決裂した最後の原因を爲すものであつて、張作霖は此の事實を知るや大いに激怒し、直ちに徐樹錚の奉天副司令の任を解き、第二十七師長孫烈臣を以て之に代ひ、徐樹錚に加擔して恣に軍費軍器を供給した楊宇霆、丁超の二少將は背任の罪に問はれ、免職されてしまつたのである。而かも徐樹錚が、その怒りを釋く爲めに奉天に至り、百方辯疎するも耳を傾けず徐樹錚を一室に監禁して正に銃殺せんとさへしたのであつたが、それは左

右の諫言と段祺瑞の調停で事なく終り、徐樹錚は北京に歸つた。此れ徐樹錚、張作霖間が次第に仲の惡くなる最初であつたのだ。

第二節　東三省巡閲使出現

張作霖の中央政界に於ける實價は、徐樹錚によつて完全に評價さるゝ機會を與へられたと謂ひ得る。然し評價はされたものの張作霖本人の望む所は、素とよりその評價ではなくて、具體的の代償物を要求するものであることは前節以來の經過に於て明かである。段内閣擁立の殊勳者であると自任する彼れにとつて、單に徐樹錚に利用されたのでは氣がすまない。しかも段内閣は中央に於て着々として豫定計畫を出現し、所謂新國會に於ては絶對過半數を制する安福倶樂部なる御用黨を得た。徐樹錚との誓約もあり、今度こそは何とかして貰はねば東三省に於てもにらみがキカなくなる憂がある。副總統は兎も角東三省巡閲使だけは此際是非物にせねばらぬと彼は決心した。そして七月下旬名を時局問題の協議に籍り重兵を率ゐて天津に至り馮國璋及び北洋武將連と會合した。そして副總統問題は勿論の事、張勳の特赦運動と、彼の曾つての秘書であり且つ袁金鎧、于冲漢と共に所謂文治派遼陽派の領袖である劉恩格を下院副議長に選定せしめんとして運動した。徐樹錚も張作霖との曾つての誓約を此機會に實現し、その惡感を和げんと張作霖の副總統説を主張したが、舊交通系の反對に遇ふて成功せず、政界には一體に平和主義の空氣が漲つて遂に徐世昌の出馬となり、只劉恩格だけは、京奉線廊坊駐在の五個大隊を黄村に進め、更に南苑に進駐せしめて政府に示威運動を爲し、且つ安福派も徐樹錚との關係から張作霖の感情を融和せんとして之に賛成した結果、下院副議長に當選することになつた。そのして張作霖自身も副總統の代りに、北方露境の騒亂に顧み東三省の軍權を統一して之に對抗せしむる必要ありといふことで、愈々九月上旬東三省巡閲使に任命されたのであつた。かくて少くも東三省に於ける張作霖の勢力は北京政府より確實に承認されたが、その官制權限等に就いては何等の規定も發表されなかつた。これは孟恩遠の存在が唯一の大なる理由を爲すもので、東三省に於ける張作霖の勢力は未だその發展の道中に在ることを示し、一面又孟恩遠の處分は暗默の中に張作霖に一任されたものと見ることが出來る。一任され得るだけの實力が張作霖に出來てゐることは勿論であるが、かく中央より認められる爲めには、やはり中央政界に於ける活動がその因を爲してゐる。それが又軍備の自然的膨張にも便なるに於て、その後と雖も中央政界に志を得て行くことはやがて孟恩遠勢力の縮小を來す所以となる。何故なれば滿洲は張作霖又は孟恩遠等にとつて中華民國の一部として始めて存在の意義を有するからである。だから滿洲の統一と中央政界に於ける活躍とは正比例して進むべきものだ。その中央政界に於ける伴侶は、南方に對して同じく北部支那の利害を代表する段祺瑞一派であることは申すまでもない。だから利害の根據を異にする所謂直隸派が南方と妥協して（吳佩孚、譚浩明、譚延

團、馮玉祥、程潛等）平和通電を發するに及び、彼は頻りに主戰を高唱して之を辨駁する通電を發し南征副司令孫烈臣、參謀長秦華を天津に派し奉軍總司令部を整頓せしめ、顧問劉恩鴻を北京に派し、政局當局と商議させるなど、八方に員を派して主戰を主張せしめる始末であつた。そして奉天南征軍の陣容は當時尙ほ多數あり、副司令孫烈臣の下に、第一技隊長張景惠は曾編奉軍第一師の二個團を率ゐて長沙に駐防し、第二技隊長許蘭洲は一個混成旅を以て陝西に出援し、蔡平本、郭瀛洲、王錫品、梁朝棟、王良臣等の各混成旅及びその他の部隊は湖北、湖南に分駐してゐたのである。

張作霖自身も亦督軍會議參加の爲め入京して所有る機會に主戰論を高唱し、平和熱に對して多大の不安を感せしめ、主戰論の花形役者たる感を呈したのであつた。然し徐世昌の懷柔と、一般的平和熱とは、すでに主戰論が事實上南征の不成功不可能を示した今日容易に成功し、加ふるに支那の內亂によつて大なる經濟的損害を蒙る列國は、日、英、米、佛、伊の五國公使の名義を以て十二月上旬、大總統徐世昌に平和促進の妥協勸告書を提出する始末だつたので、主戰論も物に成らず反つて張作霖は時局破壞の中心人物と目せられて、日本より警告を發せられた爲め、流石の張作霖も遂に如何ともする事が出來ず、前に奉軍撤兵費として百萬元を要求しつゝありしを、歸奉に際し自ら財政總長曹汝霖と談判して、財政部の豫定額二十萬元を五十萬元にまで高め、之を受け取つて十二月中旬奉天に歸つたのであつた。

然るに日本は張作霖の根據と密接なる關係を有し、且つ長江一帶の戰爭は、比較的經濟影響も少ない立場に在るので、大いに列國より猜疑され、平和促進には列國と行動を共にしたが、尙はその疑を解くに足らずとして、張作霖の北京より歸奉すると共に奉天總領事赤塚正助をして次の如き警告的勸告を爲したのである。曰く

東三省は日本と密接の關係あり。然るに此の治安維持の責任に在る者が妄りにその地位を離れ且つその軍隊を中央に送るが如きは支那全土の統一を妨害するに止らず、延いては東三省の治安維持に支障を來し、彼の白晝强盜及び日本人殺害事件の如きを續發せるのみならず、日本の公明なる態度を誤解せしむるの嫌あれば、その行動を愼まれ度し。云云

張作霖も亦此の勸告を容れ、爾後公式にも、徐總統を援助して南北統一の日の一日も速かならん事を圖るべき旨を宣言したのであつた。然しこれを以て中央に於ける張作霖の勢力が衰へたと見ることは出來ぬ。むしろ波亂を卷き起し得る實力を認められたと見るのが至當である。だからこそ上海和平會議に際しても、北方分代表の一人には張作霖を代表して劉恩格の任命を見たのである。只壓くまでも東三省の根據を支持することを第一とする必要を認め、その爲めには日本の了解を要すること勿論にして、北京政界への進出は一に此の根據に立ちて限度を越ゆることを爲さなくなつたのである。赤塚總領事の勸告は張作霖にとつても正に項門の一針でなければならぬ。何故なれば、全軍を以て關內に

進出し、しかも東三省内に何等の不安を感すべき事件の起らぬのは、實に日本の在在の故に外ならぬからである。だからその後間もなく支那に猛烈なる排日が起り、曹汝霖邸の燒打ちなどが起る如き狀態となるや、彼れは、排日に對して强硬なる反對的態度に出で省城の各學校に向ては嚴重に學生の雷同を豫防すべく嚴命し、北京在住の奉天同鄕會に電致して、奉省學生は努めて學事を修め國事に關與すべからずと訓令し、且つ省城の軍隊及び警察官に對しては過激派學生の煽動を嚴重に取締らしめ、南方及山東方面よりする不穩文書は悉く之を差押へ、妄動せんとする形跡あるものは銃殺すべしと威嚇したのである。そして尙ほ北京政府に對しても

今次の靑島問題は學生等が新聞紙に煽動されたるものにして、徒に友邦の罪を鳴らし、不規則の行動を敢てするも、唯友邦の惡感を增加するのみにして何等時難を補ふことなし。然も學生等猶且つ斯の如くんば、國家は歲々巨費を投じて宏く敎育を旋すも、結果は全く之に反することとなる。思ふに日本の對支政策は寺內々閣成立以來すでに方針を改變して努めて親善を求めつゝあるは東三省の近事に徵して明白なり。今回學生等の京畿に於て白晝暴擧を敢てし得たるものは、必ず一二野心家の政爭の具に供されたる者にして、彼等は常に外交に藉口し政府に不可能事を責め、一方亂黨と結托して天下を擾亂すること露國過激派と選ぶ所なし。されば憂國者愈々多數なれば亡國も亦愈々速かなるを恐る。請ふ、國家の靑島に對する交涉の經過を中外に宣布し一面肇事の徒を嚴罰し以て亂萌を遏し、而て邦交を全ふせんことを

と謂ふて、海內の排日その高調點に達せる時に於て彼は大いに之を辯駁した唯一人であつたのである。故を以て奉天省のみは全然此の排日の圈外に立ち得たのであるが、これには、事實上奉天省に於ける日貨排斥又は排日は直ちにその政治經濟に影響するところ多きものあるが故であることは勿論である。只省議會、農務、工務、商務、敎育の各團體が聯署して、北京政府に對し、排日的字句を連ねて反對意見を陳述したが、それは素とより生溫きもので、實際的には何等の行動も起し得なかつたのである。

第三節　孟恩遠の沒落と寬城子事件

前年の革職問題以來張作霖と孟恩遠との關係は表面的に平和を持續した。殊に主戰論が次第に不評判となり段祺瑞一派の中央政界に於ける、只その反對者を出すのみの形勢となるや、彼はしきりに孟恩遠と親交を欲し、督軍會議などにも孟督軍と同車して出京する如き狀態であつた。これは一面東三省巡閱使になつた場合の了解を得んゝ爲め、一種の懷柔策を施したものとも見る事が出來る。だから巡閱使に就任して、孟恩遠も何等の反對もなく東三省兵馬の權を掌握するや、孟恩遠が吉林省長郭宗熙と共に再三省民より彈劾されしを好機とし、愈々彼の覆面を脫して民國八年六月上旬公文を孟恩遠に送り吉林財政の不始末に就いて結責し、孟恩遠が責を負ふて辭表を提出するや、第二十七師長孫烈臣を

北京に派し、孟恩遠の免職と、その後任孫烈臣自身の任命を要請せしめ、かくて七月上旬孟恩遠の吉林督軍を免じて惠威將軍に任じ、その後任には黑龍江督軍の鮑貴卿又その後任には孫烈臣の任命が發表さるゝに至つたのである。

此の鮑貴卿の任命に就いては吉林官民の張作霖に對する反感を慮り、比較的奉天派としての色彩の薄いものを任命したものと解せられる。そして省長郭宗熙は依然留任を命せられたのであつた。

然るに一方孟恩遠は此の迅雷的の革職命令に接して流石に狼狽した。更に最も驚駭したのは孟恩遠の部下であつた。親分の孟恩遠が免職されしは、直ちに自家の地位に及ぼす影響に想到せば對抗策を講ぜざるを得ぬ。孟恩遠自身は張作霖の東三省統一熱と、吉林に於ける自己の不評判とより早晩此の事あるべきは覺悟はしてゐても、いざ退去となると、十分なる未練は涌く。それよりも幕僚參謀等は承諾せぬ。直ちに軍事會議を開いて善後問題を協議し、吉林省第一師長高士儐を急先鋒として、高峻峰、高鳳城、陶祥貴等の旅長鎮守使等は悉く强硬なる主戰論を高唱して獨立宣言を決議してしまつた。それに前年居据り運動成功の味が未だ口邊に殘つてゐるので、本來今次の免職は張作霖の强要に基き北京政府の發意ではないから、戰爭に訴へても抗命するといふ事になれば或は前年の如く免職取消しとなるやも知れぬといふので、孟恩遠も亦之に贊し、戰備の一切を高士儐に一任した。

かくて吉林省は漸次兵を吉林、長春方面の要地に集中して奉天省と絶緣し、高士儐の實兄高峻峰は前敵司令として南嶺に進駐して奉天省の進擊に備へたのである。

茲に於て張作霖は先づ中央政府に吉林討伐命令の宣布を請ひ、直ちに吉林討伐軍を編制し之れが總司令には新任黑龍江督軍孫烈臣を任じ、第二十七師及び衛隊旅より一個混成旅を抽編してその直屬麾下に隸せしめ、以下次の如く編制された。

吉林討伐軍總司令　孫烈臣

東路司令（西豐縣）　第五混成旅長　劉香九

西路同（梨樹縣）　第四混成旅長　王良臣

南路同　第二十七師暫編混成旅長　蔡平本

北路同（大賚縣）　第二混成旅長　鄭殿陞

遊軍同　第二十八師第五十五旅長　郭瀛洲

同　第二十九師第五十八旅長　石得山

此の外黑龍江省より三個混成旅を出動せしめ背後より吉林軍を牽制するに決定し、吉林軍に倍する兵數を以て三方より吉林の根據地に向つて出動を開始した。同時に張作霖は「今回吉林の騷擾は決して孟恩遠の眞意に非ず、高士儐が孟恩遠を强制し抗命せしめたるもの」と斷じ、高士儐の逆命頑抗の罪狀を天下に宣布し、そして又奉、吉、黑、三省人民に對しては「孟恩遠は高士儐の脅迫により兵を

構へて地方を擾亂し、人民を毒するにより大いに師旅を張り吉林討伐を決行すべし、要は高士儐等二三の奸賊を除くに在り」と通電を發し、出動の軍隊に對しても戰事行動に就いて嚴重誡告する所があつた。

然るに奉吉の戰雲漠々として低迷せる時に當り、七月中旬、第二の鄭家屯事件は寬城子に勃發した。即ち吉林軍第四混成旅步兵團長曹志剛麾下の一隊が寬城子驛附近に在りて東支鐵道の守備に任じてゐた際、通行日本人に暴行を加へ、一人を殺戮し他を負傷せしめた。報によつて駐屯軍副官住田中尉は兵を隨へ支那兵營に赴き事實を調査せんとせるに、支那兵は遽かに發砲し、住田中尉以下數名を殺したので、應援隊は直ちに支那兵と交戰したが、衆寡敵せずして、日本兵は殆んど全滅の悲境に陷つたのである。(死傷合計二十三名)然も支那兵は日本兵の傷者數名を陣地に運び、眼を抉り、鼻をそぎ、頭を割る等の慘虐を敢てしたのであつた。急報により吉林よりは總領事森田寬藏、高士儐等長春に來り現狀を視察し、公主嶺よりは獨立守備隊司令官高山公通來り、奉天總領事赤塚正助、關東軍參謀長眞面又助等を加へて善後問題の協議に入つた。張作霖も亦大いに憂慮し、麾下の各軍隊に向つて次の如き訓令を發して嚴重に誡告する所があつた。

長春に於て吉林軍隊と日本軍隊と衝突し、日本軍三十餘名傷亡せりと、之を聞いて慨嘆に堪えず、本使は治軍二十有餘年、每に邦交の保全を以て第一要義となし、本國に在る各國民は悉く保護するの責あり、今次出動の各旅團にして滿鐵線路を過ぎるに際し、凡そ憐國の軍警商民に遇はば均しく平和を以て應待し、苟くも齟齬ありて衝突を起すを許さず。該各軍隊長官は務めて嚴戒し、各連排長兵士等は紀律を恪守し以て軍聲を保すべし、敢て故意に違ふものあらば各該長官に責任を問ふべし

之れに就いては、張作霖が孟恩遠を放逐する爲めに、顧問の英順をして吉林軍を買收教唆せしめて此事件を惹起させ、日本の干涉によりて吉林を乘取らんとする陰謀であるとの風說があつたが、それは餘りに穿ち過ぎたる推側に過ぎない。然し此の事件が吉林軍にとつて大なる不利を結果したことは爭はれぬ。軍略上にも日本の了解あるとないとでは非常なる變化を來すばかりでなく、時は恰も段派たる奬心淇內閣で、各勢力が露骨に爭鬪を開始せんとしつゝある時であつたので、日支外交の重大問題を發生させるのは內閣の重荷を加ふることゝなるので、閣內閣は直ちに、次の如く當面の責任者たる孟恩遠の嚴責と高士儐の革職とを發表したのである。

一、高士儐が擅に軍隊を長春附近に集中せしめ大事件を突發せしめたる責任を問ひ、高士儐を免職してその事務一切を張作霖に委任す。

二、孟恩遠は軍規を嚴守する能はざりし罪を問ふ、督軍事務の一切は鮑貴卿に引繼ぎ直ちに北京に來るべし。

三、鮑貴卿は直ちに吉林に赴き實地を審査して善後の處置を採るべし。

形勢は正しく張作霖にとつて有利に展開し來つた。たとひ日本が吉林軍に好意を有するも、それを示す余地が少しもなくなつたのである。高士儐は正しく四面楚歌である。それが張作霖の意志であると否とに拘らず、兎も角結果に於ては張作霖の勢力擴大に資することになつてゐる。故に北京政府より吉林慰撫使として特派された前吉林巡按使孟憲彝と省長郭宗熙とが百方恭順を勸告するも、高士儐は更に耳を傾けず「身命を賭して奉天軍を惱まし、若し敗戰せば綠林に入り馬賊と變じて三省を攪亂すべし」と豪語して、四方の馬賊を糾合した。之に應じて走せ參じたものは張作霖を仇敵と狙ふ金鼎臣（金壽山の子）にして彼は同志劉介臣、宋奎武等の豪傑等と吉林に潛行し、高士儐と密議し、小馬賊を糾合して各一個混成旅を編制せんとし、窮鼠却つて猫を咬むの勢を示した。かくなりては、孟思遠が吉林時局平定策として張作霖に要請し、張作霖も之を諾して北京政府に申請してゐた高士儐の第一師及び一個旅の直隸移駐も最早や問題とは成らず、形勢は日にその切迫の度を高めて來たのであつた。

一方張作霖は天下の爲めに逆賊を剿討する好題目を得て公然と兵を進め、六月下旬總司令孫烈臣は討吉の大旆を翻して陸路北進し、總司令部を開原城に設立し、東路司令劉香九の先發隊は長驅范家屯に達して將に長春に迫るの概があつた。而かも前年南征の爲めに入關した奉天軍は續々歸奉し、張景惠の率ゐる暫編奉軍第一師は討伐軍後援隊となり、その第一師第二旅は東路に、混成第五旅は北路に出動し、戰はざるにすでに大局は奉天軍の勝利を物語るものゝ如くであつた。

之に對し高士儐は、裴其勳、高峻峰、高鳳城、陶貴祥その他吉林武官數人の連署を以て張作霖討伐の宣言激文を配付し、宛然たる南方派の口吻を以て北京政府を罵りたる後

張作霖は盜賊の巨魁を以て私に戎行に列し、その匪黨を恃んで關東に橫行し、遂に三省巡閱使の僞命に膺り東三省獨立の陰謀を策す。士儐等は遠く西南の諸軍に應じ約法により三省義士を合して張匪を討たん。士儐等百戰余生の身を以て國に許す。大義のある所、成敗存亡は計る所にあらず。

と高唱し、在吉林日本要人の恭順勸告にも耳を傾けず、半ば自暴自棄の態にて出陣し、自ら兵を督したのであつた。然しながら事は常に內部より崩れる。四面楚歌の裡に在つては殊に然りだ。而かも吉林省城と長春とではその利害關係が、地理的に同一ではない。長春はむしろ南滿洲鐵道の終點として南方奉天省との關係が深い。吉林の如く獨自の孤立したる地形を爲してゐない。經濟的に於て殊に然りである。吉林省城は多く東部吉林省をその背景として立つ。彼の吉長鎭守使裴其勳と吉林軍第一師第一旅長誠明の軟化は正しく如上の理由に基くものと見なければならぬ。前年黑龍江軍界を騷擾せしめた首魁として馘首された英順が張作霖の顧問として長春に陣取り、盛に吉林軍の間に暗中飛躍せる事のあづかつて力ありしは素りである。此の爲めに裴其勳は吉林督軍公署に監禁されたとか或は已に銃殺されたとの風說すら傳つたが、誠明は密かに戰線より奉天に來り張作霖と會見密議し、吉林軍の

內部より崩壞せしめんと謀つた。かくては吉林軍も最早や自滅より外はない。最初より徹底的戰意のない孟恩遠が此の形勢を見、殊に孟憲彝が張作霖と間に居中調停の勞を取ることになつたので遂に彼を通じて張作霖に妥協退讓の交渉を進め、同時に高士儁には開戰の中止を命じ、一方哈爾賓に出動してゐた鮑貴卿に至急吉林に來り接任せんことを電促するに至つたのであつた。

是に於て鮑貴卿は孟恩遠に對し長春に於て會見せんことを提議し、先づ參謀長黃變鳴を長春に派遣し張作霖の了解を得て、先づ各督軍は三省軍隊に停戰命令を出し、張作霖は京奉線皇姑屯驛に差押へてゐた高士儁の荷物九十五個を釋放し、高士儁は又招募馬賊に相當費を給して解散せしめ、金鼎臣一派をば大連に南下させて出動部隊を撤退することになつた。

孟恩遠と會見の爲め南下すべき鮑貴卿は、時恰も東淸鐵道從事員の同盟罷業あり、遷延數日、八月初旬漸く二個大隊の護衛兵を率る長春に至り、孟恩遠と會見し、順調に會議は進行して、鮑貴卿は孟恩遠一派の生命財產の安全を保障し、吉林軍の直隸移駐問題は寬城子事件の勃發により北京政府の拒絕する所となつたので如何ともするなく、他は殆んど無條件にて、孟恩遠等の吉林退去となつたのである。

翌日孟恩遠は鮑貴卿と同車して吉林に至り事務の引繼ぎを行ひ、僅かの隨員を從へて奉天に至り張作霖と會見して吉林獨立に就いて釋明する所あり、一泊の上天津に向つて去つてしまつた。高士儁も亦實兄高峻峰と共に、滿鐵の好意にて特別列車を買ひ切り、大連に亡命潛行し、かくて吉林事變も圓滿に解決し、張作霖の東三省統一は遂に完全したのであつた。

之に伴つて新任黑龍江督軍孫烈臣は督軍參謀長には、彼の楊宇霆と同罪と認められた丁超を起用し秘書長には督軍署參議袁金鎧を任用し、全省警務處長には前奉省警務處長宋文郁、財政廳長には東三省官銀號總辦劉尙淸を各任用し、奉天系の文武官を網羅して八月齊々哈爾に赴任し、只吉林省長としては郭宗熙の辭職により大總統徐世昌直系の一人たる徐鼎霖の任命を見たが、それも素とより吉林省に於て獨自の立場を有するものではなく、張作霖の東三省巡閱使は茲に名實共に備つたのである。

最後に自分は寬城子事件の日支交渉を略述する必要を認める。それはやがて當時の日滿關係の一面を物語るものだからだ。

此の交渉は九月に入つて駐支公使小幡酉吉と外交總長代理陳籙との間に談判開始され、日本側の要求條件としては(一)死者負傷者に慰恤金、治療費を與ること、(二)吉林軍の直接責任者を處罰すること、(三)當事者巡警等その指揮者を罰すること、(四)吉林軍の取締りを規定して今後の保障を爲すこと、(五)張作霖を奉天總領事館に出頭陳謝せしむること、(六)同事件に關し徐總統の發せる命令の寫を公使館に交附する事等で、此交渉は北京、奉天、吉林の三個所に於て各條に就き數次交渉され、十一月に至り漸く解決した。但し解決の內容は日支兩國官憲が日支親善上、之を一般に公表する時期に非ずとし秘密に附されてゐる。

第十二章　北滿と西比利亞

第一節　西比利亞の混亂と日本の出兵

大正六年三月（一九一七）露國に革命起りて以來露國は政治的に崩壞し、獨逸と單獨媾和を締結するに至るや、西比利亞の形勢茲に一變し全く秩序を失ひて宛然たる戰國時代を現出するに至り、群雄は四方に蜂起して各々その權勢を張らんとし、奸策を弄し、排擊を事とし、幾多の政府を組織するに至つた。その中最も早く西比利亞の自治を目標としてトムスクに政府を樹立したものはボターニンを主腦とする智識階級であつた。然し露國革命の本體たる所謂過激派の勢力はすでに該トムスク政府にまで侵入し、最初より內部的に不統一を示し來つた爲め、ボターニン、ウオロゴドスキー等の穩和派は皆辭職し、その殘黨はデルベルを推して初志を貫徹せんとしたが、間もなくイルクーツクは過激派の爲めに占領せられ、穩和派は遂に四方に解散逃走してしまつた。其當時一二ヶ月程は後貝加爾州に未だ過激派の勢力及ばず、その地方の政權は、ケレンスキー一派のエス、エルによつて把握されてゐたが、東方沿海州に於てはハバロフスク市既に過激派の爲めに政權を奪はれ、クラシノシチョロフ之が首領としてハバロフスク及びブラゴウエチエンスク間に勢力を握つてゐた。而も後貝爾州は過激派の武器を以て蜂起するに及びその政權は一と溜りもなく奪取され、反過激派の連中は東支鐵道哈爾賓方面に排難してゐた。そしてホルワット、ウオロゴドスー、デルベル等を中心として各その勢力の回復を計つてゐたが、內抗多くして物に成らず、從つて過激派に對抗して勢力挽回の行動に出ずるものなく、只日本軍の出動して過激派を掃蕩して呉れる事のみを切望してゐるに過ぎなかつた。只大正七年（一九一八）の初頭に當つて決然立つて過激派に對抗運動を起したのは、西に於てはセミヨノフが滿洲里に、東に於てはカルムイコフがハバロフスクに、その中間ブラゴヴエチエンスクにはモフがあつた。然しモフの勢力は甚だ脆弱で、カルムイコフもボクラニチヤナ（綏芬河）に至つて東支鐵道東端の番人となり、セミヨノフも滿洲里に在つて同じく東支鐵道西端の番人たるに過ぎなかつた。

當時チタ附近には將校團より成る白衛軍の一隊あり、イルクーツクに於ける殘殘の同志等と氣脈を通じ、滿洲里の反過激派軍と相應じて內外より過激派の勢力を一掃せんと企たが物に成らず、此の間に在つて免も角も勢力を得たのはセミヨノフ一人であつた。彼は大正七年（一九一八）二月自身哈爾賓に至り露國文武官に此際外國軍隊の助力を乞ふべきことを要求したが、ホルワットは實際的には何等の援助を與へなかつたので、セミヨノフは遂に自ら外國の援助を依賴するに至つた。之に應じて援助を約したものは日本と英國とで、日本は軍隊を以て英國は資金を以て夫々援助の實を擧ぐると同時に佛國も亦北京に在る大砲を貸與し、形式上聯合軍といふことになつたが、然し英國は本國に於ける內政上の關係からセミヨノフ援助を差控へることになり、彼が西進を敢てする時には斷然援助せざる

ことをセミョノフに通告したのであつた。よつてセミョノフは專ら日本の助力に信賴することとなり四月遂に二三千の兵を得て後貝加爾州の過激派に對し戰鬪を開始し、オノン河まで一擧に進出した。然し過激派の方には交通線を有する上に獨逸の俘虜ありて遂に戰敗し、七月支那國境内に逃れ滿洲里及び海拉爾の間で再擧を計ることになつた。

斯の如く西比利亞形勢の變化につれて、過激派の勢力と共に獨逸勢力の東漸の形勢が現はるるに及び、殊に極東に對する武力干涉漸く露骨辛辣を極むるものありし爲め、日本も亦國防自衛の見地より出兵の急務なるを感ずるに至り、之に對し英佛兩國の諒解も得るに至つた。然るに米國のみは未だその時期に非ずとして贊意を表しなかつた。これは大戰以來、露國と米國とは次第に接近し來り西比利亞鐵道及びその沿線に於て米人の活動するもの次第に多きを加へ來れる際なるを以て、日本單獨の出兵を許す譯には行かなかつた爲めである。

然し政治上及び經濟上に切實なる利害關係を有する日本及び中華民國は、出兵せぬまでも、之が對應策は直ちに之を講求する必要があり、殊に民國は反過激派の根據地となれる東支鐵道及びその沿線の治安は、之も一日も放棄するを許さない狀態となつたので、北京政府は先づ北京外交團の承認を得て何宗蓮、張宗昌を特派使となし、吉林督軍孟恩遠に令じて軍隊を出動し過激派の行動を取締らしむると同時に、在哈爾賓混成第十八旅長陶祥貴は、次の如き布告を發し、

東支鐵道の附屬地は露支兩國の特別協約により支那の委任に基き、露國は附屬地の行政を管理し、鐵道を經營せり。然るに或種の團體ありて之を奪はんとしつゝあり。此の團體の行動は支那の主權を侵害せんとするものなれば、支那は軍隊を派遣し、團體の行動を罰し支那領土内の内外人保護並に附屬地の治安維持の任に就かしめ兵を各地區に配置せり。各國在留民は此の際誤解の端緒を開くごとき行動なからんことを希望す。」

同時に吉林より第四旅（高士儐）を差遣して哈爾賓及び東支線一帶に亘りて分駐せしめ、東支鐵道側も亦獨力之を維持するの難きを知り、殊に米國が過激派政府と契約して鐵道隊百餘名を派遣し、その輸送管理權を收得せんとする形勢ありしを以て、東支鐵道長官ホルワットは東支鐵道の獨立問題を掲げて北京を訪問し、露國公使コダシエフと共に北京政府と協商する所あり、その結果郭宗熙を擧げて東支鐵道總辦となし、ホルワットは副總辦兼長官となり、理事としては顏世清（元吉長道尹）ウスツルゴフ（前交通次官）コルチャク（海軍提督）エゼルスキ伯、ブヂーロフ（露亞銀行總裁）外一名を擧げて茲に東支鐵道の自主獨立を宣言することになつた。

一方日本側に於ても北滿の擾亂は南滿洲鐵道の利害に大なる關係あるのみならず、浦鹽方面の朝鮮國境に於ても國防上緊要なるものありしを以て、七年三月下旬北京政府に向つて、日支兩國協動して敵國（獨墺）勢力の侵入を防止せんことを提議し、外務大臣本野一郎と日本駐在民國公使章宗祥との

間に次の如き公文の交換を爲した。

一、日本帝國及び民國政府は敵國勢力の日に露國境内に蔓延し、其結果將に極東全圖の平和及安寧を侵迫するの危險あらんとするにより、此の情勢に適應し且つ兩國が此次の戰爭參加の義務を實行せんが爲め行ふべき處置を速かに協同考量するものとす。

二、前項により兩國政府の合意を經たる後決定することあるべき事項を實行せんが爲め、兩國陸海軍此次の共同防敵戰略の範圍に付き協力を行ふべきの方法及びその條件は、兩國當局官憲は相互の利害問題に付き互に愼重誠實に隨時協議し、並に兩國政府により確定して時期を俟ち實行するものとす。

此の交換文に基き兩國の陸海軍委員は、北京に會合し、協定は六月中旬に調印を見た。然しこれは事軍機に屬するが故に公表するに至らなかつたので、各方面に於て種々なる猜疑が發せられ、或は本協定中には支那軍隊を日本軍隊の指揮下に置くこと、日本は支那領土内に於て、その欲する地點に要塞を建築するを得ること、日本は支那鐵道兵器廠を管理する等の規定ありと謂ひ、甚だしきに至つては日本は支那の財政を管理すること、日本は支那警察機關を組織すること、日本は兵器所要の原料を産出する支那鑛山を自由に採掘するを得ること、等を規定せりと云ふ者さへ生じたが、日本外務省は、悉く之を無根の報道であると公表し、且つ支那政府に向つて「共同防敵の爲めに日本軍隊の支那境内に在る者は總て戰事終了後を俟ち、支那國境内より一律撤退すべきことを聲明」したのであつた。斯かる間に浦鹽方面に於ける秩序紊亂は日を遂ふて甚だしく、四月には遂に在留日本人の生命財産に大なる危險を感ずるに至つたので、日本は先づ陸戰隊を上陸せしめ、英國も同時に陸戰隊の上陸を見ることとなつた。

既にして六月に至り聯合國は西比利亞方面に於ける聯合軍活動の必要を感じ、日本及び米國に出兵を慫慂し、更に七月に至り米國も遂に通牒を日本に送り、兩國の兵を浦鹽に出して之を占領し、當時突如として浦鹽に現はれ西進を續けてゐたチエック・スロバックの後方警備に當らんことを提議して來たので、日本は七月中旬回答を發して之に同意すると共に、別に若干の兵を西比利亞に送るべき旨を通じ愈々出兵に決し、八月二日遂に次の如き宣言書を發することになつた。

帝國政府は露國並びに露國人民に對する舊來の憐誼を重んじ、露國の速に秩序を回復して健全なる發達を遂げんことを衷心切望して止まざる所なり。然るに近時露國の政情著しく混亂に陷り、復た外迫を桎梏するに力なきに乘じ、中歐諸國は之に壓迫を加ふること愈々甚だしく、其威壓遠く極東露領に浸漸して、現にチエック・スロバック軍の東進を阻碍し、その軍隊中には多數の獨逸の俘虜混入し、實際に於てその指揮權を掌握するの事跡顯然たるものあり。

仰々チエック・スロバック軍は夙に建國の宿志を抱き、終始聯合列强と共同對敵するものなるが故

に、その安危の懸る所延ひて與國に影響する事尠しとせず。是れ聯合列强及び合衆國政府が同軍に對し多大の同情を寄與する所以なり。今や聯合列强は同軍が西比利亞方面に於て獨墺俘虜の爲め著しく迫害を被むるの報に接し、空しく拱手傍觀すること能はず、業に已に其兵員を浦港に派遣したり。合衆國政府も亦同じくその危急を認め、帝國政府に提議して先づ速かに救援の軍隊を派遣せんことを以てせり。是に於て帝國政府は合衆國政府の提議に應じて、其友好に酬い、且今次の派兵に於て、聯合列强に對し、歩武を齊ふして履信の實を擧くる爲速かに軍旅を整備し、先づ之を浦港に派遣せんとす。如上の措置を取るに方り、帝國政府は一意露國及び露國人民と恒久の友好關係を更新せんことを希圖するを以て、常に同國の領土保全を尊重し、併せてその國内政策に干渉せざるの既定主義を聲明すると共に、所期の目的を達成するに於ては政治的又は軍事的に其主權を侵害することなく、速に撤兵すべきことを茲に宣言す。

斯の如くにして日本軍は、浦港派遣軍司令官大谷喜久藏、參謀長由比光衛等を主腦として、浦港に上陸し、ハバロフスク方面に進擊するチエック軍の後援となり、更に滿洲獨立守備隊の北進ありて、反過激派軍は茲に大いに勢を得、各地に蜂起して過激派軍に抗し、七月初旬ニコリスクを占領せるチエック軍は、更に轉じて西の方イクルーツク方面に向ふことになつた。

一方セミヨノフ軍も亦チエック軍の蹶起と日本軍の出動とに勢を得て後貝加爾州に進出することになり、その數萬と稱せられてゐた後貝加爾の過激派軍も、いつしか四散し、一部は恰克圖及び黑龍江鐵道方面に逃れ他は良民の如く姿を變じて内地深く逃げ去つてしまつた。九月セミヨノフ軍はオロツンナヤに進み、チエック軍司令官ガイダ亦此地に來つて茲に東西反過激派の連絡成り、セミヨノフ軍は續いて知多に入つた。而て後貝爾の要地は日本軍第七師團に依つて占據され、第三師團の出動するに及んで之と交代した。而て黑龍洲ブレーヤ河下流方面は第十二師團により過激派の掃倒が行はれたのである。

第二節　反過激派の投落と日本

斯の如き形勢裡に西比利亞の各地方は、表面上過激派の勢力は驅逐されたので、茲に群小政府蜂起の形勢を馴致し、先づ浦鹽に在るデルベル一派は六月下旬早くも浦鹽政府を樹立し、ウオロゴドスキイは七月初旬オムスクに第二次西比利亞政府を宣言し、その他黑龍洲政府(ブラゴヴエチエンスク)、サマラ政府、ウラル軍事内閣等順次發表され、トムスク州議會も開院を宣言し、ホルワツトも亦クロデコーオにホルワツト政府を組織して、北京政府とも了解の上で閣員を任命し、自ら全露のデクターであると宣明しコルチャクを陸海軍大臣として、ブレシコフに代つて東支鐵道沿線の總指揮とした。之に對しセミヨノフ、カルムイコフ等は甚だ不平を抱き、コルチャックの下に來るを欲しなかつ

たので、當時英國の支援を得てゐたコルチャックは、之を以て日本の支援あるが爲めに斯くも反對するものであると爲し、一方デルペル政府とも互に反目する如き形勢であつた。故にコルチャックは斷然去つてオムスクに赴いたのである。

然しながら之等の諸政府は、內部的にも不統一を示すものが多かつたばかりでなく、各政府間に勢力の爭ひが猛烈を極め、就中西比利亞政界の三大勢力たるサマラ政府、トムスク議會の中心勢力たる社會革命黨及びオムスク政府の中堅たるオブラストニキとは互に幾度か衝突し、結局九月下旬のウファ大會の決議によりて西比利亞の各政府及び議會を解散し、當時最も機關の整つてゐたオムスク政府を全露政府とし主權行使者として、各政府各政黨より選出した五統領を置くことになつた。然しこれは單に表面上の妥協に過ぎず、裡面に於ける暗鬪は依然として變らず、互に相排擠するを事とし、浦鹽を逃走したるデルペルは社會黨の左派と氣脈を通じ全露政府を乘取らんとして、十一月遂に政變を勃發して社會革命黨は表面上沒落し、ウオロゴドスキイ一派卽ちオブラストニキの全勝に歸し五統領は廢止されてしまつた。此の時忽然として軍事獨裁官となり、西比利亞政界の表面に立つべき大立物となつたのは彼のコルチャックであつた。そしてウオロゴドスキイがその首相である。

然るに全露軍事獨裁官たるコルチャックに對し、西比利亞に於ける軍事的實權を握れるイワノフは忠實に服從すべきことを申出たが、セミョノフ及び沿海州のカルムイコフ等はコルチャック個人に對すると同時に其獨裁政治に反對し、兩州の獨立自守を宣言せんとし、黑龍州政府も亦之に倣はんとしチエック●スロバツクも亦コルチャック否認の態度を採つた。而てコルチャックの之に對する態度は全く壓制的にしてセミョノフに對しては國家的叛逆者として免職に付し、在イルクーツク第四西比利亞軍團長ウオルコフを以てその後任とし、ホルワットを東支鐵道長官に任じて、セミョノフ軍行きの軍隊並に必需品の輸送中止を命じたのであつた。然し、此の紛爭は主として日本軍司令部の調停によつて解決し、セミョノフも祖國復興の名に於てコルチャックの命に服することになり、セミョノフ自身は後貝加爾哥隆克州會に於て、大多數を以て後貝加爾哥隆克總兵長に任ぜられたのであつた。

斯の如くにしてオムク政府は兎も角も表面上全露政府としての形式を備ふることゝなつたので、過激派の存在を不可とする列强間にオムスク政府承認問題が擡頭し、日本も亦西比利亞共同出兵の趣旨を徹底せしむる爲めに率先して承認問題を提唱し、米國も亦從來の態度を一變して列强とその步調を一にする事となつたので、該政府が全露統一の際に聯合列强の希望を實現することを約せしめて、同時に各種の援助を徹底せしめんとするに至つた。然るに英米等は西比利亞に於ける日本勢力の擴大と延いて全露政府に對するそれとの關係から態度は自然決定的ならず、佛國巴里に於ける對獨講和條約の調印前後より該問題は頗に難澁の色を顯はし、之れと平行して、穩然たる列國の助力によりて形成され、しかも未だ獨立の域にまで育成してゐないオムスク政政は、次第にその基礎の薄弱を示し來り、

從つて民心も亦離反して西比利亞軍の士氣は著しく弛廢し來つたのである。その結果遂に過激派軍の爲めにウラル戰線を奪回され、黑龍州沿海州等各地の過激派も亦之に應じて勢を回復し、オムスク政府は形勢日々にその非を傳ひ、遂に復た起つ能はざる窮地に陷りてイルクーツクに退却するの止むなきに至つた。而かも歐州方面には北露英軍の徹退が開始され、イルクーツク、トムスク間に在りし三萬のチエック軍も亦陸路歸還が不可能となりし爲め浦鹽より海路歸還することゝなり、米國は、此のチエック軍の歸還を以て、すでに西比利亞出兵の目的を達したるものなりとし、日本軍に向つて西比利亞撤兵を通告し、且つ鐵道管理に付いて日本兵の協力乏しきこと、及び露人就中セミョノフ軍の運輸妨碍はむしろ日本の默許に出ずるものなるを以て日本軍に於て之を抑制せられたきことを要求し來る始き始末で、西比利亞軍の形勢は次第に非を加へ、大正八年(一九一九)十一月にはイルクーツクも過激派派の爲めに追はれ、全露政府は茲に瓦解し、コルチックは捕ひられて死刑に處せられてしまつたのである。しかも大正九年(一九二〇)二月米軍の西比利亞撤退が實現され、日本は一個旅團を增兵して單獨に之が守備に任ずることゝなる頃より過激派の勢力は益々火の手を擧げ、浦鹽もニコリスクもハバロフスクもブラゴヴエチエンスクも悉く赤色化して、それ等各地方の政權は一樣に勞兵會に移り、沿黑龍州軍管區司令官ロザノフも之に多大の讓步を爲すべく余儀なくされ、やがて過激派首領アンドレーエフ、シチバネンコ等の爲めに追はれて日本に亡命し、ニコリスクに開かるべき聯合ソヴエト會議は黑龍州沿海州、サハリン州、カムチツカ州の最高主權たらんとするに至り、且つ三月初旬には歐露政府指導の下にウエルフネ政府が組織され、反過激派としては只チタのセミョノフ只一人となつてしまひ、而てその全責任は日本軍の頭上に落下し來つたのである。

茲に於つて日本政府は、大正九年三月下旬次の如き聲明を發し

西比利亞出兵はチエック軍の救援を目的としたるものなるが故に同軍の引揚げにして事實完了せば日本も亦撤兵の擧に出ずるものなるも、日本の西比利亞に對する地理的關係は他の列國と自らその趣を異にし、特に極東西比利亞の政情は直ちに鮮滿地方に波及するのみならず、西比利亞に在る多數居留民はその生命財產の安全を期する能ざるを以て、今遽かに撤兵を斷行するを能はず。

且つ浦鹽派遣軍司令官大井成元は(一)日本軍の駐屯に必要なる諸般の事項に關し支障なからしむこと(二)日本と露國との間に締結したる諸條約は、何れの時のものたるを問はず、之を尊重すること(三)日本軍務を補助するものに對しては、その自由を束縛せざること(四)滿鮮地方に對し日本軍に危險を與ふべき團體の行爲を防遏すること(五)直接日本及日本軍の存立を脅威する言動を抑制すること、(六)日本居留民(朝鮮人も含む)の生命財產を安固ならしむること、等の六項に互り露國當局と協議し、四月初旬之が調印を見たのであつたが、然るに在浦鹽の革命軍は不意に日本軍に對して攻勢を取つたので、日本軍は直ちに之に應じて立ち、在浦鹽革命軍全部の武裝解除を爲し、海軍第五戰隊

も亦在港露艦の武裝を解除し、これと同時に第十四師團はハバロフスクに於て、戰鬪二日の後之を黑龍州左岸に擊攘し、ニコリスクに於ても亦露軍の大部分を武裝解除し、ウゴリナヤ、シコトワスラヴンカ、ノウキエフスコエ、バラバン等すべて駐在露軍の武裝を解除してしまつた。

斯くて日本軍は派遣軍參謀長高柳保太郎を委員長として、日本軍の西比利亞駐屯に關する露國側の了解を得んとして臨時政府に向つて商議を開始し、先づ露軍の武裝解除に付いて了解を得、次いで將來に起り得べき一般の諸問題を審議する爲めに兩國委員會を組織し（露國側委員長ッニットリン）四月下旬次の如き議定書の調印を見たのであつた。

第一條　日露兩軍司令官は速に州內各地に於ける兩軍間の戰鬪を停止せしむること、

第二條　露國武裝團體は、如何なる政治團體に屬するものたるを問はず日本軍と同時に存認地域內に存在するを許さず、

一、日本軍隊の駐屯する烏蘇里鐵道幹線の端末外及び鐵道の東側北側三十基米、西側及南側より支那朝鮮の國境に至る地域、

二、烏蘇里鐵道「スウチヤン」線（蘇城）の端末及其兩側三十基米、

第五條　指定地域外に撤退せる軍隊は後貝加爾及び樺太州內に侵入するを許さず、

第八條　鐵道守備は聯合國鐵道管理協約に基く聯合國代表武官會議の結果に依る。

然るに沿海州ニコラエフスク地方の狀況は三月初旬以來益々險惡に赴き、遂に一大慘事を惹起し日本守備隊は殆んど全滅し、數百の在留日本人が慘殺されしものゝ如く、交通杜絕の爲め的確にその眞相を極むることが出來なかつたが事態頗る重大なりとして、日本政府は取り敢ず居留民救援保護の目的を以て一部隊をニコラエフスクに派遣することに決定し、當時尙は同地方は結氷期なりしを以て派遣隊は四月下旬、一時北樺太アレキサンドロフスキー附近に上陸して之を占領した。而て六月初旬日本臨時海軍派遣隊はニコラエフスクに到着し、又デカストリー港より上陸したる多門次郎の率ゐる一技隊も同時に、尼港を占領して居留民の保護に任じたのであつた。

第三節　過激派勢力の擴大

極東露領に緩衝地帶を設置し、日本と過激派との衝突を回避せんとする方策は西比利亞に於ける反過激派の沒落以來問題となり、歐露政府は、之れにより外患を除去すると共に、國內の統整を行はんとし、日本も亦之を以て撤兵の口實とし內外に對して西比利亞出兵を有意氣ならしめんとしたのである。

抑々日本軍が初めて、緩衝國設置に關する折衝を行ひたるは、後貝加爾西方に於ける停戰問題に關聯して、ウエルフネ・ウヂンスク政府（東西比利亞獨立共和國）と商議を開始せる時にして、その提議はウエルフネ政府より日本軍に對して爲されたものである。實に同政府にとりて第一の障害たるはチタ附近に駐屯する日本軍並にセミヨノフ軍に外ならぬが故に、すでに大正九年（一九二〇）三月中旬に於て恰かもセミヨノフ軍に合同せるウヲイッエホフスキーに對し西方過激派軍との間に、セレンガ河を

境界として中立地帶の設定を條件として妥協を申込み來り、次いでチタ市ウエムストヴオ市役所購買組合に對し、セミヨノフを癈してウエルフネ政府を承認せんことを慫慂した。更に日本軍に對しては三月中旬チェック代表を介して歐露政府の媾和提議を傳へ、且その前提としてイルクーック過激派軍と日本軍との間に休戰を行はんことを提議し來つたのである。然し此の提議には何等誠意の認むべものがなかつたので、日本軍は之に應ずることなく、四月中旬過激派軍は再び攻勢的態度を採り日本軍との間に戰鬪を開始するに至つた。而て日本軍が到る處に過激派軍を擊破するや、彼はその鋭鋒を避けん爲め或は飛行器により或は英國士官を通じて宣言書を送り、ウエルフネ政府は日本軍を敵とするに非ざるに拘らず、日本軍が攻勢的態度に出ずることを非難し、且つ對セミヨノフ戰鬪の爲めその進路を解放せんことを要求し來つた。然し日本軍は之に對しても何等の回答を與へなかつたのでウエルフネ政府軍司令官エイケの名を以て日本軍司令官に向つて再び抗議書を提出し「革命軍は自由國民に敵意を有する反革命軍を西比利亞より掃蕩するに在りしも、日本軍に對しては何等の敵意を有せず、革命軍が知多に出動の際誤解なからんが爲め、知多以東に日本軍を撤退せしむるか、若くは反革命軍に對し何等の援助を與へざる旨を聲明せられんことを請ふ」て來たが、日本軍は之に對しても亦何等の回答を與へなかつたので、ウエルフネ政府は更に全權外交者クラスノシチョコフの名を以て五月初旬英國武官に托し、歐露過激派と外國との緩衝地帶として獨立極東共和國の組織を希望し、且つウエルフネ政府は地理的及び經濟的の情況並に歐露共和國の中心より隔絶せるを以て極東（貝加爾より太平洋に至る間の後貝加爾州、黑龍州、沿海州、樺太州、カムチャッカ州及東支鐵道租借地帶を含む）に獨立共和國の組織を宣明し、且該共和國は民主政體を執り國民の選擧せる代表者により政治を行ふべきものとし、其他の政綱を五ヶ條に亘つて公表する所があつた。

茲に於て日本政府は浦鹽軍司令官に對し、後貝加爾露軍と浦鹽臨時政府との間を妥協しめ、之により西方より侵襲し來る過激派軍との間に緩衝地帶を設置するの狀勢に指導すべき旨を訓令し、かくて浦鹽軍司令官は五月中旬を以て宣言を發し、日本は何等領土的野心を藏するものに非ず、若しチェック軍の歸還終了せんとするに當り、極東露領の現狀安定し、鮮滿地方に對する危險の除去せられ、日本居留民の生命財產の安固なるべき保障の立つに於ては、日本軍は嬉んで撤兵すべきことを明言し、且つ極東三洲にして一自治行政地域を形成し輿望に副ふ可き政治組織の實現せられんことを要望した。之に對しウエルフネ政府は日本軍に回答を致し、中立地帶に關しては勞農露國政府の了解の下に赤軍をしてセレンガ河より東方に追擊せざるべしと爲し、且つ日本軍の提議を容納すべきを以て一定の日時場所に双方代表者の會見を冀望し來つたので、日本軍の委員は五月下旬ゴンゴタ驛に於てウエルフネ政權代表者と商議したのであつた。此の際日本軍の要求せる所は停戰條件として知多とウエルフネ市との間に成るべく廣き中立地帶を設定し、相互侵犯せざらんとするに在つたがウエルフネ政府

は之に對し何等具體的成案なきのみならず、日本委員の質問に對しては殆んど明答を避け、第二回の商議に於て漸く知多西方約二百五十露里以内並に、スレーテンスク及クニンガ北方二百乃至二百五十露里以内を中立地帶とし、ウエルフネ市の政權を知多に移す場合日本側は之を妨碍せざる條件を提出した。然しながら詳細の事項に亘つては相互の意見に相違あり有耶無耶の中に物分れとなり、斯くて緩衝地帶の設置は一頓挫を來したのである。

翻つて過激派軍及びセミヨノフ軍の情況を見るに、沿海州革命軍は舊コルチャック政府軍及びバルチザンより形成し、在浦鹽革命軍事會議の統率する所となつてゐた。バルチザンと舊政府軍とは看同して行動しつゝあつたが、相互に意志の疏通を欠き特に舊政府軍に屬するもの及び新に徵集せられたるものゝ中には過激派たるを本意とせざる傾向あり、バルチザンは又掠奪不倫の非行多く、後貝加爾方面の露國軍は歐露過激派軍と一身同體にして純然たる共產主義のものであつた。而てセミヨノフ軍は混合分子より成立し、亦暴虐を逞しふする傾向あり多く倚賴的性質のものであつた。斯の如く、當時の西比利亞は此の薄弱なるセミヨノフ軍を除き悉く過激派化してしまひ、日本出兵の理由たる過激派の東漸を阻止せんとする目的は全く失敗に終つたので、日本に於ける輿論は西比利亞撤兵の實現を叫ぶこと益々激しく、日本政府も亦帝國議會の開會を間近かに控へてゐた爲め、七月初旬遂に西比利亞派遣軍の一部撤退を聲明し、ウエルフネ政府との中立地帶設定に關する交涉斷絕、對議會策及駐兵經費等の理由に基き、後貝加爾方面よりの撤退を行ふことゝなり次の如き宣言書を發表した。

本年三月より五月に亘る尼港虐殺事件は帝國政府の威信に關するものなるを以て、必要なる善後の處置を執らざる能はず。然れども目下西比利亞には交涉し得べき政府なきを以て、將來本事件の滿足なる解決を見るに至るまで、薩哈嗹州に於て必要と認むる地點を占領すべし。後貝加爾方面に關してはチエックスロバック軍が同方面より全然撤退せるを以て、同地方より撤退すべし。但し浦鹽方面は朝鮮に對する警務排除せられざるのみならず、却而惡化せんとする傾向あり、且多數の本邦人同地方に在留し、又パパロフスクは薩哈嗹州に通ずる要衝なるを以て、之等の地方の安定を得るまで止むを得ず相當數の軍隊を止むべし。

此の聲明に基く第五師團の後貝加爾撤退はウエルフネ政府のチタ前進を直ちに招來すべく期待されたが、その事なく、只聲を大にして極東統一政府の主人公たらんと努むるのみであつた。然しチタに於ては過激派の勢力次第に振張し、セミヨノフの獨裁政治に反抗の聲を擧げ、カツペリー軍中にも之に呼應するものあり、爲めに政權の一部は先づ地方議會に移り、やがて後貝加爾國民議會に移り、セミヨノフは或は排外的宣告を出して民心の歸向を迎ひ、一方、浦鹽政權と妥協を策して、後貝加爾總指揮官極東哥薩克總アタマンの位置を保留せんと努め、又南露なるウランゲル政府を承認してその隷下に屬するを發表したりした。

又ヴラゴヴエチエンスクの過激派政權は常に之を統轄すべき中心人物なき爲め、その態度動搖極まりなく、最初は浦鹽を以て統一政府とするを有利とするものゝ如く、その代表を浦鹽に派遣しつゝあつたが、日本府の撤退と共に急に浦鹽に派遣せる代表者を引上げウエルフネ政府に派遣することゝなり、而て浦鹽政府方面に於ては、その共產黨員の勢力擴大となり、極東の統一をウエルフネ政府をして爲さしめんとするに至り、議會も亦之を承認したのであつたが、浦鹽政府は之に同意せず、專制政治、共產主義政治の何れも認めざる旨を聲明した、然し政府部內に於ける共產黨の勢力旺盛となり、非共產黨閣員の脫退を見るに至つた。

その他ハバロフスクに於ても、八月市會は浦鹽政府に對し反對を宣言したが、日本軍の仲裁により何等故障なく浦鹽政府より派遣せる代表者に政權を讓與した。而て以上の四政權は九月上旬より下旬に亘り代表者會議を開催し極東統一問題を討議せる結果、浦鹽、ウエルフネ、ヴラゴヴエ、チタの各政權は平等の權利を以て更に協議に入るべく憲法會議の召集に一致し、ネルチンスクは知多に合併し、ウエルフネ政府は非公式に自己の優越權を取消し、之等各代表者は相一致してセミヨノフを排除せん形勢となつて來たのである。

斯くて日本政府は更に九月中旬、ハバロフスク撤兵を浦鹽派遣軍司令官の名を以て聲明し、ハバロフスク駐劄第十四師團は十月ハバロフスク方面を撤退したのであつた。

第四節　東支鐵道を中心とする紛擾

曩きに東支鐵道一帶に據る露國の勢力は、ホルワットを主腦とし支那側の後援の下に過激派に對して獨立の組織となつたことを述べた。これに聯合軍の西比利亞出兵と共に東支及西比利亞鐵道の管理問題が米國より提議せられ、大正八年一月、先づ日米間に意見の一致を見、支那及び英、佛、伊等も之に贊成し、東支及西比利亞鐵道監理協約案の成立し哈爾賓に技術部が設けられ、米人スチーブンその部長として就任した事をも書き添えて置かねばならぬ。

然るに大正八年（一九一九）七月より八月に亘り哈爾賓及東支南線に於ける同盟罷業勃發し、當時吉林獨立の事ありて北滿の物情騷然たるものありしを以て遂に沿線司令官ブレシコフの戒嚴令施行となり、民國政府に於ても沿線武力の充實を計らんとして八月中旬特に哈爾賓に東省鐵路護路軍總司令部を設け、吉林督軍鮑貴卿を東省鐵路公司督辦兼護路軍總司令に任じ、その下に哈滿（滿洲里）哈綏、（一面坡）哈長（哈爾賓）の三司令部を設け、約二個師團の兵を全線に配置し沿線守備の實推をその手中に收めたのである。支那の此の行動に付いては英米兩國の了解ありしは勿論にして、殊に米國は東支沿線に於ける米國軍の撤退が、その管理をも放棄せざるを得ざるに至つたる結果、或は日本にその管理權が移轉するやも知れざるを恐れ、支那に之が回收を使嗾した形跡も認めれらる。以來支那の態度の意

外に强硬なるは、その原因の一を茲に見出し得るのである。見よ、民國九年一月ウエルワヱ政府成立して西比利亞に於ける反過激派の勢力が沒落し、東支鐵道地帶が再び露國の他の部分と聯絡を絶たれ孤立の地位に陷るや、ホルワットは東支鐵道沿線に於ける露國民に對する國家の全權を保持する旨を布告したるが、之に對し護路軍總司令鮑貴卿は一月下旬各國代表者に向つて次の如き照會を致した。

一、東省鐵路は完全に中國の領土に屬し、同時に一領土の主權の下に、第二の國家が統治權を施行するを許さず、

二、ホルワットの職務は鐵道坐辦にして鐵道職員を以て國家統治の權能を負擔することなし、

三、鐵道條約に案照し會社露人及び沿線居住の外國人は應に中國により完全に保護せらるべきものなり、

而して張作霖は北京政府に對して東支線利權回收を建議し、北京政府は之に基いて國防會議を開きやがて鮑貴卿をして二月初旬ホルワットに對し(一)東支鐵道管理權の讓渡し(二)鐵道地帶の露國守備軍の撤退(三)鐵道沿線地區に於ける露國警察權の撤廢を要求せしむるに至つたのである。此の會議に與るものは鮑貴卿、ホルワットの外、技術部長スチーブンス、黑龍江督軍代理、鐵路交涉總辦馬忠駿、賓江道尹董士恩、護路軍司令張煥相等にして、行政權の讓渡しに關してはホルワットの强硬なる反對ありし爲め成立しなかつたが、東支鐵道の組織は之を變更し(一)本社を哈爾賓に設け總裁の下に露國人五名支那人四名の理事を設け、支那側理事は從來顏世清一名なりしを、王景春（交通部特派東鐵技術代表）董士恩、何守任（駐哈東鐵督辦公所參贊）の三名を增加し（二）鐵路沿線に支那は警察署を設けて露國警察を協助することとなつたのである。

此の間支那側の過激派利用策は著々その効を奏し、遂に三月中旬の哈爾賓に於ける革命黨派の聯合大會はホルワットに對し、其政權を臨時政府に交附すべしとの最後通牒を發するに至つたが、ホルワットは此の擧が支那側の使嗾によるとの噂高かりし爲め大いに憤慨して敢て屈しなかつた。茲に於て鮑貴卿はホルワットに向つて軍事行政を彼一個の掌中に收めたる專制の結果なりとして、その政權の讓渡しを要求し、ホ氏の回答を待たずして武力を以て罷業委員會本部を占領し、赤旗を徹して五色旗を以て之に代へ、且つ露國の軍衙兵營を襲ひ、又街上の民警を捕へて否應なしに武裝を解除し、家宅搜索を敢行して武器を押收し、同時に次の如き宣言を發したのである。

中東鐵路は中國領土內に存す。我が領土主權の下に他國統治權の行使を許さず。即ち安寧秩序を紊り同鐵道の運行を妨害する露國の政爭を我領土に移すを得ざる旨一再ならず宣言せり。然るにホルワットはその政權を把り、政策遂行の爲め軍警を利用したる結果露國勞働者階級は同盟罷行を聲明し赤旗を揭げ茲に政爭は熾烈となれり。予は中國主權の擁護及鐵道運行の圓滑を期する爲めホルワットに對し速かに中東鐵路附屬地內に於ける其政權を捨て、因つて以て中國をして條約上の義務を

履行せしめんことを提議せり。軍器等に至つては責任ある予の代表者之を保管すべし。右と同等に予は其の職責上、露國の政黨若くは個人が政治的目的を以て鐵道業務に干渉すること能はざる旨を聲明し、沿線住民に對し各其生業に安せんことを希望す。

之と同時に一方哈長司令官張煥相は監禁同樣のホルワットに對し政權讓渡しの膠詰談判をしたる末次の如く協定を遂げ、

一、政權を鮑貴卿の代表者に讓渡すこと、

二、露國兵を解散せしむること、但し之に伴ふ經費は北京政府に於て支拂ふこと、

三、支那は東支鐵道沿線警備行政の一切に任ずること、

四、將來露國人に對する問題は浦鹽政府に代表者セフチエンコ（沿海州パルチザコの首領）の到着を待つて協定すること。

斯の如くして十二年來、東支鐵道に在つて王者の如き權威を振ひ居たりしホルワットは單に一鐵道會社としての東支鐵道重役たる事にその權限を縮少せられてしまつた。而て哈爾賓露國總領事ボボフがホルワットの後を繼承せんとして「爾今沿海州自治會の臨時政府と完全なる協調を保ち、東支沿線露國民の生命財產其他民權の保護並に諸官廳に對する指揮に任すべき」旨を告示したるが如きは、單に領事として公法上の權利を行使するものに過ぎずと支那側より抗議され、如何ともするなく、東支沿線の武裝解除はかくて見事に成功したのである。

之に關しては歐露勞農政府が東支鐵道附屬地帶に於ける反過激派露人掃滅の爲に、支那を利用せんとしカラハンの名を以て北京政府に次の如き通牒を發したことが興かつて力あつたことは爭はれぬ。

即ち

勞農政府は支那國民をして他國の欺壓より免かれしめんが爲めに、露國帝制時代支那滿洲及びその他の地に於て侵略手段を以て獲得せる土地は悉く之を放棄し、該地人民にして何國に屬し何種の政體を採らんとするもその自由撰擇に任せしむべし。此の外庚子賠償金、東支鐵道鑛產森林等各種權利及び露國帝制政府、ケレンスキー政府、土匪ホルワット、セミヨノフ、露國軍人資本家の取得せる特權も亦悉く之を支那に還付し何等の報酬をも受けざるべし。然るに前露帝國の駐支公使、領事、及び各役員等は日本及協商國の援助を藉りて今尙ほ駐紮國に安居し共に支那國民を欺蒙しつゝあり。支那國民は宜しく之を明かにし斯の如き詐欺の徒を國外に放逐するを要す。

尙ほ其他露帝國の曩きに獲得せる各種特權、露商の支那に設立せる一切の工廠及露國官員、牧師或は委員等が支那法廷の審判を受けざりし特權等亦皆之を放棄し、勞農政府の全權大使が支那國民と往來し之によつて發生せる特別事情の外、爾後支那に於ける一切の法律及權力は純然たる支那國民の法律及權力に歸し、其間絕對に第三者の法律及權力を混入せしめざるべし云云。

越えて八月旬下極東政府代表ユーリンは北京に至り、大體此の通牒の趣旨により北京政府と折衝する所あり、北京政府も亦顧問シンプソン等をして東支鐵道附屬地帶に派遣し利權回收策を計劃せしめ、聯合國技術委員の了解を得て（一）東支沿線並に松花江及びその沿道の安寧秩序の維持上警察組織の改善、清鄉軍隊の編成（二）日支軍事協約廢止（三）露國代表禮遇停止（四）東支沿線司法權の回收（五）鐵道區域の市街行政權の回收（六）東支鐵道附屬の特權を停止し單に普通營利會社と改むること（七）ホルワットの排斥（八）通信機關の回收等を立案し來つたので、九月下旬遂に先づ駐支露國公使及領事等使臣の公式待遇を停止する旨を布告し、露人に對する治外法權の撤廢を斷行し、且つ佛國にその大部分の資本家を有する露亞銀行と、十月新たに左記契約を締結したのであつた。

第一條　東支鐵道會社は支那政府出資各款同價額（五百萬兩）の鐵道券を支那政府に交付すべし。該債券の性質は別に公文を以て明すべし。

第二條　董事會及び董事九人の中督辦以外に支那政府は支那人董事四人を派出するを得、若し露支董事の投票數が相同じき時は督辦は其固有議決權の外更に採決に加はる權利を有す。

第三條　理事會法定數は最少七人とす、一切の議決亦必ず七人全部の同意を得て効力を生ず。

第四條　支那政府は稽察局定員五人の中支那人稽察員二人を選出するを得、その總稽察は此の五人中より選擧す。但し支那人に限る。

第五條　鐵道管理上の便宜か顧慮し露支兩國人は公平なる支配及同等なる待遇を受くべし。

第六條　會社は今後總ての權利及び職務を嚴重に商業範圍内に限定し、政治に關する事項は一切之を禁止すべし、支那政府は隨時嚴重に取締ることを得。

第七條　光緒二十二年七月（一八九六年九月）締結せる露支東清鐵道會社合辦契約及會社章程にして本契約に抵觸せざるものは均しく有効とす。

之と同時に北京政府は大總統令を以て、露國政府の東支鐵道に有せる權限を北京政府に於て代つて之を行ふべきことを布告し、露國統一後新たに辦法を協定し、協議成立の日を以て管理終局の時と爲すべきことを附加したのであつた。而て此の東支鐵道地帶に於ける露國特別裁判權に就いても、司法次長張一鵬の調査により之を回收することゝなり、十月上旬東支沿線に於ける露國裁判所の業務執行を兵力を以て中止せしめ、下旬東省特別區域法院編制條例を發布し、十二月地方、高等の兩裁判所を設立し、之に續いて、附屬地の行政權を回收せんとして、民國十年二月初旬突如として董士恩を東省特別區市政管理局長に、馬忠駿を同副局長に任命し、東支鐵道廳の民政部は之を廢止し、警察事務は、同じく董士恩を處長とする特別區警察處に於て之を行ふことになつた。又沿線に於ける露國郵便局も之を閉鎖して支那側に於て之を行ふことゝなつた。斯の如くにして東支鐵道は純然たる營利會社となり、新長官としてはオストロモフ就任し、顏世清の代りに袁金凱が任命され、ホルワットは宋小濂の抗議により會社代表者たる名稱を失ひ單に顧問たるに止り、茲にホルワットの勢力は根抵より奪はれてしまつたのであつた。

第五節　呼倫貝爾獨立取消

西比利亞の混亂より東支鐵道には完全に支那の勢力侵估し、露國の勢力は殆んど北滿より驅逐され、歐露勞農政府も未だ外部的に發展する餘猶を示すを得ざるに至り、彼の露國の後援により自主區域となつてゐた呼倫貝爾も騷亂の難に堪え難く、恰かも支那側が、日支軍事協定により滿洲里方面に增兵したるを以て、茲に黑龍江督軍孫烈臣に向つて自主取消を申出で來つた。

仰々呼倫貝爾は黑龍江に未だ省治制の施かれざる以前は齊々哈爾等七城と等しく副都統一員が設けられて八旗駐防の地となり、達呼黑、鄂倫春、新陳巴爾虎、額魯特の五大部落に分ち、各々總管を以て之に臨んでゐた。

宣統初年之を民治制に改め呼倫兵備道（海拉爾）を設けて全境を直轄し、呼倫廳、臚濱府及び吉拉林設治局を設けて黑龍江省內に編入せられたのである。

然るに民國革命に際し、露國人は之を煽動して、庫倫の獨立と同時に呼倫をも獨立せしめ陰に陽に之が後援となり、支那側が之を討伐せんとするも途中興安嶺の境するあり、その唯一の交通路たる東清鐵道は露國側の所有にして、支那國軍の輸送を許さず、かくて獨立の狀態に在ること四年の久しきに及んだのである。

かくて民國二年に至り、露國は之を完全に露領內に編入せんとして種々劃策する所があつたが遂に成らず、民國四年（一九一五）十一月露支間に呼倫條約（秘密條約）を締結して之を特別區域と爲し、支那は呼倫貝爾五人の總管及び三品官銜を有するものに就いて副都統を任命し、各省の長官と同一の權限を與へ、此地方の諸稅はすべて此地方の費用に支出し、又此地方に騷亂が起り、地方官憲に於て鎭定する能はざる場合は、支那政府は露國政府に移牒したる後、出兵するを得ることゝなつた。

然るに翌民國五年巴布扎布軍が此の地方に起り、呼倫地方は散々に蹂躪され、副都統勝福は避難逃走する等の事があり、此の爲めに呼倫地方の人民は一樣に支那側統治者の來任を臨む樣になつて來た。而かも露國革命の勃發以來は敗兵潰卒の逃入するもの多く、支那側も之に乘じて呼倫地方に黑龍江騎兵を派して國境の鎭壓を爲さしめたので、茲に呼倫貝爾の自主取消が實現することになつたのであつた。

要するに東支鐵道と共に北滿に於ける支那側勢力の振張にして、日本軍の後貝加爾進出も之に與つて力あつたことは爭はれぬ。

第六節　琿春事件

間島及琿春一帶に居住する鮮人は約三十萬と稱せられ、朝鮮各地方の各階級を通じて移住し來れるものにして、而かも日支官憲の間に介在して何れよりも完全なる保護取締りを受ぐる能はず、徒らに

嫉妬排撥を事とし、加ふるに日韓併合の事ありてよりは、併合に不平を抱ける徒の移住し來りて排日の氣勢を煽動するや、怨嗟失望の中に生活せる住民は之に共鳴して、爾來排日の氣勢大いに昂り、支那官憲及外國宣教師の庇護下に政治教育及宗教の各方面に亘り諸種不穩の密謀を運らして止まなかつた。此の時より間島及琿春一圓は全く排日者輩の巣窟と化し不穩の空氣は全地方に漲り、殊に日本の西比利亞出兵以來は、浦鹽方面に在りし、鮮人獨立運動武斷派の逃入し來るもの多きを加ふるに至り、惡化の度が次第に濃厚となり來つたのである。

然るに支那官憲に於ては彼の日支條約による土地商租の實施が、三十萬移住鮮人の去就に關するこゝなるのみならず、日支の紛糾は必ずや此の移住鮮人を中心として惹き起さるべきを豫測し、對鮮人政策に於て頻る積極的となり、延吉道尹陶彬は或は諭告を發し、或は劃一墾民教育辦法を制定して間島の學制統一を計り、又管下鄉社の廢合を行ひ、從來統監府時代に日本官憲より任命されたる各鄉社長を淘汰し、親支鮮人を傘下に集め、一面之等鮮人をして極力歸化運動を爲さしめ專ら鮮人の懷柔策に腐心する所があつた。

然かも鮮人獨立團が跋扈し始め、やがては森林地帶の一角に兵營を築造し堂々として部隊的行動を執るに至るや、支那官憲（特に吉林省長徐鼎霖）は之が取締りに關して極めて不撤底にして却つて彼等と苟合妥協せる形跡を示し、實際上の責任者すらも、陽に鎭壓を行ひ陰に同情を表し、彼等を保護すべき事を密令し、殊に延吉混成旅長たりし孟富德及び元の延吉道尹張世銓の名によりて發せられたる密令の如きは「租國回復の行動に對しては表面的干涉のみ爲して裏面に於ては不干涉主義を採らんとす、若し糊塗的取締りをも之を爲さゞるに於ては日本官憲より不斷の交涉あるべし、屢々公然布告して各軍警に不逞鮮人團の搜索逮捕を命じたるは是れ日本を瞞着せん爲めなり・若し斯くせざれば、日本が諸種の奸計を畫すを恐れたればなり、故に各人に不逞鮮人を搜索逮捕すべからず」と謂ふて鮮人獨立團の志士的夢想者を滿足せしむる如き方策を執り來つたのである。

然しながら翻つて支那官憲側の立場を考慮する時は深く同情すべき事由もあるのである。何となれば間島の土地たるや、支那領には相違なきも、殆んど大部分の住民は鮮人に占められて居るので、之が統治に關しては鮮人に同情するの態度に出で、日本に對抗するのでなければ鮮人に對して實際上の取締權を有する日本官憲に對してその立場がなくなる。又邊陲の間島方面に治安維持に要する兵備を整ふる事は、支那政治家が政治勢力の唯一條件たる兵力を割くに在るを以て容易に斷行することは出來ない。而かも間島は日本より目して朝鮮統治の禍根であるが、支那側に在つては邊土の地の爲めに至難なる外交問題の惹起するを嬉ばない。加之地方官及軍隊が親日的傾向を示すに於ては、支那に於て排日熱の高調しつゝある當時のことだから、中央政界と同樣自已の地位を失ふ惧れがある。少くも表

面的には努めて排日的態度に出なければならぬ苦衷があつたのである。

然しながら之等排日鮮人をして武力的團結を得せしめたのは實に西比利亞の混亂と過激派の東進であつた。過激派と鮮人とが日本に對して共通の立場に在つたことが、相互に利用し、又さるゝ事となり、沿海、黑龍兩州には鮮人の歸化して守備隊に加はるもの多く、大正九年五月頃には、間島大韓國民會(會長具春先)は上海臨時政府と呼應して、過激派との間に士官の養成、武器の準備等に關する契約を爲し、又在西比利亞なる大韓軍政署及大韓新民團は過激派と共同動作せる鮮人と聯絡し、その援助によりて銃器を充實し、益々勢力の增大に努め、大韓國民會の如きは盛んに壯丁の軍事調練を行ふに至つたのである。

斯くの如くして勢を得たる鮮人等は大正九年五月遂に間島日本總領事館の一部を燒き、之を手始めとして屢々豆滿江を越えて朝鮮境內に侵入し、多數の日鮮人を殺害し、掠奪を爲す等强暴の度次第に激しく、遂には各地に兵舍を設け壯丁の徵募教練を爲して、その基礎を固め一擧にして朝鮮境內に武力進擊せん情勢を示し來つたのである。

是に於て日本政府は支那官憲に之が取締を要求し、且つ警察官を間島各地に增派して警戒に任せしめたが、上述の如く支那側は此の鮮人暴虐の擧を否認して何等具體的取締を爲さず、日本側が强硬なる交渉を爲すに至り漸く、徐鼎霖の免職されし九月上旬、吉林より兵を間島に派遣し鮮人討伐隊を組織したが、その司令孟富德は上述の如く反つて鮮人團と苟合するもゝ如く、かくて鮮人の暴虐は各地に慘害を續出することゝになつた。卽ち九月上旬琿春市街は之等匪賊の襲擊を蒙るも支那軍警は居留外人を保護する能はずして彼等の跳梁に委し、遂に十月初旬、多數の鮮人匪賊は過激派、馬賊及び支那官兵の服裝を爲せる多數の支那人と一團となり琿春帝國領事館を襲ひ、商埠地も共に灰燼に歸せしめ、多數の日本人を殺害し去つたのである、是に於て日本政府は差當り、右急迫せる事態に對し自衛上必要の手段として會寧に在る第十九師團の歩兵第三十八旅團に命じ若干の軍隊を琿春に出動せしめ專ら居留民の保護に任せしめたのであつたが、琿春を襲ひる匪賊等は尙ほ頑强に日本軍隊に抵抗し、局子街、龍井村、頭道溝、百草溝等日本領事館所在の各地方にも出沒して市街を襲はんとする情勢を示し來つたので、日本政府は十月六日、以上の地方に朝鮮より軍隊を派遣し不取敢保護警備の任に當らしめたのであつた。

一方又日本政府は、公使小幡酉吉をして外交總長顏惠慶を問はしめ、善後交渉を開始し、北京政府は日本交渉の二要點、卽ち(一)急應出兵に對する支那政府の承認(二)日支共同出兵に對する支那政府の承諾に對し、直ちに非公式ながら「支那政府は琿春事件の發生に對し深く之を遺憾とし、日本が臨機の處置として同地方に出兵せるは止むを得ざる事情に依るものとして之を諒とし、只右出兵の範圍は必要の程度を超ゆることなからんこと、及び出兵の目的を達したる上は速かに撤兵することを希望」

して來た。而て此の事件に當面すべき張作霖は、すでに事件の未發前に於ても日本兵の入境剿匪に就いて暗に慫慂する色のあつた程で、自分は一文の軍費も費やす事なく座ながらにして剿匪に成績を擧ぐることが出來るので、日本の出兵はもとより之を容認する考であつたらしいが、然し當時山東問題にからむ排日熱の汪勢なると、直隷派が、之を種にして張作霖攻擊を爲す憂があつたので、先づ赤塚總領事に對しては、

東三省に於て此の不祥事の勃發せるは日支國交上誠に遺憾に堪えざる所なるも、事は地方行政上の問題にして全責任は吉林省長たる鮑貴卿に在り、余は東三省巡閲使として軍政の權を統率するに過ぎずして直接の責任なきも間接にも亦全然責任なしとは否認せず。本事件は日支國交上頗る重大問題なるを以て余は支那の張作霖として東三省に於ける立場に鑑み出來得る限り日本側の申出でに應じ、あらゆる手段方法を執り兇暴なる馬賊團を根本より剿滅すべし。

と聲明し、吉林の鮑貴卿に對しても、本事件の勃發は吉林官憲に在るを以て、先づ遭難者の救恤、慰安の方法を講ずると共に馬賊剿滅の方法に就いて電命し、不取敢吉林剿匪の爲め出動せる張學良の率ゐる衞隊旅五營を東支線一面坡方面に急派したのであつたが、一方北京政府に對しては、鮑貴卿と共に「琿春匪賊剿滅の爲め奉天より一個混成旅を派遣中なれば、日本公使の要求せる日本軍隊の出動を拒絶あれ」と强硬意見を打電する始末であつた。

此の爲めに北京政府も國内排日論に對するその立場から突如として前言を翻し、俄かに日本に向つてその增兵を拒絶する旨の公文を交付し來つたのである、是に於て日本政府は支那政府の不承諾と否とに拘らず、自衞上止むを得ざる手段として增兵を斷行し、同時に外務大臣内田康哉は、日本出兵は間島方面に於ける一時的措置なるを以て、同方面にして不逞鮮人並に匪賊に關する危惧はなく事態平靜に歸するに於ては直ちに撤兵する旨を聲明し、且つ琿春事件に對する對支交涉の經過を叙述して日本の立場を宣明したのであつた。而て西比利亞を撤退して浦鹽に集合したる部隊の一部を陸路琿春に派遣して、二道溝、金沙溝、大虎溝方面の討伐を行ひ、又朝鮮軍は間島一帶より汪清、蜂密溝、茂山方面に亘る匪賊を掃倒したのであつた。

一方北京政府に於ても增兵交涉は拒絶したものゝ、之は體面上の問題であつて、實際は日本軍との共同動作を爲すを有利とするものなるが故に、日本政府が共同討伐の提議を爲すや、遂に進んで之を快諾するの態度に出で、その實行方法に關し、兩軍の聯絡と、誤解を避くる爲めに、奉天軍事顧問町野武馬は吉林に赴いて鮑貴卿との間に次の八箇條より成る琿春會剿辦法を議定したのであつた。

一、日本帝國と敦重睦誼のため左記の事に對し雙方會剿を爲す。

二、東寧縣東支鐵道以南二十里以外の地域及び琿春、汪清、東寧、和龍、延吉五縣の匪賊、不逞鮮人討伐の事は日本軍隊にて之を爲す。但し縣城には支那軍隊一二連並に巡警を留め秩序を維持せ

しめ、その餘の軍隊は出動す。

五、日本軍隊はなるべく短時日を以て軍事行動を終結するものとす。

六、日本軍隊は協定區域以外に出づることを得ず、馬賊追擊の場合に於ても區域を起え、誤解を起すを得ず。

八、日本軍隊は海林附近より延吉附近に向ひて前進する場合は、寧安（寧古塔）を通化するを許すこと。

鮑貴卿は又之に附隨せる支那軍隊としての剿匪方法八箇條を規定し所屬の各軍旅司令に通飭したのであつた。此の間善後問題の處理は奉天を中心として行はれ、參謀本部附佐藤安之助、奉天特務機關長貴志彌次郎、町野武馬、總領事赤塚正助等隨時協議して張作霖と交渉し、一方外務省より員を間島に派して延吉道尹陶彬と共同調査に從ひ、日支共同剿匪は實行に着手せられた。

然るに此の日支會剿辦法が北京方面にて發表さるゝや、排日運動は勃然として起り、吉林に於ては各團體の排日通電となり、十二月初旬奉天高等師範學校學生を中心とする省城五校の生徒は、從來未だ曾つて見ざる排日示威運動を起し、省議會に參集して請願する一方、市街を横行して檄文を撒布したが、該運動は龍頭蛇尾の裡に終熄してしまつた。

然しながら、間島剿匪の事も略々一段落を告げて日本軍は續々朝鮮内地に撤退を開始し始めたので、日本政府は北京政府にその善後交渉を爲したるに、支那側は容易に之に應せず、大正十年に至つて、日本側が(一)支那政府の陳謝(二)關係責任者の處罰(三)損害賠償(四)死傷者に對する弔慰金等を要求したが、支那側は頗りに第三次の撤兵を迫ると共に琿春に調査員を派し、日本の出兵によつて蒙れる支那人民の損害を要求せんとするの逆襲的意氣を示すに至り、日本軍の全部未撤退と支那側の調査未完了を二理由として交渉開始の拒絶を爲し、日本軍の全部撤退後も交渉は依然として行悩み、日本側は之を奉天の局部的問題として解決せんとするも、張作霖始め多くの反對者ありて、間島問題は依然問題として殘さるゝに至つたのである、佛領印度支那との間に協定され居る會巡辦法により、日本側の提出せる日支國境會巡辦法も、もとよりそのまゝに未協定である。

第十三章　ワシントン會議と滿洲問題

第一節　ワシントン會議に於ける滿洲と日本

一九二一年（大正十一年）十一月北米合衆國ワシントンに於て開かれたるワシントン會議は、海軍制限問題と極東問題とを議題としたものである。然しながらその何れも新興勢力たる日本を標的とせざるはない。換言すれば、新加入者としての日本國の世界的地位を定めんとするものと云ふことが出來る。特に亞細亞大陸に對する日本の地位は、その大陸が未だ各勢力圏の確定を見ないだけ、それだけ常に問題視されて來たものを、此の會議に於て決定せんとしたのである。歐米諸國は、その地理的約東から、日本に對して相當のハンデキャップを持つて支那大陸に臨まねばならぬことは、日本の勢力を殺によく確定し、又掣肘する必要を生せしむるのである。而て、日本の支那大陸に對する根據は滿洲である。滿洲鐵道中立問題から石井ランシング協約に至るまですべて此の傾向を表はさざるはないではないか。

世に所謂支那問題なるものは、實に支那と而て日本との存在の故に始めて發生するものたるは、當時今更らしく說かれたものであるが、之を自然の理に反して出來るだけ分離せんとするのが、第三國の從來の方針であつた。ワシントン會議も亦此の傾向を持つ。少くも米國などの從來の對極東策より見れば、歐米も日本に何等のハンデキャップを與へずに同樣の立場より支那大陸に臨ましめんとしたものであると察しられる。而てそのハンデキャップは石井ランシング協約に表はれたる地理的接攘區域に於ける日本の特種利益、即ち滿洲に於ける日本のそれでそれでなくて何であらう。

見よ、米國の敎唆的支援による支那全權の日支二十一箇條問題の上程運動は、挑戰的態度を以て日本全權の發言を强要して止ます、遂に一九二二年（大正十一年）二月の極東問題委員に於て、日本全權は二十一箇條要求中の「他日を期して交涉を進むべし」と保留されて來た希望條項たる第五項は、自發的に之を撤回すると共に、滿蒙に於ける投資優先權をも放棄する旨を聲明するに至つたではないか。而て支那全權王寵惠は、日本全權幣原喜重郎の此の聲明に對して「日本が滿蒙の優先權、特殊利權を放棄せるは歡迎する、併し全部の廢棄を爲さなかつた事は遺憾である。故に他日之が解決を圖るの權利を留保する」と述べ、次いで米國國務卿ヒューズは「日支二十一箇條約につき米國が日支兩國に送つた同文通牒は、米國の傳統的政策を述べたものである、併し之と日支間の條約効力問題とは別問題である。……該條約の一部たる山東問題は既に解決し、今又二十一箇條第五項撤回と滿蒙優越權放棄との聲明あるは喜ぶべきことである……尙米國は二十一箇條の第二、第三、第四條の規定により日本の保持する土地商租の權利その他に最惠國として均霑し得るものと思考する云云」と述べ、更に此の日支米三國代表の聲明を記錄に留むる事として討論を終結し、玆に二十一箇條問題を最後として極東問題委員

會は任務を終了したのであつた。

以上は日本が自發的に滿蒙に關する優越權放棄を聲明せる經過であるが、是れより先き、米國國務卿ヒューズは一九二二年（大正十一年）一月中旬、華府會議に於ける極東委員會に對し、支那の門戸開放に關する以下の如き決議案を提出した。

第一條　門戸解放機會均等の主義が有效に適用する爲め支那を除きたる各國は左の通り取り極む。

（イ）締約國は支那に於ける商業上及び經濟的開發に關し優先權を設定する意味の取極めを求めず又之を求むる國民を援助せざること。

（ロ）締約國は支那に於ける合法の商工業其他公共的企業を爲す他國民の權利を剝奪するが如き獨占權又は優先權を求めず又之を求むる國民を援助せざること。

第二條　支那政府は外國に對して負ふ義務に對し前記同一の原則に準據して行動する意志を表明すること。

第三條　支那を含む各國は支那に顧問會議設置の件につき原則に於て同意し右會議には前記協約及び宣言より生ずる各問題を附議して調査せしめ且其結果を報告せしむること。

第四條　支那を含む各國は現存各種特權中他の特權又は前記協定の原則と矛盾する觀あるものは滿足に之を匡正する目的を以て關係各國より之を右顧問會議に附議することを得。

爾來二十日に亙つて、此の問題の討議が繼續され、英國全權ゲデスは、英國の態度を表明する爲め正式の陳述書を提出したが結局原案を其儘承引し、又伊國全權シャンツェルも提議の精神に贊成の旨を述べ、佛國全權サローは、各種の利權を明確に定義し若くは何を獨占權とするやを明確に定義され得るものなもやを質疑し、ヒューズが之に說明を與へたのに對して一應滿足の意を表したる後、第四條は或は現在の權利に累する事となりはせぬか、又現在の契約全部を總括的に修正する事は妥當でないから第四條は何等の疑點を挾み得ぬ樣にする必要があると修正意見を述べ、日本幣原全權は決議案の原則には大體贊成である旨を述べたが第四條に對し佛國全權の反對意見を支持する態度に出で、遂に加奈陀委員ボーデンの提議により第四條を削除し第三條迄を可決し、之を他の諸問題と一括して條約の條文に起草とすることゝした。

支那全權は、最終決定に當り、後日第四條を提議する權利を保留する旨聲明した。此の支那全權の態度は、米國の提出案を、恰も自國の提案の如く取扱つたものであるが、此の態度は、ヒューズの前記提案が、支那全權と諒解の上に成れるものであり、且つ支那と通謀協同して、主として日本を强壓せんとする動機から出たものであることを、疑ふべくもなく暴露したものと言はねばならない。

今、二月六日、華府會議の終了と共に調印された、前記米國提案を骨子とした所謂支那に關する九箇國條約及び二十一箇條問題に關する聲明即ち第五項の撤回竝に滿蒙投資優先權放棄に關する聲明（日本幣原大使の）を掲ぐれば以下の如くである。

九箇國極東條約全文

第一條　支那國を除く各締約國は左の通約定す

（一）支那の主權、獨立並領土的及行政的保全を尊重すべし。

（二）支那に對し有力且安固なる政府の樹立及維持の爲最も完全且障礙無き機會を與ふべし

（三）支那の全領土に亙り各國民の商工業上の機會均等主義を有効に確立し且維持する爲努力すべし。

（四）友好國の臣民若は市民の權利を減殺すべき特殊權利若は特典を獲得するが爲支那に於ける政情を利用せず又右友好國の安寧を害する行爲を支持せざるべし。

第二條　締約國は前項に宣明せられたる原則に違背し若は之を害すべき如何なる條約、協定、取極或は了解を相互間に又は各別若は協同に他の一國若は數國と締結せざるべきことを約定す。

第三條　支那を除く各締約國は總ての國民の商工業の爲支那に於ける門戸開放或は機會均等主義を一層有効に適用するの目的を以て左の如く約定す。

（イ）支那の如何なる特定の地域に於ても商業或は經濟の發展に關して自己の利益の爲何等一般的優越權を設定せんとする協定を求めず又其の人民の斯る協定を求むるを支持せざるべし。

（ロ）他國民が支那に於て適法なる商工業を營むの權利又は其の種類の如何を問はず公共企業を支那中央政府若は地方官憲と共同經營するの權利を奪ふが如き或は其の規模、期間若は地理的廣袤に依り機會均等の實際的適用を無効に歸せしむるが如き如何なる獨占權若は優先權を求めず又其の人民の之を求むるを支持せざるべし。

但し本協定は特定の商工業若は財業的企業の經營及發明並研究の奬勵に必要なる財產若は權利の取得を禁ずるものと解釋すべからざるものとす支那政府は本條約當事國たると否とに拘らず總ての外國政府又は人民より經濟的權利及特權の出願ありたるときは之が取扱に方り前記協定の主義に準據することを約す。

第四條　締約國は各自國民相互間の約定にして支那領土の一定の地方に於て勢力範圍を創定し若は實際上排他的機會の享有を規定せむとするものを支持せざることを約定す。

第五條　支那政府は支那に於ける全鐵道を通じ其の種類の如何を問はず不公平の差別待遇を爲し又は許容せざるべきことを約す例示せば旅客の國籍、出發國若は到著國、貨物の原產地、所有者積出國若は仕向國或は前記旅客若は貨物が支那鐵道に依り輸送せらるゝ前若は後に於て之を運搬する船舶其他輸送機關の國籍若は所有者の如何に依り運賃又は便宜に付直接にも間接にも何等差別を設けざるべし支那國以外の締約國は前記鐵道中右諸國又は其の國民が許與又は特殊協定其の他に基き支配を為し得る地位にあるものに關し前項と同趣旨の義務を負擔すべし。

第六條　支那國を除く締約國は支那の參加せざる將來の戰爭に於て支那の中立國たる場合に中立國務を遵守すべきことを約定す。

第七條　締約國は其の一國が本條約の規定の適用問題に關係し且右適用に關し討議をなすこと適當なりと認むる事態發生したるときは何時にても右目的の爲め關係締約國間に十分且隔意無き交渉をなすべきことを約定す。

第八條　本條約の調印國にあらざる諸國にして本條約調印國に依り承認せられたる政府を有し且支那と條約關係を有するものは本條約に加入すべきことを勸誘せらるべし右目的の爲亞米利加合衆國政府は非調印國に必要の通牒をなし之より得たる回答を締約國に通告すべし他國の加入は米國政府が右に關する通告を接受したる時より効力を生ずるものとす。

第九條　本條約は各締約國の憲法上の手續に遵ひ批准せらるべく且成る可く速に華盛頓に於て行はるべき批准書全部寄託の日に於て効力を發生すべし亞米利加合衆國政府は批准書寄託調書の認證謄本を他の各締約國に送付すべし。

本條約は英文及佛文を以て認めたるものを以て正文とし亞米利加合衆國政府の記錄に寄託保存せらるべく其の認證謄本は同政府より他の各締約國に送付せらるべし。

二十一箇條問題日本全權聲明全文

本委員會の前回會議に於て支那委員は陳述書を提出して千九百十五年の日支諸條約及交換公文を再審し而して之を廢棄すべきこと

な切望せり。

日本委員の困難なる立場を諒とするも支那が自由獨立の國として締結せる國際協約を廢棄せんが爲め現に執らんとする手段に至つては同意を表し難し。惟ふに支那委員は全權を委任せられたる兩國代表者の正式に署名調印し確立せる國際慣行に據り批准交換を了したる千九百十五年の取極に付き其の法律的效力を爭はんとするの意圖に非るが如し。蓋し支那が右文書の廢棄を主張するは即ち支那も亦現に右文書の效力を有するを認むるものにして本取極は其の廢棄せられざる限り有效に存續すべしとの見解を持することを明なり。

何國と雖も領土權若くは其他重大なる權利の讓與を承諾するに躊躇せざるものに非ざるは言を俟たず。然れども苟も條約により許與せられたる權利が許與者より自發的に進んでなされさりし理由により何時にても廢棄し得べきものなりとの原則一度承認せられんか之れ亞細亞のみならず歐羅巴其他到る處に於ける國際關係の平調に重大なる影響を及ぼす極めて危險なる先例を創出するものなり。

支那委員は陳述書に於て千九百十五年の日本の要求は後日之を再審し且廢棄すべき時來るべきを應期して之れが承諾を與へたるものなる旨述べたるも其の趣旨たるや支那最初の機會を促へて廢棄せんとの意思を以て條約を締結し得るものなることを云はんと欲するものに非ざるべし。

支那委員は本件條約及交換公文は華府會議の採用せる支那の主權及獨立の尊重に背馳するものなるを主張するも華府會議は却つて支那が其の主權の行使による條約を以てなしたる讓與は支那の主權及獨立と背馳するものと認むべからずと解したること一再にして止まらず。

尙千九百十五年の條約及公文を呼ぶに所謂「廿一箇條要求」なる辭句を用ふるは頗る明確を缺き且甚だしく誤解を惹起する虞あることを茲に一言せざるを得ず右は日本の提案か全部日本の强制により支那の承諾せし所なりとの誤れる印象を與ふるの虞あるを以てなり。

然るに實際に於ては所謂第五項のみならず日本最初の提案中他の數箇の事項は支那政府の意嚮を尊重し最終要求の形に於ては全然削除せられ若くは甚しく變更せられたり更に本件交渉に關し兩國政府より發表せる記錄に依れば本件條約及交換公文中の最重要なる諸條項は最後通牒交付前已に支那委員により實質上同意せられたるものなること判明すべし而して最後通牒の形式當時日本政府に於て遷延に遷延を重ねたる交渉を速に結了せしむる唯一の方法と思料せられたるものなり日本委員は本會議に於て參加國の一つが他の一國に對し有する舊來の不滿を穿鑿し再び之れが審査を行ふも何等益する所なかるべく寧ろ互に希望と信賴の情とを持つを欣幸とする所なり。

一、日本は、(一)南滿洲及東部內蒙古に於ける鐵道敷設の爲めの借款、(二)右地域に於ける擔保とする借款に關し特に日本資本家のみに與へられたる優先權を最近の組織に係る國際借款團の共同事業に提供すべし但し此の聲明の如何なる事項と雖前記資本團體の共同事業の範圍に關し同團體の參加諸國政府間及之れを組織する各國資本團體間に交換せられたる文書若くは覺書中に明記せる諒解を變更し若くは無效ならしむるものと解せらるべきにあらず。

二、日本は南滿洲に於ける政治、財政、軍事若くは警察に付き日本人顧問若くは教官傭聘をなさしむべき日支取極に依る日本の有する優先權を主張するの意圖なし。

三、尙日本は千九百十五年の日支條約及交換公文の署名に際し日本政府最初の提案中の第五項は他日の交渉に讓るべしとの趣旨を以て議事錄中に留めたる日本の留保は之れを撤回すべし。

尙之等條約交換公文中に含まざる山東に關する事項は今回全部確定的に其調整を見且つ解決の域に達したるは茲に附言を要せざるべし日本が上記の決意をなすに至れるは即ち日本が終始支那の主權及機會均等の主義を顧念し公正及寬容の精神に遵由したるものなることを茲に明にせんとす。

以上に依つて、所謂日本の滿蒙に於ける優越權は之を放棄することに決定したのであるが、然らば日本の接壤地域卽ち滿蒙に於ける優越權を認めた石井ランシング協定は、最早存續の必要なきものとなりはしなかといふ疑問が生ずる。果せる哉、米國上院に於ける太平洋防備に關する四國條約（華府

會議に於て成立せる）批准討議に際し、該條約締結の上は、一九一七年十一月二日日米協同宣言卽ち石井ランシング協定は取消さるゝか又は廢棄せらるゝか或は修正せらるゝかの議論が起つた。一九二二年三月六日、上院議員ボラーは、「該協定と太平洋條約との現在の關係に關し大統領に說明を求むべし」との決議案を提出し、共和黨議員多數の贊成を得て成立し直ちに大統領に移牒せられた。之に對し大統領ハーディングは、同月八日上院に以下の如き趣旨を含む回答を送つて、石井ランシング協定は、華府會議に於ける極東に關する九國條約によつて自然消滅となるべきことを聲明した。「石井ランシング協定は、單に行政上の宣言にして當然正式條約によりて代らるべきものなり。……四國條約は、支那に關し言及せるものにあらざるを以て石井ランシング協定とは直接關係なきも九國條約は支那に關する各國政府の政策の最も正式的宣言にして苟くも之に反する意義を有する一切の協定宣言に取つて代はるべきものなるが故に、若し上院にして九國條約を批准するに於ては、同條約中に明記されたる原則竝に政策は拘束力ある國際條約に依つて支持勵行せらるべきものなり云々」

殆ど之と時を同うして、駐日米大使ワーレンと、日本外務省との間に、華府會議に於て成立せる諸條約乃至宣言によつて當然無效となれる石井ランシング協定廢棄の交涉進捗して居たが、四月十四日付を以て、在米日本公使と米國國務卿との間に、同協定廢棄に關する公文の交換を了し、玆に石井ランシング協定は永久に廢滅したのである。同交換文書による共同宣言を揭ぐれば以下の如し。

『兩國政府は商議の結果見解の一致を見たり軍備制限に關する華盛頓會議に依り到達せられたる了解に鑑み亞米利加合衆國及日本政府は千九百十七年十一月二日のランシング石井交換公文は廢棄せられ、且つ今後效力なきものと看做すことに合意す。』

以上の經過に依つて、日本の所謂滿蒙優越權なるものは消滅した。けれども一方に於て、日本の滿洲に於ける關東州及び南滿洲鐵道の租借權は、列國に依つて確認せらるゝ結果を得た。卽ち關東州及び南滿洲鐵道經營に關する日本の權利は、玆に更に基礎を鞏固にすることが出來たのである。これは失敗に失敗を重ね、放棄に放棄を繰返して來た巴里會議以來の日本が殆んど失敗の極に達した華府會議に於て、辛うじて得た消極的の收穫物であつたと言はねばならない。

更に此の華盛頓會議に於て、支那國に於ける外國郵便局は、租借地內に在るもの、又は條約に依り特に規定せられたるものを除き有效なる支那郵便業務の維持せらるゝこと、及び現在の郵便制度に變更を加へざる條件の下に、一九二三年一月一日迄に一律に之を撤廢することゝなつた決議の趣旨に從ひ、日本政府は關東州租借地及南滿洲鐵道附屬地以外の支那に於ける帝國郵便局は、全部之を撤廢することに決し、撤廢の準備として、先づ日支間の郵便業務の連絡其他に付協定を遂げしむる爲め、小幡酉吉、藪內敬之助、吉田伊三郎の三委員をして、支那側委員と一九二二年八月十八日以來、北京に於て交涉を重ねしめた結果、十二月九日に至り、郵便物交換約定、價格表記書狀及箱物郵便交換約定、

小包郵便交換約定竝に郵便爲替交換約定の四約定の調印を見たのである。

然るに、同交渉中に於て、南滿洲鐵道附屬地郵便問題に關しては、日支間に著しき意見の相違があつた爲めに遷延に遷延を重ね、一月の實施期に切迫せる十二月に入つて尙結著を見ない有樣であつた。

支那代表の戰術は、成るべく會議を遷延して華府會議に於て定められた一九二三年一月一日の期日間近となつて、日本側が止むを得ず拋棄的に承認するのを待たんとするにあつたことは明らかである華府會議に於て在支郵便局を撤退する提議といふのは、實は日本の對支利權を減殺せんとする提議に外ならかつたのである。何となれば、支那に郵便局を最も多く有し、郵便局の利便を最も多く感じてゐたのは日本であつたからである。日本以外の諸國にして支那に郵便局を持つてゐるといふも、極めて僅少なるものであつた。而もその撤退期日も短期日とせるは、明らかに日本を窮せしめんとの陰密なる計畫の藏せられてゐたことを思はせたのである。

果せる哉、支那側は交渉遷延の戰術に出で、日本よりの交渉なくとも一九二三年一月一日には、在支日本郵便局は支那の手に戻るものと高を括つてゐた。殊に支那側は、日本の滿鐵附屬地內の郵便局に對して回收を求めて來た。日本側は、稍々周章狼狽の氣味であつた。斯くて遂に南滿洲鐵道附屬地內の郵便局問題は、後日更に交渉題目となすことあるべしとの留保を附して、兩國委員の調印を得るに至つたのである。

然るに、同約定は、調印と同時に效力を發生せしめたことゝ、南滿洲鐵道附屬地內の郵便局を後日交渉題目とすることあるべしといふ辭句を含んでゐたことゝとの爲めに、日本國內に激烈なる反對論議を發生せしめた。前者に對しては、既に批准を待たず効力發生せるが故に遂に樞密院は諮詢に應じ難くなれりとの故を以て上奏裁斷を仰ぐの處置に出た。後者に於ては南滿洲に於ける利權を支那に讓つた屈讓的態度を國論頻りに沸騰し、外務當局を攻擊する聲喧囂たるものがあつた。

南滿洲鐵道附屬地帶內に於ける日支郵便業務協定といふは、上述四箇の本約定の附屬文として挿入したものであつて、其の內容に關し、外務省の發表する所以下の如くである。

本日附の新郵便約定に署名せむとするに當り兩國の主席代表者間に於ては兩國政府間の交渉題目と爲すことあり得べき南滿洲鐵道附屬地帶內日本郵便局の問題に關する意見の相違に鑑み南滿洲鐵道附屬地帶內日支兩國郵便局間の關係及び是等郵便局の業務に關しては暫定的に原則として現狀を維持すること竝に南滿洲鐵道附屬地帶內に於ける日支兩國郵便局間の關係は一九一〇年の郵便約定に規定せられたると同一條件に依り支配せらるべく是が適用に關する細目は中央政廳の同意を經て關係地方郵便官憲をして取極めしむることに一致せり。

一千九百二十二年十二月八日　北京に於て

小幡酉吉
劉符誠

日本は、從來ヴエルサイユ會議に於ても、華盛頓會議に於ても、充分なる準備を缺いた爲めに、一再ならず外交上慘澹たる敗北を蒙つた苦い經驗を持つてゐる。而して此の外交上の敗北たるや、實に日本の將來に取つて致命的なるものが多く、最早、今日以上の敗北を重ねんか、國際政局の水準下に落伍することゝならざるを得ないのである。南滿洲鐵道附屬地內郵便局問題は、事甚だ小なるに似たりと雖も、日本の生存に必須なる南滿洲の最後の撤退線上に於ける堡塞である。南滿洲を失ふことは日本が生存權を拋棄することに外ならぬ。かくて最早日本は、南滿洲に於て一物をも失ふことは出來ぬ狀態となつたのであつた。

第二節　旅大回收運動

前節に於て述べた如く、日本の關東州及南滿洲鐵道租借權は、華府會議に於て列國の承認する所となつて、對列國關係に於ける限り、問題は最終的決定を得たのであるが、支那全權が該會議に於て二十一箇條問題に關し後日再解決を要求する旨の留保を爲した態度に見られるが如く、支那側に於ける二十一箇條問題に對する不滿は依然として殘存してゐたのである。山東問題解決し、第五項撤回され滿蒙投資優先權放棄された後に殘る所は、關東州及南滿洲鐵道租借問題のみである。卽ち華府會議以後の二十一箇條廢棄問題は、實に關東州南滿洲鐵道回收問題に外ならぬのである。所謂旅大回收問題是れである。

曩にヴエルサイユ會議に於て白熱的努力を以て試みられたる二十一箇條條約廢棄運動は華府會議に於ても、殆んど同一の支那全權に依つて更に激烈に起された。併し前回に於て失敗したと同樣に、今回に於ても失敗した。

けれども、形式上の廢棄を得ることは出來なかつたとは言へ、實質的收穫は極めて大なるものがあつた。卽ち旅大問題を除く他の問題は悉く支那に有利なるが如く、支那の欲するが如く解決し得たのである。今日殘る所は、旅大回收問題たけである。二十一箇條條約廢棄の好口實を藉りて、運動は、狂猛に旅大回收問題に集中され來つた。

華府會議終了後支那政界の消息として傳へられたる所に據れば、「支那は日支二十一箇條條約を認めざるを以て、原露支條約に依り關東州租借地、滿鐵經營權は明年の期限完了次第之を回收する筈なり」との事であつたが、其後華府會議に支那全權として列席したる王寵惠、顧維鈞の兩氏相嗣で歸支し、一は內閣の首班に一は外交總長に就任してより、兩氏は華府會議に於ける支那政府の聲明に對する職責上遂東還附の要求を日本に致すべしとの說が漸次有力となつた。偶々八月二十六日外交部機關通信新

聞編譯社が「外交部に於ては密かに關東州回收に對する特別委員會を外交部に特設し右回收に對する準備を整へつゝある旨」を報道して以來、支那朝野の注目は期せずして茲に集まり、本問題に對する輿論は漸次高調せらるゝに至つた。越えて八月十七日北京在留の我新聞記者團が黎大總統に謁見した時、黎大總統は時局に對する所見を述べた後、關東州租借問題に就き特に左の如く述べた。

「關東州租借地問題に就いては該租借地が元の所有主(支那)に還るべきものなり、元來遼東の地は昔は燕の一部にして支那の領土たることは古き歴史の示す所なり、而して其歴史は古く且根强く支那國民の腦裡に刻まれ居れるを以て、若し關東州が日支間のアルサス・ローレン二州の如くならんか一大不幸と云はざるべからず、凡そ戰爭に依りて他國の領土を侵略したるものは永續するものに非ざる事は是亦歴史の明示する所なり、彼のナポレオンが歐洲を一手に收めんとして一敗地に塗れたるが如き成吉思汗が歐亞大陸に跨る大帝國を建設したるも幾くもなくして瓦解したるが如き、近くは獨逸のカイゼルの如き皆其好箇の實例なり、故に余は將來の國交は武力競爭を避け實業及商業に賴り以て世界永遠の平和を庶幾するものなり云々。」

右黎總統の所論は大總統たる地位に在る者の言としては實に輕舉たるを免れず、殊に關東州を指してアルサス・ローレンに比するに至りては謬見たり僻見たるのみならず、關東州租借の由來を解せざる暴論にして寧ろ前記顧外交總長一派の密謀を裏書するに過ぎざるものである。上に既に斯る大總統あり從つて國家を擧げて本問題に狂奔するも宜なる所、果して十月二十九日の支那各新聞は北京政府の意を受け遼東還附問題に關し左の如く報ずるに至つた。

「遼東半島の租借期限は明年を以て滿了すべきを以て政府は即時回收の決心なり、先日日本新聞記者團黎總統謁見の際偶然同問題に言及し總統同半島の回收を主張するや日本にては盛に反對の聲を揚げ居れり、然れど吾國は日支條約を承認せず從つて租借期限を九十九年に延期すべき理由なし、總統府顧問ファーガソン氏は曩に黎總統に對し日本政府に同半島還附を提議すべきを建議せしが、同建議案は日本關係當局に於て考慮中なれば不日具體的問題たるべし、但し日本側は此間の消息を探知し之が防止に努めつつあり近來日本各新聞頻りに同半島還附反對論を發表するは吾國の提議を阻止せんとする一種の手段なり云々。」

然るに翌三十日に至り衆議院議員林長民、張樹林等は突如として「二十一箇條の日支條約即時無效宣告要求建議案」を提出し、更に十一月一日の衆議員本會議に於ては錢議員の緊急動議に依り、議事日程を變更し「日支條約二十一箇條無效案」を上程し、提案者の說明後、衆議に依り同案を採擇し決議案と爲すに決し、左記の如く字句修正討議の上滿場一致を以つて可決通過するに至つた。曰く

『民國四年五月の日支二十一箇條條約文は國會より其無效を決議に附し政府に請ひて中外に向つて宣布せしむ』

叙上の如く北京方面にて關東州の租借權回收を强調しつゝあるに、一方問題の中心たる奉天省に於ても亦右所論に共鳴し種々之れが對策を研究しゝつありし所、愈表面の問題とするに決し、徐續生、衆元玠、命鶴影、温桑福の四氏國民外交後援會を組織し、且奉天省公民代表の名を以て十月二十七日奉天省議會に對し「關東州回收に關し各省に通電、政府に請願」の件を依頼した。玆に於て奉天省議會にては右請願を採擇し、かくて遼東回收の聲は全支各界を風靡するに至り事態容易ならざる形勢となつた。因に徐續生氏等の提出したる建議案の要旨は略左の如くである。

「華府會議によつて列國は支那の侵略せられたる土地を返還することを承認し青島始め威海衞、廣州灣は回收せられんとするに拘らず旅順大連のみは未だに返還沙汰に接せず、旅順大連も租借は廿五箇年卽ち明年を以て滿期とす、民國四年の日支條約によつて九十九箇年に延長されたるも此條約は華府會議に於て取消され各國も承認し居れるを以て日本の租借固執は金州半島の同胞を水火の中に置くものなり、我等金州同胞は何んの罪ありて一般國民より捨てらるゝなるか、兎も角我等同胞は之れ迄幾多の苦痛を忍び來たれるが尙ほ子孫後裔迄も外人より牛馬魚貝の取扱ひを受くるに忍びざるなり云々。」

各方面の事態旣に斯くの如く急轉し來れるに依り、北京政府に於ては此機會に乘じ、華府會議當時保留を聲明せる日支條約の取消を重ねて日本に要求し、更に進んで遼東還附要求の根據に及ばんと計畫せるものゝ如くなるが、傳ふる所に據れば其裏面には外人顧問ラインシュ、ファーガッソン、シムプソン等の排日論者が活躍し、英米兩國の諒解を得るに努め旣に其默諾を得たりとすら傳へられた。右運動に對する在支外國新聞の論調を見れば、十一月三日北京デイリ・ニウス紙の如きは「各界の二十一箇條」なる題目の社論を掲げ『衆議院の決議は支那國民一部分の意見に非ず、國民全體の意思を合法の手續により日本に通達せるものなり』との煽動的論調を弄しつゝあつたのである。

斯くて十月三十一日に至り、衆議院議員張樹林は贊成者二十名を得て、衆議院に『日支二十一箇條協約無效宣布諮議案』なるものを提出した。

「日支協約二十一箇條は民國四年日本が歐洲大戰に乘じ最後通牒を以て脅迫要求して成立せる條約なり、此の條約は國を辱め國權を損じ地を失ひ利を棄て延いては亡國に至るの一種の暗示たり、吾國人之より痛心疾首し遂に此の條約を廢除せんと欲し數年機會に遇ふ毎に卽ち表示する處ありたり、唯だ華盛頓會議に於て吾が國は取消を提議せるも結局通過せず終に取消の機會を留保するに止まりたり、此の條約の效力は究竟如何の狀態に在るか頗る研究を要す、吾が國方面に在りては留保を聲明してより以後は全く一種の否認の態度なり、然るに日本方面に在りては則ち實際此の條約を認め部分取消を聲明したる外仍て未だ廢止せざるの狀態たり、此の條約の經過を細査するに從來未だ國會に交付せず而して現在政府が取消留保を聲明したる以後再び國會に交付するの理由無し、但し吾

人が華盛頓會議に於て取消を主張したる際未だ國會反對返附の根據を得ざりしに因り之を重なる要理由と爲さゝりしが當時同情ある友邦は皆之を惜みたり、非常國會は屢々宣言ありたりと雖も正式國會は從來未だ意思表示あらず、夫れ國會に條約締結同意權あり條約に對し國會同意せざれば形式備らず當然無效なり、而も此の條約は久しく一面に於ては否認し一面に於ては承認するの狀態に在り、此の亡國條約をして今尙ほ效力の有無曖昧の中にあらしむ、如斯は實に國家の資格を維持し利權を輓回する正當の處置と云ふべからず、本員は此の案に對し再三熟慮したる結果最後に一解決の手續を得たり、卽ち最善の辨法として本院より決議し議院法第七十六條により該條約の原文及其の經過を政府に要求して文書調集の形式を取り之を本院に交附せしめ本院は卽ち之を參議院に移交する事を議に附し卽日該條約の無效を宣布すべし、右の如き辨法は一は此の亡國條約の懸案として未解決に在るを免れしめ一は民意代表機關たる國會の否認せる證據と爲すべし、卽ち無效を宣布するの可否敢んで公決を乞ふ。

（提出者）張樹林

（連署者）白常潔、壬兆離、劉治洲、朱家訓、趙恒、黃贊元、林長民、高增融、桃守先、馬英俊、孟森、王樞、杜成鎔、陳世祿、張雅南、周太烈、周克昌、范熙壬、楊詩浙、萬鈞

次で翌十一月一日午後一時衆議院第三期第五號常會開會せられ、出席議員三百〇二名、議長吳景濂席に着き議事日程第三案を附議した後ち、議員饒崇鎧の緊急動議により第七號案議員張樹林提出の『日支協約二十一箇條協約無效宣布諸議案』及び議員劉汝晏提出の『日支二十一箇條無效宣布案』を一括して附議し、提案者張樹林、劉汝晏兩氏より各提案の理由を說明したる所、滿場一致を以て決議案と爲す事とし、吳議長より『日支二十一箇條協約及交換文の無效を國會にて決議し之を內外に宣布すべく政府に諮請する事』を表決に附したる所、右案文の日支の上に「民國四年五月」の六字を附加すべしとの提議あり、表決の結果全部可決せられ、玆に同案は滿場一致を以つて衆議院を通過し十一月三日參議院に送附された。參議院は折柄議長選擧の爲め紛擾中であつて、同問題の解決を見ずしては附議の出來ない事情にあつた。

本問題に對する朝野の態度如何と見るに、日支二十一箇條協約廢棄案の衆議院を通過するや奉天吉林の各省議會及有志の間には之れと相呼應し遼東還附要求の運動を爲すべしと主張したる外、全國商會聯合實會會長張維庸は、北京政府に左の如く建議した。

遼東半島の租借期限は本と二十五年で明年四月が期限である、若し民國四年五月八日の協約に基き更に期限を九十九年間延長する如きあらば擧國商民は誓つて是を承認しない、領土主權の問題で全國人民の休戚に關する處である。日本人が吾中國を强迫して作つた二十一箇條は未だ國民代表の議會を通過し居らず當然效力を發生しないものである。此の協約は世界公理に反するもので旣に吾中

國の正式國會は復活したので之に依て取消を決議すべきである、公府顧問福開森氏に依つて此建議案提出せられたるに就ては吾等商民一同誓つて力爭を爲す可く、茲に商民の公議を代表して政府に求むる所以である。華府會議後は各國共侵略したる土地の還附を行ひ青島、威海衛、廣州灣の如き皆其例である。今期限に達したる遼東半島の還附は此機會を失ふ可からず政府に於ても極力一切準備して吾金州の同胞をして外人の手より脱せしめられ度い云々。

然るに輿論の代表たる各新聞は上海中華新報が十一月四日以來再三日支協約の廢棄を力說したる外は殆んど沈默し愼重に其成行を注視し居れる模樣であつた。而して注目すべきは、支那新人及有識者間に、在支外人顧問が最近數年來殆んど排日運動をのみ仕事とし、常に平地に何等か波瀾を惹起せしめ以て顧問の存在を認めしめんとする態度を非難し、支那の國際紛擾を緩和するの見地より此際各顧問を一律に解任し廢止すべしとの意見漸次有力に唱道せらるゝに至つたのである。

次に支那政府に於ては衆議院が日支二十一箇條協約の無效を可決して以來、之れに對する處置に就き深甚なる注意を拂つて居たが、既に十一月七日の閣議に於て一應本問題に就き協議したる所、顧外交總長は『同案が不日參議院を通過するを俟ち直に該協約無効の通告を日本に發すべし』と主張し、吳佩孚系の有力なる二三閣員は(一)日本の反對を豫期し(二)第三國の徹底的援助なき事明白なるに於て右通告を日本に發すとも徒らに紛擾を滋くするに過ぎざれば尙愼重考慮し輕擧妄動を爲さゝるを要すと反對し、結局何等經る所なく散會した模樣であつた。

次で一月十六日に至るや、支那衆議院に於ては曩に同院が可決の上參議院に廻付した二十一箇條日支條約無效案が、今猶同院に於ては之を上程せんとする模樣なく依然として放置せられつゝあるに、早くも關東州租借期限は二箇月の後に迫り來れるを以て、速かに同案を可決し政府をして之が交涉の準備を爲さしめざるべらかずとなし、參議院を督促して同案を表決せしむるの決議案を出した。斯くて同案は翌十七日の衆議院に上程せられたる處、更に緊急動議に依つて政府に對し速かに旅大回收準備を爲すべしとの建議案出で、茲に右二案合併の上滿場一致を以て可決せらるゝに至り、旅大回收問題は又しても衆議院の問題となるに至つた。

此の衆議院に於て可決せられたる「參議院に於ける日支條約無效案の討議督促案」の內容左の如くである。

曩きに本院を通過せる二十一條日支協約無效宣布案は案の形式は該協約の無效を宣布せんとするに在るも、實質の目的且つ最主要の一點は即ち本年三月廿六日に二十五年の租借が滿期となる旅順大連の租借權を回收せんとするに在り、此事は國家の生命、國權の本質、軍事の要害、地方の治體、社會の安寧、人民の生計諸事に關係し甚だ緊要にして且つ重大なること又全國人悲憤痛切奔走號呼の事なることは茲に一々縷述する要せず、惟だ本院此案通過後參議院に廻附したるに現在事數月を

隔つるに未だ曾て開議せず、現在旅順大連租借が滿期となるは僅に二箇月有餘なり、若し參議院を開議せしむるも尙は審査を須ち尙報告を須つ、參議院通過後政府に咨達し而して政府は尙は決定を須つ、卽ち速に議決を得せしむるも又尙ほ先づ協約無效に交渉を須つ、而して一方旅大回收の準備を要す、現在殘す所の二箇月餘の期間內は各方面が緊急進行するを以て徒らに待ち及ばざるを恐る者し再び參議院議長の風潮により荏苒決せざれば旅大回收の期限を誤り此國家の大事を竟に坐して議長の爭議中に誤る、試に問ふ我國會同人何を以て全國の父老子弟に對するや、而して本院が此案を通過せる苦心を流水に付す、偶々感此に及べば良とに悚然たり、之に因り速に本院に請ふ、緊急會議を開き卽日參議院に前きに廻附せる日支協約無效宣布案を以て開會し竝に卽ち期を限りて審査報告議決し以て國家を重んじ國權を輓回せん事を咨請すべぐ議決せられんことを、迫切企急の至に勝へず同人の察決を乞へば之れ幸なり。提出人張樹森、胡鄂公、馬驤、羅家衡、呂復、汪建剛、狄樓海

衆議院の督促に接したる參議院に於ては、一月十九日午後三時二十分開會、出席議員百四十二名、衆議院より廻附せられたる日支協約廿一箇條無効宣布案を附議したるに、一部議員は同案は頗る重大問題なるを以て議長選擧の後之を討議すべしと主張したるも大多數は之を討議する事を可決し、先づ委員附託として童抗時、湯漪、張我華、趙時欽、趙世珪、王用賓、陳銘鑑の七名を察査委員に擧げた。

幾もなくして直ちに第二讀會を開き、童抗時より審査の結果左の理由を以て同條約を無効とする事に決せる旨を報告した。

一、該協約は日本が我當局を脅迫して成立せしめたるものにして之を國際條約の訂立慣例に徵し片務的のものなれば其成立を認むることを得ず。

二、該協約は未だ國會の同意を經ず從つて國際法上當然無効なり。

三、該協約は以上の理由により政府代表者をして從來屢々國際會議に於てその取消を聲明せしめたる所にして同約は成立せるものに非ず。

右報告終るや、臨時議長より審査の結果を討議に附すべきや否やを議場に諮れる所、其必要なしとのことなりしを以て討論を打切り、進んで第三讀會に廻附せるか之亦異議なく可決通過し、玆に同案は成立し直ちに其旨衆議院及政府に通告した。

右の如くして同案は支那國會を可決通過し政府に通告された以上、政府に於て若し異議ある場合は臨時約法第二十三條に依つて國會通過後十日以內に覆議を請求することになつたのである。

今支那政府の二十一箇條問題に對する態度を見るに、支那政府が民國四年の日支條約所謂「二十一箇條」の廢棄を主張したのは巴里講和會議に始まるが其當時の根本理由は左の五箇條であつた。

（一）日支協定は歐戰に因て生せる一方面の事斷なるが故に之が解決は巴里講和會議に於て決定

さるべきのものである。

(二) 聯合國は其共乘の原則及正義に依て講和會議に於て各國間の紛爭を解決し以て將來の戰爭の銷滅を圖らねばならぬ、縱へ銷滅せざる迄も之が輕減に努むるを要す、一九一五年の日支協定は此原則に違反す。

(三) 英米佛露四國は曾て日本と協約して支那の政治獨立及領土保全を保障してゐる、該協定は之れと牴觸する。

(四) 該協定は支那の未だ允諾せざる所であるに拘はらず最後通牒に因り强迫せられて承受せるものである。

(五) 該協定は臨時的性質のもので日本も亦之を認む、日本は支那の參戰を承認せる以前に密約を以て該協定を確立せしめた、斯くの如き密約は協商國の和議の基礎となす事は出來ない(一九一九年十一月頃巴里會議に提出したる理由書)

更に巴里講和會議に於て國際聯盟の成立するや、支那政府は其の第二十條に聯盟國は本規約の條項と併立せざる聯盟國相互間の義務又は了解が各自國の關する限り總べて本條約に依り廢棄せらるべきものなる事を承認し其今後本規約の條項と兩立せざる一切の約定を締結せざる事を强約す、聯盟國となる以前本規約の條項と兩立せざる義務を負擔したる聯盟國は直ちに該義務の解除を得るの處置を執ることを要す。

との規定があることを理由として、一九一五年の日支條約の廢棄を主張せんとした。而し同會議に於ては何等支那の主張は容れられずして華府會議に至つたのである。

斯くて華府會議の開かるゝや、支那全權王寵惠は一九二一年十二月十二日の極東委員會に於て、在支各國の勢力範圍撤廢要求として一九一五年の日支條約廢棄を主張し、更に翌一九二二年一月十三、四日重ねて同條約の廢棄を主張した。其理由の一節に。

若し二十一箇條が廢棄せられぬならば支那は日本の屬國に等しく支那の主權は毀損せられ自由の發達を期し得ない、更に日本が二十一箇條に包括して强奪した各種の利權は門戸門放主義を絕對に否定するものである。

(一) 日本は支那に對し種々の利權を要求したが何等の代償を提供してゐない、同條約から生ずる利益は全く片務的である。

(二) 同條約は支那と列國との間に存在する諸條約を侵害する。

(三) 同條約は曩に此の華盛頓會議に於て可決せられたルート氏の對支四原則に背反矛盾する。

(四) 同條約の存在は日支兩國間に不斷の誤解を生ずる。

と述べてゐる。加之同年二月四日の第六回總會議に於て、王全權は

幣原全權の二十一箇條々約第五項の撤回を承認する、但し日本が總べての要請又は一九一五年の要求全部を放棄しない事は甚だ遺憾であるから、支那政府は將來適當の時機に於て同條約廢棄の目的を以て公平に適當なる解決を求むる權利を保留する。

と述べてゐるのである。要するに支那の主張は同條約は日本の强迫によりて締結し且支那國會の承認を得てゐないから無效であると云ふに過ぎぬ。

前項の如き理由で支那朝野は機會のある毎に日支條約の廢棄論を主張して來たが、從來は殆んど顧みられずして已んだのである。然るに上述の如く支那の國會が同條約の無效廢棄を可決し支那政府も之を認容したので勢ひ何等か日本に對し具體的の方策を採らねばならぬ事となつたのである。殊に旅大の改訂租借期限が此の三月二十六日で滿了する譯なので愈々其對策を講ぜねばならぬ破目に陷つたのである、そこで支那政府では國會の議決に從ひ無效を宣布せねばならぬのであるが條約廢棄は到底日本は勿論英米其他列强國を動かすことが容易でないので、結局廢棄論から改訂論に移らんとするに至つたのである。現に米國系であり支那政府の御用紙である北京天津タイムスの如き或は英國系機關紙ノース・チャイナ・デイリ・ニウス紙の如き有力なる英字新聞が改訂論を主張したのは其の傾向を示す一事例であつた。其要旨を摘記すれば。

支那政府が二十一箇條の廢棄を日本政府に迫らんとする論據は該條約が脅迫に依つて調印せられたのであるから無效であると云ひ或は支那國會の承認を經て居らぬから效力が發生して居ない云ふにあるが何れも論據が薄弱で日本政府が之を容認せざるのみでなく列國も首肯しないだらうから寧ろ改訂を求める方が賢明である。

と云ふのであつた。又支那側でも同樣意見が漸次有識者間に主張せらるゝに至つた。即ち中華新報の所論の如きは其の一例である。即ち

同條約は改訂するも、廢止するも共に困難な問題で、若し改訂を要求するならば、日本は交渉には應ずるだらうが、支那の要求する遼東半島の還付に對しては、日本は飽までも固執するであらうから、目的達成は難かしい

と論じ、更に一轉、租借期限問題に言及して

遼東半島租借地の性質については、日本ではこれを領土と同一視し、十九世紀帝國主義法學者の說を引いて「九十九箇年は永久の意味だ」として居る、併し是れは絶對に認め難い處であるから、支那は先づ今年は

一、この遼陽半島租借地は、當然返還さるべきものなる事を聲明し

二、新たに還付の時機を協定する事

三、還付の條件

の三者に就て處置を講すべく、若し日本が之れに應じない場合には、其曲は日本にあるのだと論結した。尤も此の改訂論が支那の輿論に滿足を與へしや否やは別問題で、現に國會では條約改訂案に反對が起り、更に三月三日には王家襄等三十三名から新に旅大回收建議案を提出してゐるが兎に角支那政府の意嚮は廢棄よりも改訂に向つて進んだ事は事實であつた。

支那政府の意嚮は大體叙上の如く進んで來たが北京政府では問題だけに、愼重の態度を執り、先づ外交部に對し之が實行方法に關する調査を命ずると共に、國務院に外交委員會を新設し委員には顏惠慶、顧維鈞、孫寶琦、汪大燮、施肇基、王正廷等を選任し二十一箇條に對する方策を講究せしめた。二月廿二日の國務會議で決定された外交委員會の章程は左の如くである。

第一條　外交委員會は專ら外交に關する事宜の討論研究を爲す。

第二條　外交委員會は國務院に附設す。

第三條　外交委員會は委員會長一人、副委員長三人高等顧問若干、委員若干を以て組織す。

第四條　委員長は大總統より外交總長を特派して派任せしむ副委員長は委員長は外交に熟通の人員を選び大總統に申請してこれに充つ高等顧問及び委員は委員長より大總統の諒解を得て、外交、學識、經驗に富む者を聘してこれに充つ。

第五條　外交委員會の研究討論すべき問題は左の如し。

一、大總統或は國務總理より提出するもの。

二、委員長より提出するもの。

三、委員より提出して委員長がこれを討論に附すべきものと認めたるもの。

第六條　本會議決の件は大總統に報告し大總統より外交部に交附し外交部より閣議に提出して其議決を經施行す。

第七條　本會々議は委員長首席となる委員長事故の爲出席し得ざる時は副委員長代りて首席となる。

第八條　本會に事務長一人を設け委員長の命を受けて委員會議事の準備及び文書の事を司る。

第九條　本會に事務員若干を設け委員長の命を受け事務長と共に會議及び文書記錄の事並に一切の庶務を掌理す事務長は委員長より大總統に申請してこれに充て事務員は委員長より選派す。

第十條　本會は書類を寫し雜務を處理する爲に雇員を使用することを得。

第十一條　本會の支出すべき俸給手當等の費用は委員長より適宜に定め大總統に報告して財政部より支給す。

號十二條　本章程に不完備の所あらば隨時これを改訂す。

第十三條　本章程は公布の日より施行す。

斯くて外交部は同問題解決方法として左の四案を採擇し、其一つを最後の案とする事に決定し閣議に提出した。

（一）國會の決議に基き日支協約の無效を日本政府に通告する案。

（二）同協約廢棄に關する交渉を他日適當の機會に於て開く權利を保留する案。

（三）日本に對し同協約の改訂を申込案。

（四）同問題を國際仲裁々判に提出して解決する案。

而して其の何れを採用するとしても理由とする所は左の四項である。

（一）日支條約の存續は日支親善の障碍たること。

（二）本條約は支那の發展を妨ぐること。

（三）華府會議の精神に違反すること。

（四）本條約に對しては支那國民擧つて反對し最近國會が無効宣言をした。

そこで北京政府では二月二十七日の閣議に於て日本に對し具體的の手段を執る前に駐外使臣の意見を徵すると共に、英米兩國の意嚮を探査せしめ併せて其諒解を求めしむる事とし左の如く打電した。

又一方外交部に對し條約改訂に關する通告文の起草其他一切の準備を內命した。

遼東半島の租借期限はもと二十五年であつて本年を以て滿期となるものである、外交部は過般來支那各地の實業團體から本問題は支那の領土主權に關する重要問題で其の歸結如何は全國民の共に憂慮する所であるが、惟ふに民國四年の日支條約が租借期限を九十九年に延長したと云ふことは未だ支那國會の承認を得て居らぬから當然効力を發生せずと注意されつゝある、將た又最近參衆兩院は此の脅迫に依りて締結された日支條約の無効を宣言し遼東半島租借期限が本年で終ると云ふことを指摘し遼東回收を促した、現に支那各地の人民は甚だ昂奮して居るので政府は既に積極的準備を行ひ機を見て日本と交渉を開始せんとしつゝあるが、此の事は國際關係上重大問題であるから貴官等は速に北京政府に對して意見を具陳されたし。

支那政府では日支條約の廢棄を日本に提議するも到底滿足なる効果を奏することが出來ない事を見越し、日支條約の改訂を提議せんとする意嚮に傾いてゐた處、本案最初の提案者たる衆議院議員張樹林等は北京政府が逡巡して何等の對策を講じないのみならず、仄聞する所に據ると國會の決議以外の改訂の提議說が有力であると云ふので大いに憤慨し二月二十六日衆議院に對し「速かに政府をして無効宣布を爲さしむる樣督促すべき旨」の建議案を提出し更らに議員陳中民も亦張總理、黃外交總長に宛て同樣の意味の督促を發した。一方參議院側に於ても議員童抗等は三月六日政府に對し質問書を提出し「同協約の無効宣布案は兩院を通過し政府に廻附して以來既に二箇月を超えたるも政府當局は徒らに逡巡して未だ無効を宣布せず又日本政府にも無効の通告をも發せずして關東州租借地回收の機會をも失せんするは如何なる理由なるか三日以內に回答すべし」と要求し、國會方面の躍起運動は甚だ熾烈となつた。加之英米留學生出身者の中心人物たる顧維鈞、施肇基等の外交官は支那政府顧問シムプソン氏と提携し無効宣布案の對日通告方を運動するに至つたので已なく北京政府でも國會決議に加へて日支條約改訂を日本に通告する事に決し、三月四日對日通牒文の起草を俟つて之を閣議に附した。其結果、同交涉は之を北京に於てせず直接日本政府に提起するを便利なりとして、即日外交部條約司主事任起華を日本に特派し同通牒文を帶同せしむることゝなつた。斯くて任氏は四日北京を出發し、八日東京に到着し九日廖駐日代理公使と會見し一切の手筈を定め三月十日日本政府に通告することゝ確定し、任氏は十二日歸任の途に就いた。

駐日代理公使摩恩霖は三月十日午後四時十分一等書記官江浩杰を我が外務省文書課長の許に派遣し内田外相宛左の通告文を送達し、一方北京政府は小幡公使に同樣の通牒を發した。

拜啓陳者本日本國外交部本年三月四日附左記訓令を奉じ貴大臣に照會するの光榮を有し候

日支兩國は素と親睦の間柄にて方今世界各國共に平和に向ひ公道を力持する際に當り宜しく益親密を謀り以て極東の平和を保障し世界の和を促進すべきものなり、就ては民國四年五月二十五日締結せるところの日支條約及交換文書は實に日支親善の最大障礙にして、當時該條約調印後支那政府は宣言書を發表し支那國は壓迫せられたる爲め已むを得ず、忍びて最後通牒中の各條件を受けたるも、之が爲めに各國條約上の權利を侵犯したる時は支那國は責任を負はざる旨聲名せり、關で巴里平和會議に於て理由を聲明し、該條約及交換書の廢止を要求し平和會議議長より此問題の重要なることを十分承認する旨の返書を得たり、華盛頓會議開會の節復我國代表は(一)利益の交換無し(二)支那國と他國との間に締結せる條約を侵犯す(三)該條約及交換文書は華盛頓會議に於て通過せる各原則と抵觸す(四)該條約及交換文書は已に屢々日支間の誤解を發生したり、との理由に依據し同會議に取消要求を提出せり、當時日本代表は我國提案を重視し日本は南滿洲及東部蒙古に於ける鐵道敷設及課稅を擔保とする借款の優先權、南滿洲に於ける政治、財政、軍事、警察顧問、教官傭聘の優先權を完全に放棄し竝に締結の際原有の第五項に關する留保を撤回する旨聲明せられたり、我國代表は日本代表の放棄及留保各項の撤回を承認したるも其他に就き未だ滿足せず仍全部放棄すべき事を聲明し、竝に他日適當の機會に於て本案を解決するの權利を留保する旨聲明し、右我國の留保は同會議に列席せる各國代表の正式承認を經竝に議長より總會に於て正式に宣言し會議議事錄に記載せり、本條約及交換文書に對しては本國輿論は終始反對し本國政府の巴里、華盛頓に於て本案を提出し取消を要求せるは原と全國民意を以て根據と爲せり、本國國會は民國十二年一月通常會議に於て民國四年五月二十五日締結の日支條約及交換文書を無効と認むることを議決し、本國參議院より右に依り處理ありたき旨移牒ありたり以て本國民意終始一致せるを見るに足る、而して旅順大連租借期間は間もなく滿期に至らんとす、本政府は日支關係改善の時機既に成熟せりと認め特に貴國政府に於て重ねて有らゆる民國四年五月二十五日締結の日支條約及交換文書は既に解決を經及已に貴國政府放棄竝に留保撤回を聲明せる各項を除き應に直に全部廢止せらるべきことを聲明す、竝に旅順大連接收辦法及民國四年日支條約及交換文書廢止後の各種の問題に關し商議する爲め日期を指定せられんことを希望す、本國政府は深く信ず、貴國政府及國民は日支邦交を重視し必ず能く本國々民全體の意思を容納し、數年間兩國親睦の障礙を完全に除去し、之より兩國々民眞實の親善を謀り東亞の和平益鞏固となるを得ば、是れ惟に日支兩國の福のみならず亦世界の幸なり、本國外交部は右寫を貴國駐支公使に送り接洽すると同時に、茲に特に貴大臣に及照會候條御回答相煩度此段得貴意候、尙本代理公使は貴大臣に對し特に敬意を表し候　敬具

中華民國十二年三月十日

中華民國代理公使　廖　恩　燾

日本外務大臣伯爵　内　田　康　哉　閣　下

此の支那政府の日支條約廢棄通告に關する支那民間の輿論如何と見れば左の如くであつた。

北京京報　日支兩國民親善の障碍中最も大なるものが民國四年の日支條約であることは兩國朝野の齊しく認める所であり、該條約及附屬文書は成立當時に於て甚だしく不自然である、且其後種々の經過を經て今や存在の根據は薄弱なものであるが、假に條約上の根柢確乎たりとするも積極的親善の立場から日本としては區々たる條約上の隱れたる利益に拘泥し却て積極的な重大意義ある事業を看過してはならない、故に本條約廢止問題は偏狹なる外交慣例若くは法律的根據に拘泥せず大局から着眼せば條約の廢止の如きは元來支那から要求する迄もないのである、外交部の照會や中種々の經過を擧げて該條約が今日既に廢止の機會に到達して居る事を指摘した點は明かに日本に對する支那政府の誠意を示し且日本政府が現實の見地から同一の諒解に到達し必ず相當の手段を執る事を期待したもので、日本國民にして親善の意思ある者なら必ずや外交部の通牒を誤解する事はあるまい。

上海中華新報　（第一）此の條約は永遠に兩國人民の感情融和の障碍をなし（第二）條約第一部分は既に改訂或は廢止されて居る、故に支那の爲にも日本の爲にも此惡記念の條約を殘して置く必要は無い（第三）事實上此の條約を取消しても決して日本の發展は阻碍されざるのみか寧ろ之れが爲めに增進される。之を解剖して云へば華盛頓會議の結果各國の支那にある租借地は畢竟還附される事になつてゐる、即ち旅順、大連の還附も唯時間の問題で之が還附の後日本の經濟利益に何等の損失は無い、何も此時間を延長する必要はあるまい、日本の滿洲に於ける經濟的基礎は非常に鞏固であるから條約を廢止するとも何等の影響は受けない、南滿鐵道の如き日本の在滿勢力の中心で巨額の投資がされて居るから支那が今之れを回收するは事實上不可能である、更に此條約の廢止は紛糾を一掃して日本の全部の支那に於ける經濟事業に便利を與へ且日支提携の新紀元となるものである。

支那政府の廢棄通告に接した日本政府に於ては、三月十四日午前十時内田外相は廖代理公使を外務省に招致して左の如き對支回答文を手交し、一方駐支小幡公使よりも同樣回答を支那政府に送達した。

以書翰啓上致候、陳者貴國外交部の訓令に基き本月十日附貴翰を以て大正四年五月二十五日締結の日支條約及交換公文の廢棄方御申越の趣拜誦致候、貴翰に於て先該條約締結後直に發表せられたる貴國政府の聲明、巴里會議に於ける貴國全權の聲明、華府會議に於ける貴國全權の提出したる要求等を引用せられたる後該條約交換公文中既に解決し竝に帝國政府が拋棄及留保撤回を聲明したる各項以外を全部廢棄せらるべき旨通告相成候處右は帝國政府の意外且頗る遺憾とする所に有之候、惟ふに大正四年の日支條約及交換公文は夫々正當に全權を委任せられたる兩國代表者に依り正式に調

印せれたるものにして殊に條約は貴我兩國元首の批准を經たるものに有之、而して右約定に關する帝國政府の見解は既に華府會議に於て帝國全權が聲明せる所にして、貴我兩國間に儼乎として有効に存在する條約及交換公文を貴國政府が隨意に廢棄せられんとするが如きは啻に日支兩國民の親善を齎す所以に非ざるのみならず、國際の通義に反するものにして帝國政府の斷じて承認し難き措置に有之候。

帝國政府が常に貴我兩國の親善關係を增進するを念とするは從來貴國に對し表示したる幾多の好意的措置に依り疾く御承知の通りに有之候殊に本件條約及交換公文の一部に付ては既に新に條約を締結し又は抛棄若くは留保の撤回を聲明したる次第にて、此上更に變更すべきもの絶對に無之こを茲に聲明致候從て貴信御來示の旅順大連接收辦法及本件條約及交換公文廢棄後の善後措置商議方に關する貴國政府の提議に對しては何等應酬するの必要無之候。

右回答旁本大臣は貴下に對し茲に重て敬意を表し候　敬具

追而在支帝國公使よりも貴國政府に宛て本文と同樣の公文を發送爲致候爲念申添候也

大正十二年三月十四日

日本外務大臣伯爵　内田康哉

中華民國代理公使　廖恩燾閣下

日支條約廢棄通牒に對する日本政府の回答に關し支那言論界は略之を豫想し居たる爲か殆んど通告當時同樣冷靜なる態度を持して居た。惟だ僅に民黨の機關紙北京益世報が左の如く論じたるが如きは其出色なるものであらう。

駐日支代理公使の公報に據れば内田外相は支那に回答するに先立ち駐日英米兩國大使及其他主要外國大使の諒解を得た、即ち駐日英國大使に對しては坊間日支條約廢棄に關し英國政府が支那を援助するかの如く傳へられるが日本政府は此の種の流說を信せず英國の信義を確信すと云ひ、九龍及香港が旅順大連と同一の運命にある事を仄めかし、又駐日米大使に對しては華府會議に於て日支條約中の或る部分に就いては最惠國條款により米國も其利益に均霑する旨を會議錄に載せたが之は米國が日支條約の有効を認めた證左であると信ずと云ひ、日支條約廢棄提議が米國の後援に依るかの如く傳へる一部の風說を非難すと駄目を押し、其他諸外國大公使に對しては日支條約中今日有効の部分は決して列國の支那に於ける利益を阻害するものに非ざることを指摘し、滿洲に於ける日本の地位に就きて諒解を求めたとのことである、此の駐日代理公使の公報に見るに日本が如何に用意周到であるかと云ふことが判るが之に付けても支那政府としては愼重の態度を以て日本に對するの要あるを痛感せざるを得ない、支那政府顧問シムプソンが昨日支那政府に建議した「民國四年の日支交渉、巴里會議及び華府會議に於ける本問題審議の内容を公表し再び列國の同情に依つて本問題を

解決す可し」との意見は傾聽に値する。云々

而して一般民衆も亦略同樣の態度を持してゐたが、例の親歐米の外交官及排日政客商界の一派等では之れを機會に再び排日運動を誘起せしめ對內的に自派勢力の輓回に利用せんとするものがあつた。今其重なるものを擧ぐれば略左の如きのである。

旅大回收期成會　三月十日北京に組織せられ其重なる顏觸は林長民、王正廷、顧維鈞、施肇基、王寵惠、周自齊、張耀曾である。

二十一箇條撤廢後援會　北京各界聯合書の發起である。

外交後援會　三月十五日衆議院議員蕭輔成氏等百餘名は二十一箇條問題に對する日本の回答に於て支那側の要求を拒絕せるより國會は率先して無効を決議した關係上、國會が主となつて外交後援會を組織し國論を喚起して政府の後援を爲す旨の通電を發した。

學生聯合會　北京學生聯合會、江蘇學生聯合會、上海學生聯合會、東三省學生聯合會は何れも排日運動を起さんと計畫した。

上海國民外交後援會　華府會議當時組織せられた同會は日本の拒絕回答に應じ再び復活し上海各界聯合會と提携し國貨提唱運動を高調し出した。尙上海各路商界聯合會は三月十七日大會を開催して對日經濟斷交を爲すべしとて排日風潮を煽つた。

一方國會方面に於ては飽く迄も其素志を貫徹すべしと云ふ意氣込で衆議院議員張樹林等は左の如く主張し、更に同十八日には再び對日抗議の提出を建議するに至つた。

（甲）張樹林等の通電

（一）日支二十一箇條條約は最初に於て締結意思の一致を缺き後に批准を缺き即ち法による條約成立の根本要素を缺くものである。

（二）無効宣布の性質は完全に法律的であつて政治的ではない。

（三）日本政府が若し承認せぬ時は世界の各友邦に通牒しこの條約の無効を宣布すべきである。

（四）無効宣布の附隨手續は皆法律により國際法廷の審判に訴へること。

（乙）蕭輔成等の建議

日支協定廢棄通告に關する日本政府の回答に對し政府をして嚴重な反駁回答をなさしめると共に各國に通牒して其の諒解を求めさせること。

又支那政府顧問シムプソンは「民國四年の條約締結當時の狀況及巴里、華盛頓會議の內容を詳述して日本の脅迫事情を瞭然たらしめ以て最後の判決を世界の公論に附すべし」との建議案を北京政府に出提し最後迄健鬪すべき事を主張してゐたが、仄聞する所に樣ると北京政府では右建議に基き宣言書を發表すべく草案の起草に着手したとの事であつた。而して其後の對日策に關し三月十五、十六兩日

午前外交部に於て種々攻究討議せられた模樣であつたが、其内「日本に對し再通告を發すると共に外國にも之れが援助を求むべく若し日本が該通告を受取らざるか或は回答を發しない時は愈々最後の手段として國際法廷の裁斷に訴ふるがよい」との議論が頗る有力であつた模樣である。

斯る間に、支那政府は日本條約廢棄に關し第二回の對日通告を發することに決し、四月三日漸く其起草方を外交部に命じた、然るに張總理對黃外交總長間に於ける對日方針に關する硬軟の相違、張總理對國會の見解の相違は、支那對日態度の歩調を紊し黃總長は辭表を提出し、國會側の張總理反對派の主張する所は「二十一箇條なるものは全然否認してゐるから對日通牒も否認を根據とせねばならぬに拘らず、政府は同條約の存在を承認し之れが改廢を要求したのは失當の甚だしきものである、又二十一箇條と旅大回收問題は之を切離して交渉せねばならぬのに事茲に出でざりしは全く失敗である」と云ふにあつた。

右の如く國會と政府とが相對峙して其對策を論じてゐる裡に早くも原約に據る三月二十六日の旅大還附期は經過してしまつたので、各地の支那民間に於ては大いに政府の措置當を得ざる事を攻擊し、此上は國民自ら對日策を講ずる外手段の施すべきはないと云ふので、著しく排日の氣勢を高むるに至り、五月七日の所謂國恥紀念日前後に於て各地に於ける排日運動が又しても盛になつた。今各地の排日概況の當時新聞に報せられた儘を略述すれば左の如くである。

上海　上海方面では國民外交後援會及商會各界聯合會、學生團等が中心となり示威運動を持續し、三月二十五日には市民大會を開き日本が支那の要求を容るゝ迄で日貨排斥を行ふべく、其實行手段として（一）日本人に家屋を貸さぬやう地主に徹すること（二）新聞紙は日本人の廣告を掲載しないこと（三）日本に米を輸出しないこと（四）日本の銀行爲替及び紙幣の受理を拒絶すること等に決した、右の外外交市民大會では三月三十一日左の如き決議を爲し益排日氣勢を高唱する事に努めることにした。

一、日本方面では二十五日の示威運動を少數者の煽動と稱し又蘇州南京等は冷淡であるから更に宣傳方法を講じ又蘇州南京に宣傳員を派す。

二、國貨を提唱する爲各工業者の加入を勸誘す。

三、各商店に引續き旗を掲げしむる事。

四、日貨排斥のビラを撒布する事。

叙上の如く示威運動は可成り盛大であるが實行力は案外微弱であり、尙一般商業は勿論綿絲需要も相當在荷のある日本絲二十手は賣行く見込なきが中絲及日本綿布は品薄で上代用品等日本絲でなければ立行かぬから排貨中も買手尙行はれ來つた。

北京　北京は國政の中心であると共に近時學生運動の中心となつたので其運動も上海其他より熾烈

である、從つて三月二十六日に北京學生聯合會の大示威運動が行はれ排日の氣勢を煽つたが、更に四月三日北京大學に於て學生聯合會總會を開き日貨排斥を決議した、參加學校は四十六、出席學生二百六名に及んだ、その實行方法は左の如くである。

一、本會より代表を擧げて北京商務總會の贊助を求めしむる事。

二、執行委員會を組織して日貨排斥の實行運動を指揮する事。

三、二週間の猶豫期間を設けて一切の日貨販賣を嚴禁する事。

四、日本に原料の輸出を禁止し日本各銀行が支那に於いて發行する紙幣の流通及び日本との爲替取組を禁止する事。

五、全國商會に通電して一致の行動を執らしむる事。

天津　天津では氣勢が揚らないので三月二十六日を紀念として南海女子大學生以下各女學校生徒を頭に北洋大學河北水産學校學生等が示威運動を試みたが、運動費がないので問題にならなかつた模樣である、而し若し外人側から資金が出れば重大な形勢を誘起する丈けの準備は整つてゐた。

南支那　南支那一帶の商人は實際排日を好んでゐないが國恥紀念日迄には相當重大な形勢を誘起するであらうと觀測され、廣東では親英米系の政客學生等が排日運動の煽動に着手したが從來のそれと大した差もなかつたものである。

中支一帶　中支一帶でも排日の聲はあつたが其中心は武昌、漢口及長沙である。現に長沙の學生團の如き三月三十日日本領事館に闖入し領事に警告文を提出し、米國、英國、獨逸の各國領事に請願書を提出し其援助を求め、一方日商鹽川洋行の窓ガラスを破壞する等の狼藉を極めたものだ。

滿洲　滿洲中北支一帶で哈爾賓を中心に排日氣勢が盛んであるが、奉天に於ては官憲が自重の態度を取つてゐるので大した運動もなかつた。而し問題の轉化如何によりては本問題を奉直間の政爭に利用せんとする者も出來て、排日はかくて兎に角全國的に燎烈となつたものである。

日支條約廢棄運動と日本國民

支那の我國に對して爲せる大正四年日支條約廢棄の通告は、其の不當なること固よりにして、我が政府の斷然拒絶の回答は全國民の一致支持したる所であつたが、無謀なる支那政府に某國等の煽動に乘せらるゝと、其の對内政策の爲めとに依り尙も執拗なる態度を以て其の妄動を反覆せんとしつゝあつたので、此際日本國民の同問題に對する態度を宣明し支那は勿論、廣く列國の間に之を了解せしめ置くこと必要なりとの議有志間に起り、茲に對支國民同盟會なるものが組織され、其の第一回大會が三月廿八日午後三時半から東京日本工業倶樂部に於て開會された。當日の出席者は貴衆兩院議員、學者、操觚者、實業家等各方面の代表的人士五百餘名に達し、國論の歸趨自から瞭かなるものがあつた。會は先づ上杉愼吉博士の開會の辭に始まり、蜂須賀正韶侯を座長に推し、滿場一致を以て宣言及

決議を可決し、次に實行方法として（一）本會を繼續し機宜に應じて活動する事、（二）實行委員を置く事の二項に決定し、斯くて座長より委員の指名あり、終て頭山滿翁の發聲にて聖壽萬歳を奉唱し同四時半散會した。宣言、決議及び實行委員氏名は左の如くである。

宣　言

東洋の平和を保持するは帝國不動の國是にして、全人類と共に文明の惠澤に浴せんとするは日本民族本來の志望なり、故に曩に歐洲大戰の起るや、直に義に仗りて起ち、永く極東の禍根を除き、速に世界の平和を招徠するに盡くし、後巴里講和會議に參し、又た列國と華府に會商し、誠意を披瀝して軍備の局限を圖り、太平洋の諸問題を解決せり、國策の大本茲に定まり益々支那と善隣の誼を厚くし、是より共に力を東亞經濟發展に致し、兩國民生の共榮を期成するの機運將に熟せんとす。斯の時に方りて、突如支那國會の大正四年の日支條約の無効を宣布すべきことを決議し、同國政府の之を我國に向つて通告し來るを聞くは、日本國民の日支親善の大義の爲に切に之を遺憾とする所なり。苟くも儼然たる國家間の條約を後に至て無効なりとするは、外交史上未だ曾て之を見ざる非常の事例にして、國際の秩序を攪亂し、理義を沒却するの甚だしき、之を隣國の名譽の爲めに甚た惜むべしと爲すのみならず、徒に事態を紛糾し、兩國民の間に不快の感情を挑動せんとするを悲まざるを得ず。抑も日支條約は、帝國が國民の碧血を濺ぎて露國の侵略を防遏し日支の共存の爲に籌畫したる結果にして、實に我が國策の礎石たり。是れ日本國民の期せずして擧國一致し、支那の提言を拒絶すべしと爲す所以なり。吾人同志の今之を中外に宣明するは支那國民が深く此に反省するあり、東亞の前途を達觀して、速に無用の紛爭を爲すを止めんことを衷心切望して止まざれば也。列國も亦た斯の簡明なる事態を諒覺し日本國民の牢乎たる決心の當然なるを明知するに至らんは、吾人の信じて疑はざる所也。

決　議

日本國民は、大正四年の日支條約に對し、今後支那が如何なる態度に出づるも、斷じて其の廢棄を容るさず。

實行委員氏名

蜂須賀正韶（研究會）青木信光（研究會）目賀田種太郎（無所屬）阪谷芳郎（公正會）江木千之（茶話會）和田達次郎（交友クラブ）和田豐治（實業家）岡崎邦輔（政友會）小川平吉（政友會）安達謙藏（憲政會）下岡忠治（憲政會）大竹貫一（革新クラブ）仙波太郎（庚申クラブ）頭山滿（有志）上杉愼吉（學者）

一方支那側に於ては、更に第二次對日通牒を發する準備を整へつゝあつた模樣であるが、外交總長黃郛の辭職して未だその後任確定せざる爲め、該通牒の起草をも爲すこと能はず、全く行き惱みの狀態となつた爲め、一方民間に於ては北京政府頼むに足らずとなし、國民外交による解決を選ぶの外な

しとし、即ち『經濟斷交』の實行に着手し、此の運動は各方面の贊成を得て漸次南北支那各地に蔓延し來れるは、排日運動史上に一新紀元を劃せるものとして見逃すべからざる新傾向であつた。今北京、上海に於ける同運動の經過を略述すれば左の如し。

北京　北京學生聯合會は四月二十日以後、經濟斷交を實現する第一歩として日貨の販賣を爲す者に嚴重なる制裁を加ふる事を決議し、市内各商店に於ける日貨の檢査を開始し、五月二日最後の總會を開けり、一方北京總商會其他の各團體は中央公園水榭に集合し「國民對日經濟斷交運動大聯合團體」なるものを組織し、五月七日の國恥紀念日を期し大々的示威運動を行ひ愈斷交を實現する事を決議せり。

上海　上海對日外交市民大會執行委員會に於ては支那各地より代表者を集め協議したる結果、四月九日各省の省議會商會教育會學生會新聞社等各團體に對し「上海市民は既に對日經濟斷交を決議し、既に本月七日當地各團體商會代表は日本に對し商品の賣買運輸原料の供給勞働の提供を禁止したり、依つて各地に於ても一致し本會の決議に贊成せられたし」と打電し、更に同十四日上海各路商會總聯合會は上海各團體に對し「對日經濟斷交問題は既に各公團の議決を經たり、我商民は當に私利を犧牲として對日經濟斷交を決行せよ、各馬路商店中には既に自發的に實行に入れるもの尠からず、尙くは貴會も亦宜しく各商店の主人を招集し(一)日貨排斥(二)原料供給禁止(三)支那關係會社雇用日本人の解雇(四)日本銀行に預金せず又日本紙幣を使用せざる事の四項の實行を命ぜられたし」との通告を發し次で同二十日之が具體的方法を協議し、五月七日を期して愈々大々的實行運動に着手する事を決議せり。

爾來此の『對日經濟斷交』の運動は、中部支那方面に殊に激烈に傳播して行き、一時は殆ど手の下し樣なき狀態を呈したが、臨城事件問題、中央政府の動搖等に注意を奪はれ、曹錕大總統となるや排日運動緩和に努力する所あり、六月下旬漸くにして終息を見るに至つた。

第十四章　大滿蒙主義へ

第一節　安直戰と張作霖

張作霖が主戰論を高唱して中央政界に乘り出したことは、內部的に東三省統一の爲めにも必要であつた。何故ならば東三省は支那の完全なる一部として始めて有意義のものだからである。東三省と中央と、此の二つは兩々相待つて勢力が振張して行くものである。東三省の統一は從つて中央政界に於ける勢力の振張となり、中央政界のそれは從つて東三省に於ける勢力の增大を語る。完全なる中央集權が行はれず、各々地方的立場より中央政界に對する態度が定まつて行く今日に於て殊に然りである。故を以て東三省の統一成れる後の張作霖が、益々中央政界に勢力を有つて行くことは當然であつて、且つそれは東三省自身の持つ實力の表現とも謂ひ得るのである。だから中央政界に於ける張作霖の活動も、滿洲現代史としては見逃す譯には行かぬのである。

民國九年(一九二〇)二月張作霖は突如として八省督軍同盟を主唱して立つた。これ徐樹錚一派たる安福派の跋扈に對して國務總理靳雲鵬擁護を聲明したものである。

徐樹錚と張作霖との關係はすでに前述の如く決裂のままであつた。しかも張作霖の後援と斷絕した後も徐樹錚の鋭鋒は到る處に發揮されたことは、張作霖の自惚れを傷くると共に、少なからぬ不安を懷せるに足る。加之徐樹錚の行動は次第に傍若無人にして、且つ安福派本位となり來り、民國八年の秋すでに西北籌邊使となつて外蒙古の自主取消しに成功し、盛んに外蒙古の經營に活躍し出したことは、張作霖の東支鐵道回收や、呼倫貝爾の自主取消などを問題外に驅逐する觀があつた。此の西北籌邊使は一方張作霖の大滿蒙主義と衝突し來るべき可能性あるに於て張作霖の不安は益々大ならざるを得ぬ。

斯くて支那本部に於ける安福派の反對團體たる直隸派と握手する事になり、その直隸派が猛將吳佩孚の湖南撤防によつて明白に安福派に對する態度を確定するや、張作霖は民國九年六月大總統徐世昌の召電に應じて入京し、暗に曹錕等と氣脈を通じて八省同盟の牛耳を執り、表面中立を標榜して、遺憾なく第三黨の權威を示した。そして月の下旬には保定に至り曹錕と會し、吳佩孚を始め八省同盟の代表者等と共に(一)安福俱樂部に警告すること、(二)安福派三總長を更迭して靳雲鵬を復職せしむること等を決議し、張作霖は此の決議を携へて歸京調停の任に當り、徐世昌、段祺瑞、張作霖三氏鼎座の上(一)周樹模內閣の組織、(二)徐樹錚の轉任、(三)西北邊防軍を邊防軍に編入することの三條件を決定したのであつたが、徐樹錚は西北籌邊使辭職と交換條件に段祺瑞內閣の組織を主張して止まなかつた。然るに徐世昌は七月初旬周樹模內閣案を國會に提出すると共に、張作霖、曹錕等が徐樹錚の罪狀を宣布した翌日徐樹錚の西北籌邊使を免職し西北邊防軍は之を陸軍部の管下としてしまつた。是

に於て安徽派の諸將は吳佩孚の免職を迫り、段祺瑞も亦遂に邊防軍第一師、第三師及第九師に出動準備を命令するに至り、張作霖は安福派より怨まれて遂に天津に逃げ出し、そのあとより段祺瑞は北京に入つて直ちに定國軍を組織し、段芝貴を總司令、徐樹錚を總參謀長、丁士源を交通部長として京畿一帶に戒嚴令を宣布し、且つ徐世昌に迫り、曹錕、吳佩孚を免職してしまつた。

かくなつては最早や騎虎の勢である。安直兩派は京漢線長辛店、京奉線廊坊の兩方に對峙するに至り、張作霖も亦愈々その旗幟を鮮明にして安福派討伐を聲明し、徐樹錚の派遣せる暗殺團を捕縛するや、徐總統擁護を表面の名義として奉天軍の入關を決した。先づ汲金純の第二十八師は全部錦州の駐割地より出動入關し、張作相麾下の第二十七師は、鐵嶺、開原、法庫門方面に至る諸部隊も等しく奉天及新民屯に集中し、また吳俊陞の第二十九師の騎兵旅團は洮南より陸路新民屯に南下して、此等の諸隊は續々として入關し軍糧城を中心に天津北倉一帶に集りその數七萬に達すると稱せられた。而て奉天に於ては巡閲使衛隊旅長たる張學良を省城戒嚴司令として敵黨の侵入に備へたのであつた。

然るに形勢の推移は、安徽軍に不利となり京漢線方面は安徽軍總崩れとなり、京奉線方面に在りし徐樹錚の軍隊も爲めに退却を餘儀なくされ、一部は京綏鐵道に又一部は通州方面に撤退したので奉天軍は七月下旬、進出して廊坊に至り、湯玉麟に引率され奉天憲兵は北京に到着して安徽派の要人を逮捕せんとした。次いで奉天軍はその主力を豐臺及南苑に輸送し、直隸軍と共に安徽軍の武裝を解除してしまつた。北京城には安徽軍の敗兵、新來の奉天軍、直隸軍等充滿し何時衝突を生じ城内に闖入するやも知れぬので歩軍統領の軍隊を以て各城門を鎖し嚴重警戒し、殊に張作霖の入京は如何なる芝居を打つや竊倪を許さずとし、人心大いに動搖し、復辟の謠言も亦盛んに流布されたのであつた。

斯くして張作霖は一躍時局の中心人物となり、一切の問題は張作霖之が解決の鍵を握るが如き觀を呈し、國務總理靳雲鵬は先づ奉天に來りて安直兩軍の停戰に付いて協議し、曹錕等も亦交渉はすべて張作霖に一任してあると稱して調停には耳を藉さなかつたので、張作霖は靳總理と同行して入關し、奉天には黑龍江督軍孫烈臣を巡閲使代理として留守せしめた。

靳雲鵬と共に入津した張作霖は曹錕を保定より呼び寄せて協議し、(一)邊防軍とその官制を廢すること、(二)西北邊防軍を廢止しその軍隊を解散すること、(三)新國會停止すること等その他の直隸派の要求條件に就いて贊同し、且つ今後北方の時局は張作霖曹錕の二人にて維持することを申合はせ、靳雲鵬をして内閣を組織せしむることゝなつたのであつた。かくて張曹二人は八月初旬相繼いで入京し、張作霖は「兎も角も靳雲鵬に再び内閣を組織させた上、その他を事を處理せしむべし、又國會の法定數に足らざること明白なる以上は、國會の同意を求むる如き形式を執るの要なければ署理として任命すべく、若し國會にして反對せば解散して可なるのみ」と主張し、且つ張作霖曹錕の兩人は、復辟と共和の主唱者なれば必ず衝突を起すであらうといふ謠言に對して、兩人連名を以て各省に宛て「斯

くの如きは黨人の揑造流布するものにして余等は飽くまで元首を擁護し共和を保持する決心なり」と通電してその態度を表明した。

然るに直隸派の猛將吳佩孚は、張作霖の勢力擴大に憤怒し、國民大會を提唱して、安直戰の善後問題を定めんとし、靳内閣に反對の態度を執り出したので、兩者の意見には大なる差が生じたが、結局曹錕が吳佩孚を抑へて張作霖の主張を通させたので、茲に靳雲鵬の國務總理任命が正式に發表され、奉天派、直隸派、舊交通系の聯立内閣が成立し、且つ北京政府の政權に關しては、大總統、國務總理、張作霖曹錕の四頭目間に政權保持を目的としたる六箇條の條件が協定された。即ち、

(一) 重大案件に關しては政府より張作霖曹錕兩人の意見を徵すべきこと。

(二) 東三省及直隸、山東、河南等各省の官吏任用は張作霖曹錕兩人の意見を採用すること。

(三) その他の各機關に對する政府の任命には、張、曹二人は反對せざること。

(四) 中央政府の命令を遵奉せざる諸省あらば、張、曹二人より勸告すること。

(五) 靳内閣動搖の際は前以て張、曹兩人に通知すること。

第二節　察哈爾の占有と吉黑督軍の更迭

斯の如くして年來鋭を東三省に養へる張作霖が愈々手を關内に伸ばすの機會は到來した。彼れは先づ大總統の威嚴擁護と京師治安の保持を理由として前年南征以來駐屯せる張景惠麾下の暫編奉天第一師を依然常駐せしむる外、鄭殿陞の暫編第二混成旅その他を合し、約三萬の奉天軍を南北兩苑及び廊坊一帶に分駐せしめ、又軍糧城を中心に山海關以西の京奉沿線にも軍隊を配備した。然る後彼は北京の兵權を掌握せんとし、步軍統領王懷慶が京師衛戍總司令を兼職せるを、その本職を解かしめて步軍統領には奉天督軍參謀長湊華を後任たらしめんとした。然しこれは徐總統の反對に遭ふて成らなかつたので、その代り京師憲兵司令陳興亞を免職して湊華を此處に据へた。

然しながら張作霖の理想は大滿蒙主義の實現に在つた。京師の兵權を獲ることも、此の主義實現の手段と解せられる。張作霖の食指が永いで蒙古に向つて動くことは、徐樹錚を擊つた張作霖としては豫定の事實と見られる。先づ第一に奉天省と最も密接の關係があり、且つ直隸の大堡壘を爲すところの熱河を彼は希望した。そして此の地域の都統には張景惠を据へんと運動を始めたが、此地には北洋軍人の長者姜桂題の鎭守し、毅軍の精鋭を擁してゐる爲めに、彼の轉任は仲々に困難で張景惠の推擧も殆んど物にならなかつた。依つて張作霖は察哈爾都統王廷楨を轉任せしめて、その後任とするに決し時殆かも外蒙方面の形勢が急を告ぐるに際し、王廷楨が叨林に出兵するを踏躇逡巡し居るを聞き、早速政府に對し「外蒙危急に際し都統出兵せざれば奉天軍を出兵さすべし」との强硬なる激電を送り次いで王廷楨の免職を强要した。之に就いて靳總理とは、すでに默契の成立せる事とて九月下旬遂に

王廷楨は將軍府に祭り込まれ、奉軍副司令張景惠が察哈爾都統兼陸軍第十六師長に任命されたのであつた。然かも張景惠が張家口赴任の爲め奉天より北京に向ふに際し、察哈爾都統の權限を擴充し、外蒙古軍事統率權を附與すべく政府に要求せしめ、庫倫、恰克圖に駐屯する軍隊は勿論、別に一ヶ師團の兵力を蒙古各地に分駐せしめ、その全部を察哈爾都統の統率に歸せしめ、且つ第十六師長には別に鄒芬を任命したのであつた。

張作霖は以上の如く關内にその勢力を張ると共に東三省内部に於ても着々として自己の地盤を固めつゝあつた。否關内に對してこそ種々なる手段も要すれ、東三省内に於ては最早や何人の容喙をも許さないのである。彼の張作霖に對し唯一の競爭者であつた馮德麟も、張作霖から、三多の後任として盛京副都統に任ぜられて、むしろ隨喜して之を受くる如き始末である。湯玉麟も亦遼西なる白土廠門の閑居から呼び出されて安直戰爭の際には奉軍偵察隊長として御奉公し、その功により遂に第三代の東邊鎭守使として(九月下旬)張作霖の命令を聞くことゝなつたのであつた。此の東邊鎭守使なるものは鳳凰城に駐紮して、馬賊の巢窟たる東邊の鎭撫に當る重職で、且つは滿鮮國境警備の擔任者であるが、之が遼西との位置は全く相反し一は北京一帶に對するものであるのに、これは全く奉天内部の治安に任ずるもので、他勢力との關係は殆んどないといふて差つかひないものである。而て朝鮮即ち日本に對しては、朝鮮より來るものよりも、むしろ日本の代表的それは南滿洲鐵道によるものなるが故に、對日本的に意義ある位置ではないのである。即ち日本との直接交渉は全くないのだ。だから東邊鎭守使は全く奉天省内部に對する一機關に過ぎないものである。此の東邊鎭守使は張作霖の同輩である馬龍潭が任じてゐたのだが、その部下が馬賊と聯絡し良民の財を掠奪せることがしば〳〵あり、且つ公金を消費したる事實があつたので、兵權統一を希望してゐた張作霖は直ちに後を洮昌道尹に轉任せしめ、その後任には第二十七師第五十四旅長蔡平本を任命し、やがて蔡平本の新編第四混成旅長に轉じて、その後に湯玉麟の任命を見たものなのであつた。

斯の如くして奉天省は全く張作霖の色彩を以て殘るくまなく塗られてしまつた。黑龍江にも信頼する孫烈臣がゐる。只殘るは吉林のみとなつた。それも張作霖の勢力下ではあるが、未だその色彩が濃厚でないのみだ。吉林督軍鮑貴卿の進退がその赴任當時より決定的のものでなく、實は孫烈臣を吉林、張景惠を黑龍江に據えんとするのが張作霖の眞意であつた事を語れば明瞭である、その鮑貴卿をして之に代らしめたのは一時的のもので、反奉天熱のある吉林に對する一時的緩和濟であつたのだ。だから東三省内に於て、意のまゝに振ひ得る今日に於ては、鮑貴卿の轉任が只時日の問題となり來つたことに無理はない。只鮑貴卿と雖も張作霖の傍系であり、且つは東支鐵道の回收に就いて殊勳を立てたりしたので、彼を黜ける口實を得るに苦んでゐたものであつた。然るに一方鮑貴卿は、東支線の回以來次第に張作霖を無視する行動があり、直接に中央政府と折衝することなどがあつたので、兩者の

意見は相反するに至り、且つ安直戰爭に際しては、由來安徽派と了解のある鮑貴卿としては相當その立場に苦しみ、安徽派の沒落は、ことに張作霖に對して彼の立場が困難を加へて來た。加之吉林省內部に於ては琿春事件の突發に遭ふて兼任省長としての責任を問はれ、省民の排斥運動を受け、しかも紛亂せる吉林財政の處理に付いてその方法を誤り、多く私腹を肥やすといふ評判があり、爲めに省民の反感は益々高まり、遂に民國十年三月中旬霆威將軍に任ぜられて天津に至り、その後任には張作霖の豫定の如く孫烈臣が轉任し、黑龍江督軍には第二十九師長吳俊陞が任命されたのであつた。但し之に就ては、北京政府は吳俊陞を吉林に赴任せしめ、孫烈臣はそのまゝとして、更動の煩雜を避けんとしたが、張作霖は于沖漢を北京に派して政府と商議せしめ、豫定の任命を見ることになつたのである。同時に黑龍江政務廳長には前奉天政務廳長たりし遼瀋道尹史紀常が任命された。

第三節　蒙疆經略使（熱河の獲得）

過激派軍の爲めに追はれたるセミョノフ軍の一部約四千人は、約二千の馬賊と共にウンゲルン指揮の下に車臣汗部の野に逃入し、長期に亙つて困難なる行軍を續けたる後庫倫近くに到着し、支那軍と數戰闘の後民國十年（一九二一年）二月庫倫を占領し、活佛の名を以て遂に外蒙の獨立を宣言した事件があつた。北京政府に於ては九年の冬すでに庫倫危險の報に接し、急遽庫倫救援軍の編制に着手し、張景惠を援庫司令に第十六師長鄒芬を同副司令に任命し、直隸派も亦之が牽制の爲めに、口北鎭守使譚慶林を援軍として派遣することとなつたのであつたが、北京政府の財政窮乏と奉直兩派の相互牽制策の爲め討伐隊の進軍は遲々として進まず、かゝる內にウンゲルン軍は支那兵を追ふて南下し來り、三月中旬にはすでに叨林、烏得の要所を占領するに至つた。而かも支那側はチタ過激派政府の共同討伐提議を顧みず、對內問題に對する爭執を續けてゐたのである。彼の當時喧傳された復辟の謠言の如きも、反對派は張作霖牽制策として用ゐた傾向がある。即ち「露蒙軍の南下を機會に張作霖は避難の名義にて宣統帝を奉天に連れ出すべし」との噂があり、その理由の一として、ウンゲルン軍が庫倫に殺到するに先ち東部內蒙古の某地に於て準備を整へ、物資の供給は一に之を海拉爾に仰いだ關係上、張作霖が之を知らざるの理なく、知つて之を傍觀し何等の干涉をも加へざりしは此の軍隊との間に何等かの默契があるに相違なく、張作霖が庫倫に救援軍を送らないのは一に此の理由であるといふのである。然しながら此の謠言の眞僞は別としても、對內問題は奉直何れにも、力を外部の爲めに割くことの不利益を明示してゐたのは事實である。それは卽ち對南政策の關鍵を握つてゐた長江巡閱使李純の死によつて、二大勢力の均勢が破れ、北方に於ける第三黨たるべき勢力がなくなつたことである。これと同時に南方に於ては陳炯明の蹶起ありて、勢大いに振ひ、孫文は新に大總統に就任して陣容を整へ來り、從つて諸勢力の均衡によつてその中立地帶たる使命を有してゐた漸內閣に大動搖を來したのであ

る。加之靳內閣成立の使命たる南北和平は、李純の死と南方の蹶起によつて一片の反古と化し、國會の新撰擧も浙江督軍盧永祥の延期通電によつて實行不可能となり、軍隊裁撤の如きは奉直兩系の戰備によつてその反對の現狀を將來し、この間に舊交通系の內閣乘取陰謀が發生する如き始末であつたのだ。

斯の如きを以て北京政府も、すでに外蒙軍は傍江に迫れるを聞き、むしろ之と妥協してその善後策を講せん意志を示し來つたが、時あたかも外蒙古より重要使命を帶びて來れる二人の特使が奉天を經て北京に來つたので、早速張作霖の入京を懇請し、張作霖も亦外蒙の形勢と之に對すべき彼の好個の地位とを利用し所謂大滿蒙主義實現を期して、遂に四月中旬總參謀長許蘭洲、顧問町野武馬を隨ひて入京し、曹錕及び兩湖巡閱使王占元と會して所謂天津會議が開かれたのであつた。

然しながら會議の結果は單に廣東討伐宣言書と、內閣を改造して舊交通系を追ふたのみで、素とより一時的彌縫に終つたのであつたが、然し外蒙問題は少くも張作霖にとつてはより以上の緊要切實のものであつたことは確である。彼が冗々二ケ月に亘つて京津間に滯留せる所以の目的は卽ち玆に存すと云ふても過言ではない。果せる哉彼は、外蒙問題解決の最も大なる鍵の所有者として實際解決を主張し滿蒙經略の大權を求めたのである。此の大滿蒙主義はすでに大東三省主義の完成したる後必然來るべき運命である。彼はすでに察哈爾を得た。熱河と綏遠を得ば中華民國に對する大滿蒙主義は完成する。盤石の重みを以て北京政府を抑ふることが出來るのだ。故に彼は先きに張勳を起用して特別區域巡閱使とし、又は征蒙總司令たらしめんとしたが、復辟の謠言によつて立消えとなつたものだ。

然し今は、內閣問題に對して、自已と關係深き舊交通系を追ふてまでも解決することに贊同したその報酬が必要である。而かも外蒙問題は是非共解決せねばならぬ危急に迫つてゐる。その解決の最大適任者たる張作霖の要求は之を拒むを得ない。かくて遂に五月下旬在京蒙古王公を召集して對蒙大會議を開き、滿場一致を以て外蒙征討案を決議し一切の大權を張作霖に付したのであつた。張作霖の要求に系る經略費七百萬元も、直隸派には陝西省を與ふることゝ交換條件に承認され、後援軍の支配及び聯絡計劃は曹錕之を擔任することゝなつた。

然し彼が蒙古經略の大任を引受けて歸奉し、孫烈臣吳俊陞等と東三省軍事大會議を開いたりしたが、汲金純の熱河都統就任の主張が納れられなかつた爲めに、更に蒙疆經略使就任の模樣を見せず、烏里雅蘇臺より來れる外蒙軍の一隊が、隊伍も整へず、綏遠管下なる四子王府に現はるゝに及んでも「未だ蒙疆經略使に就職する旨宣布し居らざるを以て、蒙邊の軍事に關しては直接北京政府と協議されたし」と綏遠都統に打電する始末であつた。依つて北京政府も止むなく、蒙匪討伐の爲めと稱して姜桂題を說き汲金純と交代せしむるに決し、第二十八師の征蒙軍熱河方面出動と前後して更迭を發表することに張作霖と了解成り、玆に漸く六月下旬蒙疆經略使の實現を見たのであつた。その蒙古經略の具體案なるものを見れば、先づ第二十八師を右翼とし、之に騎兵一ヶ旅を合し、汲金純指揮の下に

熱河に駐屯し、同地より進軍し、左翼としては當時廊坊駐紮の暫編奉天混成第六旅長鮑德山、通州駐紮の暫編奉天混成第九旅長牛永福に出動を命じ、第十六師及び暫編奉軍第一師の一旅と共に張景惠指揮の下に張家口より滂江に向はしめ、更に黑龍江よりは一旅を編制して索倫山に駐屯せしめ、露國との聯絡を絶ち、張作霖自らは第二十七師の一混成旅を率ゐて後路より全軍を督戰するといふのであつた。政府からも百五十萬元はすでに送付され出動軍隊總數は六萬人であるといふ事だつたが、然し張作霖の親征の如きは到底あり得べからざる事に屬し、且つ實際六萬といふ大軍を動かすことは不可能であつた。加之蒙古及支那本部の實情を詳細に考察した者は何人も征蒙の爾く重大なものでないことを知ることが出來たものである。何故ならば、外蒙軍は敗殘の根據なき徒に過ぎなかつたからである。又直隸派が陝西、河南と着々その地盤を擴めて行くのを看過して悠々と蒙古あたりに出掛けることは張作霖にとつては出來得ないことである。於是てか張作霖の征蒙事宜なるものは單に熱河都統の位置をして完全に彼の指揮下にあらしめることを第一目的とするものであつたことを知るのである。從つて征蒙計劃はすべて此の目的を中心として行はれて行くのであつた。

見よ、九月上旬張作霖は突如參謀長をして、蒙疆經略使の辭表及びその官印を北京政府に提出せしめた。これ熱河問題に對する北京政府の約束が、その履行期たる九月に入るも實現せず、熱河都統姜桂題が毅軍を提げて反對せるその背後に露骨なる直隸派の使嗾ありしが爲め、荏苒遷引せられて未解決のまゝ葬らるゝ如き形勢を憤つての行爲に外ならなかつたのだ。茲に於て靳雲鵬は大いに狽狼し、急遽對應策を講じ、時あたかも熱河北部の阿片收獲すでに終り、爲めに姜桂題の態度も亦昔日の如く執拗ならざるに至つたのを幸として、直ちに姜桂題を陸軍檢閲使に任じ毅軍を統率せしめ、熱河都統には約束の如く汲金純を任命したのであつた。かくて熱河をその手中に收めたる張作霖が以後蒙疆經略使の職責を敢て盡さうとしなかつたのは當然である。彼が言の如くんば、蒙古兵の如きは少しも恐るゝに足らない。蒙古の大平原に於てこそ猛威を振ひ得るけれども、一歩なりとも關内に入らんか、その擊攘は實に易々たるものである。蒙古の平原に於ても兵數軍餉に於てさへ缺くる所がないならば決して彼が如く進軍を恣にさせはしない、恐るべきは蒙軍に非ずして直隸軍なのであつた。

而かも幸にして蒙軍は滂江の危急を告げたるのみで、鄂芬の死守によつて之を占領することを得ず次第に庫倫に引上げてしまひ、加之西北利亞に向へるウンゲルン軍は過激派の迎擊と、ウンゲルン軍に虐待されたる蒙古軍の反抗とにより殆んど遺滅に歸してしまつたので、茲に外蒙の形勢は全く一變し、過激派はウンゲルン軍に代つて外蒙古の支持者となり、庫倫還付を北京政府に向つて宣言するに至つたことは、たとひ露支通商問題を有利に解決せん爲めの手段であつたとしても、張作霖にとつては北京政府から軍費まで卷き上げた蒙古經略の責任を免るゝを得る機會となり、又以て輿論の反抗にも申譯が立つことになつたのであつた。まして況んや、東三省内部に於ても耿玉田一派の陰謀事件など

があり馬賊の蜂起南方革命派の潛入等兎角兵變とまでは至らなくとも不穩の形勢ありしに於てをやだ

第四節　大滿蒙主義の破綻（第一次奉直戰爭）

熱河、察哈爾の獲得によりて大滿蒙主義は先づ成就したと見て差つかひない。何故ならば張作霖の所謂大滿蒙主義なるものは、成吉斯汗の大蒙古を學ぶものではなく、否むしろ學び得るものではなく單に奉天第一主義の擴張に過ぎず、從つて目的は北京政局を左右し得れば足るものだからである。左右して而て奉天第一主義を充實鞏固ならしむるものだからである。而かもその奉天第一主義なるものは前にしばしば述べし如く、支那あつての奉天である。奉天の獨立を意味するものではない。支那に於ける奉天の價値を高上せしむるのが目的である。だからそれは必ずしも蒙古の獲得を必要とはしない。要は奉天第一主義の障害を除去するに在る。然るに張作霖の中央政界に於けるや次第に此の意味を離れ來つた傾向が認められる。奉天の價値を中央に强要するのみならず、或る時は之を奉天の犧牲する傾向さへ見え出した。中央が奉天の爲めに存在するものでない限り、此の傾向の是認さるべき理由がない。長江流域特に兩湖をその根據地とし、張作霖と共に中央政界の支持者である、直隸派の默過し得ないのは當然ではないか。只しばらく兩者の衝突を見なかつたのは、相互の地盤の確定してゐなかつた爲めに外ならぬ。特に直隸派に於て然りと謂ひ得る。奉天派よりすれば段派は同じく北方の利害

（他面之を日本のそれと見得る）の上に立つてゐるのだから、先づ段派の下に在るもそう不安ではないが、直隸派は、曹錕よりもむしろ兩湖に於ける吳佩孚の利害（概して之を英米と看做し得る）に據つてゐるので、直隸派にとつては、關内にその勢力を得て來た奉天派は正しく第二の安徽派と同樣である。而かも東三省は完全に張作霖のものとなり、臥榻の下すでに他人の鼾聲を容れざるに、安直戰後の直隸派は戶締りさへも未だ充分とは謂ひなかつた。直隸派とは云ふものゝ馮國璋の勢力を遺産として受け繼いだ譯ではない。戰勝は反安徽派の合同的勢力に依據しただけである。馮國璋の地盤はむしろ南京の李純が引受けてゐたのだつたが、その李純が死んだので、奉天派は此處にも手を出さうとする始末。曹錕派はその直隸督軍の位置とそれから第三師の兵力以外有力なものを持つてゐなかつた。第三師は吳佩孚の率ゐるもので、彼の根據地は湖北であらねばならぬ。しかも當時の湖北にはまだ王占元かゐた。直隸派はこれからその地盤を築き上げねばならぬ立場だつた。要するに安直戰後の直隸派は兩湖の勢力によつて立つた。そしてそれを完全に手に入れた。王占元の沒落がそれである。奉天派が熱河察哈爾蒙古と手を延ばすにつれ、直隸派も兩湖と直隸とを結ぶ河南にその勢力を附殖して縱斷の形を取り更に陝西を手に入れて安全地帶を形成した。そしてその勢が固定し奉天派と對峙の形勢になると、馮國璋時代の直隸派も、あたかも奉天派と段派との利害と同じ樣な關係から直隸派の傍系と立つに至つた。實に安徽派の殘黨さへも手なづけて、奉天派防守の策を廻らさねばならなかつたのである。

奉直兩派の間涉地帶たる新內閣も亦獨自の利害の上に立つものでない限り兩勢方の爭執を內閣自體が如實に示し來るべき理である。見よ、京津會議を一期として小康を得たりと安堵せる新內閣も、その後旬日を出でざるに盧永祥が聯省自治の宣言に會ひて、北京政府存在の價値に少なからぬ減少を來し、續いて陸榮廷の出走と王占元の沒落に會ふて、その施政方針たる南北統一及總選擧が根底より崩壞してしまつた。しかも王占元に代れる吳佩孚は擴大せる直隸系の勢を集合して廬山會議を召集し、以て露骨に北京政府の鼎の輕重を問はんとし、之に對する奉天派の均衡的要求赤飽くところを知らず、而かも新內閣とは反對の立場に在る廣東政府と密かに提携したる跟跡さへあつて、新內閣が命の綱であつた奉直兩軍閥の連鎖的援助は茲に至つて完全なる乖離を來したのである。加之新內閣の死命を制するものに財政の窮之と、之に伴ふ舊交通系の壓迫あり、外に在つては露支通商問題の停頓後、太平洋會議、山東直接交涉等の難問題發生し、各省の自治運動も亦高潮して、內外の情勢一として悲觀材料たらざるなきに至つたのである。

かゝる時に突如として起つたのは交通銀行の取付騷ぎであつた。そして直隸派が此の間に乘じて交通銀行の乘取りを策すると見るや、舊交通系は早速に張作霖と結び、遂に新內閣の總辭職を招來せしめ民國十一年(一九二二年)初頭、梁士詒を主班とする奉天派と舊交通系との聯立內閣が出來上つたのであつた。斯の如くしてその間涉地帶はその實質を失つたのである。

是に於て兼ねて抱懷せる直隸派の不平は更に無念の反感を驅らざるを得ない。何故ならば、北京政府は殆んど奉天系によりて占據されたからである。而かも財閥として隱然一大勢力を有する舊交通系と奉天派との提携は、直系にとつて由々しき恐脅である。更に南方派とも了解ありて背後よりを直隸派を威嚇し、又安徽派諸將の逮捕命令取消を行ひ、曹汝霖、陸宗輿等の親日派を復活せしむる等、安徽派との握手も成れるの觀あり、直隸派も遂にその防衛を脅かされて坐視するに忍びず、血氣の吳佩孚は遂に民國十一年一月初旬排日の題目を籍りて梁內閣反對の第一矢を放つてしまつた。

矢は遂に眩を離れた。奉直戰は區々たる調停運動如きで止まるべきではない。張作霖は早くも三月下旬、京師附近治安維持の名目の下に奉天軍を關內に增派することゝなり、第二十七師の第五十三旅及第七、第四の兩混成旅はすでにその準備を了し、吉林、黑龍江二省に駐屯中の第二十七師第五十四旅及び衛隊旅に引上げを命じ、此等の軍隊は續々として出動を開始し、北京南苑及軍糧城に駐り、第二十八師の步兵騎兵の大部隊も四月初旬より出動して古北口を經て北京に向ひ、斯くして四月中旬までに山海關を越えたる奉天軍は約二萬に達するものがあり、四月下旬馬廠、固安、長辛店の各方面に於て戰端は開始された。而して五月初旬長辛店の戰鬪に於て奉天軍は擊破されて固安、馬廠方面も共に總崩れとなり、北京方面の奉軍は武裝を解除され、中央固安方面のものは通州、遵化を經て古北口方面に散を亂して退却し、津浦線方面のものは鐵路によりて逃れたるも、一個旅の多數を以て全軍

捕虜となつたものもあつた。而てその殘部は一時軍糧城に集つたが、直軍の追擊に遇ふてその本營を灤州に移し、且つ古北口方面に退却したる第二十七師及第二十八師の一部も來り加はり、その數尙ほ四萬と號し、天險によりて最後の一線を試むる形勢見えたるも、頹勢は遂に支ふべくもなく、直軍の熱河占領も實現されてその背後を脅かされ、且山海關に至る京奉線不通の責任に關し外國の干涉を受くる恐れある爲め、五月中旬山海關に退いて、此處にその兵力を集中することゝなつた。

此の間奉天內部に於ても戰爭を繼續するの不利なるを知り、且つは張作霖當初の目的たる舊國會恢復及び南北統一が吳佩孚によりて遂行されんとし、最早や戰の理由を失ふたので、省長王永江等は痛我慢の張作霖に連日苦諫を呈し、五月下旬兎も角も奉天に歸らしめたが、彼は依然として再戰を主張して止まなかつたので、張學良を山海關の前線より呼び戻して勸告せしめ、又張學良を介して在奉英國宣敎師ヤング及び米國宣敎師ブラットに戰局調停を依賴した。兩人は六月上旬張學良と共に山海關に赴き、直隸軍の前線司令彭壽辛と秦皇島附近に於て會見する事に決定された。然るに此頃より兩軍の前哨線に於て衝突が起り、遂に六月中旬彭壽辛は五營の兵を以て攻擊を開始し、奉軍は孫烈臣、張學良等相率ゐて出動して之を擊退し、その後引續き直軍の襲擊があつたが、皆擊退された。是に於て王永江等は此の機會に張作霖の意志を翻させんと種々劃策し、その結果遂に黎元洪に向つて、國內に於ける一切の戰鬪を禁止するの大總統令を發布せられんことを要求するに至り、北京政府も亦直ちに之を容れ、張作霖は「作霖東三省に鎭座すること茲に十年、上國家に對し下人民に對し聊かも疚しき所なし今回直隸軍と開戰せるは止むを得ざるに迫られたるものなるを以て、將來政治軍事の權力中央に歸して大總統が他人の指揮を受けざるに於ては、作霖は甘じて東三省獨立を罷め鉾を投して罪を俟たん」と申出るに至つた。

斯くして奉直停戰第一回商議は六月中旬秦皇島に於て開かれ、ヤング及開灤鑛務局總裁ネサンの二人を斡旋者として張學良と王承斌との會見があり、次いで英艦カーリラ號に於て孫烈臣、王承斌の會見あり、次の如く停戰條約を締結したのであつた。

一、奉直兩軍は中華民國統一の爲め協心努力す

二、奉軍は二郎廟以南の陣地を徹兵し、直軍は後方灤州に集合す

三、直軍は東三省內に入るを得ず

斯の如くして奉直戰は全く結末を告げたのであつたが、その結果は一方に於て直隸派の澎漲を來したと同時に他方に於ては奉天派の縮少を來し、奉天派は山海關を中立地帶として全く關外に追ひ出されてしまつたのである。

第十五章　日露交渉と露支交渉

第一節　大連會議

日本の西比利亞出兵軍が、後貝加爾州及び黑龍州より逐次撤退し、烏蘇里一州に集結を終へたことはすでに述べた。而て薩哈嗹州の占領は大正九年七月初旬の宣言に於て、將來正當政府の成立を俟つて解決する旨を發表し、極東三州の駐兵は累次の聲明に基き、最後の浦鹽集結軍をも機會の有り次第撤退することに決定したのであつたが、此の機會をして著しく促進せしめたのは、實にワシントン會議の開催であつた。何故なればワシントン會議は即ち軍備制限會議であつて、一面日本の大陸發展を牽制する意味のものと見られたからである。

斯くて日本政府に於ては西比利亞撤兵の前提として、大連に於て極東政府との間に重大なる交渉を進むることゝなり、日本は西比利亞派遣軍政務部長松島肇を、露國はチタ政府外務大臣ユーリンを各々代表として、大正十年八月下旬より愈々會議を開催して、西比利亞問題に就いて困迷せる外交に一條の活路を見出さんとしたのである。而て此の會議は極東政府を交渉主體としたもので、その理由に就いて日本政府の聲明した所に據れば、

一、チタ政府は憲法會議以來獨立政府として內閣の組織は勿論、その勢力範圍も黑龍州、沿黑龍州沿バイカル、ザバイカル、沿海州の五地方に及び名實共に漸次整備しつゝあること、

二、チタ政府は共產主義を採用せず、事實上民主主義を奉じ居れる事

三、西比利亞の統一安泰を計るには撤兵を決行するに如かず

の三理由に據るものにして、從つて本會議に於て討議せらるべき主題は日本軍撤兵後に於ける日本在留民の生命財產の安固、及び經濟の發達を確實に保證せしむると同時に露國側希望の通商貿易問題を決するに在つた。

然るに會議僅かに三回にしてユーリンは、その穩和派にして勞農政府に不評判なると、對支交渉に失敗したることにより更迭を命ぜられ、チタ政府保健大臣ベトロフ之に代り、九月上旬より再び會議に入り、露國側は直ちに二十九ヶ條(秘密)の提案をし、日本は之に對し修正意見を提出したが、露國側は先づ(一)チタ政府は既に憲法會議も成立し極東三州の統一成れる故、協約は壓くまで對等であらねばならぬ事(二)チタ政府は共產主義を拋棄し、民主的施設を實行すべきを以て日本も軍國主義を拋棄して双方の親善を圖るべきこと、を主張するに對し、日本側は(一)チタ政府は未だ完全なる統一政府といふを得ざる故對等國として正式協約を締結する譯にゆかぬこと(二)日本の政策を軍國主義といふは非常の謬見故、先づその謬見より一掃せねば正當なる親善關係を結ばれぬ事、を主張して互に讓らず且

つチタ側は、日本の修正意見に對する再考を求めて來たので、日本側は政府の訓令を待つ必要を生じ、その到着まで休會することなり、二十六日に至り漸く開會し、日本政府の提案に係る十七ヶ條の對案を附議しだが、チタ側は突然會商地をチタに變更せんことを申出でたので會議は三たび停頓した。

而て十月二十九日日露兩委員は大連會議促進記者團代表に對して次の如き回答を發した。

日本側松島委員長の聲明

一、會議の經過に就いては日本側から九月二十六日十七箇條の對案を提示してチタ側の回答を求めたまゝ、今日に至るも何等の通告に接しない。

二、會議停頓の理由はチタ側より通信聯絡不備と專門委員派遣との爲に會議の再開猶豫を求めた爲めで、その他何等の齟齬はない。

三、目下緊要問題は根本問題たる原則案を協定するに在る。原則案にして成らば枝葉の問題は自ら解決するのであらう、

四、撤兵問題は原則案の協定と共に自然に解決する。(イ)西比利亞在留日本人の生命財産の保護(ロ)滿鮮國境に對する脅威(ハ)西比利亞在留鮮人の取締等に關して何等の保障なしに撤兵し難きは云ふまでもない。薩哈嗹の撤兵にも尼港事件の跡始末を先決問題とするのが當然の順序である。

チタ側ペトロフ委員長の聲明

一、會議の當初日露兩國の會議に對する態度には多少の相違があつた。即ちチタ側は大連會議を非常に重大視し、此の會議に於てチタ政府の正式承認を議定し、更に進んでは勞農ロシヤと日本との國交恢復の端緒を開かんことを希望してゐたが、日本は單に暫定協約を結んで通商問題のみを解決せんとしたのである。併しながら公式に非公式に協議を重ねた結果、兩者の立場は互に了解し得るに至つた。

二、通信聯絡不完全の爲め本國政府との照會に意外に多くの時間を費し、それが爲に種々の風説を生じたのは遺憾である。

三、目下交渉中の或種の問題、即ち漁業權の如きは主として勞農ロシヤより決定きすべもので、薩哈嗹撤兵の如きも尼港事件の解決を先決問題とすればどうしても勞農ロシヤの參加を必要とする。故に日本側に異議がなければ勞農ロシヤの代表を會議に參加せしめたいといふ提議をしたが、日本側は之を承認しなかつたので、軍事及その他專門委員の設置を求めたのである。

四、チタ政府はワシントン會議には何等の期待を有たぬ。齊多は日本との直接交渉によつて萬事を解決することを希望して止まぬ。然し萬一大連會議で圓滿な解決を得ない時は一切の經過を公表して世界の輿論に訴へる外はない。

五、極東共和國と勞農ロシヤとは人種、文化、言語、風俗その他の點に於て離るべからざる關係を

有するは云ふまでもないが政治上には全く獨立の國家を組織してゐる。然しながら兩國共、早く日本との親交關係を結びいと云ふ希望に於て一致してゐる。

六、（略）

七、撤兵は露國領土より完全に兵を撤するのでなければならぬ。故に薩哈嗹の撤兵に關しては先づ日本側より尼港事件の解決條件を表示して撤兵の眞意を明かにされんことを希望する。（後略）

即ち日本側は原則案協定を主眼として自主的撤兵を固守し、隨つて勞農ロシヤの會議參加を不必要とするに反し、チタ側は通商と同時に日本軍の全部撤退を要求し勞農ロシヤの會議參加を必要とする點に於て終始渝りなき態度を示したものだ。而てチタ側提案の二十九ヶ條と日本側の對案十七ヶ條の要領を摘記すれば次の如くである。

△チ　タ　側

一、浦盡の滯貨若くは林業、漁業、鑛業等の利權を擔保として日本より借款すること。
一、物質並に食糧の輸入を便ならしむる爲め東支鐵道と後貝加爾鐵道との連絡運轉を圖ること。
一、機食、被服、衛生材料等を日本より補給なられたきこと。
一、正式外交代表を交換すること。
一、軍事行動の許す限り成るべく速に浦盡派遣軍全部を撤退すること。
一、薩哈嗹州派遣軍撤退の意志を表明する爲め日本側より尼港事件の解決條件を内示すること。
一、極東共和國の主權を侵害する虞れなき限り日本の希望を容るゝ意志なるも、その專擅にて決し難き勘察加州關係事項等に關しては勞農政府と協議を重ねべき時間的餘裕を與へられたきこと。
一、浦盡のメルクローフ政府（十年五月カツペリ殘黨と呼應して、チタ政府の系統なるアントノーフ政府を倒して浦盡の地方政權を掌握した非社會主義者）とは平和的手段により併合交渉を進むべきを以て日本は嚴正中立を確守ぜられたきこと。
一、大正九年四月浦盡政府と日本軍との間に締結せられたる日露議定書その他反過激派諸政府と日本との間に締結せられたる一切の現存暫定協約は此際その全部を破棄すること。
一、極東共和國政府は日本軍の撤退後その領土内に在る日本人の生命財産の安全を保障すること。

△日　本　側

一、日本に對する共產主義宣傳の拋棄。
一、西比利亞在留朝鮮人使嗾の嚴禁。
一、浦盡軍港の防備を撤廢して自由港となすこと。
一、ポシエット灣を自由港とし、同港より豆滿江左岸印ち我が咸鏡北道に隣接する地域を割して中立地帶とし露國の武裝兵士を駐屯若くは通過せしめざること。
一、極東共和國領土内に在留する外人の商業の自由、土地及財產の私有權を確認すること、
一、極東共和國在留日本人の生命財產の安全を保障すること。
一、極東共和國内に横行するバルチザン又は馬賊の日本人に與へたる危害及損害に對しては、チタ政府に於てその責に任ずること
一、黑龍江の自由航行權を承認すること。
一、東支鐵道南線、哈爾賓、長春間の軌道變更に對し露國の權利に屬する範圍に於て異議なきことを確認すること。
一、西比利亞駐屯軍の特設せる通信機關の處置に關しては特に商議すべきも、我國としてはチタ政府の買收に應ずる意志あること

一、日露平和交渉の終了後に非れば、チタ政府は浦鹽の潛貨處分に着手せざること。

斯の如く双方の意見に相當の距離があるのみならず、チタ側は、或は通信機關に故障ありと稱して會議地移轉を提議し往其時日を遷延せしめ、或はワシントン會議の開催に乘じ代表者を同地に派して大いに宣傳を行ひ、何等か有利なる情勢を展開せんと努めたる爲め、會議は容易に進渉せず、チタ側は更に陸軍大臣ブクウヘルを派遣して會議に當らしむることゝなつた。此の會議遷延に就いては、チタ側に次の如き數理由があつたと察しられる。

一、日本と對等條約を結んで薄弱なるチタ政府の基礎を鞏固ならしむること。

二、速に日本軍の撤兵を斷行せしめ一にはチタ政府の强硬を宣傳して民心を收攬し、一には浦鹽メルクロフ政府の薄弱なるに乘じ一擧之が覆滅を計ること。

三、通商を結び日本より物質及資金を得て民心を緩和せとすること。

四、ワシントン會議の結果は日本が必す撤兵するものと思ひ、會議は永引く方か反つて好都合なるべしと臆測したること。

然るにワシントン會議の進行はチタ側の思ふ壺に嵌らず、ワシントンに出張した政府委員も米國々務卿に面會を謝絶され、列國委員も亦之を顧なかつたのみならず、一方浦鹽政府は大連會議に反對し日本がチタ政府と交渉するを自己排斥を看做してゐたが、その後日本が嚴正中立を守ることを確めると同時に、大連會議の屢々停頓するを見て、漸次勢を回復し、その別働隊たる白色パルチザンが盛んに活動を始め、浦鹽より北上して、沿海州に於ける過激派の根據地たるハバロフスクに肉迫し、加之旗色を見て動く赤軍の寝返りを打つて白衛軍に降るもの續出し、白軍の勢力は愈々加はり來つた。依つてチタ政府の陸相代理セールイセフは急遽ハバロフスクに向ひ黑龍州、後貝加爾方面の赤軍を同方面に繰り出し、大連會議の委員陸相ブリューヘルも亦歸還を余儀なくされ、チタ側は非常なる苦境に陷つたのである。而もチタ政府は此の白軍の活動を以て領土的野心のある日本軍の後援によるものなりとし盛んに排日宣傳を爲したので、日本代表は大連會議に於て强硬なる抗議を提出し、且つ會議の條項に付いても成るべく讓歩してチタ側の希望に同意して會議を促進せしめんとした。而て又浦鹽派遣軍中前線に在る第十一師團は大正十一年四月中交代の必要に迫られて居たが、大連會商が圓滿に進渉するに於ては、同師團を歸還せしめて交代を爲さず、守備區域を縮少するを以て彼我の便宜なりと認め、調印を急がんとしたるに、チタ側は新に日本撤兵前チタ軍隊の浦鹽即時進出を要求し來りたるのみならず、更に撤兵期間を明示せんことを要求し、その他各種の要求を逐次提出し時日の遷引を計り、且つ談判を打ち切りチタに歸還すべき旨を言明した。かくて日本政府も代表者に大連引きあげを命ずるの止むなきに至り、茲に大連會議は決裂となつたのであつた。時に大正十一年四月下旬であつた。此の間支那側は、大に日露大連會議を重視し、張作霖の如きは種々なる牽制策を執り、むしろ會議の不調破裂

を希望し、奉天交渉署員焦桐を大連に派して情報をさぐらしめたものである。何故なれば、大連會議の結果日露が國交を開始し、日本より經濟上の援助を受くるに至らば露國は茲に復活して支那北境の一大脅威となり、從來の如く露國に對して示威的態度を執り得ざるのみならず、東支鐵道に關する利權の回收を企てる恐れがあつたからである。

第二節　長春會議

大連會議も成らず、西比利亞の排日は益々その火の手を擧ぐるに鑑み、日本政府は六月下旬、從來しば〳〵聲明し來れる西比利亞撤兵を愈々斷行するに決し、大正十一年十月末迄に沿海州より全部撤兵することを發表し、同時に次の如く撤兵理由を聲明した。

西比利亞撤兵に就いては從來成るべく速かに之を斷行したい希望を有してゐたが種々の事情から急にその運びに至らなかつたのは甚だ遺憾とする所である。然るに今や東部西比利亞の政情は十分に安は定したとは言ひ難いが、而も之をロシヤ全體の國情に就いて觀るに勞農ロシヤに於ても今日で恐怖政治の實行を廢してゐる狀況でもあり、又共產主義の施設に就いても漸次之に變改を加へて來てゐる樣な次第であるから、從來勞農政府を危險視してゐた列國の態度も漸次緩和せらるゝに至つた故に昨年來歐洲諸國と勞農政府との間には幾多の協約が締結せられ、曩にはゼノアに於て米國以外の主要諸國が勞農政府の代表者を會議に召集したるを始めとし、現在では是等諸國が海牙に於ても亦勞農政府と交渉を爲さんとする狀況にまでなつて來てゐる。卽ち從來露國を危險視せる一般風潮は露國自身の反省と共に漸次變化を呈して來たのみでなく、ゼノアに於ては假令期限附なりとは言へ露國との間に所謂不侵略協定が成立して、宣傳の禁止、國境不可侵の約定を見るに至り將來に於ても亦之を基礎として益々平和保障の確立を見んとするの氣勢が釀成せられんとしてゐる。事態斯の如きにも拘らず尙且帝國が沿海州に駐兵を繼續するは、素とより帝國政府の素志ではないのであるから、此際愈々撤兵を斷行する事に決した次第である。先般大連會議に於て通商その他に關する協定の成立を見なかつたのは遺憾措く能はざる所であるが、チタ政府に於ては談判不調の最大原因であつた所の日本軍撤退に關する疑惑が一掃された次第であるから、近き將來に於て必ずや圓滑に協約の成立に努力する事と確信してゐる。而て右撤兵の斷行は之によつて曩きにワシントン會議に於て示した帝國の和衷的態度と相俟つて日本國民が動ゝもすれば外國から誤解されてゐる樣な侵略的國民に非ずして、眞に世界の平和に貢獻せんとするに忠實なる國民である事を十分に了解するものと確信するものである。云云

日本政府は尙ほ同時に共同出兵を爲したる英米佛伊、チエコスロバック及び支那の各政府に對し撤兵斷行を通牒し、更に撤兵に伴ふ善後策として曩きに大連會議にて折衝せられたる基本協約に準據し、

チタ政府と再び交渉を開始する事に決し、チタ側駐日代表アントノーフと内交渉を進め、アントノーフの歸國後、七月初旬に至りチタ政府外務大臣ヤンソン及びモスクバ政府外務大臣カラハン兩名の名を以て、哈爾賓駐在オゾールニンを通じ哈爾賓總領事山内四郎を經て、日本外務省に向つて「日本チタ政府間の基本協定は既に大連會議に於て或る程度までの諒解點に達し居るを以て、これ以上は兩國誠意を披瀝して交渉せば解決容易にして敢て問題とならず、唯だ重要なるは尼港事件跡始末及び漁業權に關する二處分案なるが、右二案は何れもチタ政府に解決處分の權なきを以てモスクバ政府代表を參加せしめ、日本、チタ、モスクバ三國會商と爲し交渉を進めたし」と正式に申込み來つた。茲に於て日本政府は直ちに應諾し八月下旬、愈々會議地を長春と定め、日本は外務省歐米局長松平恒雄、總領事松島肇を委員とし、露國はヨッフェ及びヤンソンを委員として九月初旬會議に入つた。

然るに支那政府に於ては、長春會議の成り行きを特に重視し、長春の官憲は勿論、北京政府に於ても種々研究する所があつたが、愈々開會せらるゝや、外交總長顧維鈞は日本公使を訪問し、先づ口頭を以て「第三國の領土内に於て國際會議を開かるゝ場合は一應通牒位は發せられたし」と述べ、更に公文書を以て「長春會議に於て如何なる協議の成立すべきや詳にせざるも、右協定の中に於て苟しくも支那の權利利益及領土を侵害するが如きものある場合は、之を承認する能はざれば、成るべく事前に支那政府と商議せられたき旨」申込來れるに、一方又長春に於ては種々なる風說流布せられてゐたので、支那側の誤解を釋く爲め、松平委員長は吉長道尹孫其昌を訪問し「日本は東支鐵道問題、松花江黑龍江航行權問題等は今回の會議に關聯して何等考慮し居らず、且つ之等支那關係の問題は支那政府と協議を遂ぐるにあらざれは何等の効力もなきは自明の理である」と說明し、之に對し孫道尹は充分諒解せるの意を表したるも、北京政府は更に外交部參事鄭延禧を長春に特派すると共に、顧問シンプソンを派遣して、日露兩國委員より說明を聽取せしめ、尙は長春會議に支那側よりも代表を列席せしめんことを要求したりしたものである。

然るに一方長春會議に於ては、露國側は最初より全露本位の協定を締結せんとする事に力を注ぎ、大連案の基本協定を基礎とする討議に反對し、日本側より之を駁擊すれば更に文字の解釋の相違であるなどゝ論ずる有樣にしてその態度は略推して知るべき情勢であつた。かくて會議の結果の稍々惡化し始めたるは九月十日頃にして、露國側は談判の範圍を、歐露、日本間に擴張せんことを主張したるも、日本側は範圍を日本、チタ間に限定し、基本協定の成立を俟つて全露問題に入るべき旨を約したのであつた。然るに露國側は頑として應せず會議は將に決裂せんとしたので、日本側は試案を示して、事實上大連案を基礎として逐條審議に入つたのであつたが、十八、九日の會議に於て露國側より突如尼港問題を持ち出し、露國の領土たるサガレンに日本軍の一兵たりとも駐在する以上基本協定に對する勞農ロシヤの批准を得ること困難なれば、その撤兵期を明示すべしと迫り、茲に會議は豫定の大難關に

達着した。而かも此の問題に就いて九月下旬露國代表はモスクバ政府の訓令に基き左の如く述べた。

一、極東共和國領域にその適用範圍を限定する日本對全露協約の締結には同意す。但し日本は協定締結後日本對勞農露國通商協約を締結することを誓約するを要す。

二、勞農露國及び極東共和國は基本協定第一條の宣傳及び對敵行爲の相互禁止條項を極東共和國領域のみに限定することを欲せず。同條項は之を勞農露國領域（サガレン、カムチヤツカ）にも擴張適用すべき旨、協約或は附屬文書中に規定するを要す。

三、露國側は尼港事件の解決を俟つて後初めて薩哈璉の撤兵を實行すべしとの日本の主張を承認し得ざるのみならず、尼港事件解決に責任を負ふことを得ず。

四、尼港事件、日本の西比利亞占領中露國民の蒙れる損害、薩哈璉に於ける日本の利益、その他日露兩國相互間に利害關係を有する各種の問題は之を締結兩國間に於て協議すべきものと思ふ。同時に露國側は北部薩哈璉の撤兵は勿論、その他の露國領土よりの撤兵は全然他の問題と切り離してその撤兵期日を基本協定或は附屬文書中に言明せんことを極力主張す。

右に對し日本委員は「第一及第二兩項に對しては異議なく之を承認するも、第三の薩哈璉撤兵問題に關しては日本政府の態度は變更する能はず、即ち薩哈璉北半は尼港事件解決の保障として占領するものなれば撤兵は同事件の解決を俟つて實行すべきものである、故に日本政府は基本協約締結後直ちに尼港事件を審議しその解決を俟つてサガレンの撤兵を斷行せんとするもので、同事件解決の責任は當然露國政府の負ふべきものである」と謂ひ、又「第四の撤兵期日は尼港事件の解決を俟つて決定すべきものにして基本協定の調印をも終へざる以前に於て之を言明すべき理由がない」と述べて兩者の意見は一致するに至らず、全く妥協の餘地なき形勢に陷り、九月二十五日の第十三回會議を最後として遂に會議は決裂する事となり、三週間に亘る本會議も何等の効果を收むるなく終末を告げてしまつた。

此の會議の終了するや日本委員は直ちに決裂の顚末を中外に發表し、會議決裂の責の歸する所を闡明すると共に、外務大臣内田康哉は次の如き聲明書を發表した。

長春會議の不成功に終りしは帝國政府の最も遺憾とする所なりと雖もこれがため政府の撤兵方針には何等變更を來すことなく、豫定の如く浦潮其他大陸よりの撤兵は十月末までに結了すべし。唯だ北樺太に關しては、從來數次聲明せる如く二港事件の解決と同時に、之が撤兵を行ふべく、而かも帝國政府は本件に關しても何等領土的意圖を包藏するものにあらざることをこゝに言明せんとす。帝國政府は對西伯利關係の調整を期し出來得る限り寛容にして且つ互讓的なる方針を以て鋭意右目的の達成に努め、當初より極めて明瞭なる了解のもとに齊多び莫斯科代表者と長春に會議せしめたり。然るに同會議劈頭において、帝國代表者は先にゼノア及びヘーグに於て歐洲諸國の經驗せると同

一の困難に逢着すべきを感得せり。抑々帝國政府の欲する所は、齊多政府との暫行協定により邊境に對する不法の侵犯を防ぎ、危險なる宣傳を終熄せしめ、且合法に西伯利に在住する日鮮人民を保護せんとするにありしは政府の豫て明らかに宣言したる所、西伯利在留帝國臣民の私有財産權を承認せしめ、通商その他の業務遂行の自由を認めしむるは、獨り日露兩國政府との條約に基き居住營業の權利を有する萬餘の日本人の利益たるのみならず、不幸なる西伯利露國民の利益たるを信じたり。

然して帝國政府は、齊多政府に於ても右の如き暫行協定の締結を欲したるものと信じ、又樺太軍事占領問題の討議は追つて彼の帝國領事を初め七百餘の帝國臣民が殘忍なる殺戮の危に逢ひたる所謂尼港問題解決の際に讓るべき事は、齊多政府に於ても篤と了解せる次第なりと確信せり。將又帝國政府は從來の聲明に基づき、先きに西伯利撤兵を決し着々これが實行に取懸れり。右に關しては在留日本人は勿論、露國人諸團體より撤兵の結果西伯利擾亂を來たし、各派の爭鬪延いては邦人に對する危害を誘致すべきを恐れ、撤兵の延期を請願し來たる向きもありたる所、帝國政府は此上に駐兵を續け徒らに我政策に對する非難猜疑を招くを欲せず、斷じて撤兵を繼續せる次第なり。長春會議に於ては莫斯科政府は始より殆んど齊多政府を無視するの態度を執り、又莫斯科政府は歐露に於ては終始私有財産權を否定し來りたりたるに顧み、帝國政府に於ては長春會議に對する露國側の誠意につき疑を有し、殊に果して宣傳禁止を協定するの意志ありしや否や疑はざるを得ず。唯だ如上の成行きに拘らす帝國政府は國民と共に深く露國民の窮狀に同情を寄すると共に西伯利に於て平和並に秩序の維持せられんことを希望するものなり。

斯の如くして長春會議は決裂したが、浦鹽撤兵に關しては、その聲明通り撤兵を實行し、十月下旬チタ軍と浦鹽引渡に關する協定を遂げ押收武器も亦全部赤衞軍の手に引渡して全部の撤兵を了ると同時に、列國の東支鐵道技術部も亦十月三十一日限り解散することゝなり、東支鐵道は全然支那側の一手に於て管理せらるゝ事となつたのであつた。

最後に、自分は會議に表はれたる兩國の態度のみでなく、恰かも長春會議中に起つた、武器賣渡事件を摘錄して、日露支三國によりて起される滿洲政界の盆圍氣を察して貰ふ必要がある。それが會議に影響したことも少くはないからである。武器事件とは即ち、派遣軍司令部が浦鹽に於て保管してゐた武器に關した事柄であつて、その一はチエック軍の浦鹽引揚げに際し保管を依托されたる武器十六貨車の紛失事件であり、他の一は押收武器の一部なるべしと信せられる三十二貨車の武器が、浦鹽政府の執政官ヂットリックスの名に於て東三省保安總司令張作霖に賣渡された事件である。

チエック軍武器の紛失したのは、すでに大正十一年一月中の事であつて、時の浦鹽政府はメルクロフの首班時代の事であり、且つ當時は恰かも大連會議の進行中であつたのである。而該紛失武器は浦鹽政府麾下の白衞軍の武裝用に供せられたことが後に至つて發見された。又張作霖の買收した武器

は、その背後に日本現役將校が關係してゐると噂せられ、時恰も長春會議の進行中であつたので、日本の誠意を疑ふもの頗る多く、先づ北京外交團はその善後策に就つて協議し、殊に北京政府は、武器買收の當人が張作霖なるを以て大いに筋張し、十月中旬、駐支公使小幡酉吉に向つて次の如き要旨の抗議を提出し來つた。

一、浦鹽の日本軍司令部は浦鹽政府及び張作霖との間に武器買賣の取極めを爲し、既に其武器積込貨車十五輛奉天に到着したりとの報告に接したるが、支那國内への武器買賣に就いては陸軍部の許可を要する規定あるに拘らず、その許可なくして斯の如く武器の賣買契約を爲すは、支那の治安に障害を與るものなるを以て禁止されたし。

二、張作霖の手許に達せる問題の武器の出所に關しては在浦鹽の支那總領事が日本總領事より聽取せる所とチエック總領事より聽取せる所と一致せず。チエック領事の云ふ所によれば該武器は浦鹽の日本軍司令部が露國官憲に保管中の武器を賣却し、露國官憲が更に張作霖に賣却したるものなりと云ふが、若し右が事實ならば怪しからぬ事である。調査の上回答ありたし。

これと殆んど同時に日本政府も内閣の名を以て次の如く公表した。

去る九月廿四日以來新聞紙上に軍部がウラジオ派遣軍の監視または押收にかゝる軍需品を他に供給し何等かの企畫を爲しつゝあるが如き記事を掲げ種々の論議を見るに至り、爲に世上少からざる疑惑を生じたり右記事の如き事實のあり得べからざるは云ふ迄もなき次第なるが斯かる流説の傳へらるゝに至りたる因由と思はるゝ諸點につき事の眞相を發表し以て不幸なる疑惑を解かんとす。

一、抑々押收軍需品は大正九年四月武裝解除事變直後我派遣軍がロシヤ側となしたる協定により治安維持の必要上露軍の軍需品を押收せしものにして爾後武器彈藥の如き直接戰鬪に供し得る危險品の外は逐次これをロシヤ側に還付し又地方に於て押收せし兵器類は昨年總てこれをウラジオに集收せり而して以上の諸軍需品は小銃、火藥、手榴彈及火藥を主なるものとし其總量約三十萬トンに達す。

押收軍需品の性質以上の如くにして素りにこれを處分すべきものに非ざるを以て我派遣軍は嚴重にこれを監視し來れり。唯警察機關たる各種民警等の爲め必要なる兵器彈藥は前記協定により我派遣軍に於てロシヤ側の要求に基き若干交付しあるも其の他は皆ウラジオ附近數里に亘る廣地域に於て百七十餘棟の倉庫内及多數野積として存置しあり。

然るに世上押收兵器を我軍に於てロシヤ側または支那側に供給しあるが如き風評を傳ふるものあり、これにつき調査せる處によれば若干貨車に搭載せる兵器が長春より奉天に到着したる事實はあるも露支國境稅關所在地たるポクラニーチナヤに於ける調査と押收兵器が前記の狀態にあることゝに徵し右奉天着の兵器に我軍が關與し居るにあらずやとの推定は勿論前記の風評は事實の根

據なきものといふべし。

過般頻りに喧傳せられたる三十二輛編成のロシヤ赤十字列車問題の如きも八月三十日右列車が突然ウラジオ發したるを以て豫てロシヤ鐵道側と協定したる輸轉材料散逸防止の主旨に基き野戰交通部は取敢ずこれを露支國境ポクラニーチナヤに抑留せしめたり、然るに九月初旬我軍の撤去輸送も順調に進み爾後に於ける使用車輛の準備また成り其の必要を認めざるに至りしを以て九月八日これを解放せしもの也。ロシヤ側說明によれば右はハイラル方面避難露人の救濟を目的とし衞生材料被服糧食及家具等を積載せしもの也と、因に世上往々ウスリー及東支鐵道の輸送物件につき我派遣軍に於て當然これを承知しあるべきものなるが如く唱ふるものあるもウラジオ派遣軍は其性質上駐屯地域の行政を行ふものにあらず野戰交通部また單に我軍事輸送に關し當該鐵道側と交渉をなすの機關たるに止まるを以て右は誤解に基く流說なり。

二、チエツク軍シベリア撤退に際し其殘置軍需品の監視につき同軍代表よりウラジオ派遣軍に交渉ありしを以て、我軍は大正元年末より當分在庫及貨車格納の儘單に之が外部の警戒に任じたり、其後右軍需品の所有權に關し先方關係者間に紛爭を生じたるを以て我軍はこれが警戒を謝絕せしも兵器格納貨車十九輛のみは治安維持の見地に基き從來の如く警戒を繼續し來れり、然るに本年八月上旬チエツク側の希望により點檢せしに右貨車全部空虛となれる事を發見せるを以て直にこれが調査を行ひたるに巧妙なる手段により貨車の掏り換へられたるものなることを確め得たり、本件一切の事實は軍法會議の結果により自ら明白となるべし。

これを要するに本問題は偶々世間の物議を招けるもチエク兵器の件は其眞相近く判明すべく、また我軍部が押收兵器を他に供給せりとなし、甚だしきは國策の範圍を超越して何等かの企畫を行ひありと爲すが如きは全く事實に反するものなり。

第三節　露支交渉と滿洲（一）

支那は從來白軍の弱勢なるに鑑み、むしろ赤軍と呼應して東支線の乘取りをやつたと見られてゐる。それは赤軍にとつても、素とより白軍驅逐の一便法ではあつたのである。而かも赤軍にとつては、歐洲方面が封鎖の狀態に在り、且つは日本が赤軍に向つて對敵行動をとつてゐる際であつたので、その經濟的必要より支那と握手する必要があり、それが又日本を牽制する一手段ともなるものであつた。故に露支交渉は、すでに早くより喧傳され、而かもそれは日露交渉の場合とは反對に、常に支那側が有利なる地歩を占め來つた。北滿に於ける支那の利權回收は、露國が眞實之を希望するものではないにも拘らず、容易に之を爲さしめたのは、赤軍に對する嗾昧を示す一例となる。而して之れが支那の立場をして益々有利ならしめし傾向があり、むしろ此の北滿に於ける支那の活動こそ、露支關係に於

て、支那側の優勢を將來した唯一のものであると謂ひ得る。そしてそれは張作霖の兵力と、而て東三省の統一に歸するものではあるまいか。外蒙古に於ける赤軍の活動も、之と交換條件に北滿に於ける勢力を盛り返さんとしたものと見られる。だから當時露支交渉はその主要部分が北滿問題であつたと云ふても過言ではない。民國十年四月下旬チタ政府と正式交渉を爲すに先だち、外交總長顏慶惠が、ユーリンに對して要求したるは實に(一)グロデコオ、黑河、滿洲里、賣買城の國境關稅に關する件(二)黑龍江及松花江の航行權に關する露國側の意嚮(三)東支鐵道關係事項の根本解決に關する露國側の主張(四)北清事變の際支那側より割讓せる江東六十四屯の還附に關する露國側の眞意等であり、黑龍江省長派遣呼倫貝爾善後事宜督辦兼交涉員鐘毓と極東共和國代表ヤビコフとが五月初旬滿洲里に會して、暫行境界交通協定十二條を締結するなど、北滿に於ける露支兩國の密接にして、而かも複雜なる關係は時に外交的辭令の交換を俟つべく、餘りに錯綜したるものであつた。

而て九月に至り大連會議の開かるゝや前述の如く、支那が之によつて刺擊されたるを機會に交渉を開始せんとし、ユーリンはペトロフと代つて北京に至り、支那政府の了解を得、更に奉天に至り張作霖と詳細に協議を重ねて遂に十一月中旬滿洲里に於て、支那側は李垣を委員長として、李家鎏、王景春、褚其祥、于冲漢を委員とし、露國側はユーリンを委員長として露支會議が開かれたのである、然るに、露國は當時饑災に苦しんでゐた際とて、支那が食糧の供給を承諾せば圓滿なる解決を見るべく期待されたるに拘らず、庫倫問題に關して露國側は頑として應せず、東支鐵道問題に關しても、國境附近の赤軍を東支線各驛に分派することを要求したので、張作霖は遂に東支鐵道の件は暫く之が交渉を中止すべしと電命し、黑龍江、吉林の兩督軍も之に和し、茲に滿洲里會議は殆んど流產に終つてしまつたのであつた。而て十一年一月には北京政府が、露支陸路章程（免稅減稅の各種辦法）の廢止を宣布してしまつた。斯くして滿洲里會議は、一年有餘を費したる露支通商問題の第一期的終末となり、新なる局面は、チタ政府には非ずして勞農ロシヤを對手として展開されることゝなり、勞農ロシヤ特派大使パイケスが、モスクバより派遣されたる、第一次の使節として北京に入つたが、此頃より奉直の關係は次第に爆發に近きつゝありし爲め、露支交渉としては何等の展開も見せず、奉直戰の終りたる後民國十一年八月中旬ヨッフエの入京によりて始めて、その交渉に入ることゝなつたのである。即ちヨッフエは九月初旬外交總長顧維鈞の下に公文書を通達し、速かに露支通商交渉會議の正式會議を要求した。然し北京政府に於てはヨッフエの入京以來その言動に對し頗る注目し、或は南方孫文派との關係を疑ひ、その申出に對しても愼重なる態度を執りつゝあつたが、民間に於ては北京大學の所謂新人を中心として速かに勞農ロシヤとの交渉を開始すべしと主張するものがあり、又衆議院議員三十四名の連名を以て勞農政府承認案を國會に提出せんとする事などがあり、一方長春會議の開かゝるありしを以て北京政府も愈々交渉の開始を應諾するに至つたが、長春官憲にヨッフエの行動監視を命ずると

共に各省に過激思想取締に關する法案を通電する始末であつた。

斯くて長春會議の決裂するやヨッフェは十月初旬北京に入つたが、北京政府は支那側より提出すべき議題に關して俄事委員會を組織して研究し、その結果何よりも先づ庫倫の撤兵を要求することゝなり、それにして解決せずば、露國の交渉には應じないことに決定した。これ「露國の交渉は實力ある日本すら尙ほ露國との交渉を困難とするに、支那が果して克くその目的を達し得るや疑問」なると同時に內政的にも張作霖との斷絕關係からして全責任を以て交渉に入ることが出來なかつたからである。即ち若し一度露支會議の先決條件たる勞農軍の蒙古撤兵にして行はれんか、直隸系を背景とせる北京政府は必ずや同方面の防備を直隸派に委すべく、その結果同方面は完全に直隸派の勢力下に入るであらう。之れ奉天派にとつて尠なからざる痛手なるを以て張作霖も亦極力之が牽制策を執るべく、更に露支會議の重大議題たる、松花江航行權問題、東支鐵道問等は何れも東三省に關係するものであるから、たとひ露支會議に於て如何なる議定を爲すとも、張作霖との諒解なき限り露支會議の結果に就いて實行上の責任が持てないのである。

かゝる中に日本軍の浦鹽撤退が赤軍との間に圓滿に解決せられ、特に押收武器が全部赤軍に引渡された爲め、支那側ではこれ日本の對露方針の一變であると驚異し、日露會議はやがて二度目の機會を招來すべく期待し、加之白軍の將士及露人避難民が浦鹽より或は朝鮮に出で或は陸路北滿に竄入し來り、特に琿春方面には國境を越えて遁入避難し來るも多く（約三千名と稱せらる）、爲めに支那側は琿春地方の警戒を一層嚴重にすると共に、東支鐵道護路總司令は護照なき者の入國を絕對に禁止する旨を宣し、政府も亦赤白兩軍に對し、支那境內に入るものは武裝を解除して驅逐し、若し强へて入境する場合は武力を以て對抗する旨を通告するに至り、且つ、ヨッフェに對しては(一)露國人は松花、黑龍兩江の航行權に干涉せざること(二)露國人は東三省森林鑛山を自由に採伐せざること(三)滿蒙に再び增兵せざることの三條件、及び十一月十日までに外蒙古の撤兵を實行することを、露支交涉開催の先決條件として申入れた。然るにヨッフェは(一)及び(二)以外は之を承認せず、反つて十一月初旬重ねて東支鐵道問題に就いて抗議し、一九一九（民國八年）及び一九二〇（民國九年）の露國政府の宣言によつて、露國が支那に在る一切の權利を放棄せりと推想するは誤解に屬することを抗議し來り、且つ東支鐵道に據る白黨系を驅逐し、支那領土に遁入したる敗軍を極東共和國に交付することを要求し來つた。

斯の如く本題たる通商問題よりも、種々たる實際的事件の爲めに露支兩國は奔走するが如く見えたるも、その間に於て、之等實際問題が、兩國の正式交涉に對する準備ともなり、かくて民國十三年三月下旬に至れば、北京政府は張作霖とも了解ある王正廷を籌備中俄交涉事宜に任命し、王正廷は直ちに交涉に關する諸般の準備に係り、先づ籌備中俄交涉公署を組織し、次いで上海に於ける露國避難民

及び北滿一帶に於ける現狀視察の途に上り、四月中旬上海より奉天に至り張作霖と會見の上更に北滿一帶の視察を爲し、之が爲めに露國も亦大いに活氣付き、代理代表ダフチンは上海在留露人の視察を爲したりしたが、同會議に於て最も難關と目されし東支鐵道問題に對しては「東支鐵道は西伯利亞交通の死命を制するものであるのみならず、同地方には多數の露人が居住してゐるからその利益も亦無視することは出來ぬ、而て鐵道そのものは法律上並に事實上に於て完全に露國の所有物で第三國の干渉を許さず、露支兩國の直接交渉によりて解決すべきものである」との意見を發表して會議は依然再開するに至らず、かゝる中に代表ヨッフエは日本に在つて、日露豫備交渉を開始する如き始末だつたので、委員長王正廷の如きは大いに焦慮して、遂に露支交渉の遷延は露國側に誠意なきによるものなりとの意見を發表して、交渉籌備督辦を辭する旨を非公式に聲明するに至り、露國側も亦六月下旬會議遷延はその責支那側に在りとて次の如き辨明書を發したのであつた。

露國側よりは交渉を促進して問題を早く解決する趣旨で會議地點をモスクバに移さんことを建議した程である。又ヨッフエが病氣を理由として故らに交渉を遷引するものゝ如く支那側で指摘してゐるが、露國としては承認し得ない所で、ヨッフエの東京より歸ることの出來ないのは醫師の勸に因るものであることは周知の事である。露支の交渉既に久しく頓挫して居るのであるから、今更數週間待てないことはない筈である。又蒙古の露軍が撤退するに非れば交渉を開く能はずと云ふも、軍隊撤退に就いては交渉の際に讓ることに双方の意見一致せることは公文書の示す所である。王正廷の辭職か事實とすれば遺憾至極であるが、斯の如きは支那側で近き將來に於て、交渉する意志なきことを語るもので、既に權力ある政府が存在せず、總統も地位を去つた最近の狀況から觀れば露支交渉遷延の責任は全然支那側にある。

第四節　露支交渉と滿洲（二）

露支交渉は兩國が互に交渉遷延の責を他方に歸せしめて、事實交渉の中絶を物語つてゐる時に際し、東三省に於ては、遂に東支鐵道附屬地に於ける土地管理の權を回收せんと計劃するに至つた。即ち東省特別區護路軍參謀長兼濱江鎭守使張煥相は東支鐵道督辦王景春、特別區行政長官朱慶瀾等と密々協議の上保安總司令張作霖に建策し、張作霖亦之に同意して愈々附屬地の移管を決行するに決し、督辦王景春、行政長官朱慶瀾に對し、新に地畝管理局を設け張煥相をして局長を兼ねしめ、同時に東支鐵道の土地部を撤廢せしめ直接鐵道の業務範圍に屬せざる土地の事務一切を移管せしむべき命令を發したのである。

茲に於て張煥相は、民國十二年七月下旬、地畝管理局長の資格を以て、東支鐵道長官オストロモフに對して附屬地移管の實施を要求し、露國側の返答を待たずに豫定通り、東支鐵道廳土地部を占領して

部長ゴンダッチを追ひ、强壓的に回收の實を擧げ、直ちに朱慶瀾の名を以て布告を發し、更に張作霖の名を以て移管理由を次の如く聲明した。

一、鐵道附屬地內の事務は東省特別區行政長官の管理に屬す、現在の東支鐵道管理局土地部の權限は右行政長官の權限と抵觸す。

二、鐵道敷設條約には、土地の主權は支那地方官憲に屬すと規定せり、然るに現在地土課一切の事務は此の條約に違反し支那の主權を毀損するものなり。

三、民國九年(一九二〇)十月東支鐵道管理續約第六條に、會社今後の權利は何等の事項たるを論せず均しく商業範圍內に嚴に制限を行ひ、政治關係事項の均しく禁止すべき旨明記しありて、支那政府に於て嚴密に取締を行ふべきものなり。然るに土地課の行爲は該規定に反するを以て、該契約を尊重する爲にも速に取消を行ふべきなり。

之に對し露國側に於ては、副督辦ダニレフスキー、鐵道長官オストロモフ、露亞銀行支配人ブチヒユーヶネン、土地部長ゴンダッチ、勞農全權ボゴヂン、哈爾賓市長チシエンコ等を會し、種々對策を協議し土地部の移管には東支鐵道の財政上(一年の地租收入約二百萬元)より反對し且つ協議の爲め相當時日を與ふる樣支那側に要求することゝなり、一方哈爾賓領事團に於ても亦、日、英、米、佛の四國領事は、從來同鐵道が各國に於て管理せられ來るのみならず、華府會議の協定を爲したる關係上直に緊急會議を開いて之が對策を講求したる結果

一、東支鐵道の歸屬は露支兩國間に於て決定すべきもので勿論政府の手によりて解決さるゝのでなければならぬ。從つて政府に非らざるものが單獨で勝手に處分すべきものでは絕對にない。

二、華府會議によれば東支鐵道の歸屬は露支兩國の決定によるべきものであるが、各國は同鐵道に關し利害關係を有するを以て、兩國間に歸屬の決定するまで現狀を維持すること。

三、附屬地帶に於ける各國居留民の利害關係上、今回の如き無暴なる回收計劃は承認する能はず。

と決議し、朱慶瀾長官に嚴重なる抗議を申込んだので、哈爾賓に出張し來つた吉林督軍孫烈臣は「支那官憲は主として鐵道その者に干涉せず、故に鐵道會社が現に使用しつゝある附屬地には干與せざるも、實際上鐵道會社が使用し居らざる附屬地は全部之を支那官憲の管理の下に置く」べき折衷案を提議したが、露國側は卽時に之に反對した。然るところ張作霖は東三省の行政に就ては、北京政府の訓令を待つの要なしと爲し、獨斷を以て土地管理局長張煥相に對し、直ちに附屬回收に關する事務を開始すべく命令し來り、張煥相も事務開始の布告を發布するに至り、同時に奉天當局は次の如く聲明したのである。

支那側が今回の要求を提起した譯は、條約で定められた鐵道附屬地を返還せよと要求するのではない。元來露國側は帝制當時に於て條約以外の土地までも勝手に收用して之に諸種の建築又は施設

を爲して今日に及んでゐる。而て現にオストロモフ村、ゴンダッチ村などと唱へ不法にも東支鐵道の土地課にその管理權を委任してゐるから支那が之に反對するのである。然るに外交團までが此正當なる要求を拒絶せんとするのは何事であらうか。

之に關し勞農ロシヤ側では代理代表ダフチャンより北京外交部に「今次支那の行爲は全く露國側の主權を無視したるもので、斯かる問題は來るべき露支會議に於て決定すべきものである」と抗議すると共に、次の如き聲明書を發表した。

一、東支鐵道の所有權は勞農露國に屬し、露國は單獨にて同鐵道の所有權及び處分權を有す。

二、一九二〇年(民國九年)三月支那が同鐵道沿線に於ける露軍の武裝解除をしたのは不法である。支那が大總統令を以て同鐵道に關して爲したる聲明も不法である。

三、一九二〇年十月支那と露亞銀行との間に締結された東支鐵道に關する條約は無効である。

四、一九二二年(民國十一年)二月ワシントン會議極東委員會に於ける東支鐵道に關する九箇國協定は不法である。

五、從つて最近附屬地回收に就き日英米佛の四箇國が支那に對して爲せる行爲も何等その權利なきものと認める。

六、東支鐵道に關する諸懸案は露支兩國が他を交へず友誼的精神を以て協議すべきものである。

かゝる時露國側に於ては、ヨッフェ病氣の故を以て、勞農政府外交委員カラハンと交代せしめ、カラハンは直ちに哈爾賓に至り、八月中旬更に奉天に至つて張作霖と會見し、東支鐵道問題に就き(一)東支鐵道の實權は露國に於て掌握すること(二)附屬地の回收に就いては支那側の要求を承認すること(三)露國側の地上權を認めて現在の建築その他の設定權を認め、將來も此の決定を保證すること(四)東支鐵道長官を交換せしめ勞農側より任命すること、等の四箇條を提議したと傳へられたが、張作霖は、土地問題を露支會議にて根本的解決を爲すべきものとし、それまでは他までも初期の目的を斷行することゝなり、會見は何等具體的結果を得ずしてカラハンは九月初旬北京に入つた。爾來カラハンは各方面に活躍して會議開始の氣運を促進することに努め、十一月初旬漸く文書交渉の時代に入つたのであつたが、露支交渉督辦王正廷は、露國の承認問題に就いては豫じめ日本の意嚮を確むる必要ありとし爲め、カラハンに對しては露國承認問題を、他の懸案解決の後に商議すべきことを通告して、十一月下旬北京を出で、先づ奉天に立ち寄り張作霖の意見を徵したる上日本に向つた。

然るにカラハンは王正廷の通告に對して、先づ支那側の無誠意を責めたる聲明書を發し、且つ、露支交渉は必ず露國との正式關係を恢復したる結果として初めて開始せらるべきを主張し、最後に東支鐵道問題に關しては、露國は商業上の權利を保留する以外何等野心なきを述べ、要するに露支間一切の問題は一九一九年及一九二〇年の露國の宣言に基き解決さるべきものであると結んだ。

依つて王正廷は歸國と共に民國十三年(一九二四)一月初旬、露國が會議に先ち正式關係を恢復せんと希望する態度には贊成するを得ず、尙は露國が未だ庫倫に駐兵するは誠意なき表證であると述べたが、カラハンは露國承認を先決問題とする點に於ては毫も讓歩の跡を見せず、支那も亦列國との均衡上自說を固執し、かくて兩者の交涉は細目に涉及するに至らずして玆に行結りの狀態に陷つたのである。

然るに一方支那國民の對露態度は、在支米國人及米國系新聞その他の猛烈なる阻止運動が行はれたるにも拘らず、カラハンの入京當時より已に熱心なる露支會議即開運動が、學生及一部智識階級間に擡頭しつゝあつたが、彼等の活動は次第に各方面の輿論を喚起するに至り、王正廷カラハンの交涉行詰りの頃に至つては盛んに露國の承認を主張し、次いで民國十三年二月に入るや、英國及び伊太利の露國承認の報あり、爲めに輿論は俄かに沸騰し、露國無條件承認を提げて政府に迫り、遂に政府をして上海滯留中の王正廷を召還せしむるの氣運を作つた。

果然二月中旬王正廷の入京するや、カラハンは直ちに外交部に向け、支那の白黨援助に就き嚴重なる抗議を提出すると共に王正廷との間に交涉開始に就き意見の交換があり、先づ東支鐵道及露國承認問題を除く他の諸懸案に就いて妥協點を見出し、第三回(二月下旬)第四回(三月上旬)の會見に於ては東支鐵道に關し、露國側の讓歩に依つて次の如く妥協が成立した。

一、支那の東支鐵道買收を承認す、その評價及方法は會議の議決に待つ。但し外資を使用するを得ず。

二、鐵道は露支通商上の用に供すること、但し哈爾賓浦鹽間は露國に於て軍事上必要の場合軍隊輸送に供するを得。

三、回收前は臨時理事會を設け露支各々五名を出し、理事長(支那)副理事長(露國)局長(露國)副局長(露支各一名)別に監査會を置きその人數は露人三名支那人二名とす。

四、雇傭の鐵道局員は露支各半數とす。

又承認問題も、諸案を一括して大體の基礎的取極を爲し之を修好條約として調印し、然る後露國の承認を行はんと云ふ支那側の主張に露國側も異議なかりし爲め、愈々協定大綱草案及附則を作成し各本國の審議を俟つこととなつた。

然るに北京政府に於ては、露國承認尙早論者たる外交總長顧維鈞及陸軍總長陸錦等が、王正廷の草案に就き、露蒙條約廢棄、駐蒙露軍撤退、外蒙白黨取締、在支露國教會堂回收問題等の諸點に關し修正意見を提出し、カラハンは强く之を拒絕したるに、一面又佛國公使よりの東支鐵道に關する嚴重なる抗議に會したる爲め、交涉は再び困難に陷り、而かも尙早論者等は依然として修正案を固持する爲めに、カラハンは、兩國全權が能ふ限りの讓歩を敢てして作成せる協定草案を今に至つて支那政府が

些々たる閣員の嫉爭及他國の壓迫により調印を躊躇するを見、遂に最後的通牒を送つて三日間内に調印を求め、若し期限内に調印なき場合は協定全部を無効とする旨通告し、而かも支那の無通告により形式上露支交渉は決裂となり、外交部が王正廷に代つて露支交渉の衝に當ることゝなつたのである。

斯くて外交總長顧維鈞は三月下旬支那政府の態度を辨明して交渉の繼續開始を希望したるに、カラハンは、交渉繼續の無意味なること、及び支那側に於て交渉再開の希望あらば、先づ露國を承認すべしと頗る强硬に主張し來り、爲めに交渉の再開は支那の大讓歩なき限り殆んど絶望の狀態に陷り、國務總理孫寶琦、外交總長顧維鈞は病と稱して遂に閣議に列せず、一面國内各界の輿論は益々沸騰し、囂々として露國無條件承認を提げて政府に迫り、且つ吳佩孚、齊燮元、馮玉祥、等が續々として調印要求の通電を發し、殊に吳佩孚の如きは、前後八回に亘つて猛烈に政府の失政を糾彈し、若し本交渉にして絶望に終らば、その全責任は顧維鈞に在りと斷じ來り、一方張作霖も、亦北京政府が自己と了解ある王正廷の罷免に全く張作霖を無視したる行爲ありし爲め、三月下旬東三省代表呂榮寶を北京より召還し、顧維鈞をして交渉せしむることに反對の電報を發したのであつた。

玆に於て顧維鈞は大いに狼狽し遂に交渉の難關を爲した露蒙條約の廢止、外蒙の撤兵及び數會回收問題の三項に就き最大限度とも云ふべき大讓歩を爲し、四月初旬外交次長沈瑞麟をして之をカラハンに發送せしめ、爾來密かに外交部參事朱鶴翔に旨を含めてカラハンと商議せしめつゝあつたが、五月下旬に至り遽かに兩國の意見の合致を見、翌日直ちに調印を了し、玆に露支の國交は恢復し、支那政府は直ちに露國を承認したのであつた。

かくて北京政府は、東支鐵道、外蒙接收その他重要事項に就いて關係各官署並に專門家を網羅して之が對策を講究しつゝあつたが、露支協定實施と直接關係深き奉天側張作霖との關係が圓滿に進行しないのみならず、反つて張作霖より否認の通告に接したので、北京政府では大いに狼狽し特使を奉天に派して意志疏通に努めたが張作霖が之に應せざる爲め、露支協定は事實上その實行が頗る困難なる狀態に陷つてしまつた。依つてカラハンは奉露局部協定により北京政府との協定を圓滿に實行し得る樣解決せんと欲し、クリシュコ及びクズネツオフ等を細目會議委員に任命し、張作霖に向つて種々交渉する所があつたが、張作霖は頑として之に應じなかつたので、止むなく東支鐵道沿線の赤軍を密かに出動せしめて奉天側を牽制しつゝあつた。

然るに八月下旬に至り蘇浙方面の風雲は次第に急を告げ、九月初旬に至り遂に奉直間に戰爭を開始するに至つたので、カラハンは好機乘すべしと爲し、張作霖との交渉を進行せしめた所、張作霖も亦赤軍が直隸派に加擔しその背後を衝かんことを恐れ、急に交渉に應じて玆に奉露局部協定の成立を見ることゝなつたのである。然し北京政府側では此の奉露協定は二個の意義を含むものと觀側した。即ち(一)は、若し張作霖と或る程度まで妥協して置かないならば、他日張作霖が大捷を博した場合、北

京政府と締結せる協定を根底より破壞せらるる恐れがあるから、その豫防的意義を有すること、(二)は奉露局部協定を締結することによつて、直隸派が大勝した場合と雖も、正式細目會議に於て極力有利に解決せんとする遠謀より來るものであると、云ふのである。兎に角北京政府は九月下旬「勞農大使と張作霖との間に如何なる協定を爲すも斷じて承認する能はず」と抗議したが、カラハンは之に對して次の如く回答を發した。

露支協定は張作霖の不承認により東三省に關する部分を實行する能はず、その結果外交團の同意を絶て奉露交渉を開始し、今回その協定の成立を告げたものである。而て今回の協定は列强の東支鐵道侵略の野心を防止し、並に露支兩國の利益を增進するもので、露支協定の精神に違反せさる而已ならず、反つて露支協定の實行を助成するものである。

之を同時に奉天側に於ては新協定成立の結果、赤露の提議を容れ東支鐵道の幹部大更迭を斷行し、左の如く任命し

(支那側幹部)督辦兼理事長　鮑貴卿　△主任理事　袁金凱　△理事　范其光、呂桑寰、劉哲
△監査役　陳環、楊卓、

(露國側幹部)長官兼理事長　イワノフ　△主任理事　セレブリヤンニコフ　△理事　ダニレフスキー、ラキイチン、クルイシコ　△監査役　ジヤコウブイッチ、コスチン　△鐵道副長官　スイスモント。

而て支那官憲は前鐵道長官オストロモフ、及び前土地部長ゴンダッチの兩名を逮捕監禁し、之に就いて「兩名は嘗つて支那の國體を汚辱する劇を上場せしめ一般支那人から猛烈な排斥を受けてゐるのみならず、東支鐵道に關し陰謀を企て、鐵道行政を破壞し事務上にも不明の點ある爲め、早く逮捕することになつてゐたのであるが、今回之を實行したる止まる」と云ふたものだ。然し巷間では、奉直戰中、赤軍が東支鐵道を侵略しないことと交換條件に、白黨たるオストロモフ、ゴンダッチ兩名を死刑に處することを要求したらしいと噂された。それは兎も角斯くして白黨はその最後の根據地をも逐ひ出されてしまつたのである。

一、露支協定

(甲)露支懸案解決大綱協定、

第一條　本協定調印後兩締約國の外交關係は直ちに恢復すべし。支那政府は適當の手續を以て前ロシヤ公使館、領事館々舍を勞農政府に移轉すべきことを承諾す。

第二條　兩締約國政府は本協定調印後一ヶ月以内に會議を開き、後列各條の規定により一切の懸案に關する詳細なる手續を商議決定して之を施行することに同意す、右に關する詳細の手續は迅速に完了すべく如何なる理由あるも前項の會議開始の日より起算して六ヶ月を越ゆることを得ず。

第三條　兩締約國政府は前條に定むる所の會議に於て、支那政府と前ロシヤ政府との間に締結せる一切の公約、條約、協定、議定書及契約等を纏て檢案し別に相互平等公平の原則及一九一九年、一九二〇年の勞農政府宣言の精神に基き更に改めて條約、協約、協

定等を締結することに同意す。

第四條　勞農政府はその政策及一九一九年、一九二〇年の宣言により前ロシヤ帝國政府と第三者との間に締結せる一切の條約及臨定にして支那國の主權及利益を侵害するものは總て無効たることを聲明す。

兩締約國政府は爾後兩國政府共に各他締約國の主權及利益を侵害する條約及協定を締結せざることを聲明す。

第五條　勞農政府は外蒙古の完全に支那國の一部分たることを承認し、及該領土内に於ける支那の主權を尊重す。

勞農政府は外蒙古駐在の勞農政府軍隊撤退問題及び彼我境界地方の安寧に關する辨法は本協定第二條に定むる所の會議に於て商議決定後、直ちに勞農國軍隊を悉く外蒙古より撤退せしむることを聲明す。

第六條　兩締約國政府は相互に各該國境内に於て他の一方の政府に謀反及反對する爲成立せる各種の機關又は團體の存在及活動を許さざることを擔任し、並に相互他の一方國の公の秩序及社會組織を紊すが如き宣傳を爲さざることを承諾す。

第七條　兩締約國政府は本協定第一條に定むる所の會議に於て更に兩國境界を割定すべきことに同意す、右境界割定以前は現在の境界を維持するものとす。

第八條　兩締約國政府は兩國を境に河川、湖沼及他の流域上の航行問題に關し相互平等の原則により前條に定むるところの會議に於て之を規定することに同意す。

第九條　兩締約國政府は前條に定むる所の會議に於て左の原則により東支鐵道問題を解決することに同意す。

一　兩國政府は東支鐵道は純然たる商業の性質を帶ぶるものなることを聲明す、並に該鐵道自身の營業事務は該鐵道に於て之を直轄し、その他の支那國家及地方主權に關する事項即ち司法、民政、軍務、警務、市政、稅務、地所（鐵道用地を除く）等は總て支那官廳に於て處理することを聲明す。

二　勞農政府は、支那は支那の資本を以て東支鐵道所屬の一切の財産を回收することを承諾す、並に該鐵道に屬する一切の株券債券を支那國に移轉すること承諾す。

三　兩國政府は本協定第二條に定むる所の會議に於て鐵道問題金額及條件並にその移轉手續を解決することに同意す。

四　勞農政府は一九一七年三月九日の革命以前に於ける東支鐵道の株主、債券を所有するもの及び債權人に對し一切の責任を完全に負擔す。

五　兩國政府は將來東支鐵道問題に關しては露支兩國に於て之を解決すべく、第三國の干涉を許さざることを承認す。

六　兩國政府は本條第三項に規定する所の事項解決せざる以前に特に東支鐵道臨時管理辨法を規定することに同意す。

七　本協定第二條に定むる所の會議に於て東支鐵道に關する各事項の解決せざる以前は兩國政府の一八九六年九月八日締結せる露支合辦東三省鐵道契約に據る總ての權利にして本協定及東支鐵道臨時管理協定並に支那の主權と相抵觸せざるものは仍有効とす。

第十條　勞農政府は前條ロシヤ帝國政府の支那國内各地に於て各種の公約、條約、協定等に據り取得せる租界その他に關する總ての特權及特許を拋棄することに同意す。

第十一條　勞農政府は露國に屬する義和團事變賠償金を拋棄することに同意す。

第十二條　勞農政府は治外法權及領事裁判權を撤廢することを承諾す。

第十三條　兩國政府は本協定第二條に定むる所の會議に於て通商條約を締結するときは兩國の關稅々則は相互平等主義を採り同時に協定することに同意す。

第十四條　兩國は前條定むる所の會議に於て損害賠償の要求を討議することに同意す。

第十五條　本協定は調印の日より直ちに効力を生ず。

（乙）東支鐵道臨時管理協定、

第一條　本鐵道に理事會を設け議決機關となし、理事十人を置き露支兩國政府より各理事五人を任命して之を組織す、支那政府は支那人理事一人を任命して理事長即ち督辨とし、勞農政府は露人理事一人を任命して副理事長即ち會辨とす。

理事の決定數は七人を以て最少限度とす、その採決は總て六人以上の同意を必要とし、然る後施行力を有するものとす。

督辦及會辦は理事會の事務を共同管理し各項の文書を裁可するものとす。

督辦及會辦事故ある時は各該政府は他の理事をしてその職務を代理執行せしむ（督辦は支那人理事代理し會辦は露人理事代理するものとす）。

第二條　本鐵道に監事會を設け監察五人を以て之を組織す、支那人監察二人は支那政府之を任命し、露人監察三人は勞農政府之を任命す會長は支那人監察中より之を選擧するものとす。

第三條　本鐵道に局長一人副局長二人を置き局長は露人を以て充任し副局長は露支兩國人各一人とし理事會之を任命し各該政府の認可を受くるものとす。

局長副局長の職權は理事會之を規定す。

第四條　本鐵道の處長、副處長等は理事會之を任命す、若し處長支那人なるときは副處長には露國人を任用し、處長露人なるときは副處長には支那人を任用すべきものとす。

第五條　本鐵道の各役員は原則として露支兩國人を平均に任用するものとす。

第六條　理事會は鐵道事務を商議し之を解決すること能はざる時は兩國政府に申請して之を解決するものとす、但し本協定第七條に記載せる決算の事項に關しては此の限にあらず。

第七條　本鐵道の豫算決算は理事會より理事會及監事會聯合會議に之を廻附しその認可を經るものとす。

第八條　本鐵道の收益は理事會之を保管し本鐵道の根本辦法解決きるゝ以前は之を流用することを得ざるものとす。

第九條　理事會は前ロシヤ帝國政府が一八九六年十二月批准せる東支鐵道會社規則を本協定及一九二四年五月締結の露支懸案解決大綱協定の主旨により迅速に改訂すべし、但し如何なる理由あるに拘らず理事會成立の日より算し六ヶ月を越ゆることを得ず。

其改訂完了せざる以前は該規則にして露支懸案解決大綱協定と相抵觸せず並に支那國の主權を侵害せざるものは有効とす。

第十條　將來東支鐵道の根本辦法が一九二四年五月締結の露支懸案解決大綱協定第二條に定むる所の會議に於て解決せられたる時は本協定は直ちに廢止す。

第十一條　本協定は調印の日より効力を生ず。

（丙）　聲明書

一　一九二四年五月露支懸案解決大綱協定に調印後、前ロシヤ帝國政府又は支那國所有の一切の不動産及動産にして各該國領内に在るものは相互直ちに之を還附し、且その還附すべき財産は目錄を作成し各該政府に送附し處理せしむべし。

二　勞農政府實際上所有のロシヤ教會建物及土地の移轉又はその適當の處置に關しては大綱協定第二條に定むる所の會議に於て支那内地に於ける財産保有に關する現行法律及規則により之を商議決定すべく、北京及八大處に於ける勞農政府の實際上所有するロシヤ教會建物及土地等は勞農政府に於て之を引繼くべき支那機關を指定したる後、支那政府は支那内地に於ける財産保有に關する現行法律及規則により該指定支那人又は支那の機關に之を移轉すべく、支那政府は該建物及土地を保護管理し且つ現に居住し居るものを移轉せしむべきことを雙方了解せり。

三　大綱協定第四條に關し、支那政府は露國に對しロシヤ帝國政府以來第三者との間に締結せる一切の條約及協定等にして支那國の主權及利益を侵害するものは現在又は將來たるに論なく之を有効と認めざることを雙方了解せり。

四　大綱協定第十條に記載する所の勞農政府の拋棄する各種の權利及特權に關し、支那政府はその一部又は全部を何れの第三國又は何れの外國人組織の團體にも之を讓渡せざることを雙方了解せり。

五　大綱協定第十一條に對し左の如く雙方了解せり。

イ　勞農政府の拋棄するところの露國に屬する部分の義和團事變償金は該賠償金を擔保とする各種の優先債務を全部償還せる後（完全に之を支那教育奬勵の爲めの用に充つるものとす。

ロ　特別委員會を設立して前項の資金を管理並に分配す、該委員會は三人を以て之を組織し、内二人は支那政府任命し一人は勞

農政府任命す、該委員の議決事項は全員一致を以て之を行ふ。

八　該資金は收入の都度前項特別委員會の指定せる銀行に預入るべきものとす。

六　露支大綱協定第二條の規定による本會議に於て該協定第十二條により治外法權及領事裁判權撤廢後の勞農露國人民の地位に關する準則として適宜の條項を規定すべし、但し如何なる理由あるに拘らず勞農露國人民は完全に支那國法律の管轄を受くべきことを併せて聲明す。

七　東支鐵道臨時管理協定第五條に規定する所の原則は、その適用を現在ロシヤ國籍に屬する人員を更迭し又は罷職することを以て該原則を實行する唯一の主義なりと解するを得ず、更に各地位は總て兩國人民を平等に任用すべく、何れの一方の人民に對してもその待遇に差別を示すことを得ず、且各地位は當事者の能力、技術及教育上の資格により之を任用すべきものなることを聲明了解せり。

(丁)　交換文

支那政府は兩國の友好關係を維持する爲に現在本國軍隊及警察各機關に於て任用しつゝある前ロシヤ帝國人民の職務を停止すべし、右人民が本國に在留すること及びその行動は勞農國家の安全に危害を及ぼす恐あるにより、若し右人民の名簿を本國政府に御提示あるに於ては本國政府は各關係機關に命じ必要手段を執らしむべし。

二　奉露協定

第一條　東支鐵道

一　兩國は東支鐵道が純經濟的機關なるを聲明す、兩國政府は東支鐵道の直接管理下に在る經濟的施設を除く外、支那の國家並に地方政府の權利を侵害する如き總べてのもの例へば司法、地方行政、軍事行政、警察、市制、租稅及び地產が支那官憲の管理に歸する事を聲明す。

二　一八九六年九月の東支鐵道建設並に運用契約第十二條に規定されたる期限八十年を六十年に減じその時期滿了と共に支那政府は同鐵道並に附屬財產を無償にて回收す、右期限を（即ち六十年）尙ほ短縮すちや否やは再議に附す、本條約調印の日より勞農政府は支那が東支鐵道を買戻す權利を認む、その際に於ては兩國は同鐵道の實際資金は支那の資本により公正なる價格にて回收さるべきことゝ定む。

三　勞農政府は露支大綱協定第九條第四項の東支鐵道債務に關する件は更に新に兩當事者間に組織さるゝ委員會にて決定する事に同意す。

四　兩國政府は東支鐵道將來の解決は第三者を除き露支兩國間にて決定する事に同意す。

五　一八九六年八月の東支鐵道建設運用協定に準據し兩當事者間に組織する委員會で本協定調印の日より四ヶ月以內に完全に改訂せらるべきこと又改訂前は兩國政府の權利は本協定の範圍外に於ても支那の主權を損ぜないものに限り之を維持す。

六　東支鐵道運用に關する協議並に決定を爲すべく十名より成る理事會を組織す、理事會は兩國より五名宛、支那側理事中より一名の督辦を任命す、右は從來の理事長の職權を行ふ、法定數七名とし理事會の決議は六名以上の贊成を要す、正副理事長は協力して理事會事務を處理し、關係書類は總て兩者の調印を要す、正副理事長中欠員ある場合は兩國は理事中より代理者を任命す、但し理事長が支那人なるときは副理事長は露國人たるべし。

七　鐵道は五名より成る會計監査員會を組織し勞農露國より三名支那より二名を任命す、但し委員長は支那側より選出す。

八　鐵道は露人長官一名、露支各一名の副長官を置く、右は理事會之を任命し當該國政府の承認を要す、正副長官の職務權限は理事會之を定む。

九　各課の正副課長は理事會之を任命す、但し課長が露國人なるときは支那人、課長が支那人なるときは副課長は露國人たるべし

十　各課の使用人採用は兩國平等とす、但此の原則を實行する際に於ても鐵道を完全に運用する爲め兩國人採用に當つては經驗資格を標準とす。

十一　本協定第一條第十二項に規定せる評價並に償算を除き其他の事項にして理事會にて決定し能はざるものは之を兩國政府に

於て正當且つ圓滿に解決す。

十二　理事會は鐵道の評價並に議算を合計監査委員との聯合會に於て愼重審議の上提出すべし。

十三　鐵道の純益金は理事會にて保管し兩國間に之が處分の聯合委員會が最終の決定を爲す迄之を使用するを得ず、理事會は一八九六年十二月舊露國政府により規定されたる東支鐵道會社定款を今次の協約に準じて可及的迅速に全部改訂せらるべく、理事會成立後四ヶ月より遲延すべからず。

十四　定款改訂に際しては今次の協定に對する支障を來し、或は支那の主權を侵害せざることを不斷に注意せざるべからず。

十五　支那側の東支鐵道回收條件が兩當事者間に決議せらるゝと共に、若くは今次の協定第一條第二項に規定せらるゝ期限の滿了により鐵道が支那に屬する時を以て本件に關する本協約の全部は無効に歸す。

第二條　相互平等

兩國政府は相互平等主義を根底とする相互の主權を尊重し、相互の領土内に在る普通世に知られたる河川、湖沼流域上すべての相互船航行に關する問題を解決することに同意す、本問題に關する細則は調印の日より二ヶ月以内に委員會に於て規定さるべきこと、ハルビンを含む松花江上流勞農領土の船客貨物に關する利害關係及び黑龍江下流海洋に至る船客貨物に關する利害關係は協約兩當事者間に於て決定すべきこと。

第三條　國境

兩國政府が兩國にて組織する委員會に於て國境の再査定を爲すこと、之が決定前は現狀維持を承認す。

第四條　關稅と通商

兩國政府は兩國にて組織する委員會に於て相互平等を原則とし關稅率並に通商條約を定むることに同意す。

第五條　宣傳

兩國政府は相互の領土内に於て相手國政府に對し共謀手段を以て之を擾亂せしむることを目的とする機關團體の存在並に活動を許さざることを相互に誓約す、尙は兩國政府は相手國の政治並に社會組織に反する事を目的とする宣傳に關係せざる事を誓約す。

第六條　委員會

各條項規定の委員會は本協定調印後一ヶ月以内に開會し可及的迅速に六ヶ月以内に完了すべし、

但し右は本協定中特に期間を規定する委員會に對しては適用せず。

第五節　日露條約成立

長春會議決裂の結果勞農代表ヨッフェは直ちに北京に趣き支那を相手として交渉の開始を運動するに至り、茲に露國は、日支兩國を同時に擒縱して巧に兩國を驅使し、各露國を標的として競爭を試みしむることゝなり、且つは日露交渉に勞農代表者の參加したる事が、とりもなほさず露國の意嚮が極東に於ては先づ日本の承認を求むるに急なるものがありし證據であつた。これが爲めに日本の輿論は漸く露國承認に傾き來り、之に乘じて後藤新平が個人的にヨッフェを日本に呼び寄せ所謂私的交渉に入つた。日本政府も亦遂に此の私的交渉の後を受けて川上俊彥を代表とし、日本の首府に於て始めての國際會議が開かるゝに至つた。然し大正十二年六月より開かれたる此の豫備交渉は、露國が飽くまでも對等の地位、完全なる條約及び權太撤兵の聲明を要求し、正式承認を最後の結論としたるに、日本側は條約の廢棄に反對し、舊債務の承認、私有財產制の保證とを主張した爲めに遂に尼港事件の責任謝罪に對する用語上の形式問題を理由として、一ヶ月にして決裂したのであつたが、然し十二年正月

ヨッフエの入京以來約半ケ年の間に兩國の關係は次第に密接となり、彼我兩國民の了解も亦漸次深くなり、一方交渉上に於ても双方の主張を明かにし問題の範圍を限定し得て、兩國の立場を明かにし將來の歸趨を暗示するに與つて功あつたことは事實であつた。

それかあらぬか十月に至つて駐支勞農代表カラハンは日本羅災民救濟に關する提議を日本公使芳澤議吉の下に致し、これを第一歩として芳澤カラハンの會見となり、隨時日露交渉再開に關する意見の交換を見るに至り、やがて十三年二月浦鹽に於ける日本領事否認問題、日露交換通信員退去問題、日露交換郵便停止問題及び浦鹽在留日本人拘禁問題等の勃發あり、差しあたり之等の問題を北京にて交渉することゝなり、それが一轉して遂に五月中旬芳澤公使に對する日本政府の全權委任狀發給となりたのであつた。

爾來會議を重ぬること、正式會議に於て六十一回、豫備會議を通算して約七十七回に達し、その間幾度となく停頓休會し、危機に頻することも亦數回に及んだのであつたが、これより先き、すでに獨、英、伊、佛等の諸國は何れも舊債問題等を將來に保留したまゝ露國を承認し、且つ露國自身も是等の點に就いては比較的妥協的態度に出で來つたので、北京に於ける日露會議も亦從來の懸案解決の如き消極的のものではなく積極的方面卽ち勞農露國を承認して日露兩國間に修好關係を恢復すること、通商協定を締結して經濟的に提携すること、日本にとつて重要なる利權を讓與して實利的方面に日露兩國の經濟的利益を密接にする事等の點に於て著しく交渉進渉し、憲政會內閣の出現後は交渉の最大難關となつてゐたサガレン利權問題に關して五分五分の讓歩が成つて、大正十四年一月二十日、遂に露國側は未解決の宣傳及利權問題に就いて全部日本の修正提案を是認する旨を聲明し茲に協定の成立を見たのであつた。

一方支那政府に於ては日露條約の成立が明瞭となるや、一月中旬日露兩代表に宛て「近く成立せんとする日露條約は支那の主權並に領土權に關し何等侵害するの條項を含み居らざるものと諒解し居る」旨の照會的聲明書を寄せ來り、之に對し芳澤公使は「日露條約は完全に日露兩國間の關係に止り何等第三國の主權及び利益に言及し居らざる」旨の通告を發した。而て支那側の輿論は概して日露條約の成立を祝福し、進んでは日露支三國の協調の實を擧ぐべきことを期待したものである。次に提ぐる北京京報の社說（邵振青）は實にその代表的意見と見ることが出來る。

日露國交の恢復は啻に日露兩國の幸のみに非ず、東亞外交界の空氣は自ら茲に絕大の變化を發生せんとするは殆んど疑ふべきもの無しと云ふてよい。余は此の機會に個人として一種の希望を有する。卽ち日露支三國の間に徹底的諒解をなし、三國の提携を以て基礎と爲すを得ば、歐米に對抗する行動を採らずとも、只その影響によつて以て歐米を感化しその外交方針をして改革せしめ、帝國主義の猖狂を防止し、延ひては來らんとする世界的革命を挽救し得ると信ずる。而て此種の希望の

夢想となるや否は日本の負ふ所の任務にして非常に重大である。蓋し所謂日露支三國の徹底的諒解なるものは必ず先づ日本の對支方針の根本卽ち帝國主義的傳統政策の自動的拋棄を必要とする。近來日本の學者等は我國の觀察に對して曩日に比し著しく進歩してゐるが、若し能くその國家の運命を悟り、當に完全に日支提携を確立すれば則ち日本朝野の從來なす所を繰返すが如きこと萬なかるべしと云ふも過言ではない。若し能く日露兩國人士の注意を喚起し且つ日本政府及國民の贊同を得ば、日露國交の成立は實に世界外交史上空前の重大價値を有するものである。而て日本今後の地位も亦目ら康衢の大道に進み、以て完全に歐米の羈絆を脱離して被動的外交より自動的外交となることが出來るのである。云云、

日露間の關係を律する基本的法則に關する條約

第一條　兩締約國は本條約の實施と共に兩國間に外交及領事關係の確立せらるべきことを約す。

第二條　「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦は千九百五年九月五日の「ポーツマス」條約が完全に効力を存續することを約す。

千九百十七年十一月七日前に於て日本國と露西亞國との間に締結せられたる條約、協約及協定にして右「ポーツマス」條約以外のものは兩締約國の政府間に進て開かるべき會議に於て審査せらるべく且變化したる事態の要求することあるべき所に從ひ改訂又は廢棄せられ得べきことを約す。

第三條　兩締約國の政府は本條約實施の上は千九百七年の漁業協約の締結以後一般事態に付發生したることあるべき變化を考量し右漁業協約の改訂を爲すべきことを約す。

右改訂協約の締結に至る迄の間「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦政府は日本國臣民に對する漁區の貸下に關し千九百二十四年に確立せられたる實施方法を維持すべし。

第四條　兩締約國の政府は本條約實施の上は左記の原則に從ひ通商航海條約の締結に至る迄の間兩國間の一般交通は右原則に依り律せらるべきことを約す。

一　兩締約國の一方の臣民又は人民は他方の法令に從ひ(イ)其の領域内に到り、旅行し且居住するの完全なる自由を有すべく(ロ)身體及財産の安全に對し恒常完全なる保護を享有すべし。

二　兩締約國の一方は私有財産權益通商、航海、産業及其の他の平和的業務に從事する自由を最廣き範圍に於て且相互條件の下に他方の臣民又は人民に對し自國領域内に於て自國の法令に從ひ付與すべし。

三　自國に於ける國際貿易の制度を自國の法令を以て定むるの各締約國の權利を害することなく、兩國の通商、航海及産業を成るべく最惠國の地歩に置くは兩締約國の意嚮なるに依り兩締約國は兩國間の經濟上又は其の他の交通の增進を妨ぐるに至ることあるべき禁止、制限又は課金を他方締約國に對し差別的に行ふことなかるべきものとす。

又兩締約國の政府は兩國間に於ける經濟上の關係を調整し且促進する爲通商及航海に關聯する特別の協定を締結するの目的を以て事態の要求することあるべき所に從ひ隨時會議を爲すことを約す。

第五條　兩締約國は互に平和及友好の關係を維持すること、自國の法權内に於て自由に自國の生活を律する當然なる國の權利を充分に尊重すること、公然又は陰密の何等かの行爲にして苟も日本國又は「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦の領域の何れかの部分に於ける秩序及安寧を危殆ならしむることあるべきものは之を爲さず且締約國の爲何等かの政府の任務に在る一切の人及締約國より何等かの財的援助を受くる一切の團體をして右の行爲を爲さしめざることの希望及意嚮を嚴肅に確認す。

又締約國は其の法權内に在る地域に於て(イ)他方の領域の何れかの部分に對する政府なりと稱する團體若は集團又は(ロ)右團體若は集團の爲政治上の活動を現に行ふものと認めらるべき外國人たる臣民若は人民の存在を許さざるべきことを約す。

第六條　兩國間の經濟上の關係を促進する爲又天然資源に關する日本國の需要を考量し「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦政府は「ソ

ヴイエト」社會主義共和國聯邦の一切の領域内に於ける鑛産、森林及其の他の天然資源の開發に對する利權を日本國の臣民、會社及組合に許與するの意嚮を有す。

第七條　本條約は批准せらるべし。

各締約國の右批准は成るべく速に其の北京駐劄外交代表者に由り他方の政府に通知せらるべく且本條約は右通知の後に爲されたるものの日より完全に實施せらるべし。

議定書(甲)

第一條　各締約國は他方の大使館及領事館に屬する動産及不動産にして自國の領域内に現存するものを右地方に引渡すことを約す、東京に於て前露西亞國政府の占有したる土地が東京の都市計畫又は公共の目的の爲する事業に對し支障と爲るが如き位置に在りと認めらるる場合に於ては「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦政府は右支障除去の爲日本國政府の爲すことあるべき提議を考慮するの意嚮あるものとす。

「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦政府は「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦の領域内に設置せらるべき日本國大使館及領事館に對する相當の敷地及建物の選定に付一切の適當なる便宜を日本國政府に與ふべし。

第二條　前露國政府即ち露西亞帝國政府及之を繼承したる臨時政府の發行したる公債及國庫證券に依り日本國の政府又は臣民に對して負へる債務に關する一切の問題は日本國政府と「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦政府との間の將來の商議に於ける調整に留保せらるることを約す。

尤も右問題の調整に當り日本國の政府又は臣民は一切の他の條件にして均しきに於ては「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦政府が同樣の問題に付他の何れの國の政府又は國民に與ふることあるべきものよりも不利益なる地位に置かるることなかるべし。

又締約國の一方の政府の他方の政府に對する請求權又は締約國の一方の國民の他方の政府に對する請求權に關する一切の問題は日本國政府と「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦政府との間の將來の商議に於ける調整に留保せらるることを約す。

第三條　北「サガレン」に於ける氣候の狀態が現に同地方に駐屯する日本國軍隊の即時本國輸送を妨ぐるに鑑み右軍隊は千九百二十五年五月十五日迄同地方より完全に撤退せらるべし。

右撤退は氣候の狀態が之を許すに至らば直に開始せらるべく且日本國軍隊の撤退したる北「サガレン」の總ての地方は直に「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦の當該官憲に完全なる主權に於て還付せらるべし。

行政の引渡及占領の終了に關する細目は「アレクサンドロウスク」に於て日本國占領軍司令官と「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦代表者との間に協定せらるべし。

第四條　兩締約國は其の一方が何れかの第三國と結びたる軍事同盟の條約若は協定又は其の他の秘密協定にして他方締約國の主權領土權又は國家的安全に對する侵害又は脅威と成るべきものの現に存在せざることを互に聲明す。

第五條　本議定書は同日附を以て署名せられたる日本國及「ソヴイエト」社會主義共和國聯邦間の關係を律する基本的法則に關する條約の批准と共に批准せられたるものと看做さるべし

第十六章　第二次奉直戰まで

第一節　東三省の變局（一）

奉直戰の結果奉天軍は全く關外に追ひ出されしてしまつたが、最早や奉天第一主義の完成したる今日である、東三省に於ける張作霖の地位は依然としてその覇王たるの實を失はない。少くも日本勢力の及ぶところは即ち張作霖の安全地帶である。況んや彼自身此の日本勢力をも一括して東三省に磐石の基礎あるに於ておやだ。

見よ、五月中旬奉軍の尙ほ灤州に踏み止りつゝある時發布されたる張作霖處分案の如き（一）張作霖の東三省巡閲使、奉天督軍兼省長の本兼各職を免じて査辨を待たしむ（二）東三省巡閲使及蒙疆經略使の職を裁撤す（三）吳俊陞を奉天督軍署理に袁金凱を同省長署理に任ず（四）馮麟閣を黑龍江督軍署理に、史紀常を同省長署理に任ず）全く一顧だも價せず、吳、馮、袁、史の四氏は直ちに此等の亂命には服從し難しと謂ひ、東三省各界聯合會も「張使の去留は三省三千萬人の生命の繫る所なるが故に此の亂命には一致否認す」との通電を發し、且つ天津に於て、東三省の獨立宣言が發表される始末であつたのだ。此の獨立宣言は張作霖より各國公使及天津領事團に宛てられたものであると謂はれたが、兎も角も張作霖の獨立行動は蓋し自然の趨勢で、此の宣言の內容こそ、張作霖と東三省との關係を如實に物語るものであるから左に錄する。

余は徐世昌より東三省、熱河及察哈爾の特別區域及內外蒙古を放棄すべき旨の通知を接受せり、此等の地方は民國共和國の土地として承認せらるゝものに非ず、余は余の特殊なる地位上之より生ずる義務を負ふ能はず。只親交國民との交誼を進め、その生命財產の保護に全力を盡すべし。

清朝及び中華民國時代に於て締結せられたる一切の重要なる條約は凡て承認尊量すべし。他の問題及事項に就きて協議せんと欲する外國公使、領事及居留民は予の政廳に申出ずべし、予は人民の福祉を增さんが爲め今日以後從來よりも更に親交國との通商關係を親密ならしめんことを望む、今後北京政府が東三省に關して如何なる條約を締結する共、予の直接許可なきものは、予に於て之を承認せず、云々。

斯の如くにして奉天派は所謂文治派（王永江等）の熱心なる活動によりて愈々自治の形式を採ることゝなり、五月下旬張作霖、孫烈臣、吳俊陞の連名を以て、孫文、唐紹儀、伍廷芳、福建、浙江、安徽、山西の各省督軍その他に對し大要次の如き通電を發した。

共和以來內亂の頻々たるは、軍閥が世界潮流に暗く法令を棄て民權を蔑にするに因る、之が根本的改造を爲すに非れば統一和平は期し難し。吾等は協力扶持して民治を促成せんとす。吳佩孚は噪心

病狂跋扈甚だしく、人權を蹂躙し叛亂の行爲あり。されば過般奉軍入關し吳佩孚に撤底の覺悟を通告し共に進行を策せり。然るに吳佩孚は反つて吾に向つて開戰し、更に長驅して天津に出で政治に干渉せり。吾等は救國の爲め止むを得ず東三省の自治を宣布し、並びに西南及び長江同志の各將と一致行動を執り、法律を擁護し統一を促進せんとす。俯して願ふ、今や天下は亂を厭へり。速かに合法的政府の實現を見れば吾等は直ちに甲冑を棄てゝ民に還り再び政治に與らず。

斯くて張作霖は五月下旬歸奉し、直ちに東三省各代表百名を招き今後の施政方針に就いて協議を重ねたる結果、依然張作霖を首腦と仰ぎ、孫文一派の統一策を援助することゝなり、六月上旬奉天省議會は吉黑二省の代表をも合して、張作霖を奉吉黑聯省自治軍總司令に推擧し、同時に聯省自治の成立を宣布し、茲に中央との公文交渉を斷絶し、一切を東三省保安總司令の名義にて行ふことゝなり、保安總司令の下には同副司二人を置き、孫烈臣及吳俊陞が夫々推擧されたのであつた。その後省議會聯合會は次の如く東三省保安規約を協定した。

東三省は地理歷史の關係より聯合して一自治區を爲し、奉天、吉林、黑龍江の區域に限り、自治區內の公共保安の爲め規約を制定し共同遵守す。東三省の鄕土及び一切の權利は官民之を管理し、事務の趨向により軍民分治となし、自治方針は一致の步調を執り軍務總司令之を統轄し、副司令之を協理す。總司令は省議會聯合會より選擧し、副司令は總司令之を任命す。民政は各省長總理し、各省長は憲法發布以前には省議會より之を選擧す。東三省の官制組織は舊により立法事務は省議會聯合會之を行ふ。司法權は舊制により各舊法廳之を行ひ行政事務は行政長官之を行ふ。

尙ほ三省の代表者（三省文武官より各一名、省議會各五名、農工商敎各界各一名計三十三名）より成る東三省保安聯合會は東三省憲法案の一部として保安總司令の職權を次の如く定めた。

一　法律案を聯合議會に提出することを得。

二　聯合議會に於て決議せる法律を執行することを得。

三　法律を執行する爲め或は法律の委任に基く命令を發することを得。

四　命令を以て東三省の軍隊を召集することを得。

五　法律によつて特赦及び刑の增減を爲すことを得。

六　每年省議會及聯合議會を召集することを得

七　法律によつて戒嚴令を宣布することを得。

八　人民を代表して外交官を接受することを得。

九　聯合會の合意により宣戰講和及び條約締結の權を有す。但し敵人我が領土に侵入する場合は先づ宣戰を布告するを得。

十　自身或は人を派し聯合會議に出席せしめ發言權を有す。

之より先き張作霖は七月中旬、前巡閲使、督軍兩署を合併して保安總司令部を組織し、之を七署に分ち張厚琛を參謀長に、李紹白を副官長に、魏毅を軍務處長に、錢維新を軍需署長に、顏文海を軍法處長に、王承宗を軍醫處長に、談國恒を秘書署長に夫々任命し、又奉天、吉林、黑龍江の各省長も民選の形式を以て王永江、魁陞、史紀常の諸氏任命され、王永江の病氣中は省議會議長白永貞が代理することゝなり、兎も角その後の局面は一段落を告げたのであつた。

然しなから張作霖の意中は厭くまでも復仇に在るのだから、民政の方はあまり問題にならず、軍事計劃のみは著々として進行して行く樣な風に見えた。精兵主義なるものが即ち之れである、そしてその計劃の實行は、吉林、黑龍江の省議會が所謂聯省自治に對して反對したり、王永江の省長辭任などあつていさゝか長びいたが、高士儀の北滿攪亂策も張宗昌や護路軍の爲めに間もなく沈默逃走してしまつたので、愈々着手され、先づ軍事整理に付いて次の如く通達し

一　今後軍官候補者には試驗を行ひて之を採用し他の方法を以て推薦することを許さず。

二　各軍隊は之を軍區とし人材を養成して無能者を馘首し交代せしむ。

三　各軍隊の學科は民國十一年九月一日より開始し、毎日二時間授業す。

四　各軍隊は軍事雜誌及軍事講義錄を發行し將卒の見聞を廣めしむ。

五　各軍隊の人員は不足するを許さず、若し長官が不足人員の月給を着服する者を發見せば嚴罰す。

六　軍人にして阿片を吸飲するものを發見せば直ちに免職するのみならず法に照して處罰す。

七　今後軍官の學術を尊重し研究を爲さしめ毎月試驗を行ひ成績良好の者には賞與を與ふ。

八　今後下級學校出身者は軍官たるを得ず、又小學校を卒業せるか、若しくは常識を有するものにあらざれば兵卒たるを得ず。

九　各軍隊の軍人は十七歲以上、四十歲以下の者及び身許不明にて保證人なきものは一切淘汰す。

之に對する張作霖の意氣込みは、奉直戰に於て脆くも慘敗したる第六混成旅長鮑德山及呼倫貝爾鎭守使兼騎兵第二旅長張奎五の銃殺となつて現はれ、又奉直戰に於て應戰に力めざりし者及び軍紀を守らざりし軍隊に大淘汰を加へ、所謂新式武官の採用を謀つたりしたのである。

而て新軍政に關しては九月中旬の保安總司令の命令にて師團名稱は之を廢し旅團本位とし、一個旅は三個團、一個團は三營、一個營は三個連、一個連は百五十名とし、騎兵砲兵の各營は等しく團に改むることゝなり、此の爲めに陸軍整理處なるものを設け、孫烈臣を總監とし、姜登選を副統監として協議せしめ、十月下旬次の如く決定された。

一　東三省の軍制正式決定以前は師及旅を正軍とし、其殘餘の補充游擊各隊はすべて撤廢し、各師旅内に合併して其統一を圖ること。

二　三省軍隊は今後の統一を期する爲め編制の軍及旅數の順序を以前の如く各自に定むるを得ざる

ことゝす。

三　三省軍隊は境界を分たず相互に駐紮せしめ、奉天軍はその三割を吉林に、その二割を黑龍江に兩省軍隊を加へて駐紮せしむること。

四　三省の各高級軍官亦相互に任地と交代して各軍隊の親密を圖り軍心の一致を望むこと、又擔任地交代は抽籤にて之を定む。

五　營長以下各軍官の指揮刀軍服を廢し普通軍隊と同一ならしめ、階級は肩章を以て區別すること。

六　騎砲各軍は戰時なりと平時たるとを問はず、歩兵軍に比較し有用なる點ある故、奉天同樣吉黑兩省も亦歩兵の一部を騎砲兩隊に改め應用に備ふること。

七　今後三省の歩騎砲工輜重各軍の內部にては軍人の保證書に注意し、兵變逃走等の事件ありたる時の處置に便ならしむること。

八　今後各軍は新兵招募の上隨時教練を施し補充に便ならしむると共に、臨時募集の際に於ける資格の不同內部の不統一等の弊を免かれしむること。

九　各軍營の軍需品購買につきては月末に新式帳簿に記入の上師旅部に送附し、その檢査を請ふこと。

尙ほ無線電信局や航空設備の充實に對しても大いに努力する所あり、無線電信局は陸軍整理處の管理の下に、奉天、長春、哈爾賓、齊々哈爾及び錦州に設立せられ、又兵工廠も前陸軍次長韓麟春を廠長として奉天に設立せられ、その設備も支那隨一といふ噂であつた。斯の如く對直戰備に就いて着々とその効を爲しつゝあつたが、直隸派の壓迫の次第に加はるにつれ、東三省內民心收攬策として東三省鄉老會議の開催を計劃し、その內部的結束を固めんとし、民國十三年五月初旬奉天省長公署に於て開會し、張作霖、吳俊陞、王永江、楊宇霆以下奉天派の幹部全部出席し、東三省の有力者七百餘名を會し、張作霖は立つて次の如き演說をした。曰く、

東三省は日露兩國の間に挾まれて外交上頗る困難の地位に在るが、幸にして保境安民の狀態を保つてゐる。然し國內を顧る時は政爭絕ゆることなく何時東三省に波及するやも計り難い。東三省官民は諸種の準備を爲して有事の際に備へねばならぬ。云云、

然るに五月下旬吉林保安副司令孫烈臣が死去し、奉天派の總參謀であり、且つ新舊兩軍閥の調停役であつた彼れであつたので、東三省政界は一時不安の影を漂はし、張作霖もその後任任命により政治的變動の起るのを虞れて、吉林保安司令は一時彼自身の兼任とすることゝしてゐた。然るにその後第二十七師長たらんとしつゝあつた第二旅長張學良の運動効を奏し、結局、第二十七師長張作相を吉林保安副司令に任命し、張學良が第二十七師長となつたのであつた。次ぎに新計劃に基いて改編せられたる東三省陸軍とその駐紮地とを掲げる。

第二次奉直戰前に於ける東三省陸軍一覽表

師及師長	駐紮地	旅	駐紮地	旅長	團	駐紮地	團長
陸軍第一師師長 李景林		步兵第二十三旅	北鎮	李爽愷	第六團	北鎮	張靈
參謀長 李世藩	遼西北鎮	步兵第二十四旅	北鎮	邢士廉	第四十七團	溥帶子	朱同勛
					第十一團	北鎮	胡毓坤
					第二十三團	北鎮	賈聯芳
					騎兵第九團	清河逢門	胡殿甲
					砲兵第二團	北鎮	馬瑞雲
陸軍第二十七師 師長 張學良	遼西錦縣	步兵第五旅	義縣	于正山	第十七團	八家子	毋長祥
參謀長 魏益三		步兵第十九旅	錦縣	高維嶽	第二十七團	義縣	雀鳴山
					第三十團	錦縣	劉偉
					第四十團	高橋	朱繼先
					騎兵第二團	大凌河	賈文煥
					砲兵第三團	錦縣	孟昭田
陸軍步兵第一旅	洮昌道遼源			調朝薰	第五團	遼源	宣永湘
					第十五團	八面城	陳九芝

				陸軍步兵第二旅	奉天省城	郭松齡	第一團
							第三十九團
							騎兵第十四團
							砲兵第四團
							第二十八團
				陸軍步兵第三旅	奉天省西豐	張宗昌	第四十四團
							第五十五團
							炸彈隊
				陸軍步兵第四旅	遼西興城	裴春庄	第四十五團
							第五十三團
				陸軍步兵第六旅	奉天省城	宋九齡	第十八團
							第二十五團
							第四十八團
							砲兵第五團
第四十九團	開通	任治平	第三十五團	通化	傅程九		

陸軍步兵第七旅	陸軍步兵第八旅	陸軍步兵第九旅	陸軍步兵第十旅	陸軍步兵第十一旅	陸軍步兵第十二旅	
區鳳城	長春	吉林省依蘭	吉林省輪樹	黑龍江省黑河	奉天省新民	
湯玉麟	丁超	陳玉嵩	于環激	巴英額	趙恩寿	
第三十七團 安東 張從雲	第四十一團 伊通 楊登瑞	第二十四團 富錦 趙振熙	第十一團 五常 宋文俊	第二十團 黑河 張甄文	第四十六團 新立屯 竇倫	第五十團 新民 馬志誠
第五十八團 桓仁 董福亭	騎兵第十三團 農安 孫興武	騎兵補充團 依蘭 劉寶麟	第三十一團 榆樹 李毓久	騎兵第一團 瑷琿 吳士傑	第五十九團 新民 趙鳴泉	第七團 白草溝 王樹棠

陸軍步兵第十三旅	陸軍步兵第十四旅	陸軍步兵第十六旅	陸軍步兵第十七旅	陸軍步兵第十八旅	陸軍步兵第二十旅	陸軍步兵第二十一旅
吉林省局子街 吉興	遼西彰武 楊維生	遼西綏中 齊恩銘	黑龍江省海拉爾 張明九	吉林省哈爾賓 張煥相	吉林省盤石 楊遇春	陸軍步兵第二十一旅
第九團 第二十九團	第二十一團 第三十三團 騎兵第二十三團	第十團 第二十二團	第五十一團 騎兵第二十一團	第十九團 第五十二團	第十三團 騎兵第十八團	第四團 第二十六團 騎兵第七團
琛春 局子街	哈拉爾街 彰武 大廟鎮	綏中 前衛鎮	扎蘭屯 海拉爾	一面坡 綏芬	棒甸 敦化	寧安 密山 寧安
朱榕 楊金璧	關寶麟 徐永和 董懷清	孫旭昌 劉連瑞	關海亭 蘇顯楊	劉介臣 柯文運	任永和 常堯臣	新恒蘆 蘇德臣 李盛唐

		陸軍步兵第三十二旅	黑龍江省呼蘭	石青山	第四十三團 騎兵第四團 通河鎮 呼蘭 陸春清 陳輔臣
		陸軍步兵第三十三旅	奉天省輝南	蔡平木	第八團 騎兵第三團 第五十四團 第六十團 輝南 輝南 饑德 丁喜春 田子厚 王永清 錢忠山 梨樹
		陸軍步兵第三十六旅	吉林省雙城堡	李桂林	第十六團 騎兵第十一團 第三十六團 雙城堡 扶餘 阿城 孟文卿 陳銘安 徐士臣
		陸軍步兵第三十七旅	奉天省城	溫賓玉	第四十一團 第五十七團 奉天 田庄台 鄒震寰 王春榮
		陸軍騎兵第一旅	洮昌道通遼	穆春	第二十二團 第二游擊隊 康平 開通 王德棟 通遼 子凰林 程海峰
		陸軍騎兵第二旅	黑龍江省彩泉	彭金山	第十九團 第二十團 拜泉 三里之 李相庭 劉維漢

		陸軍騎兵第三旅	奉天省城	蘇錫麟	第六團 第十五團 奉天 奉天 彭振國 蕭國慶
		陸軍騎兵第四旅	黑龍江省安達站	李冠英	第十六團 第十七團 泰來 安達站 徐子鵬 張殿九
陸軍第二十九師 師長 吳俊陞 參謀長 王濤	齊々哈爾	騎兵第五旅 步兵第十五旅	海倫 滿洲里	梁忠甲 萬麟閣	第三十二團 第三十八團 第十二團 第八團 第十團 扎賚諾爾 滿洲里 齊々哈爾 海倫 納河 李有田 靖國綸 劉德懷 馬占山 孫俊章
					砲兵第一團 齊々哈爾 吳泰來
					騎兵第一游擊隊 洮南 張海鵬
					海軍練軍營 營口 鮑英麟
					奉天騎兵第三十四團 吉林保安副司令 步兵第二團（黑龍江保安副司令衛隊） 齊々哈爾 富春 步兵第三團（吉林保安副司令衛隊） 吉林省城
					騎兵補充團 黑龍江省甸林 焦景彬

第二節　東三省の變局（二）

戰敗後の奉天派は聯省自治の形式を以て獨立の狀態となつた。然しそれは形式上の事であつて東三省としての內容に於ては殆んど變化かないと謂ふて差しつかひない。只北京政界から完全に手を引いたといふた方がより適切な樣に思ひる程の獨立である。すでに形式に於ても聯省自治である如く、だから、それは直隸派との斷絕を意味するだけである。言葉を換ひれば、それは完全に東三省の利害の上に立ち返つたものと見られる。東三省の利害は、要するに此の際は奉天省のそれである。

然しながら奉天省の利害は、未だ一個獨自の形式を以て存在し得ない。ホルワットの東支鐵道が無意義且つ無力なりし如く、又南滿洲鐵道の獨立の如きは全く考へ得られざるものゝ如く、然りである。故を以て北京政府と脫離したる奉天派は必ず何等かの背景を必要とする。それは即ち反直隸派の大同團結に至る根底を爲すものに外ならないのだ。反直隸派とは云ふまでもなく、孫文派と安福派であつて、張作霖の起否が、此の兩派の策動に最後の斷案を與ふることになつてくるのだ。彼等の歷史的經歷から見れば、孫文派と奉天派の如きは、全く永炭相容れざる底の間柄ではある。殊に張作霖は兎角、宗社黨と目さるゝ程の右黨であり、又一方は過激派と稱さるゝ程の左黨でもある。安福派にしたところが、安直戰前の八省同盟は、その首腦者が張作霖であつた事などから、あまり宜い感じは持つてゐなかつた筈だ。それが割合に强固なる大同團結を爲すに致つたに就いては、其處に何等かの理由がなければならぬ。

その最大なる理由は素とより直隸派の大膨漲でなければならぬ。安福派はすでに慘敗し、奉天派も亦支那本部より追ひ出されてしまつた。而て孫文派の牙城廣東にも、直隸派の色彩を持つた沈鴻英などが押し寄せて來た。反直隸派は、最早や大同團結して之に當らざる限り自存の計はない。直隸派の利害によりて中華民國が左右さるゝのを許さざる限り、小異を素てゝ大同に就くは此の際自然の經路である。然し自分は此の外に、所謂世界の大勢、否極東の形勢が次第に變化して來たことを第二の大なる理由として擧げざるを得ぬ。それは即ち右傾的色彩と左傾的色彩が兩々相對峙する形勢から一轉して國家主義の旺盛を招來した事である。右傾者も左傾者も共に歷史的鄕土の上に立つて獨自の使命を全ふせんとするに至つたことである。その結果世界主義の理解なき强迫から脫れ、自由に之が取捨擇擇を爲さんとし、支那に於ては排日より一轉して反英の空氣が次第にその濃厚の度を加ふるに至つた。元來排日そのものも一般的排外の一の表現であると自分は見て來たものであるが、それが愈々此處に一般的排外になつて來たといふのである。フランスがその革命に於て內部の戰爭よりは國際戰爭の勃發によりて、始めてその內部の革命を成就した如く、日本の維新革命が尊王（倒幕）と攘夷とを同時に目標とした如く、支那も亦歐米の心理的奴隸から脫することによりて中華民國は完成さるゝ運命に在

るならば、排外は革命と同時に起るべきであつた。そしてそれは現に排日となつて表はれた。排日は革命の民國から見れば、歐米のイヌを擊つて之を改心せしむる爲めに意義があつた。排日が民國五年以來六七年間繼續され、それが排日者をして常に內政上有効なる結果を來さしめたるは、その雄辯なる證據だ。然し改心後の日本は大局に於て同じ利害の下に在る唯一の味方である。而かもその支那に於ける利害關係に於ては近來英國と益々相反し來つた。英國にとつては支那は經濟的搾取の土地であり人民であるが、日本にとつては國の存立の爲めに支那の完全なる獨立を必要とするものだからである。英國の根據は揚子江流域に在り、その利害を代表してゐるのが直隸派である。そして奉天派は日本と最も密接なる關係に在り、從つて親日でもある。排英の空氣が仲介となつて反直隸派の大同團結に至らしめた理由は此處に在る。元來の排日家たる孫文一派が親日となつて來たことは、實に排英の結果に外ならぬ。彼はすでに民國十一年の交に於て、問題は護法ではなくて革命であると宣言してゐる。それ以來彼は、廣東沙面に於けるボイコット、商團軍への赤裸々なる宣戰等、排英の急先鋒を以て任じてゐる。商團軍とは實に香港の經濟的勢力を背景としてゐるものに外ならぬ。吳佩孚自身すら親日の傾向を帶び來りつゝあつた事などは、如何に排英熱が旺盛となりつゝあつたかを物語るものである。

然り而て、此の兩極端を排英と仲介物として結びつくべく、與つて力あつたものは安福派の策動であつた。吳光新、徐樹錚等はその花形役者である。奉天派を動かすべく汪兆銘も來た、張繼も來た。然して張作霖は奉天第一主義を守つて仲々に動かふとしない。張作霖の動かぬのは日本が抑へてゐるからであると、孫文派や安福派の連中が、日本を時には怨みもした。然し張作霖としても之等の反直隸派はもとより必要である。之れがあつて始めて中華民國に於ける彼等の立場に意義が生ずる。だから大同團結は成るのであり、張作霖も大局上彼等とその行動を一にする樣になつて來たものだ。見よ、民國以來東三省にその勢力を失つた民黨の勢力は此れを機會に東三省にも入り込んだ。民國十一年十月の創刊に係る東三省民報こそは、純然たる民黨色彩のものであり、王永江及び張學良が二萬元を支出して之を補助し、その後は財政廳より每月三千元の補助を爲し來りし事は這般の關係を如實に物語るものである。然り而て、奉天省政府當局者が、滿鐵附屬地の敎育權回收や、その他の利權回收運動を爲した如きも、大局に於ける奉天派の立場と孫文派のそれとの合致を物語るもので必ずしも親日と相矛盾するものではない。彼等の大同團結が如何に排英の仲介物に成るとは謂ひ、日本の後援によりて始めて立つたと云ふが如きは屈辱である。角をためて牛を殺すことになるそしりを受ける。親日は必ずしも日本に賴るのではない。對等の人格を以て大局の利害の上に於ける親交である。日本によつて立つと見られ勝ちな奉天省も今は此の誤解からいさゝかなりとも解放される必要がある。之等利權の回收を强へて主張する必要を、內政的に見出すものでないけれども、概念として此種の思想の

東三省人心に存在するは否定されない。次に自分は此等利權回收運動の經過を綴つて東三省變局の片鱗を見つむるであらう。

先づ民國十三年二月初旬に起れる關東州內犯人引渡要求である。これは交涉署より奉天總領事に對し爲されたもので、その理由とする所は「日本の關東州租借權は一九九八年の旅大租借に關する露淸條約を繼承したものである。而て同條約第四條には、若し犯罪ある時は該犯人を最寄淸國地方官に交附して處分せしむ、その處分方法は咸豐十年の露淸條約第八條に據るべきものとす、との規定があるが、日本は一九〇五年の滿洲に關する日淸條約第二條に於て露淸兩國間に締結せられたる租借地並びに鐵道敷設に關する原條約に照し努めて遵行すべきことを承諾してゐるが故に、租借地居住の支那人に對する裁判權は正當なる支那人の權利である。而かも從來之が行使を主張せざりしは租借地近くに裁判官廳がなかつた爲めで、今回瓦房店に之を新設した以上、當然關東州內の支那人は支那側にて裁判すべきものだ」といふのである。然しこれは日本側輿論の激昂に遇つて二月下旬、手續上の齟齬があつたとの理由で撤回してしまつた。然し此の事件の續いて、正式の交涉はなかつたが、新聞紙は、奉天省長王永江が租借地內に於ける(金州管內)支那人にも選擧權を附與するに決したるを報じ、すでに張作霖の承認を得て、最寄の縣署にして選擧を行ふべく選擧人名簿の作成を命じたと傳へ、同じく王永江が民治俱進會(東三省民報社長張銳助がその會長)を使嗾して安奉線回收運動の氣勢を擧げんとしてゐると報じ、又滿鐵沿線郵便局の撤退を要求し、弓長嶺鐵鑛も日支合辦を取消して省政府獨力經營に任ずべし、などとも傳へられた。之に就いて省政府當局者は、全然關知せずと辯明し、斯の如き問題が日本に傳へられたのは何等かの爲にせんとするものゝ惡宣傳に相違ないと極力否定したものだ。然るに四月上旬奉天省敎育廳長謝蔭昌が、日本敎育視察團を招宴したる席上に於て、滿鐵附屬地に於ける滿鐵の對支那人敎育は日本の帝國主義に立脚するもので、支那の國民敎育を破壞する所尠くないと述べたるに、此の聲は漸次に擴大し「日本人が滿鐵沿線で經營してゐる公學堂なるものは一種の禍的敎育を施す所で、その敎育たる支那の國情に適せぬのみか、同化の作用をも含み、此儘にして進まば行々は東三省靑年の國家觀念を絕滅し、多數の親日奴隸を養成し前途憂慮に堪えない」と謂ひ、四月下旬省敎育會は臨時會議を開き、遂に敎育權回收方法並びに奉天收回敎育權促進會の組織を議決するに至つた。其回收方法の主なる條項は、支那側に於て鐵道附屬地內に多數の國民學校及以上の各學校を設立すること、日本側設立の小學校、師範學校、中學校等に民國學生の入學を禁止すること、等で、同時に日本の敎育を受けたる支那人は日本を讃美して中國を鄙下することを憂えたる宣言書を發した。而て五月初旬には謝敎育廳長が非公式に奉天總領事を訪問し「日本が滿鐵附屬地に居住する支那人兒童の敎育に盡力さるるは眞に感謝に堪えざる所であるが、國民の基礎敎育は之を支那側に一任せられ、日本は支那が實施し得ざる高等專門敎育のみ行はれたし、又滿鐵附屬地內に支那初等學校を設立すべき土地を供給されたし」と

の意味を具陳したのであつたが、此の問題はそのまゝになつた儘、當面の視廳から遠のいてしまつた。

第三節　第二次奉直戰と日本の態度

すでに奉天派を中心として反直隸派の大同團結が行はれた。奉天軍の內容充實も實に直隸軍に報復する爲めに外ならない。廣とれる黑影の實體、霸者吳佩孚をして奉天第一主義を犯さしめざることを第一目的としたるものであると云ふた方がより適切であらう。彼等自身如何に思考したるにせよ、中華民國に對する奉天省の價値を犯さしめざるを以て終局の目的とするに於て奉天軍の充實は始めて意義がある。第一次奉直戰の如く北京政府の爭奪であつてはならないのだ。反直隸派の大同團結も亦從つて此の意味でなければならぬ。

勢はすでに熟した。民國十三年八月安徽派唯一の殘黨である浙江の盧永祥が、直隸派勢力擴張の犧牲として、その地より追ひ出されんとし、九月初旬遂に鋤を執つて立つに及び、孫文は南より、張作霖は東北より各々兵を揭げて立つに至つたのである。既に八月下旬蘇浙の風雲刻々急を告ぐるの時奉天派に於ては軍事會議を奉天に召集して對直隸策を講求し、先づ張作霖の名を以て大總統曹錕に對し、蘇浙兩省の軍事行動中止の勸告を爲し、若し聽かれずんば止むを得ず武力調停の途に出でねばならぬことを以てした。然るに北京政府にては鮑貴卿を介して張作霖との意志疏通を謀り、以てその蹶起を阻止せんとの運動を開始したが、九月七日遂に盧永祥討伐令を發布したので、奉天軍は豫定の如く、先づ在奉各國領事を招待して、今次蹶起の已むべからざる理由を說明しその諒解を求め且つ各方面に對して同樣の通電を發し、北京政府に宣戰の布告を發したのであつた。

斯くて軍事會議の結果奉天軍を鎭威軍と名付け、保安總司令を鎭威軍司令部と改め、陸軍整理處を軍務所と改稱して奉天軍の大本營と爲し、總司令には張作霖自ら之に任じ、出征軍は、第一路姜登選、第二路李景林、第三路吳俊陞、第四路張學良、第五路張作相、第六路許蘭洲の六路とし、各軍は續々として關內に向つて出動することゝなつた。奉天軍の宣戰布告は次の如くである。

曹錕並に吳佩孚の罪惡積累山よりも高し、國會議員を買收して高位を偸み、自治制を破壞し、且つ列國の我國の爲に免除せる團匪賠償金を私して自家の目的に充てんとしてゐる。予は國民の窮迫甚だしきを思ひ今日に至るまでしばらく之を寬容せるも、今や彼等の支那國民を蹂躪するを見るに堪えず。玆に麾下の軍隊を率ゐて賊徒を討伐し、偏に支那國民の爲めに平和を紊るものを除き士氣を刷興せしむるを期す。之が目的は唯だ元兇を誅するにあつて何物をも傷害せざれば、予の軍何れの處に到るとも何人も紛擾するを須ひず。上天照覽我が言を變へず、云云。

斯くて兩軍の前線は先づ九月中旬熱何方面に於て衝突し、奉天第三路吳俊陞の軍は早くも九月二十日開魯を占領し、第二路李景林軍も亦九月二十三日朝陽を攻略し更に進んで建平を陷れた。是に於て

更に第七路及び第八路を編成し、各々張明九及び鬧朝璽がその司令として熱河方面の攻略に從事することゝなり、第二路の張宗昌及び邢士廉が十月初旬凌源を占領してより第二路は南下して背後より灤州に迫らんとし、第五路及第七第八兩路を除く他の部隊は悉く山海關に集中して十月六日より總攻擊を開始した。

然るに十月下旬に至り直隸軍第三路司令として熱河方面に出動した馮玉祥軍は突如寢返りを打つて北京に引き返し、國民黨系の一派と共にクーデターを斷行して北京政府を占領し、爲めに山海關に在つて全線の指揮に任じてゐた吳佩孚は巧に奉天軍との戰線を收集し、後事を張福來、彭壽幸に托して天津に歸來したので、奉天軍は十月二十七日より山海關及び灤州方面に激烈なる攻擊を開始し、第二路司令李景林は直隸軍の第九、第十三兩師の敗兵を急追して遂に二十八日灤州を占領し天津方面と山海關との連絡を遮斷してしまつた。是に於て山海關の直軍は完全に包圍され、奉天軍は三十日遂に直隸軍の根據地なる秦皇島の沙山を占領してしまつたので、直軍は悉く海路天津に退却し、奉天軍は三十一日完全に山海關を攻略した。かくて十一月一日奉軍は早くも唐山を占領して塘沽に追つたが、時しも天津なる吳佩孚軍は馮玉祥の國民軍に敗られて天津に退却し、三日遂に血路を塘沽に開き手兵を率ゐて海路南方方面に落ち延びたので茲に奉直戰は終了し、奉軍第二路の先鋒張宗昌軍及び吳光新の騎兵團は即刻天津に入り、後續部隊も京津間及び浦津沿線に配備され、かくて奉天軍は十月三十一日戰後の時局に對する態度政策に就いて重要會議を開き、その結果段祺瑞の出馬して新政府を樹立し、政局の收拾に當るならば東三省は從來の自主聲明を取消し、中央に復歸することは勿論であるが、併し東三省として此際積極的に中央政府に參與することは種々なる不利益を釀す恐れあるより、單に有力なる發言權を握るに止め、中央政局には直接何等の干涉を爲さず、依然安民保境主義を以て終始すると共に、財政上に於ては依然として戰前同樣の態度を執り、中央財政と東三省財政とを混同せず嚴格に差別を設くるの方針を執ることに決定し、張作霖は來奉中の盧永祥と連名にて先づ段祺瑞擁戴の通電を發し、十一月八日盧永祥、鮑貴卿、楊宇霆、張學良等と共に、日、英、米三國領事を帶同し、先づ山海關に於て日本守備兵を訪問し、十日天津に到着したのであつた。

斯くて天津三頭會議の開催となり、段執政政府の出現となるのであるが、今日に至るも未だ繼續中の事ではあり、且つは將來の問題でもあるので、滿洲現代史は張作霖の天津入りを以て筆を措くを至當と考へる。只最後に奉直戰に際して日本朝野に與へたる影響を書き止めやうと思ふ。

日本政府に於ては、九月十一日、早くも「支那の內爭を傍觀して苟しくも對支干涉に類するが如き措置を執る意志を有せず」と發表したが、日本國內に於ては滿蒙特殊地域擁護論が、張作霖の宣傳と合體して有力に唱導せらるゝと同時に直隸派擁護の聲も亦少なからずあつたので、外務當局は隨時その誤解を釋く目的を以て對支憶度を聲明し、十月一日外務大臣幣原喜重郎は「支那動亂に對する日本の執

るべき態度に就いて、民間には或は奉天派を援助せよ、或は直隸派を援助せよ、或は平和勸告を爲せ、など幾多の說が行はれてゐるが、日本の立場を考へ、ワシントン會議の條約に鑑み、更に大正八年の北京外交團の規約に想ひ及ぼす時は唯不干涉主義を執る外はない。平和勸告の如きも一種の內政干涉を惹き起す場合なしとも限らぬから斷じて出來ぬ。素とより平和勸告の時機が絕對にないとは豫言出來ぬが、今日之を爲すことは出來ぬ。予は曾つてワシントン會議に於て支那に於ける各國利益範圍の限定を全廢する議があつた際に、滿蒙に於ける日本の利益は事實の問題なることを述べた。此の一點に就いては篤に考慮してゐるが、近來色々な方面から色々な忠告要求を受けてゐるけれども、今日まで日本が世界に聲明實行し來りし內政不干涉主義は飽くまで之を支持せねばならぬ」との意味を與黨三派（憲政、政友、革新）代表との會見に於て述べ、且つ十月十三日北京公使芳澤謙吉及び奉天總領事船津辰一郎は日本政府の訓令に基き、北京政府及奉天當局に向つて夫々次の如き覺書を交附した。

帝國政府は今回不幸にして勃發せる支那國內の爭亂に對しては絕えず嚴正中立の態度を執り來れり。戰端の開始せられたる原因の如何を問はず、現に對抗する兩軍共に等しく支那國民の一部を爲すものにして、日本の支那國民に對するや、偏に友好善隣の關係を增進せんとするの外何等他意あることなし。之と同時に滿蒙地方に於ては帝國臣民の居住するもの實に數十萬に上り、日本の企業及投資極めて莫大なるものあり。殊に帝國自身の康寧繫りて同地方の治安維持に存する所亦頗る多し。

帝國政府は毫も支那の內爭に干涉せんとするが如き趣旨に基かずして、玆に兩軍に對し以上の明瞭なる事實に就き嚴肅なる注意を喚起し、且つ斯の如く緊切なる日本の權利利益は十分尊重保全せらるべきことを最も重要視するの意を表明す。

之に對し北京政府は外交總長顧維鈞の名を以て、日本人の保護と治安維持の責任を負擔すべきことを回答し、直隸派の總師吳佩孚は兩度芳澤公使と會見懇談し、且つ次の如く日本に向つて彼の意志を發表したのであつた。

奉直戰に就き特に日本朝野に一言したきは、張作霖が一日長く滿洲に跋扈すれば、滿洲の交通及住民の困苦は一日だけ長く繼續さるべく、要するに彼の滅亡は獨り東三省の住民のみならず日本の爲めにも好ましい所であるといふ點である。南滿洲に於ける日本の特殊地位及び利益に就いては余は充分之を尊重する。具體的に云へば戰爭中南滿鐵道を平時狀態に置きその他の日本の利益も戰爭により傷つけざるやう注意す可きことは既に芳澤公使に通告聲明し、その諒解せらるゝ所であるが之を更に具體的に表示すれば次の如くである。

（一）東三省は隣邦日本と領域接觸するを以て同方面より軍事行動を開始する場合も同一の態度を執るべく既得權を否認し無視し或は侵害するが如きことは斷じてない。

（二）友邦諸國は數次の內爭に對して不干涉を聲明したが、余は友邦諸國の此の態度を大いに喜ぶ

然しながら茲に特に明白になすの必要あることは、今回の張作霖討伐は逆賊に對する中央政府の討伐行爲であるから普通の戰爭又は內亂とは全然その性質を異にする。從つて之に對し第三國が援助すべき理由はない。

(三) 不干涉なる言の中には討伐軍の行動に對し、障害を除去し、更に進んで必要の場合條約の規定に基き軍隊に對し適當なる便宜援助を提供するの意を含まねばならぬ。

(四) 不干涉の意義を曲解しき中央軍隊の行動を制禦するの意味に取る場合は事實上叛逆者に對し援助を與ふることとなる。

(五) 友邦諸國は年來支那の迅速なる統一を希望し、支那の不統一は支那自身の破滅を來すのみならず、友邦の利益をも脅かすものであると主張してゐたから、此際はその態度を持續することを望む。

(六) 西南諸省及滿洲は中央政府と分離せる結果幾多の對外問題を惹起した。之に對し中央政府は充分なる責任を負ひ得ざるのみならず友邦にも多大の不便を與ふることになつてゐる。

然るに馮玉祥の北京政變ありしより、日本政府は居留民保護の目的を以て、在旅順步兵第三十三聯隊第二大隊及機關銃一小隊を秦皇島に派遣し、且つ驅逐艦を天津に二隻秦皇島に四隻配備し、此の旨を在東京各國大公使に通告し、英米兩國も亦天津駐屯軍より、英國は豐臺に、米國は唐山に夫々增兵して防禦準備を整ふる所あつたが何れも事なくして濟んだのであつた。

兎も角支那の內亂が今回の如く日本國內に影響し、東京に於ては日本人中に奉天、直隸の兩派を生じ言論や示威運動までして爭つた事は曾つて見なかつた現象であり、且つ奉天派が多額の費用を措しまず日本國內に於て宣傳を爲したるも、曾つてその例を見ないものであることを最後に書き添えて置く。

第十七章　尾　言

一

自分は最後の章を藉りていさゝか東三省の地理、歴史的雰圍氣、從つて起る支那本部に對する政治的地位を考察せねばならぬ。

先づ第一に支那本部と東三省の關係に就いてその歴史的見地よりして著しく人目を索くことは、日本及び露西亞といふ、支那の東北部を包む二大勢力が國境を接し、利害を等ふしてゐることである。近代史に於ては、支那の外交關係の最大なるものが此の日本、ロシヤの二大國によつて醸生せられ、その連續は中華民國が革命の道途に在ると等しく未だに大問題として殘されてゐることである。黑龍江を境界とする廣大なる露支接壤地域はクロパトキン將軍の喝破したる如く露國にとつては勿論の事、支那にとつても決して理想的國境線とはすでに謂ひ得ない如く、その他東支鐵道、日支國境線、關東州租借地、土地商租等の、東三省より謂へば內政問題にまで日露支三國の利害は相錯綜して、それ等の悉くが未解決のまゝに殘されてゐると謂ひ得る狀態である。而かも此等の問題は獨り東三省の內政問題たるのみならず、日露兩國共に國策に影響を及ぼすべき大問題たるに於て、東三省は正しく之等三國の自由競爭場と謂ひ得る。此の間に立ちて支那は依然としてその主人公たる地位を保持しつゝあるのであるが、近代史に於ては他の二國に比し支那の國力が比較的微弱であつた爲め、露支二大勢力を相互に利用することによりてその地位の安全が保持されて來た樣な狀態であつた。

斯の如く國際關係の錯綜したる土地なるが故に東三省在住民は自ら支那及支那人としての國際的自覺を要求せられる。否東三省人民のみならず、一般の支那人も東三省をして支那の國際的試驗場として重視する樣になつて來た。遠くは日清戰爭より間島問題に及び、近くは東支線の回收より旅大の問題に至るまで、支那人は血眼になつて之を爭ひ來つたのは一面此の理由に基くものである。然らば支那は今何が故に國際的試驗場を要求するか。云ふまでもなくそれは中華民國の成立である。中華民國の成立、換言すれば支那今次の革命は之を外觀して支那の國際的自覺と稱することが出來るからである。

もとより內政的には清朝の積弱を擧げ得る。然し民國革命に於て排滿と同時に興漢がなかつたならば革命の意義を失ふ。而て興漢とは中華民國の國際的自覺、之を形式上より見れば完全なる現代的國家の完成である。そは即ち國際的對立を意味するものに外ならない。既に國際的對立と謂ふ、革命の道中に在る中華民國は、當然に之が試驗場を必要とする。而てその絕好の場所を彼等は東三省に於て發見したのである。

加之清國をして國際的立場に至らしむべく最初の刺戟を與へたるものは實にロシヤであつた。シベリヤより長驅滿洲に侵入して最先に清國に向つてその國境劃定の必要を痛感せしめ、爾來强大なる力

を以て滿洲に侵入し野郎自大の中華の民をして國際的自覺に最初の耳を欹たてしめ、清朝の末葉に至つては、北京の政府を威嚇する最大なる一國となつた。所謂南面して王を稱する地理的約束の下に立つ中華の國だ。北の方蒙古滿洲よりする大威力を如何に痛感したかは思ひやられる。しかも他の一國日本は日清戰役によりて清朝の積惡を暴露する役をつとめ、又日露戰爭によりて、支那人をして白人恐るゝに足らずとの自信を有せしめ排滿興漢の革命に絶大なる精神的援助を與へたものである。一路北京に至る京奉鐵路の有無に關せず東三省は正しく支那人の國際的試練場として絶好ならざるを得んやだ。

二

然しながら十八世紀以來支那に迫つて來た外國の勢力は敢て日本及露國のみではない。東印度會社勢力の餘波として英國の勢力は廣東より南支那一帶に及び、ナポレオン三世の野心より結果したるフランスの安南占領は南境雲南との紛爭を惹起し、英國は西藏に迫つて來たのであつた。亞片戰役アロー號事件等數々來ればその大なるものゝみにても五指を屈するに足る。而てそれ等の悉くが支那をして國際場裡に引づり込むべく多大なる効果を有したことは確である。然しながら帝都北京より見れば廣東雲南地方は歸服の民であつて始んど殖民地視されてゐた地である。身に迫る痛みは仲々に感ずべくもない。しかも南よりした之等列强は單に通商貿易を主としたるものであつて、日本及びロシヤの如く國の安危を賭するが如き切實なる利害より發したるものではない。從つてその刺戟も到底滿洲に於ける三國の如きものではあり得ない。然らば滿洲と支那本部との關係は之を如何に考察すべきであらうか。滿洲が清朝の發祥地であり、彼れが最後の城廓として重視されて來た歷史、既に論じたる如く新中國の外交的試練場として選ばれたる場所等々を繰返す必要もなく、その地理的約束は今や京奉線によつて密接に結合せられ、北の方熱河を挾んで北京の東北を固むる重要なる地點である。北京の背後より磐石の如き重みを以て威壓する熱河、察哈爾の特別區域は實に滿洲の完全なる把握によつて始めて安泰なるを得るは、過去の歷史の證する所によりて明白である。清朝が熱河を重要視したる所以は實に此れに根據するものであつて、それは清朝自身の體驗、否北方より國を立てたるすべての朝廷が之を證明してゐるのである。見よ、遼國金國はもとより元國の如きもすべて滿洲の地に發祥し、先づ熱河、察哈爾、綏遠の地方を略取し、然る後易々として北平の野に進出し來つたではないか。清朝の强盛を以てしても山海關の守りは遂に拔くことが出來ず、熱河、察哈爾を略取して始めて北京を占領することが出來たのである。故に若し中華民國が似然としてその首都を北京より移すことを敢てしない以上特別區域は確實に保持する必要があり、而之が探題として權威ある東三省總督の重要さは、清朝ならずとも似然として現存するわけである。換言すれば威力ある東三省の執權者は北京政局に對して大なる發言權を有することゝなる。

然しながら茲に注意を要することは、張作霖の擡頭當時より東三省に於ける勢力關係は、完全なる三國の對立ではなくて日本の勢力が南滿洲より次第に北方に侵出し露西亞は僅に東支鐵道の弧壘を守るのみとなり、往年の日露關係は東三省に於ける主客の位置を顚倒した狀態となつて來たことである。加之民國三年歐州大戰の開始より露西亞の革命にまで到達するに至つて東三省に於ける日露の勢力は次第に均衡を失し、北滿洲の政治的勢力の殆んど全部が張作霖によつて代表されることになり、露西亞は滿洲蒙古の重要なる接壤區域として意義を有するのみとなつたことである。而てこの張作霖勢力の北上は、一面に日本勢力を背ふてゐるものと見ることが出來る。奉天勢力の北進が日本の西比利亞出兵と、その時を同ふしたのは仰々何の意か。少くも孟恩遠を驅逐して名實共に滿洲王となるまでの張作霖は、陰に陽に日本を背景とせざるはない。張作霖以前の東三省の主腦者は一に清朝の策を奉じて幾分露國に接近する傾向があり、又その主策とする所は之等對日及對露の關係よりは支那そのものを本位として爲政したものと認められる。事實當時は日露兩國共に滿洲に於ける勢力圈は確定せず、且つ未だ初期に屬することゝて、歷史ある支那とは之を同一線上に置いて論ずることが出來なかつたことは事實である。然るにその後に至り年の經過と共に日露兩國の文化が滿洲の社會組織と密接なる關係となり或は又その一部となつたものも出來、從つて日露兩國と、支那人の滿洲とは確然之を分離することが次第にその不可能の度を濃くして來た。かくなつては張作霖ならずとも排外的本國本位を以てしては到底その爲政の完全なる行使が不可能となる。少くも何れか一方と共同する事によつて始めてよく自己の地位の安泰を期することが出來るのである。

若し支那側の爲政者にして自國本位の排外的政策を固執するに於ては、反對に日露兩國の共同動作を誘起し南北より挾擊の運命に遭ひ、主腦者の地位の安泰さへも覺つかなくなる恐れがある。而も支那側はその脅景たるべき支那本部の勢力今日の如く四分五烈にして到底日露兩國に對抗するだけの實力なき時には殊に外交關係を考慮せねばならぬ。又たとひ有力なる第三國ありて之を援助することあるも日露兩國の如く滿洲に對する利害關係の密接なるものが他に其比類がないから、從つて此の兩國程の熱心は到底期待が出來ない。米國の滿洲中立提議の如き、仇敵たる日露兩國の握手を誘起し、その共同反對宣言によりて、影を消してしまつた如きその好實例である。故を以て少くも革命前後よりの支那に於て、滿洲の社會及政治組織は日支露三國の何れを除外しても成立しないと、極言すれば言へぬことはない有樣なのである。然るに民國の革命は、その直接行動は實に日露戰役に於ける日本の勝利に大いに影響せられ、日本の如く又は日本と共にの聲によりてその成立を告げたものであるが故に、滿洲に於ても革命の成立は同時に日支の握手と見做され、而かも清朝は露西亞と結び來つて日清戰役に失敗し、遂に三國干涉に至り、それを動機として支那に於ける列强の勢力圈劃定となり、外侮を防ぐ前に清朝を倒さねばならぬ、清朝こそ支那及支那人を亡ぼすものであるといふ第一革命の目的を提供

したものであるから、滿洲に於ても清朝を倒す事は同時に露國の勢力を驅逐することゝもなつた次第である。故に革命以來日本と滿洲との關係が次第にその深さを增して行つたことは何等怪しむに足りない。然り而して張作霖の擡頭は此の革命と共に始まり、滿洲に於ては尤も支那本部との關係の深き奉天に其根據を置ける關係及び同時に日本とは滿洲中第一に密接なる關係に在るべき奉天を其根據とする事などより蔭に陽に日本の勢力を借り、支那本部の背景を以て吉林及黑龍江に相對し遂に之が統一に成功したのであつた。此の關係は、安奉京奉の二鐵路と、而して大連より一路北に向ふ南滿鐵道とが如實に之を物語り得ると思ふ。以下少しく滿洲に於ける奉天省城の政治的地位を考察したい。

三

奉天は、近代史に於ける東三省の主都である。近代史とは清朝の中葉以後の事であつて、東三省總督の駐在したる頃から東三省の主都となつたと謂ひたい。即ち對露、對日關係の次第に復雜を加ふるに至つて之等外交問題の接渉をも統一主管せしむる目的の爲めに、一地方長官と云ふよりはむしろ全權大使の格で設置されたものであると推定される。それ以前の奉天將軍は、清朝發祥地の主管者といふ意味以外に對朝鮮の外交及び軍事の權を掌握してゐたものであるが、對露の方は吉林及び黑龍江兩將軍が之に當つてゐた。然るに日清戰役後滿洲方面に於ける日露の利害は直接に相接し、遂に日露の戰役となり、更に日本の朝鮮半島領有、滿洲鐵道の分割等より、日本との關係が漸次密接の度を加へ、從つて奉天の地位は對朝鮮より對日本と擴大し、その日本國の發展は奉天省城の重要さと同時に增加して行くことゝなつた。かくて東三省に於ては對露外交を主眼とした時代より、對日關係を主眼とする時代に推移し、從つて奉天は東三省の主都たる一理由を加ふるに至つた。然し茲に注意を要することは、奉天は東三省の主都ではあるけれども、國內的に之を見れば以然として殖民地長官の駐紮地であることである。この爲めに京奉鐵道は重大なる任務を盡してゐる。即ち對露外交とか對日外交とか云ふけれどもそれは勿論東三省本位の外交ではなくして中華の國としての外交である。日清、日露の兩役が支那革命に大なる影響を與へたと云ふことは云ふまでもない事だが、滿洲を革命する爲めのものではない。支那を革命する爲めに滿洲の問題が役立つたのだ。支那人にとつての滿洲は歷くまでも支那そのものゝ利害を先きにし、又之に基いたる滿洲である。例へば日本を切り離したる朝鮮若しくては南滿鐵道が未だその單獨の意義を有せざると等しく、少くも之と同樣なる意味に於て支那その者と分離したる滿洲は未だその意義を爲すに至らない。從つてそれが獨立を保存する能力もない。彼の露西亞本國の勢力と分離關係に在つたホルワットの東支鐵道が、幾ばくならずして亡んだ理由も之れと同樣である。故に奉天も、支那本部と關係の密接なる事に於て始めてその價値を表はす。京奉鐵路の重要さが茲に於てか明白である。京奉鐵路を有する奉天がやがて、之を有せざる吉林、黑龍江に號令するに至るべきは正に大勢の然らしむる處であらう。之を歷史に徵すれば、京奉鐵路なき時代の

滿洲は、むしろその海よりする交通を主としたるが故に金州、熊岳城、遼陽等がその主都となり主として朝鮮をその對手方とするものであり、又金、遼、元の如きはむしろ熱河を通過する交通路により長春、哈爾賓がその根據地となつてゐたものなのである。之等は故郷保持の目的以外に何もなかつたのだが、只清朝のみは朝鮮を臣服せしむる事によりて、その勢力の增大を來したる者なるが故に、朝鮮に對する關係上奉天がより多く重視されたのであつた。之を要するに奉天は、日本及支那にその政治的根據を置くことによりて始めて東三省の主都たり得るものであり、而て張作霖は支那日本の政治的接續であるべき革命に際して、此の二つの根據によりて擡頭したものであることが、所謂奉天派の合同的勢力を形成し得たものなのである。何時の場合でも時代は英雄を作るが、英雄が時代を作るものではない。張作霖をして斯の如き奉天派の强盛を誇らしむるものは、實に支那、日本と而して奉天とである。ロシヤも亦彼の爲に敵役となつて之に貢獻したことも亦見逃すことが出來ない。

完

大正十四年七月二十二日　印刷
大正十四年七月二十五日　發行

南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課
編纂人　太宰松三郎
發行人　大連市天神町六十六番地二ノ一　磯部信一
印刷人　大連市西公園町四十九番地　荒木猪象
印刷所　大連市西公園町四十九番地　合資會社日清印刷所
發行所　南滿洲鐵道株式會社

14.5
17.

終